

博士論文

# 和泉式部の和歌の研究

— 三つの歌材で読み解く和歌の特質 —

東京女子大学大学院人間科学研究科

金子 紀子

博士論文

和泉式部の和歌の研究

―三つの歌材で読み解く和歌の特質―

*The Study of the Poems of Izumi Shikibu*

*:the Characteristics by Analyzing the Three Subject Materials of Her Poems*

二〇一八年十一月三十日

東京女子大学大学院人間科学研究科

金子 紀子

目次

序

一

第一部 和泉式部についての先行研究

第一章 和泉式部についての研究史

三

第二章 和泉式部の詠歌史

二六

第三章 和泉式部の漢詩文の受容

四〇

一 先行研究

四〇

二 和泉式部の漢詩文の受容

四四

三 和泉式部の歌の漢詩文

五〇

第二部 「菖蒲（あやめ）草」の歌

第四章 平安時代の和歌における「あやめ草」

一 はじめに

五五

二 菖蒲と五月五日の行事

五七

三 歌材としてのあやめ草

六二

第五章 和泉式部の「あやめ草」 「折」と「恋」

一 「あやめ草」と歌と表現技法 七四

二 節供に因むものとともに詠まれた歌 八二

三 「折」と「恋」を詠む 八七

四 清少納言との「あやめ草」贈答歌 九四

五 まとめ 一〇一

第三部 「桜」の歌

第六章 「桜歌」の系譜—古今集から後拾遺集へ

一 はじめに 一〇六

二 桜の享受「折る」ことと「花見」 一一二

(一) 折る 一一三

(二) 花見 一一九

三 霞と風

(一) 霞 一二五

(二) 風 一三二

四 心

一三九

五 まとめ

一五〇

第七章 和泉式部の「桜」の歌

一 はじめに

一五三

二 桜の享受 折る一枝をめぐって

一五五

三 桜と心

一六一

四 「桜」をめぐる歌群

一七一

五 和泉式部と「桜」

一七七

六 まとめ

一八四

\*資料 和泉式部の「桜」の歌一覧

一八八

第八章 和泉式部の『燈の前に花を思ふ』と云ふ心」の歌をめぐる

一 はじめに

二〇六

二 漢字四字題の創作

二〇七

三 「燈前思花」の題意

二一一

四 「『燈の前に花を思ふ』と云ふ心」

二一九

五 まとめ

一一三

第四部 「露」の歌

第九章 勅撰集の「露」の歌―後撰集と後拾遺集を中心に

一 はじめに

一一七

二 後撰集の露の歌

一一一

(一) 露そのものを詠む歌

一一一

(二) 露が誘う心境を詠む歌

一一五

三 後拾遺集の露の歌

一一八

(一) 露そのものを詠む歌

一一八

(二) 露が誘う心境を詠む歌

一二二

第十章 和泉式部の「露」の歌

一 初期百首の「露」の歌

二五〇

二 和泉式部と「露」

二五八

(一) 伝統的な詠み方

二五八

(二) 思いを詠む(独詠)

二六〇

(三) 人とのつながりで詠む(贈答)

二六五

三 命を詠む

二七二

四 まとめ

二八三

\*資料 和泉式部の「露」の歌一覽

二八七

第五部 和泉式部家集配列にみる創意性について

第十一章 配列にみる創意性

一 はじめに

三一〇

二 歌群の考察

(一) 稻荷祭の歌群

三一二

(二) 御嶽精進の歌群

三一三

(三) 疾うよ来よ歌群

三三〇

三 まとめ

三三五

結

三三八

凡例

\* 和泉式部集は、次の本文を使用した。

清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部続集』（岩波文庫 一九八三）

脚注の引用の場合の略称 ↓ 「文庫」

\* 勅撰集の八代集本文 は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。

各勅撰集は古今集、後撰集のごとく略称を用い、『』はつけない。↓新体系

\* 私家集の、「注」が付いていない家集は『新編国歌大観』の本文による。

\* 『日本国語大辞典』『全文全訳古語辞典』『国史大辞典』『古事類苑』は概ねジャパンナレッジを使用

\* 注釈書の略称

『新編日本古典文学全集』（小学館）↓新全集

佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈』正集篇（笠間書院 二〇二二）

同 続集篇 一九七七 ↓ 「全釈」

久保木寿子『和泉式部百首全釈』（風間書房 二〇〇四） ↓ 「百首全釈」

森重敏『十三代集撰入和泉式部和歌抄稿』（和泉書院 一九九三） ↓ 「抄稿」

窪田空穂校註『和泉式部集 小野小町集』（日本古典全書 朝日新聞社 一九六七三版） ↓ 「全書」

\* 論文は第一部を除いて、既発表論文、掲載予定の論文に加筆、補訂した論文です。





## 序

平安中期を代表する歌人和泉式部については、和歌はもちろん、伝記や、「和泉式部日記」などがさまざまな角度から取り上げられてきた。専門の研究者のみならず、歌に魅せられた近代の読者にも評価され、秀歌を集めたアンソロジーも多く出版されている。

この和泉式部の作品については、私家集のみならず、『和泉式部日記』を含めて既に先学の詳細な研究がある。家集の本文研究としては、和泉式部集の諸本や、和泉式部集切などを対象に、書誌や成立、構成に関する研究などがある。家集については、漢学、仏教などの影響といった、詠歌環境に関するもの、なかでも伝記研究と関わって周囲の歌人との交流などの研究がなされている。また家集から読みとれる表現の特色などの研究もある（『論集和泉式部』巻末 和泉式部文献目録 笠間書院 昭和63）。

しかし、詠歌千五百余首のうち、まだ研究の対象とされていない歌も多くあり、和泉式部の歌の特質の解明には多くの余地が残されている。そこで本論文では、定数歌群などの形式や、歌の内容（特に心情表現等）による選出ではなく、ひとつの具体的な素材（歌材）によって網羅的に歌を抽出し、それぞれの歌材ごとに、和泉式部の歌の特質を考察するという手法をとりたい。これによって、群作、定数歌、題詠、贈答歌、独詠などの作歌事情の異なる領域を越えて、和泉式部の和歌全体に接することができると考える。おのおのの素材を和泉式部がど

う詠み込み、何を表現しようとしていたか、そこから窺える和泉式部の歌の特質を明らかにすることを目的とする。

ここで選んだ歌材は「菖蒲（あやめ草）」、「桜」、「露」の三点である。

「菖蒲（あやめ草）」は、五月五日の行事のためのものであり、五日を過ぎると無用になる。同時代の歌人の中では、和泉式部は「菖蒲（あやめ草）」の歌を多く詠んでいる。この歌材を愛好したという点からも、「折」を大事にする和泉式部らしさが窺えよう。五月五日という「折」に密接に関わる「菖蒲（あやめ草）」を、どのように和泉式部が詠んでいるか、そこから和泉式部にとっての「折」あるいは交流について考えたい。

次の「桜」は、古来から現代まで広く日本人に愛好されてきた歌材であり、すでに数多くの歌がある。その意味では、「桜」を詠む歌の歴史をひとつの和歌史と捉え、その中での和泉式部の「桜」を詠む歌を考察し、和歌史上の位置を確認する。

「露」は、一瞬で消えるはかないものとして仏典にもあげられており、いかにも無常を詠むに適した歌材であると想像される。和泉式部の歌は、根底に無常観が横たわっていると思われるが、和泉式部の「露」の歌の分析を通して、和泉式部がどのように無常を捉え、表現しているかを考究する。

また、まずはこれらの歌材の検討に入る前に、これまでの和泉式部の和歌に関する主な研究を振り返る。なかでも和泉式部の生育環境をたどり、すでに詠歌の時期が推定されている歌について、その人生と照らし合わせながら、漢詩文の受容や定数歌、歌群などを、和泉式部がいつどのようなつながりのなかで身につけていったかを

概観したい。

続いて第二部から第四部まで、前述の三つの歌材を詠んだ歌について分析と研究を行う。勅撰集や他の歌人との比較をすすめながら考察する。

第五部では、三つの歌材を詠む和泉式部の歌を詠み解く過程で、配列や詞書に意図的な工夫が施されている歌群の存在に気づき、改めてまとめて考察したものである。これら歌群の考察から『和泉式部日記』の作者としての和泉式部に連なる特質が読み取れるのではないかと考え、別に第五部としてまとめた。

このように三つの歌材を中心に考察することで、歌人和泉式部の特質の一端を明らかにしてゆきたい。

## 第一部 和泉式部についての先行研究

### 第一章 和泉式部についての研究史

和泉式部についての研究は現代に至るまで引き続き行われており、それは取りも直さず、和泉式部という歌人が放つ個性ばかりでなく、その豊かな文学的資質を表出する一五〇〇首余りの歌と『和泉式部日記』という作品自体に多くの魅力があり、かつ未だに解明されざる余地を多く残しているからにほかならない。

このような和泉式部に関する研究は甚だ多く、時代とともに重積された研究は、より詳細に、多方面からのア

ブローチがなされ、ほぼ定説を見るまでに進んだ部分もある。ここでは和泉式部の研究史の中で、これから論究を始めるにあたって前提となる諸研究の総意と研究の現在の確認をおきたい。

まず、昭和63年刊の『論集和泉式部』（和歌文学会編 笠間書院）において、『和泉式部研究の現在と展望』（鈴木良治、武田早苗、徳植俊之）としてそれまでの研究動向と評価が、和歌と家集、和泉式部日記、和泉式部伝の三つに分けてまとめられている。昭和63年代までの研究史についてはここで押さえることができる。

そして巻末には『和泉式部文献目録』があり、明治から昭和63年までの研究文献648件が一覧できる。その上、新見を示すものや、定説となる研究文献などには、解題が付されている。この文献目録は後の和泉式部研究を志す者にとって最大級の資料である。

その後の研究の概観については、平田喜信『和泉式部研究の現在』（国文学35巻12号 平成2年10月）、森田兼吉『和泉式部研究の動向・昭和五十一年以降』（解釈と鑑賞 60巻8号 一九九五）があり、同じ号にある『和泉式部研究文献目録抄・昭和五十一年以降』（兪仁淑、李鎔美、平沼恵）が昭和51年から平成4年までの文献が抄録であるがまとめられている。

これ以降は研究の現況と展望といった概括的な記事は見当たらないが、その後も和泉式部について多くの研究が続けられていることは云うまでもない。因みに平成元（一九八九）年以降、CiNii論文検索で単純に和泉式部で検索すると373件、収録範囲が違うが国文学論文目録データベース（国文学研究資料館）で同様に検索すると594件（二〇一五年まで）がヒットする。和泉式部の現在の評価についてはこの年代の研究を対象に考察す

る必要がある。

前述の『論集和泉式部』の『和泉式部研究の現在と展望』（昭和63年時点）において述べられている、研究の現況と今後の課題を確認したい。

「一、和泉式部の和歌と歌集」（武田早苗執筆）では、本文研究については所在不明だった榊原本の影印本の刊行とともに、伝行成筆和泉式部続集切の新資料が報告されたことで、今後研究が進展するであろうと指摘する。

正集続集については「この二集が『若干歌群の集積』であろうとする点では一致を見ており」、清水文雄が正集続集をそれぞれ5歌群、A〜Jに分類し（注1）、以降、この分類が引き継がれているが、近年平田喜信が重出歌の出現状況から、平面的に区分することに疑問を提示し、「和泉式部自身からの距離という観点に立って『正・続集』内を甲・乙・丙三層に分類・整理した（注2）。現在、大勢はこの平田説を容認する方向に動いており、現行の十歌群が直接集の成立と結び付く単位のものではないとする立場が多い」としている。特にB歌群、E歌群（日記歌を含む）の近接性、G歌群（帥宮挽歌群）とそれに含まれる五十首歌については「和泉式部の本質に迫る大きな問題をはらんでおり、今後ますます読み深められなければならない。」という。続集末尾のJ歌群は日次詠歌群とよばれている。この歌群の研究は平成以降次々研究が発表されて関心が高まっている。

和泉式部の和歌と表現に関しては、それまで多々修飾語を伴って評されてきた「和泉式部の多面性を別の角度から、和泉式部という歌人が生み出した『和歌』の問題としてとらえ直そうとする試みがなされている」とし、寺田透「自己客体視」（注3）、清水文雄「作者の自分とその自分を見ているもう一人の自分」（注4）、平田喜信「作

中の女と作者の混同視から両者を明確に区別すべき」(注5)、鈴木日出男「事実から表現への過程に独自なからくりがしくまれている(注6)」といった論を紹介し、また定数歌、句頭に古歌や経典の一字を置く歌群等、種々の観点から「いまこそ作家としての和泉と作品としての和泉詠とを視野に入れた本質的な和泉式部論が展開されるべきであろう。和泉式部の和歌には難解なものが多いとされてきたが、その要因は多く表現構造に求められる。感情の赴くままに表出したかに見える和歌の根底に、実は周到な計算や巧まれた表現があったことが解明されつつある現在、恋多き女流歌人という呪縛から解き放たれて、ようやく和泉式部の和歌は、それ自体、また表現自体が、取り上げて論じられる段階に入ったと言えるのではないだろうか」としている。

次に二、和泉式部日記(鈴木良治執筆)の研究史についてみれば、成立論、他作説自作説論争、作品論(作品内部の問題点)にかかわる研究が続ぎ、昭和30年代後半から40年代に吉田幸一『和泉式部全集』『和泉式部研究』(注7)が研究史上の問題点を集大成し、円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記』(注8)により、作品の詳細な読みと、新見の提出(「超越的視点」)が見られたことは大きな業績であるとする。昭和50年から60年代は「得られた読みから、自作・他作を即座に導き出すのではなく、自作あるいは他作を自己の立脚点とはするが、あくまで本文からはなれずに読解する姿勢の論文が多く見受けられる」とし、清水好子の論(注9)をあげている。また、「家集」から「日記」を考察する視点は、従来成立前後問題が中心だったが、森田兼吉『日記』歌と『家集』の歌の表現の類似性から『日記』叙述の特色を探る(注10)、平田喜信『家集』の日次詠歌群を連作として読み解くことから「その手法が日記にも応用されているという論(注11)、久保木寿子「作品構造の骨格に

『和歌的な構成論理』を読み取る論」(注12)をあげることが出来るとし、そして「今後の『日記』研究の方向は、最近の研究が自ら指し示しているように、『日記』の分析から導かれた問題点(略)を『日記』内部の問題としてとらえ直し、その読解を深めていく、ということに尽きよう。外部資料に乏しいだけに、あくまで本文の読解を中心として、『家集』の表現などの分析と合わせて「和泉式部」的なるものの抽出・追究をしていくことが今後の『日記』研究の課題となろう。」と示唆されている。

三として和泉式部伝記の研究史が解説されているが、それについては、清水好子『和泉式部』(王朝の歌人6)(注13)が「家集・日記の丹念な読みから和泉式部の一生を考察したもの」、増田繁夫の『冥き途 評伝和泉式部』(注14)が「現在見ることのできる和泉式部関係のあらゆる歴史史料を駆使して和泉式部の伝記を明らかにしようとしたもので、現在の和泉式部伝研究の一つの到達点を示しているともいえる書である」とあげるのにとどめている。

以上は昭和63年時点での和泉式部研究史と今後の研究への課題の示唆を、『論集和泉式部』の解説から要約した。次に平成年間の研究史と、現在の和泉式部の評価を見る。これは稿者が概観するものであるが、前述したように、1989年以降の研究も非常に多く一覽して見ると、600余件(国文学論文目録データベース)の研究のうち、大まかに数えて和泉式部の和歌については120件余、日記については250件を超える。研究史を概観するにはなるべく多く研究に目を通すべきではあるが、主題が多岐にわたり、稿者の力量の限界もあるので、和歌に関して「初期百首」、「五十首和歌」、「日次詠歌群」のいくつかの論考を中心に見ていきたい。



「初期百首」

\* \* \* \* \*

和泉式部の平成年間の研究史において、「日次詠歌群」以外に取り上げられている群作

のうち、「初期百首」については、まず久保木寿子氏の『和泉式部百首全釈』（注15）が刊行をあげねばなるまい。先行の注釈や研究を押さえ、漢籍、関連歌踏まえての詳細な語釈、わかりやすい通釈、補説においての先行百首歌の用例の紹介等々をそなえ研究を志す者にとって非常に貴重な資料となった。

鈴木宏子氏は「『和泉式部百首』覚書・春歌二十首を読む」（注16）において初期百首の研究史の概観を示され、その上で氏の見解を明らかにされている。「初期百首」の名称について、鈴木氏は初期定数歌という名称は、百首で収まらない『毎月集』や『賀茂保憲女集』を包摂する一方で他の作品群との境界線が曖昧になることや、「百」という規模に重大な意義がある、すなわち先行の好忠の「百首」という大きな規格は、それ自体が意欲と創意に満ちた、人々にとって衝撃的な数だったのではないだろうか」ということで、氏は「初期百首」ということばを用いるとする。研究史としては藤岡忠美氏の好忠百首が「沈淪訴嘆」の性格をもつこと（注17）から「自己をのびのびと解放し、文学的感興を味わうことのできる小天地であったものと想像され」、これに応和した歌人は「百首」という新しい試みに挑戦することに、高揚感を抱いたのではなからうか。初期百首は、歌人たちの実験の場でもあり、新しい和歌を生み出す坩堝であったと捉えたい。」とする。和泉式部百首もこれら河原院の歌人達の先行百首の影響を受けていることは既に久保木寿子氏により指摘されており（注18）、また源重之、重之女百首の

構成に近いことから、鈴木氏は冷泉院に繋がる可能性も指摘している。

また続いて同氏の『和泉式部百首恋十八首について』(注19)では、この恋部については、恋の時間的進行による構成意識は見られず、多様な恋歌が一見無作為に並んでいるとされている。この恋歌の特徴としてひとつは「ひとたびは逢うことのできた、しかし容易に手の届かない恋人に再び逢いたい、その姿を目にしたいと切望する―『待つ』ではなく『見るよしもがな』―歌が多く含まれることである」、またもうひとつは95番にみられるように万葉的な表現・発想が散見されることから「こうした『万葉的なもの』への志向も、この歌群を特徴づけているように思う」と指摘し、この二点から考察している。

「万葉的なもの」については、82、84、87、89、92、95番の六首をあげ、それぞれに万葉集歌を例示し、考察されている。そして95番以外は「和泉式部集」に他に類例のない一回限りの試みであり、それは初期百首という新しい表現に挑戦しようとする精神に関わっているものであり、「初期百首にふさわしい新しい恋歌を詠むために、和泉式部が選びとった方法の一つが、万葉的表現への接近だったのではないだろうか」と結論づけている。

また、「女が『見る』恋歌」として85、92、83番を例にあげて考察し、「この歌群の『見る』ことへの希求は、自ら行動することを封じられた女の、それゆえに切実な恋の表現なのである。」としている。また「見る私、見られる私」の項では、86番においては、「男は、髪を掻きやる手であり、顔をのぞきこむ眼差であった。女は男によって『見られる』と同時に自分を見つめる男を『見る』。」そしてこの歌に「うち臥す」女の姿を外側から見つめる視点があることも指摘されている。最後に「和泉式部が初期百首という器と出会った、そこに生まれた

のは、女が「見る」恋歌であった。女は、記憶の中の恋人の姿、あるいは幻としての恋人の姿を眼前に描き出す。こうした「見る」ことへのただならぬ希求

は、手の届かない高貴な人への恋というストーリーをも思わせるものである。そうした歌々の中から、女の嘆きの姿態を契機として不在の恋人の姿が招来される構造を持つ、秀逸な恋歌も詠まれたのであった。」と結んでいる。

#### 「五十首和歌」

和泉式部続集の940番〜1061番「帥宮挽歌群」（注20）と呼ばれている歌群の中の1014番〜1059番は「つれづれの尽きせぬままにに、おぼゆる事を書き集めたる歌にこそ似たれ 昼偲ぶ 夕べの眺め 宵の思ひ 夜中の寝覚 暁の恋 これを書きわけたる」という詞書を持つ四十六首の歌である。この歌群は「五十首和歌」と呼ばれており、「帥宮挽歌群」の中の一部として理解されてきた。

この「帥宮挽歌群」については、既に清水文雄氏（注21）、藤平春男氏（「和泉式部」帥宮挽歌群）を読む」（注22）、久保木寿子氏「帥宮哀傷歌群の世界」（注23）、木村正中氏「和泉式部と敦道親王 ― 敦道挽歌の構造」（注24）などにおいて、その基本構造や成立、主題表現などが論究されてきた。

藤平春男氏はこの歌群は連作構成が緊密ではなく、群作に近いものもあり、他の場で詠まれた挽歌の吸収もあるのではないかとしている。また木村正中氏は「ここには時間と恋情を組み合わせた五つの題が設定されている

のであるが、その組み合わせにもとづいて、深い人生観照と豊かな叙情性とを現出させる表現空間を形造っている。それは、敦道への哀傷を基底としながら、題詠という虚構的な主題の設定が、その主題に支えられてむしろ自在な表現を可能ならしめ、したがってその哀傷も、さらに細やかな純粋な心情の世界としてそこに展開することになるのである」としている。

久保木寿子氏は「和泉式部統集『五十首歌』の考察」(注25)において、まず詞書については「この歌群は哀傷歌群として、統一的主題の下に把握できるのであり、詞書の前半部分は、この歌群の主題に係わるものと解されるところ。詞書の後半は、詠者が、主題の形象を、より細分化された『題』の下に、意識的に書き分けることにより果たそうとしたものであることを示す」とし、内容を「①対称及び自己表現に見る、詠者の詠歌対象に対する位置の問題、②歌中の時間表現に関する問題」の二つの視点から考察している。

まずその①の詠う位置については、「死の混乱の中で哀傷の対象は『君』と呼ばかけられ、詠者に未だ近いものとして把握せられたのが、次第に遠い『人』として客観化され、同時に切迫した思いが沈静化するにつれ、自己意識も鮮明になり「我」と形象化されるに至る」と分析する。②の時間表現については、「ひるしのぶ」に一番多く、「ここで詠じられる時の経過は、帥宮の死が刻々と過去になっていくことへの嘆きなのである」として未だ過去のものになりきってはいないが、次の「ゆうべのながめ」では帥宮との生前の日々が過去のものになってしまったことへの嘆きが詠まれ、最後の「あかつきの恋」では過去の助動詞「き」が用いられ、死者は過去のものとして捉えられ、再認識され、回想される対象とする。

総体として五十首歌の詞書は「一日の中の特定の時間を示す言葉を題に据え、個別の歌をそれに沿って詠いあげながら、この歌群が総合体として示す時間は一日を越えている。示されているのは、明けては暮れる日々を繰り返しながら、より大きく推移していく時の経過であり、心情なのだと思う。」とし、歌い得たものとして、「結局、各小歌群に辿りえた推移する時間も、詠者の心情を質的变化の相に於いて捉える用には供されず、対象への切迫度に強弱を付与し、時々々の思いに場面性を加えるに留まる。」とし、「散文に期待されるような主題の展開は、この歌群に於いても十全に發揮されるには至らない。」としとしている。

平田喜信氏は先に「和泉式部、作者の視座」(注26)で「この五十首の場合も、先の百首と全く同様に、定教歌を詠もうとする意図がまずあり、その構想下に歌は一息に詠み上げられたものと考ええる。」とされ、次の「和泉式部の帥宮哀傷『五十首和歌』—その題詠性・連作性をめぐって」(注27)では、先行の藤平春男氏や久保木寿子氏の論を踏まえて、①題詠性、②連作性、について再度論じている。

①題詠性については「ここに所属の一首一首の大部分が題に規制され、それを意識して詠み出されたことがほぼ確実である」として、例えば、<sup>1014</sup>番については「『昼偲ぶ』という題がそのまま詠み込まれており、もし題詠であるとするればこのままでも十分その条件を満たしているのに、さらに『昼』からの連想で太陽光の『日』、さらに「月日」の「日」の意で『日を経て』が詠まれる。」とし、これがそのあとの歌にも影響していることを指摘し、「通常の題詠以上に前後の同題和歌との結び付きが濃密であることが感じとれる」とする。そして修辭的にも1017番、1018番の掛詞隣り合わせの両首に用いられており、

この修辭こそは、詠者が題にこだわりつつ歌を詠み出していった何よりも証左であると思う。題に合わせてこれらの和歌を選び出すなどという逆のケースは想定しがたいからである」として、『五十首和歌』の五題に部類された和歌はなんらかの意味で題意を踏まえたものがそのほとんどを占め、題との関係を語彙の面から指摘できない作は皆無と言つてよいほどである。」と題詠性は十分に追認できるとしている。

また②の連作性については同様に例（たとえば「物思ふ人」「夢だにも」「雲となりにし人」など）をあげ、同一主題の繰り返しが各題の内部に留まらず見られ、「一首として独立させて詠むよりは、こうした和歌の布置のもたらず交響波の効果によつて、定数歌の構造の中で見直すと、一首の世界はいっそう拡がり深化したものとして目に映るようになる。これこそこの歌群の本来持つ連作性にほかならず、これを各題の中に和歌を投げ入れただけの群作的集合であると見なすとは、題を超えてなお主題性を追求しようとする作者の姿勢から推しても無理であろう。むしろ和泉式部はこの五題を、漸層的に悲嘆の情を表出し得る一種の枠組として積極的に選びとつたのではないかと思われ、その意味で『五十首和歌』という統一体は、①題詠性以上に②連作性を具有した一個の作品として設計され、それ自体独立しえ、かつて世に伝わっていたものと断定してさしつかえないものと思われる。」と、結論づけている。

平田氏の「五十首和歌」は和泉式部自身で題詠として構成し、連作として詠まれたとする結論は、現在、理解を得て、その後このことに関する論考はない。その後、武田早苗氏の「和泉式部続集五十首和歌をめぐって—和泉式部日記と五十首和歌と—」の論考があり、この平田氏の見通しを継承し、五十首和歌と和泉式部日記の表

現の比較の上、『和泉式部日記』の執筆後、「それからさほど時をおかずに、帥宮への追慕と悲嘆を集大成するものとして詠じられたのが五十首和歌であった。帥宮との死別直後の慟哭から始まり、それを過去の思い出として捉えようとするまでの心の軌跡を詠出したこの歌群は、絶望と悲嘆だけを表した挽歌とはその意図するところを少々異にしている。日記の執筆という事業を乗り越えた後に、再度、その悲しみの変遷の有り様を和歌という形で残しておきたいという歌人のさがとでも言えようか」としている。武田氏は日次詠歌群、日記執筆、五十首和歌の順で詠まれたという立場をとっている。

この五十首和歌については、帥宮挽歌群の末尾に後人が挿入したとして諸研究で一致を見ている。それは帥宮挽歌群の古筆切が多く伝わるが、五十首和歌に関してはないので、外の挽歌とは別の伝来を経たと想定されるからである。その成立経緯はともかくとして、五十首の歌をまとまってこうした構成で詠むという、諸研究者が指摘しているように、明らかに意図的な構成意識に基づく営為と思われる。

#### 「日次詠歌群」

日次詠歌群は『和泉式部続集』末尾の1478番（1483番）～1549番の歌群をいう。これらは詞書を見ると、おおむね9月上旬から11月3日まで連続した日付け順で並んでいる。一日一首あるいは複数の歌が詠まれている形である。

この歌群については既に『論集和泉式部』の文献目録にもとりあげられており、その論点を森田兼吉氏が「和泉式部続集日次歌群の方法」（注29）まとめている。すなわち（一）この歌群の最初をどこにおくか。（二）和泉式

部の人生史の中で、この歌群はどこに位置を占めるか——つまり、いつの年の歌日記か。(三)ここに登場する式部の思う人はだれか。(四)和泉式部日記との関わりの四点である。ここに(五)として、私に歌の内容、性格についての研究を追加し、これに沿って研究を概観したい。

まず(一)歌群の冒頭は九日と日付のある詞書を持つ1483番より前の五首、1478〜1482番から始まるというところで諸説落ち着いているようである。1477番は「三月ばかり」という詞書があり季節が違う。続く1478番〜1482番は日付や季節の表示がないが、森田兼吉氏が「歌と歌がからみあい物語的雰囲気をかもし出していること、不如意な恋に苦しみ憂愁に満ちた一四八三以降の詞書や歌と基調を同じくしていること」から1478番〜1549番の七二首をひとまとまりの歌群として提起し、これが「今日では多くの賛同を得て、ほぼ定説化されている。」とある。藤岡忠美氏はこの冒頭部分について『日次歌群』の構造―冒頭部をめぐって(注30)において、近来の説の通りに1478番から始まると見た場合、1478番〜1482番の日付がない五首が冒頭におかれることで何らかの機能を果たすところがあるのだろうかという観点から考察されている。この論考では詳細な考察の結果、「冒頭の五首のうちの、最初の三首が『まえがき』というに最も相応しい部分である。ここでこの歌群における女主人公の設定がなされ、遠方からたまたに訪れてくる男を待つ身であること、男の夜離れのための涙の日々をおくっていること、宮仕えをつとめる身であること、などが紹介される仕組みになっている。……中略……いずれにしても、この冒頭の三首は、歌群の開始にあたって女主人公の設定を果たすだけでなく、物語的虚構の要素を含むかも知れない歌群の構想であることをひそかに提示するものだったのであるまいか。」とし、また冒頭の四首目、五首は「日次



歌の展開が開始される九月八日に当たる。ここにも日付はないのだが、『つれづれ』に日を暮らし、月の美しさを独りで見る淋しい日常がここから始められていくことになるのである。」とされている。

さらに藤岡氏は末尾のやはり日付のない二首についてはその前の十一月三日の  
1546、1547番から詳細に読解し、  
1548番、1549番は「歌  
番は一日付（九月九日から十一月三日まで）によって括られるいわば本編の最後の歌」であり、  
群全体の巻末に付けられた跋の部分に相当するのではないかという見方である」とする。和泉式部はこの二首の  
詞書にある「文」への強い執心があり、それは歌群全体の底流としてあるもので、「このような、歌群全体の主  
題を解き明かすための鍵ともいえるこの『ふみ』の存在とその流れとを承けて、いわば付記的に記されたものが  
最後の二首であり、日次から解放された跋としての立場を保っているのではなからうか、というのが私見である。  
そしてこの見方を支えるのは『和泉式部日記』の末尾に、『宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらし、  
書きなしまめり、と本に。』（新編日本古典文学全集）との注記的本文が虚構的作為として加えられていること  
である。」とし「日次詠歌群の末尾を、同じ作者による共通の作為としてとらえたくなる所以である。」として  
いる。そして日付のない冒頭の部分と末尾を序と跋として対応させるということが作者の構想的意図にあったと  
する。「そうした構想ないしは虚構の用意に守られてことによって、日次詠のかたちをとったこの歌群は、作者  
の日々の心情に沿うところが部分的な集合であるにせよ認められるように思われる。」（注31）この藤岡氏の論は、  
成立や歌群の性格、さらに『和泉式部日記』との関わりをも含んだ解となっている。 さて（二）の成立  
については、諸説が分かれるところである。1990年以降もそれぞれに詞書や人物特定などに根拠を求めて推

測されているが、未だ定説を見ない。年次の早い順に長保三（1001）、四、五年、寛弘六、七、八年、寛仁二、三年、長和三年、万寿元年（1024）、晩年説と20年以上に渡る。また、武田早苗氏は帥宮の御子である「岩藏宮」出産の年に宮邸を退出した折と考え、寛弘三年説成立を提唱した（注32）。現在では詞書に出てくる「人」「例の所」「おほつ」「物語でし人」などを誰をさすかという考察がそのまま制作時期の推定に重ねられているが、そもそも誰に比定するかという点について諸説がある。また、歌群自体の性格のとらえ方、すなわち「詠まれた年度の異なるものを巧みに集成した作品であることが想定されるのである。」（注33）や、平野由紀子氏「仮に実際毎日詠じたとして、何よりもつと同日の詠は多かつただろう。しかしその中には捨てた歌も多くあつたろうし、日次に歌を配すというアイディアは、必ず編集という作業を伴うはずで、これは全く新しい文芸形態であつたのだ。」（注34）というような意図的に虚構性を生み出そうとする行為があつたとすれば、事實はよりおぼろろになっていく。

（三）の人物特定については、夫は道貞、保昌、貴人は両親王、恋人は源雅通、藤原信経などが想定されて論究されているが、久保木寿子氏が登場人物を a 夫と覚しき人、b 敬語が用いられない人物、c 敬語が用いられている貴人に分け、c の敬語がある詞書をもつ三首について c 1、c 2、c 3 として考察の結果、c 1 c 2 と c 3 は別の貴人だとして c 3 は藤原定頼を推定されている。（注35）後藤祥子氏はこの定頼から相模の関わりを推定されている。（注36）また、林マリヤ氏が大江匡衡が「匡衡集」に和泉式部に宛てた歌が十四首あり、そのうち九首が日次歌群に詠みかけた歌であるとの論を出された。（注37）林氏の論文はこれまでのように和泉式部集の

内部からの考察ではなく、外部の資料からの論証で、画期的なものである。これに対しては久保木寿子氏が『匡衡集』少考―和泉式部歌集所収二歌群との関連をめぐって―で反証を試みられている。(注38)このことに関する論考は今のところほかに見当たらない。(四)『和泉式部日記』との関連については日記の方の問題にも関わるのでここでは省く。

(五)に追加した歌の内容についての研究であるが、それまでの論考が事実性の考証に偏りがあったのを、歌群そのものの読みを重視する論考が発表された。尾高直子氏の「和泉式部続集『日次歌群』の表現―歌語『みどりの紙』『風の音から』」(注39)、平野由紀子氏「和泉式部続集日次歌群新考」(注40)であり、また平野氏は「和泉式部の日次歌群について―漢詩の背景―」で漢詩の影響を指摘されている(注41)。久保木寿子氏は後撰集との関連から表現性を論究された。(注42)「和泉式部続集日次歌群の方法と表現性―後撰集雑四との関わりから―」

特に注目されるのは、三田村雅子氏の「もう一つの『和泉式部日記』―詞書から読む日次歌群―」論考である(注43)。この論考では和泉式部集の他の歌の詞書には見られない日次詠歌ならでの顕著な特色をあげて考察している。特に詞書の末尾に「くにも」「くも」を多く用いて口ごもる調子が見られるとし、この言葉は日次歌群には二十例見られるが和泉式部集では他に一例しかなく、日記には現れない特異なものであることを示している。さらに「もの思い」や「ながめ」をうける「ほどに」、「あはれ」を導く「空のけしき」、激しく吹く「風」、受身型の「おぼゆる」が日次歌群に集中すること、同じく「聞く」「聞こゆる」が二十三例見られるなど、そして日次歌群七十二首のうち「思ふ」「物思ふ」が合わせて三十八例あり、「言わばこれは『もの思ふ女の日記』と

でもいふべき性格を持つ特別な歌群なのである」としている。また、和泉式部集の他の歌群の「もの思ふ」基調があることにふれ、「続集末尾の日次歌群は、このような先行（アタリ）の連作歌の構成・方法を学び、さらに拡大してそこに日記的な時間と自然と人事を包摂する新しい日記世界を構築し、その中で「もの思い」を受け止めようとした歌群であると断定してもいいのではないか。」と結論づけている。

三田村氏はこの作品の「日次」についても『日次』表記そのものも、特定の日を指しているとは思われない。日次歌群に多い重出歌も、それぞれ別の場面で詠まれた歌をこの場面にふさわしく最小限の変更のもとに収録、再構成された歌とおぼしい。」とする。日次を虚構とするこの見解は、前述の藤岡忠美氏の論を更に具体的に論証したものである。この歌群を虚構とする見解に立つのであれば、「作品」内から事実（人物、時期）を特定することは出来ず、詠歌状況の把握はある程度必要ではあるが、こだわることは意味がなく、正解もあり得ないということになる。いたずらに事実（史実）との重ね合わせにこだわることなく、この歌群の創意性の観点からの考究が必要である。

## 「まとめ」

多くの研究の中から「初期百首」、「日次詠歌群」、「五十首和歌」の研究を概観したのはいくつもの理由がある。

「初期百首」は和泉式部の初学の和歌とされている。先行の百首と同様に「春夏秋冬恋」という各主題に二十

首（恋は十八首）ずつ詠んでいる。学びの歌というものの、和泉式部の和歌の特徴とも思われる要素は、「初期百首」のうちで既に表れている。

たとえば、技巧の点では、古今集や、先行百首の歌人達（好忠、重之、重之女）、公任などの歌の表現を取り入れながら、巧みに意味をずらして詠んでいる。その例として「21桜色に染めし衣を脱ぎかへて山郭公今日よりぞ待つ」は古今集巻第一春歌「66さくら色に衣は深くそめてきむ花のちりなむのちの形見に」の「着む」を「脱ぎかへて」、山郭公の鳴くのを待つと詠み、春の歌から夏の歌に変えている。また、「12我が宿の桜はかひもなかりけり主からこそ人も見に来れ」は『公任集』「1春来てぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ」の歌をもとに、花が宿の主とはいえ、やはり主ゆえに人が来るとする。（注44）（第三部で後述）。「9秋までの命も知らず春の野の萩のふる根をやくと焼くかな」は『好忠集』（注45）「30花見んと命も知らぬ春の日に萩の古根を焼かぬ日ぞなき」からの影響を受けているとされる（『文庫』）。

この他に「なになれや」「あつれて」「花もてやつす」「日の脚」「白ながら」「おのがみな」など、用例の少ない言葉や、独自の言い回しが見られる。他の和泉式部の和歌にも多く見られる畳語表現も、百首歌の中に「39切りに切りても」「9やくと焼くかな」「25槇のとたたきかくたたき」「43掘らば掘らなん」「52出づるに出でし」「82見えもせむ見もせん」「83寄せては寄せる」など、数多く確認でき、強調とリズム感をもたらしている。

このような技巧の面のみならず、「38声聞けば暑さぞまさる蟬の羽の薄き衣は身に着たれども」「48鈴虫の声ふりたつる秋の夜はあはれに物のなりまさるかな」などのような繊細な感性の窺える歌もあれば「77背子が来て

臥ししかたはら寒き夜は我が手枕を我ぞして寝る」(冬)「81つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り来ん物ならなくに」「88逢ふ事を息の緒にする身にしあれば絶ゆるもいかが悲しと思はぬ」のように、「恋」部においては報われない情熱的な思いを詠んでいる。

これらは初期百首が和泉式部の詠歌歴の初期に詠まれたことを前提とすると、後に読まれた歌と共通する観念や諦観のようなものが、早くから存在していたことを示す。それは萌芽というものではなく、意識して自覚的に詠まれたものではないだろうか。初学の歌としての無意識の評価だけでは語ることはできない、和泉式部の技量の質の高さや、早くから「歌人」として自覚的に作歌に臨んでいたことなどが読み取れるのである。

「五十首和歌」の歌群は研究文献の内容のところで紹介したように、「題」を手がかりに複数の歌を構成意識を以て配列した歌群と考える。すなわち、「ひる」から「あかつき」まで時を追って移行し、歌の主題としては「君」から「人」へ、それは「主情」が「客観化」へ、それに伴い帥宮のことが現在のことから過去のことへと移り変わり、言葉を連携させていく技量を伴って和歌が詠まれ、構成されている。すなわち、この五十首和歌は「創意性をもって配列され、意図的に詠まれた」一つのスタイルの完成形と言ってもいいのではないか。

和泉式部集の中には創意性をもって意図的にまとめられた、と考えられる小歌群がいくつか存在する(第五部)。それらの小歌群は、小規模ながらも詞書によって人と人によるエピソードが語られ、それによる数首の歌が詠まれていくという形をとっている。

この五十首和歌は「題」は時間的推移と恋の様相を示しているが物語的なエピソードが語られているわけでは

ない。創意性をもった歌群といっても、そこに第五部でみるような歌群との大きな違いがあり、「一つのスタイル」という断り書きを入れた所以である。

エピソードを以ての構成という点では、むしろ「日次詠歌群」が既に注目されてきた歌群として重要であろう。またこの歌群は、重出歌をもとに「再構成」があとづけられるという点で貴重である。1405番「交はしてし衣はかへじ結びおきて露けげなりと人は見るとも」と、1509番に三句目が「結びてし」と少し違うが重出している。1405番の詞書は「四月一日、思ふ様ありて」で1509番は「十月一日」である。

和泉式部の重出歌の詞書にはそれぞれ差異があり、二月が三月であったり、詠歌状況の違いなどの例があるが、概ね時期などは共通の要素を含む。この二首の場合、四月一日が十月一日になっているが、同じ衣替えの日である。後者が日次詠歌群と呼ばれる歌群の十月一日に当たる一首となっている。これはすなわち1405番を日次詠歌群の中にあてはめたのではなからうか。他にも日次詠歌群には三首の重出歌があるが、これらの場合、いずれも日次詠歌群ではない方の歌には時間を表す詞書はない。日次歌群に所収するにあたり、新たに時間などを組み込んだと考えられる。日次詠歌群について、詳細な考察をしてはいないのであるが、この歌群の創意性について考える時、重出歌の問題はひとつのヒントになり得るのではないかと考える。

「初期百首」は四季題及び恋の定数歌であり、この歌群自体はまとまっている。「五十首和歌」は述べたように、一日のうちの時間と恋の諸相が題として設定され、その推移に心情が綴られて終わる。「日次詠歌群」の場合には詠歌時期ははっきりしせず、始まりははおおむね1478番からとされているものの、終わりの家集の終わりと同

一であるとしていいのか諸説を見ても決定的とは言えない。ただし、編集の意図はこの日次配列をひとつとつても明らかである。「人」の存在はあるものの、贈答歌はなく、『和泉式部日記』のようなエピソード性はない。しかしながら、物語性を色濃くもつ歌群という点では、百首歌や、五十首歌とは違った興味深い歌群である。編集意図を考えると一時期に一挙に詠んだ歌群ではなく、歌稿の中から折々の歌を少しずつ日記的に編集し直した歌群というように稿者は考える。

注 1 清水文雄『和泉式部歌集の研究』（笠間書院 2002）

注 2 平田喜信『平安中期和歌考論』（新典社 1993）

注 3 寺田透『和泉式部』（日本詩人選18）（筑摩書房 1971）

注 4 清水文雄『王朝女流文学史』（古川書房 1972）

注 5 注 2 に同じ

注 6 鈴木日出男「和泉式部、比喻と象徴」国文学 23 卷 9 号 學燈社 1978. 7)

注 7 吉田幸一『和泉式部全集 本文編』（古典文庫 1959）

『和泉式部研究』（一）（二）（古典文庫 1964 1967）

注 8 円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記』（至文堂 1967 三版）

注 9 清水好子『和泉式部』（『王朝の歌人』6）（集英社 1985）



- 注 10 森田兼吉「和泉式部の歌と帥宮の歌」(國學院雜誌 昭和50年11月) \*
- 注 11 注2に同じ
- 注 12 久保木寿子『和泉式部日記』の構成試論」(国文学研究79 早稲田大学国文学会 昭和58年3月) \*
- 注 13 清水好子『和泉式部』(『王朝の歌人』6) (集英社 1985)
- 注 14 増田繁夫『冥き途 評伝和泉式部』(世界思想社 1987)
- 注 15 久保木寿子『和泉式部百首全釈』(風間書房 2004)
- 注 16 鈴木宏子「『和泉式部百首』覚書・春歌二十首を読む」(千葉大学教育学部研究紀要) 第5巻Ⅱ人文・社会科学編五〇  
2002
- 注 17 藤岡忠美『平安和歌史論』(桜楓社 1966) \*
- 注 18 久保木寿子氏「和泉式部の詠歌環境—その始発期」(『国文学研究』七十一集 1980 (早稲田大学国文学科))
- 注 19 鈴木宏子「和泉式部百首恋十八首について」(『国語と国文学』79・5 2002—05)
- 注 20 清水文雄『和泉式部家集の研究』(笠間書院 2002)
- 注 21 清水文雄『和泉式部研究』所収
- 注 22 藤平春男(「和泉式部」帥宮挽歌群)を読む」(『論叢王朝文学』)所収 笠間書院 1978)
- 注 23 久保木寿子「帥宮哀傷歌群の世界」(『論集 和泉式部』)笠間書院 1998)
- 注 24 木村正中「和泉式部と敦道親王—敦道挽歌の構造」(『平安時代の歴史と文学 文学編』吉川弘文館 1981)

- 注 25 久保木寿子「和泉式部統集『五十首歌』の考察」(『今井卓爾博士古希記念 物語・日記文学とその周辺』(桜楓社 1980))
- 注 26 平田喜信「和泉式部、作者の視座」(初出「国文学」昭和 53.7) 『平安中期和歌考論』 (新典社 1993))
- 注 27 注 2 に同じ
- 注 28 武田早苗「和泉式部統集五十首和歌をめぐって—和泉式部日記と五十首和歌と—」(相模女子大学紀要 10 2005. 3)
- 注 29 森田兼吉「和泉式部統集日次歌群の方法」(『論集 和泉式部』笠間書院 1998)
- 注 30 藤岡忠美「『日次歌群』の構造—冒頭部をめぐって」(『平安朝和歌 読解と試論』風間書房 2003)
- 注 31 藤岡忠美「日次歌群」の構造—末尾をめぐって(注 30 に同じ)
- 注 32 武田早苗「和泉式部統集日次詠歌群をめぐって」(『和歌文学研究』90 2005 - 2006 和歌文学会)
- 注 33 藤岡忠美「和泉式部『日次詠歌群』成立考」(注 30 に同じ)
- 注 34 平野由紀子「和泉式部統集日次歌群新考」(『古今集とその前後』風間書房 1994)
- 注 35 久保木寿子「和泉式部統集日次歌群の成立試論」(中古文学 62 1998)
- 注 36 後藤祥子『和泉式部統集日次詠歌群の虚実』(『古筆と和歌』笠間書院 2008)
- 注 37 林マリヤ「和泉式部と大江匡衡」(中古文学 63 1999)  
『匡衡集全釈』(風間書房 平成 12)
- 注 38 久保木寿子『匡衡集』少考 —和泉式部歌集所収二歌群との関連をめぐって— (白梅学園大学・短期大学紀要 2007)

注 39 尾高直子「和泉式部続集『日次歌群』の表現―歌語『みどりの紙』『風の音から』」(和歌文学研究 89 2004)

注 40 平野由紀子 注 34に同じ

注 41 平野由紀子「和泉式部の日次歌群について―漢詩の背景―」(『平安和歌研究』風間書房 2008)

注 42 久保木寿子「和泉式部続集日次歌群の方法と表現性―後撰集雑四との関わりから―」(国文学研究 122 1997)

注 43 三田村雅子「もう一つの『和泉式部日記』―詞書から読む日次歌群―」(『玉藻』2号 フェリス女学院大学国文学会 2007.3)

注 44 『平安私家集』犬養廉、後藤祥子、平野由紀子校注(新日本古典文学大系 28)(岩波書店 1994)

注 45 『中古歌仙集(一)』松本真奈美・高橋由記・竹鼻續著 (和歌文学大系 54)

(明治書院 平成 16)

## 第二章 和泉式部の詠歌史

「和泉式部集」は自らの編集か後人の選によるものかどうか不明であるし、『赤染衛門集』(注1)や『道濟集』

(注2)のように編年体になっているわけではない。また全体像についても、前項でもふれたように資料研究からの家集の成立や構造は清水文雄氏や平田喜信氏の詳細な研究が基盤となっているが、しかし、現存資料及び傍証になる史料などを含めて、現時点ではこの家集の成立事情などの確実な情報を得ることはできない。そのため、家集のひとつひとつの和歌の読みが詠歌事情を理解するために重要になっており、現在の家集の研究の主流となっている。

まず詠歌史の背景となる和泉式部の伝記を、先学の諸研究から確認しておきたい。

和泉式部の生年は諸説あるが、おおむね天元元年（九七八）生まれとする。

父は大江雅致で、太皇太后宮大進として冷泉帝后であった昌子皇太后宮の職司であり、母は平保衡女で、やはり昌子内親王の乳母子介内侍（掌侍の中の中宮内侍）であったという。和泉式部には姉妹がいたことは家集にも、『赤染衛門集』にも見える。最初の夫橘道貞は、父雅致とは職務上の繋がりがあり、『小右記』（注4）の長保元年（九九九）九月二十二日の昌子皇太后宮病悩の記事に「太皇太后宮大進雅致朝臣」と、「和泉守橘道貞」の記述があり、この時、道貞が宮の権大進に任ぜられており、共に晩年の昌子皇太后宮の身边に仕えていたという。和泉式部の結婚はその前、長徳元年（九九五）か二年（九六九）頃で、長徳三年ころ女の小式部内侍が誕生している。しかし、その後、道貞は和泉式部のもとを離れてしまう。

長保三年（一〇〇一）あたりに為尊親王との出逢いと恋愛があったと推定されるが、翌長保四年（一〇〇二）六月に親王は薨去。長保五年（一〇〇三）四月より、帥宮敦道親王との恋愛が始まり、同年12月宮廷に入る（『和泉式部日記』）。

寛弘二年（一〇〇五）または三年（一〇〇六）に帥宮の子（石藏宮）を産む。寛弘四年（一〇〇七）十月帥宮薨去。

この後服喪の期間を過ぎて寛弘六年（一〇〇九）中宮彰子のもとに出仕し、その後道長家司藤原保昌と再婚した。万寿二年（一〇二五）年に小式部内侍が出産で亡くなる。その後万寿四年（一〇二七）皇太后妍子の追善供

養に玉を献じて歌を詠んでいる（家集 367 番、『栄花物語』（注 5）。これが和泉式部の事実としての記録では最後になり、以降の消息はわからない。

このような詠歌の環境を振り返ると、若い日、帥宮の文化圏は和泉式部にとって和歌表現の感性を研ぎすます源泉となったであろうし、また、上東門院に出仕して道長の周囲にいたことで、周辺に出入りする歌人や詩人のやりとりは知識や教養の摂取におおいに役立ったと考えられる。

以上はおおまかな和泉式部の伝記であるが、道貞との結婚破綻のほか、最愛の親王をふたりまで失い、更に娘にまで先だたれるという平坦ではない和泉式部の人生は、その和歌に大きな影響を与えた。歌群中の帥宮挽歌群と晩年の小式部内侍の死の際の慟哭は、悲痛きわまりない絶唱である。ただ、和泉式部の歌は、あふれる感情をそのまま歌い上げる正述心緒の歌人としての領域にとどまっただけではない。既に先行研究で指摘されているように、河原院文化圏の歌人から百首歌を享受し、その後自ら五十首歌や題詠的な群作を詠み、また漢詩や和歌、経文を歌の頭においた連作を詠んでいる。先駆者がいたとはいえ、このような制約のもとで心情を詠みつつ表現として昇華させるという詠作方法で、一条朝の和歌としては画期的な試みである。こうした詠作がなし得るといふ点で、決してただ口にまかせてすらすら詠むような天才歌人ではないのである。和泉式部は人生の節々で身をおいた詠作の環境の中で、多くのことを摂取しつつ、表現技法の工夫や新たな歌語を創出するといった努力をしていたと考えられる。

和泉式部の歌の多くは詠んだ時期はわからない。家集から読み取れる詠歌事情が、必ずしもすべて和泉式部の

人生の事実とは限らないのであるが、現在までの段階で理解されている研究をもとに、詠歌史をたどることはある程度可能である。

次にあげた表は家集の中から詠歌事情が判明している歌や歌群をとりあげ、詠歌時期（推定）を一覧にしたものである。

「事項」には歌群や詞書に見える人名、出来事などを取り上げ、該当する歌番号（岩波文庫本）を示した。

詠歌の年は現在の研究で推定されている年次で、複数ある場合やずれのあるものは概ね最初の年次を西暦で示した（機械的に年次順に処理するためである）。ただし、同じ年次の中では、状況から事項を適宜入れ替えをした。「注」には、詠歌のおおよその年次の元号と、詠歌時期の不明なものは、人名の該当すると覚しき役職名の在職時期や、没年などを入れたものもある。○内は備考に挙げてある研究書以外の典拠資料である。備考の数字は典拠とした次の資料番号である。並行して論文も参考にした。ここにあげてある資料は、資料の著者が既にそれまでの諸研究をふまえつつ論じられているもので、その時点で総合的に判断された著者の見解が示されているものとして、典拠資料にした。空欄のものは稿者が私に推測した。必要に応じて『小右記』（注6）、『御堂閔白記』（注7）、『権記』（注8）を確認した。

① 久保木寿子『実存を見つめる和泉式部』（日本の作家13 新典社 2000）

② 増田繁夫『冥き途 評伝和泉式部』（世界思想社 1987）

③ 武田早苗『和泉式部 人と文学』（日本の作家100人 勉誠出版 2006）

- ④ 森田兼吉『和泉式部日記論攷 第二』（笠間書院 昭和63）
  - ⑤ 桑原博史『源道濟集全釈』（風間書房 昭和62）
  - ⑥ 武内はる恵、林マリヤ、吉田ミスズ著『相模集全釈』（風間書房 平成3）
  - ⑦ 久保木寿子『和泉式部百首全釈』（風間書房 2004）
  - ⑧ 『赤染衛門集』武田早苗校注（和歌文学大系20 明治書院 平成12）
  - ⑨ 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー 平成26）
- 年表

- ⑩ 『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』卷末年表  
（新編日本古典文学全集 26 新潮社 1994）
- 『長能集』『大江嘉言集』 新編国歌大観（日本文学 Web 図書館 古典ライブラリー）

\* 一覧表 別紙 黄色は和泉式部の人生に関わるもの。青色は重要な歌群や連作を示す。

事 項	歌番号(岩波文庫)	概ね事項 の最初の 年(推)	元号 及び 注	備 考 (典拠)
和泉式部誕生		978	天元元年978	②⑩
初期百首	1~98	993	長徳元(995)~長保元(999)(①) 正暦四年(993)帯刀陣歌合以後か(③)	①③
橘道貞との結婚		995	長徳元年 二年ころ	②⑩
藤原道綱(大将殿)	250,251	996	長徳二年十二月(996)~長保三年七月(1001)道綱右大将	①
小式部誕生	806	997	長徳三年ころ(997)(⑩) 長保元年(999)までに(③)	③⑩
くらきより	151(843) 844	999	長保四年(1002)ころか(②) 長保元年(999) 長保三年(1001)の間(③)	②③
小式部内侍	837 838 1326 1274	999	長保元年999道貞和泉守(小右記)以前か	③
藤原公信少将	108 109 110	999	公信 少将長保元年~寛弘元年(権記)	
橘道貞 和泉守	259重出749 1252 201重出1109 1110 1111	999	長保元年九月二十二の記事(小右記)道貞和泉守以降	①②
為尊親王との恋愛		1000	長保三年(1001)ころ(⑩) 長保元年(999)冬から二年(1000)(②) 長保二年冬~三年十月(①)	⑩①②
「いはほのなかに」歌群 親	442~453	1000	長保四年春1002以前(①) 長保二年1000春(②)	①②
十題十首	164~173 重出146 1~1470	1000	長保二年冬か	①③
親 勘当	252 253 726 75 7 1372 親へ 440 1257 1258	1001	長保三年	①③
権中納言屏風歌(大江嘉言、源道済)	187~198 重出851 ~865	1001	長保三年	⑤
源雅通少将	111 112 255 25 6	1001	雅通 少将長保三年1001~長和元年1012(権記)	
為尊親王薨去		1002	長保四年(1002)六月	⑩
「我不愛身命」歌群	1391~1402	1002	長保四年1002八月以降の春か(①) 帥宮生存中1007以前(③)	①③
帥宮敦道親王との恋愛		1003	長保五年1003「和泉式部日記」	
赤染衛門	365 366	1003	長保五年1003以降	⑧
源道済	245~248 重出787 ~789 804~805	1003	長保五年1003	⑤
大江嘉言	809 810 811	1003	長保五年1003~寛弘六年対馬守 寛弘七年1010ころ任地で没	兼澄・長能 左大臣家 歌合長保五



				年1003三人 出詠
和泉式部日記歌	221~225 227~23 2 400~430	1003	長保五年1003~寛弘元 年1004 (日記記事内容) 以後	⑩
橘道貞 陸奥守	847 184重出849 106 107 (206) 910 1295 1319詞 書 続集切56	1004	寛弘元年1004三月道貞 陸奥守「御堂関白記」	②①⑧
赤染衛門	184 183	1004	寛弘元年1004	⑧
白河山荘花見	99~107	1004	寛弘元年1004三月道貞 陸奥守以降 106の詞書	⑩
石蔵宮永覚	991 499 506 50 7 526 1215 (古 筆切)	1005	出生 寛弘二年1005 (⑩) 寛弘三年1006 (③)	⑩③
花山院歌合	122~131 132 ~140 141~149 重出868~876	1005	七夕歌 重出歌に花山院 歌合とあり 「長能集」 「小右記」参考 寛弘二 年1005八月に中止にな った歌合か	①
源道濟	157	1005	寛弘二年	⑤
帥宮題十首	355~364	1007	寛弘四年十月以前の秋か	①
帥宮薨去	234	1007	寛弘四年	⑩
藤原道綱	235~240	1007	寛弘五年1008以降 (②) 234の詞書寛弘四年10 07	②
傅大納言道綱歌合?	1227~1233	1007	寛弘四年1007正月~寛 弘八1011年六月傅大納 言	①
帥宮挽歌群 五十首和歌	940~1061	1008	寛弘四年1007十一月帥 宮四十九日~寛弘五年一 周忌 寛弘五年冬以降	①
親身論命歌群	269~311 重出368 ~399	1008	寛弘五年冬以降	①
中宮彰子 へ出仕	464 465 466 36 5 467 474 930 931	1009	寛弘六年1009	②⑩
伊勢大輔	930 931 (501 502)	1009	寛弘六年以降 930詞書	
源道濟	459 460	1009	寛弘六年三月五日	②
大江嘉言	459 460	1009	寛弘六年三月五日	②
紫式部日記		1010	寛弘七年夏 女房批評	⑩
藤原保昌との結婚		1010	寛弘七年1010 (⑩) 寛 弘八年1011以降 (②) 寛仁元年1017ころ (④)長和五年1016まで に (③)長和二年 (101 3) (①)	④② ③ ①
清少納言	503 504 505 53 8 539 540 541	1011	寛弘末年以降	①
藤原道長	226 623 624	1011	大殿 寛弘六年出仕後か	
相模	531 532 (公資妻)	1013	長和二1013、三年1014 ころ大江公資と結婚	⑨ ⑥
藤原保昌 大和守	564	1013	保昌長和二年1013、万	⑥⑩

			寿二年1025～長元五年1031在任中 (⑩)	
藤原頼通大饗屏風歌	312 (312～329)	1018	寛仁二年 (御堂関白記)	②
小式部内侍	623 624	1018	寛仁二年1018 教通の子を産む	②
藤原道長	623 624	1019	入道殿 道長寛仁三年出家	*道長年譜
祭主輔親	524 525	1020	寛仁四年1020～治安三年1023 保昌丹後守のころ	①
藤原保昌 丹後守	466 467 468 469 582 583 584 585 472 474 475	1020	寛仁四年1020～治安三年1023	⑩④
定基僧都の母	493～496	1024	万寿元年1024 長元四年1031僧都火事	①
小式部内侍没	482～492 497 498 332 333 515 544 545 574 575	1025	万寿二年1025	⑩
相模	491 492 (相模妻)	1025	万寿二年1025 内侍の死	
定基僧都の母	490 497 498	1025	万寿二年1025 内侍の死	①
皇太后宮 妍子薨去	367	1027	万寿四年1027 追善供養	栄花物語
相模	480 481 (一品宮相模)	1028	長元元年1028ころ一品宮修子内親王に出仕	①⑥
藤原保昌 摂津守	243 244 748 801	1032	長元七年ころ摂津守(増田) 長元九年1036任地没	③
日次詠歌群	1478～1549		寛仁頃	

この一覧は事項にあげた項目の時期が明確なものもあるが、多くは推測である。

また、事項の時期がはっきりしていても、詠歌の時期とは必ずしも一致はするものではない。たとえば帥宮の死を悼む歌の場合、直後とも、ある程度の時間をおいたものとも、さまざまに考えられる。また、詞書にある官職を手がかりとする場合、後の編集でその時の官職に書き替えられて居る可能性もあるが、この表では現在の詞書をもとに推定する。このため、あくまでもそのころの詠歌である可能性というところに止められよう。日次歌群については成立時期の推論に大幅な時間差があるので今は空欄にしてある。

それぞれ今まで別個に詠歌時期を推定されていたものをこうして一覧にしてみると興味深い点がいくつか見られる。

ひとつは、家集の歌番号は詠作時期の順には対応していない。これは既に指摘されているように家集が雑纂形式であることを示すものである。ただし、個々の事項にかかわる歌はそれぞれまとまっており、ばらばらになってはいない。

もうひとつは続集にあたる903番以降の歌が少ないことである。これは続集にある歌には固有名詞が少なく、そこから類推できる歌が少ないということにもなる。ただし、和泉式部の歌の中で大きなまとまりである五十首などを含む「帥宮挽歌群」、「我不愛身命」歌群、「日次詠歌群」は続集内にある。また表にはあげていないが、私に名前を付した「御嶽精進歌群」、「疾うよ来よ歌群」、「桜がり歌群」(第五部後述)なども続集内にある。これまで続集そのものを対象とする研究はさほど多くはない。しかしながら、こうしたこうした構成意識の窺われる歌群が続集に集中し

で見られる現象は、続集のもつ性格としては興味深く、考察する余地を多く含んでいるように思われる。

また、和泉式部の家集の中で最後の歌、一番新しい歌は何かということであるが、詠歌の時期がわかる万寿四年（一〇二七）皇太后宮妍子の追善供養に詠んだ367番が事実に基づいている最後である。ただし、480番の相模に贈った歌の詞書には「一品宮相模」とあり、相模が一品宮修子内親王に出仕したのは長元元年（一〇二八）年ころ（⑥）であるとするれば、もう少し下るかもしれないことがわかる。そして、「津」の国の人とのやりとりを藤原保昌とすれば、保昌が摂津守になった長元七年（一〇三二）頃以降の歌となることが推測される。

この一覧では、家集のまだ多く存在している個々の歌、また家集以外以外の勅撰集や私撰集に含まれている歌については及んでいないが、おおよその、詞書等でエピソードをもつ歌の詠歌の流れはつかむことはできるのではないだろうか。

流れを概観すると、詠歌史としては三期くらいに分かれよう。

第一期は生年から帥宮との恋愛以前までで、この間の詠歌としては、「初期百首」や題詠（十題十首）、屏風歌（「権中納言屏風歌」）を詠んでおり、歌人として既に名が知られた存在であったと考えられる。この時期の注目すべき歌群は「初期百首」であろう。

「初期百首」は「学びの和歌」として『万葉集』や古今集、後撰集などの表現や先行の好忠百首歌、重之百首、重之女百首などの影響を受けつつ、詠まれていることが指摘されている。（⑦）これも諸説あるが、久保木氏は特に恋歌群に『古今和歌六帖』（貞元九七六〜天元九八二ころの成立）の「分類題」が用いられていることから、

これらが「恋歌」に具象の形をあたえる外在的な動機であり、初学ゆえに学びとられてものかと思われる」として、長保二年（一〇〇〇）までには成立していたとする。これに対して武田氏は、正暦四年（九九三）五月五日に行われた「帯刀陣歌合」（東宮居貞親王）の三首が百首歌と類似していることや、この歌合に大江嘉言が出詠していたことなどから、あるいは資料の提供をうけ、正暦四年をそう下らない時期で、娘時代に詠まれたと推定されている（③）。

「いはほのなかに」歌群は、おそらく、橘道貞道貞と不仲になり、為尊親王との関係が知られるところとなつて、両親が嘆いているのを聞いて詠んだとされる歌群である。

心にもあらずあやしき事出で来て、例すむ所も去りて嘆くを、親もいみじう嘆くと

と聞きて、いひやる、上の文字は世の古言なり

という詞書で古今集巻第十八雑歌下 952 「いかならんいはほのなかにすまばかはよのうきことのきこえこざらん」の一字を初句の頭において詠んだ歌十二首である。

親から勘当を受けた悲しみを切々と詠んだ歌群である。為尊親王との恋愛の始まりは長保元年末から三年まで説があるが、長保二年あたりは既に関係があつたと考えられる。為尊親王は長保三年の十月から病気で四年六月に亡くなった（『権記』）ので、久保木氏はこの歌群の中に死別の悲嘆の歌がないところから亡くなる前に詠まれたのであろうとしている（①）。

同じ頃に詠まれた歌群のうち注目すべきは、「権中納言の屏風の歌」である。

「権中納言の屏風歌」は、和泉式部集の中で「人の、屏風の歌詠まするに、はるの」187番〜198番十二首とその重出歌「権中納言の屏風の歌、桜咲きたる家に客人おほかり」851番〜865番十五首のことである。この屏風歌は源道濟（十二首）と、大江嘉言（十一首）が同じ屏風歌を詠んでいる。『道濟集』は桑原氏によれば、概ね年代順に配列されており、この屏風歌は長保三年相当の歌群の中にあるという。そしてこのころ「権中納言」は藤原斉信と推定されている(⑤)。この屏風は四季屏風であり、三者の中では一番歌が多い。桑原氏は各歌人に四季の図柄を示し、色紙形に使う歌を依頼する方法が取られたものと推測し、「道濟集をはじめ三つの歌集の記録は、その図柄の示し方にそれぞれ自分流に多少の解釈を加えて、各歌の詞書として記録したのであろう」し、「必ず採用されるとは限らないから、同一柄に二首の歌を用意する場合もあるらしい」とされている。

和泉式部は赤染衛門などとは違って、屏風歌や歌合などの歌は家集に多くはみられない。

その中で屏風歌がそのまま収載されているのはめずらしく、また、「権中納言の屏風」という出自もわかる屏風歌群であることも貴重である。そして、それが他の歌人も同時に詠んでいることで詠歌の時期も判明するという希なケースである。また重出歌851〜854番の存在によって歌群のどちらかに少し手を入れたらしいことがわかる。誰のどの歌が選ばれたかは不明であるが。ただ、後年（寛仁二年）「藤原頼通大饗屏風歌」において詩や和歌を選定したことが、『御堂関白記』正月二十一日の記事に見え、その中に「江式部」のものも入れたとある歌がある。312番から329番までの歌はそのために詠まれた歌でその中の312番が屏風歌に選ばれたことが、『栄花物語』巻第十三ゆふしで（注7）によってわかる。これは家集だけでは屏風歌かどうかは判断できないという例でもあり、

こうしたことに鑑みる和泉式部が屏風歌を詠んでいないということは断言するのは早計であろう。

「権中納言の屏風歌」でもうひとつ重要なことは、長保三年に貴族の屏風歌を依頼されたということであろう。これまで見てきた詠歌の中で、この長保三年という時期に既に作られていて、和泉式部の和歌として世に知られている可能性があるものは、初期百首ぐらいしかない。このような早い時期から、歌人として認められていたということは、ある程度まとまった家集の草稿のようなものがあつたり、世にも流布していたのだろう。

この期間の歌群として、「我不愛身命」歌群が、和泉式部無常観の表出の詠歌史上、早い時期のものとして注目される。(時期は第二期とも接するかもしれない。)

この歌群は「法華経」勅持品第十三の偈文「我不愛身命 但惜無上道」の「我不愛身命」を「われみいのちをばをします」と訓読し、その十二音を初句の頭に置いて詠んだ歌である。なお、『法華経二十八品和歌』は法華経の全巻二八品の章句・頌・部分を題として、一人ないしは複数の詠者が各品を詠んだ和歌(⑨)ということ、平安中期から近世まで見られ、供養や法会などのために詠まれていたという。

『我不愛身命』といふ心を上にすゑて」との詞書を添えて、経文の一字一字を「上にすゑて」その意味するところを詠んでいる。この世への未練と自らを惜しむ歌を詠み、この世における罪業の深さ、無常を詠み、自分の身の過ぎ(死んで)ゆくのは今日とも知らずにという歌で終わっている。経文をもとに無常を嘆き詠みながら、実は身命を捨てきれぬ自己愛と現世の執着を詠んでいるのである。経文をこえて人間存在を深く見つめた歌となっている。

第二期は帥宮との恋愛から同居、死から中宮出仕ころまでとする。この時期は、帥宮の文化圏に身をおいて、花山院歌壇などのさまざまな交友もあった。この年表においても種々の歌人の名前が見える。河原院に集まる歌人、花山院、帥宮周辺において、歌会、詩会、歌合などに出詠する人達、後宮に出仕する女房達などである。なかでも男性歌人は三つの歌壇に共通して関わっている人もいる。源道濟や、大江嘉言、藤原長能、源兼澄がそうである。また上流貴族である道長、公任、道綱とも直接歌を交わしている。

女性歌人について、赤染衛門、清少納言、伊勢大輔、定基僧都の母、相模など、後世に名を残す歌人たちと折々、歌を交わしている。特に赤染衛門とは親しかったようで、息子挙周が雅致女（和泉式部の妹）の所に通って、挙周の代わりに母親の赤染衛門が、雅致女の代わりに「姉の和泉式部」がそれぞれ代詠をしている歌が『赤染衛門集』にある。（和泉式部集にはない）。また、『両集に和泉式部が夫道貞と離別し、帥宮に引き取られたことにたいして赤染衛門が和泉式部に歌を送り、修復に心を砕いている贈答歌がある。また、清少納言とは「あやめ草」に絡めて贈答歌があり、第二部で後述する。

右のように上流貴族や当代一流の歌人たちとの接触は、和泉式部が漢詩や和歌に理解の深い帥宮の近くにいたことから、和泉式部は以前よりまして可能になった。和泉式部は帥宮と長保五年（一〇〇三）四月に知り合ってから寛弘元年（一〇〇四）一月帥宮邸に引き取られる。その間の恋愛の推移を一四四首もの和歌を含んだ『和泉式部日記』を後にまとめている。三年あまりの短い同居生活のあと、帥宮は寛弘四年（一〇〇七）十月に亡くなる。そのあとの宮の四十九日の法要から一周忌までを詠んだ「帥宮挽歌群」といわれる94番〜1061番の独詠百



二十二首がある。悲痛極まりない絶唱はこの家集の中の白眉といえる。この中に含まれる題詠五十首和歌については研究史のところで述べた。この挽歌群に続く「観身」歌群は和泉式部の一層の孤独を詠じている。

第三期は中宮出仕後にあたり、これは道長の周辺にあることも意味する。和泉式部は、小式部内侍とともに、道長文化圏の中で詠歌生活を送っている。このあたりは『紫式部日記』の女房評に語られている。

伊勢大輔は和泉式部より先に中宮彰子に出仕し、和泉式部が初出仕した折に歌を交わしている。相模は和泉式部の和歌の後輩でもあり、個人としても親しかったようで、旅の途中で和泉式部の家に立ち寄りたり、小式部内侍の死に際しては歌を贈って来ている。また、和泉式部が「前栽のおもしろきを見て、いひあつめたる」という476〜480番の五首の歌を「一品宮相模」に贈り、それに対して相模が返歌をしている。この歌群は秋の庭の美しさを愛でて詠んだもので、久保木寿子氏は再婚の相手の藤原保昌邸で詠まれたものとしている①。しかしこの歌の基調には、和泉式部の無常を詠む歌いしばしば潜んでいる、鬱々とした気分は見られない。相模も巧みに冬は何？と聞き、菊をかけた歌を返している（481番）。この相模の歌が、一品修子内親王に出仕した後に詠まれた（後から加えられたものでなく）とすれば、一〇二八年頃にはまだ和泉式部も健在であり、晩年のころの歌と考えられる。

藤原保昌との結婚後、丹後守や大和守、摂津守となった保昌とは歌のやりとりはあるが、この時期の贈答歌は保昌以外の人のものである。そうした和泉式部の晩年の大きな出来事が小式部内侍の死である。幼い子を残して亡くなった娘の子を思いやる気持ちと、和泉式部自身が自分の子を失った悲しみを重ねて慟哭の歌を詠む。

家集の中で帥宮挽歌と同様に悲傷の歌はこの小式部内侍の死を悲しむ歌である。まとまった歌群はないが、番々492番の中には、和泉式部が小式部内侍の死を悲しむ歌、小式部の子供を思いやる歌、小式部内侍を悼み、和泉式部を見舞う人々との贈答歌が収められている。上東門院をはじめ、相模、木幡僧都定基の母といった人が、消息を寄越している。この他に332、333番は頭中将公成（小式部内侍は公成の子を産んで亡くなった）との贈答、544番小田（山田か）中務が内侍の薫き物を請いに来たときの歌など、周囲の人々との歌の中でより悲しみを表出させられて詠んでいる。晩年になって、子に先立たれることは予想だにできなかったであろう。

小式部内侍の死については、家集の中にはおそらく詞書には名がなくとも、折につけその悲しみを母体にして詠んでいる歌は他にもあるはずである。そして、これは和泉式部の詠歌史としては大きな締めくくりとなったのだと思われる。

注1 武田早苗・佐藤雅代・中周子『賀茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』（『和歌文学大系』

20）（明治書院 平成12）

注2 桑原博史『源道濟集全釈』（風間書房 1987）

注3 久保木寿子『実存を見つめる和泉式部』（日本の作家13 新典社 2000）

増田繁夫『冥き途 評伝和泉式部』（世界思想社 1987）

『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』巻末年表

注 4 藤原実資『小右記』3 現代語訳 倉本一宏編 (吉川弘文館 2016)

注 5 家集 367 番

皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて、いろいろの玉召したるに、

参らすとて

367 数ならぬ涙の露をそへたらば玉の飾りをかさんとぞ思ふ

『栄花物語』巻第二十九 たまのかざり (新編日本古典文学全集 33 小学館 1998) p 143

注 6 注 4 に同じ

注 7 藤原道長『御堂関白記』(上・注・下) 倉本一宏全現代語訳 講談社学術文庫 (講 談社 2009)

山中裕ほか校注・訳『栄花物語』巻第三十二 ゆふしで (新編日本古典文学全集 32 小学館 1997) p 129

注 8 藤原行成『権記』(上・中・下) 倉本一宏全現代語訳 講談社学術文庫 (講 談社 2011 2012)

\* 年表以降の注は典拠とした文献の丸付き数字で示してある。

### 第三章 和泉式部の漢詩文の受容

和泉式部の生育環境や生活環境が、詠歌にどのような影響を及ぼしたかを考える時、和泉式部の歌に漢学の影響があることが指摘されている。これについて、和泉式部がどのような環境で漢詩文を受容したについては詳細な先行研究がある。まず、その研究の内容の概容を示したい。

#### 一 先行研究

先行研究として、小松登美『和泉式部と漢学』（注1）近藤みゆき『和泉式部と漢詩文』（注2）をあげる。

小松登美氏の研究は和泉式部と漢学の受容について、具体的に漢詩をあげて指摘した論文である。氏は平安時代における女性の漢学習得の状況が好意的に受け止められなかったことにもかかわらず、当時の上流貴族の女性、特に后宮は漢学の教養は必須であると暗黙のうち見なされており、それなりの漢学教育を受けていたらしいことを『宇津保物語』や『源氏物語』の例も引いて、言及している。また中流階級の女性にはそれほど知識は求められなかったが、女房として出仕するには家や容姿のほか、書道、和歌、音楽のたしなみと共に、『人のいらへ

―人との応対―』の巧みさが基本条件の一つとされた。」とし、「人」は「上達部・殿上人等の男性陣」で、女房は漢学を学んでいる男達と対応して賞賛を得なくてはならなかった。つまり女性の処世のすべてとしても、ある程度漢学の知識が必要だったとしている。定子サロンの清少納言や彰子後宮の紫式部の学才が際だったのも、后宮の漢学に対応する教養を双方ともに備えていたからであろう。

小松氏の研究では和泉式部がどのような機会に漢学の教養を身につけたかということの可能性として、「1 幼児の―生家の―環境、2 夫・恋人・男の友人を通して、3 官仕え先」の三つの経路が考えられるとしている。1 は、父は大江雅致で大江家の出身、母は昌子、内親王（冷泉天后）に仕える乳母介内侍（稿者注 小松論文のまま）と伝えられ、両親ともに漢学の教養があったと推察できる。これは雅致から勘当をうけていたころの歌に、中国の故事を詠み込んで親に贈っていることからわかる。2 は、交友関係の中には道綱、公任、道長、道濟などがおり、漢学の知識は帥宮敦道親王の影響が大きいとする。また3 の官仕え先としては敦道親王家と彰子の御所ということで、作文会をたびたび開いた敦道親王はもちろん、御所では道長や多くの公卿、殿上人との交渉もあり、漢学の知識を得る機会に恵まれていたと指摘している。そして、注目すべき点として、「第一は、この帥宮との交渉の時点において、和泉には既にある程度の漢学の知識があった点である」、「第二に注目されるのは、こうした帥宮の持つ漢学の世界に対し、その交渉の初期の段階において、既に、和泉が非常に積極的な関心を示し、宮もそれを嫌ってはおられない点である。」として、次の日記の歌を引いている。

\* 1 『和泉式部日記』 (注 3)

しばしありて、御文あり。「けさは、鳥の音におどろかされて、にくかりつれば、殺しつ」とのたまはせて、鳥の羽に御文をつけて、

殺してもなほあかぬかなにはとりのをりふし知らぬけさのひと声

御返し、

いかにとはわれこそ思へ朝な朝ななき聞かせつる鳥のつらさは

と思ひたまふるも、にくからぬにや」とあり

\*2 『和泉式部日記』 (『和泉式部集』 四二二)

御文あり。「おぼつかなくなりにつれば。参り来て、と思ひつるを、人々文つくるめれば」とのたまはせられたれば、

いとまなみ君来まさずはわれ行かんふみつくるらん道を知らばや

をかし、とおぼして、

わが宿にたづねて来ませふみつくる道も教へんあひも見るべく

小松氏は漢詩文の世界を顕著な形で反映している歌がある箇所にとまっていることについて、「1は帥宮との恋愛関係歌であり、2は帥宮哀悼歌群であり、3は統集末尾の日記的歌群である」とし、1、2、はやはり帥宮の影響が認められ、3はこの中に明確に漢詩文を典拠としている歌が含まれているので、この歌群執筆時には

漢詩文に強い興味を持っていたと指摘している。

また小松氏は家集のうち漢学の影響が見られる歌を三十例近く紹介し、和泉式部にとって「漢学の素養は和泉に何をもたらしたか、その人間性をいかに深め、その視野をいかに広げ、観察・表現力をいかに磨き豊かにしたか、これは重大な問題であるが、現時点では軽々には論じ得ない。」とし、その前に、家集の中の漢学の影響を受けた歌を掘り起こし、他の女流作家との比較、生涯を通しての漢学との交渉軌跡を辿ることが必要と指摘している。この指摘は、漢学の影響のみならず今後和泉式部の和歌研究及び詠歌史研究の一つの指針になる指摘であり、最も和泉式部の和歌の本質に迫る視点である。しかしながら、現時点でもまだ十分に研究し尽くされていない。

近藤みゆき氏は小松論文を踏まえた上で、新たに加えた詩文の関わる用例を、詠作機会ごとの分布が示し、さらに百首歌や群作、帥宮歌会、道綱の歌合などの中の漢詩の影響を受けた歌を詳細に検討し、長保三年八月〜十月時期に制作されたと推定する。「権中納言の屏風歌」で和泉式部の歌に既に漢詩の影響が見られることから、「漢詩文を一首の創造の糧とする方法意識は、すでに教道との交渉以前、社交とはやや別の、文芸世界との交渉に根ざしていると言えよう。」としている。教道親王との交渉が始まったのは長保五年である。そして漢詩を享受した歌が多く詠まれた時期は長保末〜寛弘期と推定し、次の例をあげ、「いわば、この期の和泉帥の官という文人・文芸の場の主催者のかたわらにある者として、こうした新進文人・歌人達の新しい漢詩文受容の方法意識を身近に出来たのである。(中略)これら、兼作歌人らとの文芸の場の共有と刺激が、この期の和泉の漢詩文へ

の関心の高揚に繋がったのではないか。」としている。

『後拾遺和歌集』 卷第二春下 (新大系)

庭の桜の多く散りて侍りければよめる 和泉式部

148 風だにも吹きはらはらずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

『兼澄集』

(新編国歌大観)

そちの宮にて三月十日よひばかりに人人うたよませたまふに、はなを見て

にはをはらはらずといふだいをたまはりて

1 はるのうちはちりつもるともきよめせじはなにけがるるやどといはせむ

『嘉言集』

(新編国歌大観)

花をみむとてにはをはらはらず

95 はなちればてもふれでみる庭の面を心にもあらぬ風やはらはむ

愛水多棹舟 惜花不掃地

(白氏文集 卷五二・二二八九・「日長」)(注4)

## 二 和泉式部の漢学受容の状況

前項の先行研究により、和泉式部の漢文受容の環境が提明らかとなり、帥宮の影響によるところが大きいもの



の、二人の交渉以前から和泉式部には漢学の知識があったことがわかった。

そして、小松論文や近藤論文に挙げられている、漢文の影響を受けているという和泉式部の和歌の原典は、白氏文集、法華経、礼記、経国集、日本書紀、宋玉高唐賦、田氏家集、玉台新詠、千載佳句、樂府、等多岐にわたる。では、和泉式部は漢文を具体的にどのようなようにしてどういう機会に手にして読んだのだろうか。

紫式部は『紫式部日記』（注5）に、自身の学問のことについて、弟が漢籍を習っている時に「ききならひつ」覚えたことが記述されており、状況がよくわかる。また漢籍も物語も厨子の中に保管されていて、夫が亡くなってから一冊、二冊取り出して見るといふことも、「真名書」が読める人であったとわかる。また、紫式部の周囲の朋輩や侍女たちの陰口を恐れて、一という字すら書けないふりをしたとあり、女が漢籍を読むことは社会的には女性らしくない、批判される行為だったことが書かれている。

同じく同時代の清少納言は『枕草子』一九八段「文は」に

文は 文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文。

とある。また、一四八段「見るにことなる事なきもの、文字に書きてことごとしきもの」の段には見るにことなる事なきもの、文字に書きてことごとしきもの 覆盆子。鴨跖草。

水茨。蜘蛛。胡桃。文章博士。特業の生。皇太后宮権大夫。楊梅。いたどりはまいて、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。（注6）

と書いてある。この一九八段に見る文献は「表」、「博士の申文」などあり、女房が見ることができなものだっ

たのか、清少納言が何故興味を持ったのかはわからないが、漢詩のみならずこのような漢文まで清少納言は読み得たということである。一四八段は、大したものではないのに仰々しいこういう漢字が使われていると例にあげているものである。ちなみに「覆盆子」は『古事類苑』(注7)によれば『和名類聚抄』に挙げられており、清少納言の知り得ることと考えられよう。

この紫式部と、清少納言の二人の漢籍受容に対する態度は正反対である。紫式部はひたすら漢文の知識を隠していたと書いているが、清少納言はあつけらかんと自分が読んだらしい漢文の書物を披瀝している。これが紫式部の清少納言への反発を買うことになるのだが、ただし、紫式部も日記に彰子に日本書紀、白氏文集、樂府などを進講していることを綴っており、それを隠すことが大変であったと述べるのは、いかに漢文の知識があるかということの逆の表現でもある。『源氏物語』の作者が「一」の字が書けないはずがなく、書けないと周囲に思わせたというのも大げさである。

和泉式部はどうか、ということであるが、自らは何も書いていないので何もわからないし、紫式部の批評にも漢籍の知識についてはでてこない。とはいえ前掲の先行研究にもあるように、生家の大江家は学問の家系であるので、家に書籍はあったであろう。一家がより所にしていた昌子内親王の周辺でも、漢学の知識を得る環境はあったと考えられる。昌子内親王は朱雀天皇と熙子女王(前坊保明親女王 母時平女)との間の一人娘であり、父や母方の両祖父から多くを伝領した資産家として知られていたという(注8)。そこには漢籍などの知的財産などもあったと考えられる。既に、「初期百首」と呼ばれる和泉式部集冒頭の歌群や、「権中納言の屏風歌」で

も漢学の影響が指摘されているところから、帥宮との交渉以前に漢籍を身につけていたことは確かであろう。

ある程度具体的に漢文受容の状況がわかるのは、帥宮についての記事である。帥宮は『権記』(注9)によれば、長保元年九月十一日、十月七日に帥宮が作文会を行ったことがわかる。また、長保二年二月三日に帥宮から天曆(村上天皇)御製の詩草一卷借りたという記述がある。また『大鏡』の「道隆」伝には、「また、学生ども召し集めて、作文し遊ばせたまひけるに・・・」というくだりがあり、宮が自ら作文会を主催するような漢詩に造詣が深い方であったことと、おそらく漢籍も多々所蔵していたのであろうことが推察される。また、源道済や大江嘉言はすでに和泉式部とともに「権中納言の屏風歌」に出詠しているが、この二人も帥宮周辺にいた。特に道済は和泉式部集にたびたび名がでてくる兼作歌人である。和泉式部は帥宮と出会いの結果、そういう環境に入ってしまったのである。また、彰子のもとに宮仕えの間、道長との交渉も家集の中にでており、道長が度々作文会を行っていたことは、『御堂関白記』(注10)にある。また『権記』にも内裏作文会の記録がたびたび見え、どちらも「詩題」が記録されている。男性貴族達の詩会ではあるが、ある程度の詩題や詩の内容が耳に入らないでもないであろう。

他に先行研究にも例としてあげてあるが、詩会とかかわりがある歌が次の二例である。

三月晦に、「惜<sup>レ</sup>春<sup>ノ</sup>心<sup>」</sup>の文作りて、四月朔日になりぬれば、そのつとめての歌よむに

1436 昨日をば花の蔭にて暮らしてき今日こそ往にし春は惜しけれ

この歌は詩会で男性が「惜春心」の詩を作って、翌日は四月になっていたので、歌を詠んだ。これは帥宮邸か

どうかはわからないが、当然和泉式部は「文」も見ていたと考えられる。後拾遺集卷第二春下に大中臣能宣朝臣の歌に

三月尽日、「惜」春、心」を人ぐよみ侍りけるによめる

163 ほととぎす鳴かずは鳴かずいかにして暮れゆく春をまたもくはへん

という似た状況の歌があるが、この場合は歌会であろう。「文作りて」とあるところがその違いである。「惜」春、心」は特に詩ではなく、季節の歌題と思われる。

「花の時心不」静、雨の中松緑を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

460 松はそのもとの色だにあるものをすべて緑も春は異なり

この 459、460 番については、源道済、大江嘉言も同じ題で詠んでいることが、すでに久保木寿子氏によって指摘されており（注11）、「全釈」や、『源道済集全釈』（注12）でも言及されている。

『源道済集』（以下論文引用の道済の歌は注12による）。

三月五日、中宮大夫、法住寺にて人々詠みし。二首。春残花。

264 山隠れ残れる花を見つるかな世に吹き出だす風にたづねて

265 春雨に生ふる小松の梢にぞ君が来てみむほどは知らるる

『大江嘉言集』

花心しつかならず

114 さかぬよにちるまで花につけたれば春の心のそらにも有るかな

はるのこまつ、みどりをます

115 千代まではかはらざるべき松なれどはるはみどりのふかくぞ有りける

『道済集』では「春残花」と一首の題が違うが、他にも題が出ていたものか、この歌だけ時期が違うのかは不明である。この他は微妙な違いはあれ、ほぼ同じ題であることから、『和泉式部集』459、460番の詞書にいう「人のよむに」の「人」として道済と嘉言も参加したことは確かであろう。この歌会は状況としては同じ歌題を出されて、それについて歌を詠むわけである。この道済の歌によれば、これは中宮大夫藤原斉信の歌会と推定される。なお、先に見たように、藤原斉信が制作を依頼した「権中納言の屏風歌」に三人とも出詠している。

ただ、この「花の時心不<sup>な</sup>静<sup>ま</sup>、雨の中松緑を増す」については、出典が未詳であり、あるいは漢詩に由来するのではなく、その時に用意された題なのかも知れない（第三部後述）。

小松論文が指摘しているように帥宮は和泉式部が漢文を撰取するのを嫌っていない。『和泉式部日記』の「を

かし、とおぼして、」と文作る道を教えてあげようと返歌していることでもわかる。そのような親王のもとにあつて、和泉式部は漢学の知識を吸収し、歌に取り入れたのであろう。また、清少納言は漢籍に詳しい定子のもと、まわりの貴族との当意即妙のやりとりでその漢学の知識を遺憾なく發揮している。紫式部が非常に神経を使って隠さざるを得ないと書いているが、これは紫式部の気質と彰子周辺の雰囲気による考えではないだろうか。『枕草子』にも見られるように、定子サロンでは漢学知識を披瀝してもはばからない空気があつたと考えられる。それゆえ、清少納言が周りから讃められて、得意になつていたのである。清少納言の性格によるところも大きいのであろう。

### 三 和泉式部の歌の漢詩文

二の冒頭にあげたように和泉式部が原典としていると思われる漢文作品は多様である。ここにあげられた出典はどれも特殊なものではなく、既に多くの研究がなされている『和漢朗詠集』にある漢詩を題にすえた「観身」歌群は『枕草子』にも引用されているし、法華経観持品からの「我不愛身命」歌群は、公任や赤染衛門、長能なども「我不愛身命 但惜無上道」の歌を詠んでいるので、仏典の知識として身につけていたものかもしれない。「文集」、すなわち『白氏文集』は、清少納言や紫式部なども挙げていたので、すでに常識となつていた。『玉臺新詠』との関わりは、千葉千鶴子「和泉式部と漢詩―『玉臺新詠集』」注13に用例があげられている。次に和泉式部は漢詩から得た知識をどのように詠んでいるか、小松論文、近藤論文以外の例を挙げてみよう。

315 影にさへ深くも色のみゆるかな花こそ水の心なりけれ

「水のこころ」の用例は多く見られるが、ほぼ詞書や、歌の中に水の縁語の「河」「池」「谷」「瀬」や、水の状態を示す「ながれ」「清」「にぎり」などと共に詠まれている。

和泉式部の歌は、「流れ」も「池」も語として詠まれていない。それを思わせるのは「水のこころ」の「水」のみである。

「全釈」では『和漢朗詠集』にもおさめられている白居易の詩やこの詩をふまえた管三品の詩を「心においてであらう」としている。次に挙げる。

『白氏文集』卷五十七

(注14)

2799 過元家履信宅

鶏犬喪家分散後 林園失主寂寥時

落花不語空辞樹 流水無情自入池 略

『本朝文粹』卷十詩序三 木管三品

(注15)

暮春待宴冷泉院池亭同賦 花光水上浮 応製

略

觀其花綻在岸 水清盈科

花垂映而水下照 水浮光而花上鮮

略

誰謂水無心 濃艷臨兮波變色

誰謂花不語 輕漾激兮影動唇

嗟乎、花之遇時 水之得地者歟 略

菅原文時が詠んだのは、美しい花々が咲く冷泉院の池で行われた宴の折の詩である。

この詩をみると、花は綻び岸辺にあって、池には清らかな水が満ちている、花は水に映え、

照り輝き、水は光を浮かべて花の上に鮮やかである。このあとさらに水と光、水の色的美しさをたたえる文言が

続き、そこに白居易の詩をひいて、誰が水に心が無いといったのだろう、あでやかな濃い色は水に臨むとき、そ

れに応じて波も色を変えるのだと詠じている。

この詩句の内容と、和泉式部の歌との関連は確かであろう。特に通常の「水の心」を詠む和歌とは異なって、

水に映る花の影に注目する点に影響は明らかである。では、花影が「色深く見える」に続く「花こそ水のこころ」

とはどのようなことを言おうとしているのだろうか。

「全釈」では「水の本心、水の精粹」、「文庫」では「水の情趣」と解している。もともと、「水の精髓」、「水の情趣」というのはどういう意味か不明で、また、花と水どちらが主体かわからない。



文時の詩は「水には心があるのだ、だから花影をいつそう濃く鮮やかにする」という意であるが、和泉式部は、それをもうひとつ展開して、いや実はそれは「水」ではなく、「花」がそうさせているのだ、「水の心」と思われているのは実は「花」なのだと言んでいるのではなからうか。

この歌は寛仁二年「藤原頼通大饗屏風歌」に詠進のために詠んだと思われる歌の312から329の歌の一首である。この歌は採用されず、312の歌が取られている(注16)。

次の歌は「金剛般若経」に典拠を持つと思われる歌である。

露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて

178 草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か

露より世のはかなき事あるに

1149 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれじ幻の世か (続集)

他出 万代和歌集卷第十八 雑五

(注17)

3573 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれしまぼろしの世か

この歌は重出歌と微妙に助詞が違っており、また諸注の解釈も見解が分かれる。

「全釈」はこの歌の出典は金剛般若経「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如雷、應作如、是觀。」と  
している。「文庫も「一切有為法・・・によるか」と補注にあげている。研究者によつて、「し」を過去形とと

るか、否定として「じ」ととるかによって解釈も異なる。この歌の解釈については後に詳しく述べる（第四部）が、この歌は無常あるいは仮有を詠む歌である。

漢学の影響が多く見られる歌があるが、ここにあげたように、漢詩の趣旨をなぞるだけではなく、いかにそれを詠み込んでいるか、どのように展開させているか、もう少し各歌を詳細に読むことで、また和泉式部の和歌についてのひとつの特質を明らかにすることができるのではないだろうか。

- 注 1 小松登美『和泉式部の研究』（笠間書院 1995）
- 注 2 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房 2005）
- 注 3 野村精一校注『和泉式部日記 和泉式部集』（新潮日本古典集成 新潮社 1981）
- 注 4 『白氏文集』巻五二・二二八九・「日長」（『新釈漢文大系』第105巻 白氏文集 九）（明治書院 2005）
- 注 5 山本利達校注『紫式部日記 紫式部集』（新潮日本古典集成 新潮社 1980）
- 注 6 松尾聰、永井和子校注・訳『枕草子』（新編日本古典文学全集 18 小学館 1997）
- 注 7 『古事類苑』洋巻第二巻 植物部 十八 草七（ジャパナレッジ）
- 注 8 山中裕ほか校注・訳『栄花物語』巻第一 月の宴（新編日本古典文学全集 31 小学館 1995）
- 注 9 藤原行成「権記」（倉本一宏訳 講談社学術文庫 講談社 2011）

- 注 10 藤原道長『御堂関白記』（上・注・下）倉本一宏全現代語訳（講談社学術文庫 講談社 2009）
- 注 11 久保木寿子「和泉式部の詠歌環境―その始発期」（『国文学研究』  
七十一集 昭和五五（早稲田大学国文学科）
- 注 12 桑原博史『源道济集全釈』（風間書房 1987）
- 注 13 千葉千鶴子「和泉式部と漢詩―『玉璫新詠集』」（『和泉式部の言語空間』和泉書院1997）
- 注 14 『白氏文集』十岡村繁著（『新釈漢文大系 第106巻』（明治書院 2014）
- 注 15 大曾根章介ほか校注『本朝文粹』（『新日本古典文学大系』27）（岩波書店 1992）
- 注 16 山中裕ほか校注・訳『栄花物語』巻第三十一 ゆふしで（新編日本古典文学全集32 小学館 1997）p 129
- 注 17 安田徳子『万代和歌集』下（『和歌文学大系』14 明治書院 2000）

## 第二部 「菖蒲（あやめ草）」の歌

### 第四章 平安時代の和歌における「あやめ草」

#### 一 はじめに

本章では、「菖蒲」「あやめ草」という歌材を取り上げ、和泉式部の歌の特質の分析を試みたい。「あやめ草」の歌とは詞書、または歌の中に「菖蒲」「あやめ草」「あやめ」の語が入っている歌をいう。

「菖蒲（あやめ草）」は折と強固に結びついた歌材であるので、『和泉式部日記』に顕著なように「折」を意識する和泉式部の特質をはかるのに格好の歌材と考えられたのである。以下、和泉式部は「五月五日」をどう詠んでいるのか、またその際に「あやめ草」という歌材をどのように扱い、何を表現しようとしているのかを考察する。

五月五日は節供の日であり、様々な行事が行われる。後述するように、この日に菖蒲は欠かせない植物である。菖蒲を軒に葺き、薬玉を作り、人に贈り、邪気を払い長寿を願う。「菖蒲（あやめ草）」にとっては一年で一日の「晴れ」の日なのである。ところが、菖蒲は翌日になればだれも振り返らなくなる。ゆえに「菖蒲（あやめ草）」にかかわる歌は五月五日に詠まなければならないし、この日のうちに贈り贈られることが肝要なのである。また、年中行事と結びついているだけに、月並みな歌に陥りやすい「菖蒲（あやめ草）」をどのように詠むのか、その表現力が問われる歌材である。

和泉式部は「あやめ草」の歌を和泉式部集で二七首、『詞花和歌集』に一首、『和泉式部日記』に一首詠んでいる。このうち、勅撰集にのみある『詞花和歌集』の一首のほか勅撰集に他出しているのは、『後拾遺和歌集』に一首、『続古今和歌集』に一首のみである。他出が少ないということは、「あやめ草」を詠んだ歌については、和泉式部の歌としてあまり注目されなかった歌が多いということ推察させる。

また、和泉式部以前に「あやめ草」を複数詠んでいる歌人はさほど多くない。『貫之集』（正保版歌仙歌集本（注1））は全八八九首のうち八首、『能宣集』（西本願寺本（注2））は全四八五首のうち一七首、同時代の『赤染衛門集』（榊原本（注3））でも全六一四首のうち、贈答歌の赤染衛門自身の歌一首が確認できるくらいである。これらは、平安中期までの「あやめ草」を詠んでいる歌人の中でも歌数が多い方である。和泉式部の場合、和泉式部集一五四九首（重複、重出歌を含む）のうち二七首であり、母数が違うので一概に比較はできないが、「あやめ草」の歌数は多い方と言えよう。その意味では平凡な詠歌として等閑視されてきた「あやめ草」をめぐる歌は、案外和泉式部の詠作の特質とも関わっているのではないかと想像される。

たとえば和泉式部の「あやめ草」の歌は「五月五日」に関わる歌が、全二九首のうち二三首を占める。和泉式部に「あやめ草」詠が多いのは、「折」をとらえて詠むのに、興味を引かれる歌材であったからなのである。

このような見通しのもと、和泉式部の「あやめ草」の歌について考察していきたい。

## 二 菖蒲と五月五日の行事

「菖蒲」はサトイモ科の多年草で、現在一般に「菖蒲（あやめ）」というと念頭に浮かぶ、花の咲くアヤメ科の「アヤメ」や「ハナシユウブ」とは違う植物である。『和歌植物表現辞典』（注4）によれば、「北半島の温帯から熱帯の水辺に群生する多年草。根は横に這い、枝分かれが多い。植物全体、特に地下茎に芳香がある。」とあり、『菖蒲』という字はセキシヨウの漢名。」である。菖蒲の「根」は「粗大で長くのび、太くて白色」（注5）

という。菖蒲の葉とともに「根」そのものは古代から薬用に用いられた(注6)。

『荆楚歳時記』(注7)によれば、「五月五日、之を浴蘭節と謂う。四民並びに鬪百草の戯あり。艾を採りて以て人を為り、門戸の上に懸け、以て、毒氣を禳う。菖蒲を以て、或いは鏤み或いは屑とし以て酒に泛ぶ。」とあり、訳注に「草の中で最初に生えること、及びその芳香が辟病や長寿の力の源と考えられたのである。」という。その後日本において享受され、端午の節供のシンボルとなり、軒に葺いて邪氣を払い、人に贈り、根の長さを競べたり、根をかけて長寿息災を願う素材となった。このことについては、倉林正次氏の『饗宴の研究(文学編)』(注8)、山中裕・今井源衛編『年中行事の文学』(注9)、中村義雄氏の『魔よけとまじない』(注10)など、詳細な研究がある。以下それらによりながら、菖蒲と五月五日の行事についてまとめる。

宮廷行事としての節会は『儀式』『内裏式』『延喜式』(注11)などに儀式次第が詳述されている。また、『西宮記』『恒例第二 五月 菖蒲事』(注12)には、平安時代の節会のこと五月三日から記されている。この内容の要約が、後藤祥子氏の論文「五月五日」の「b 儀式の概要」(注13)に記述されているので引用する。

これを盛事の故実書『西宮記』についてみると、およそ次のようである。

五日に先立って三日に六衛府で南庭に菖蒲輿を立てる。四日夜には主殿寮が内裏の諸殿舎に菖蒲を葺き渡す。五日早朝、書司が菖蒲二瓶を生け、糸所から奉る薬玉を昼御座のある母屋の南北の柱に結いつける。

また内膳司から御園の早瓜が献ぜられ、それを葛野の常住寺に遣わす。天皇はこの日、菖蒲縵をつけて武徳殿に出御、皇太子ならびに王卿が盞を賜わると、宮内省が典薬を率いて菖蒲机に昇き入れ、近衛が、こ

の日騎射をつとめる官人や馬について奏文をたてまつる。次に続命縷を賜う。太子には内侍が、続いては王卿たちには女蔵人がこれを授ける。続命縷は右肩に懸けて左腋へ垂らし緒を分けて腰で結う。太子以下膳を賜わり、二献の後、国栖奏があつて馬技に移る。

しかしながらこの武徳殿における節会は、五月が村上天皇の忌月であることを以て冷泉朝以降廃絶された。これは、『枕草子』「見物は」の中に、「五月こそ世に知らずなまめかしきものなりけれ。されどこの世に絶えたることなめれば、いとくちをし」と、記述されていることからよく知られるところである。

ただし、武徳殿の節会としては廃止されたが、後藤氏の論文に

以後節句行事は、関係諸司が奉献する菖蒲輿・菖蒲案・薬玉等を清涼殿に飾りつける天皇個人の爲の舞台ごしらえと、天皇の臨行を持たない左右衛府の手結行事とに分離して行つたのである。

と、あるように、『西宮記』にいう節会は廃絶しても、「菖蒲輿」「菖蒲葺く」「薬玉の授受」という行為は宮中でも引き続いて行われていたことは、『枕草子』二二三段「三条の宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿など持てまゐり、薬玉まゐらせなす。若き人々、御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけてたてまつらせたまふ」などや、『栄花物語』巻第六「かがやく藤壺」の五月五日の宮中の様子の記述(注14)、『讚岐典持日記』五月四日の記述(注15)にも見られることである。このうち「菖蒲を葺く」は宮中のみならず、民間でも行われていたことは、やはり『枕草子』第三七段「節は」に「九重の御殿の上をはじめて、言ひしらぬたみのすみかまで、いかでわがもとにしげく葺かむと葺きわたしたる、なほいとめづらし」、『枕草子』八五段「なまめかしきもの」に「い

とあたらしからず、いたうものふりぬ檜皮葺の屋に長き菖蒲をうるはしう葺きわたしたる、青やかなり」とあることでもわかる。また『蜻蛉日記』中巻(注16)にも、「五月にもなりぬ。わが家にとまれる人のもとより、『おはしまさずとも、菖蒲ふかではゆゆしからむを、いかがせむずるといひたり。』」、同じく『蜻蛉日記』下巻に「明くれば、五日のあかつきに、せうとなる人、ほかより来て、『いづら、今日の菖蒲は、などかおそうはつかうまつる。夜しつるこそよけれ』」とある。特に「菖蒲ふかではゆゆしからむを」は、菖蒲の力が邪気をはらうものと考えられていたことを、端的に示している。

「菖蒲を葺く」行為は、菖蒲の葉を軒の端に葺くことから「軒のあやめ」ともいわれ、「端」は「妻(夫)」と掛詞をなして広くよまれた。「あやめ草」をめぐる和歌の表現から、「菖蒲を葺く」風習を確認することができる。

一方、「根」は菖蒲を抜く時に共にひいたとする、次のような歌がある。

102 隠れぬの下に生ふれど菖蒲草根ごめに引きて見る人は見つ

躬恒(注17)

五月五日つとめて、長く白き根を見て、侍従の君聞えたまふ。

涙川汀の菖蒲ひく時は人知れぬねのあらはるるかな(『うつほ物語』祭の使)(注18)

「根」は後述するように「貫之集」において「根ながき命」と詠まれており、長寿息災の象徴として歌に詠まれている。薬玉につけたり、長寿息災を願って飾るなどもされた。五月五日に菖蒲の根を求めて贈る習俗があったことが、『枕草子』『栄花物語』などに確認できる。



紫紙に棟の花、青き紙に菖蒲の葉はほそくまきて結び、また白き紙を根でひき結ひたるもをかし。いと長き根を、文の中に入れなどしたるを見る心地ども、艶なり。

〔『枕草子』「第三七段」節は〕

薬玉などつけて、長き根をやがて御前の御簾の前の遣水に浸して出でゐたるもをかし

（注19 『栄花物語』巻第三十四「暮まつほし」）

『枕草子』によれば、棟の花や菖蒲の葉と同様に、菖蒲の根も五月五日に贈られていたのである。また、『栄花物語』の例は、五月の最勝の御八講（寛徳元一〇四四）の様子であるが、このように五月五日に菖蒲の根を贈る風習が広く定着していたらしいことは、十世紀末から十一世紀の文学作品から窺い知ることができる。

この「根の長さを競う」行為が、文芸となったのが根合である。根合は、文献記録としては永承五年（一〇五〇）五月五日六条院祿子内親王家で催されたのが最古であるとされている。永承六年五月五日内裏根合は盛大なもので、これについては『栄花物語』巻第三十六「根あはせ」に記述があり、一丈三尺の根が出されたという。後の『堤中納言物語』の中の「逢坂こえぬ権中納言」がこの永承六年五月五日内裏根合の影響をうけているという。（注20）。三谷栄一氏は、永承五年の根合以前に、『赤染衛門集』（後述）に根合（長徳三年—長保元年「五月五日左大将公季根合」）（注21）の記述が見え、これが史上最古といえるが、さらにそれ以前に根合が存在したかどうかはわからないとする（注22）。

また大中臣能宣の家集の中に「根合」で詠んだ歌（後述）があり、これについて『能宣集注釈』（注23）は、「州

浜が用いられているから、かなり大規模の行事であり、かつ、これは根合の行事としてはもっとも古い記録である」とするが、実際に根合だったとすると、能宣の卒年（九九一）から考えて、この根合は『赤染衛門集』よりもさらに以前ということになる。ただし、根合についての資料（『古事類苑』『年中行事の文芸学』など）で、この能宣の歌に言及しているものはない。

前掲の『饗宴の研究（文学篇）』によれば、「根合は王朝期に流行した物合の一種であり、その行事構成の上からは、歌合の次第の中に包含され、付加される物合部分として営まれた」とする。根合自体は菖蒲の根の長さを競う遊びだが、根合の際、あらかじめ和歌の題が決められ、根合のあと和歌合が行われたので、詠歌のひとつの場、生活のなかでの詠歌（褻の歌）ではない、晴の歌（題をもとに制作する歌）の場を提供する行事であった。その意味で、和泉式部の歌が「根合」行事が定着したなかでの詠作であるかが気になるのであるが、右記のように、「根合」が行われるようになったのは「王朝後期」のいつであるか、あるいは十世紀後半に遡り得るのかもわからないが、その時期ははっきりとはわからない。

### 三 歌材としての「あやめ草」

このように、五月五日の一連の行事や習俗と深い関わりのある「あやめ草」であるが、歌材としてはどのように詠まれているのだろうか。

『万葉集』以降勅撰集（『拾遺和歌集』）と、平安時代の主な歌人（貫之、能宣、赤染衛門）の歌を考察する。

なお「菖蒲（シヨウブ）」は漢語であり、詞書には使われるが、和歌の表現としては「あやめ草」となる。ただしその場合も花の咲く「あやめ」（多くは山野に自生し、湿地に生えることはまれ）や「花菖蒲」（ノハナシヨウブの園芸種）ではなく、サトイモ科の多年草をさすのは前述の通りである。

まず『万葉集』（注24）には、「あやめ草」は十二首詠まれており、このうち卷一山前王の歌（423）と、卷十古詠（1955）とその重出歌（4035）を除いた九首、すなわち卷八（1490）、卷十八（4089、4101、4102、4116）卷十九（4166、4177、4180）は、大伴家持の詠である。そして4102歌を除くすべてにおいて「ほととぎす」が「あやめ草」の語の数句前か、直前に詠まれている。また、雷公鳥を詠む（鳥を詠む）意の詞書をもつものが六首ある。このように詠歌の中心は「雷公鳥」にあつて、「あやめ草」ではない。例えば次のような歌である。

#### 卷第八

##### 大伴家持が雷公鳥の歌一首

1490 ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまだ遠みか

#### 卷第十九

##### 雷公鳥を感じむ情に飽かずして、懐を述べて作りし歌一首（短歌を并せたり）

4180 春過ぎて 夏来向かへば あしひきの 山呼びとよめ さ夜中に 鳴くほととぎす 初声を 聞けばなつ

かし あやめ草 花橋を 貫き交へ かづらくまでに 里とよめ 鳴き渡れども なほししのはゆ

他の「あやめ草」は423「花橋を玉に貫き」に云ふ『貫き交へ』かづらにせむと」、4101「花橋に 貫き交へ 縵にせ

よと、<sup>4166</sup>「花橘を娘子らが 玉貫くまでに」などと表現され、これを見ると「あやめ草」は「花橘」とともに、

「玉」に貫き、「縵」にするものであることがわかる。これは、節会の行事に使われる、「菖蒲縵」「薬玉」に相当するものであろう。

また表現として特徴的なのは、「かづらにせむと」「いまだ遠みか」「玉貫くまでに」からうかがえるように、五月五日以前を詠んでいることである。五月の行事は意識されているが、それは主題ではなく、むしろ五月の鳥である「ほととぎす」と取り合わせるためのある一日の典型として、菖蒲をかづらにするさまが詠まれているにすぎない。前後の表現を見ると、「ほととぎす」に導かれて「あやめ草」が詠まれており、「あやめ草」はほととぎす鳴く五月の景物のひとつとしてとらえられている。『万葉集』の「あやめ草」は「ほととぎす」と結びつけて詠まれているのである。また、掛詞の使用は見られない。

その後「ほととぎす」と「あやめ草」を同時に詠んだ歌は、平安時代では、古今集のあとの勅撰集については、拾遺集巻第二夏111番（醍醐天皇）、千載集巻第三夏歌170番（藤原良通）の二首のみである。私家集では、平安中期の歌人詠にも散見するが、中世以降、『拾玉集』に九首、歌合題に取り上げられるほか、全体として「ほととぎす」と「あやめ草」を取り合わせる発想は少なくなっていく。

そもそも古今集において、「あやめ草」の歌は次の一首のみである。

『古今和歌集』巻第十一恋歌一

469 ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もする哉

この歌の上句は、『万葉集』の表現に見られる423「ほととぎす鳴く五月にはあやめ草……」、4101「ほととぎす来鳴く五月のあやめ草……」の表現をふまえているが、この歌の上句は下句の「あやめも知らぬ」を導きだすものであり、万葉集歌とは違い「ほととぎす」は主役ではない。また、「あやめ草」には「文目（条理）」と掛詞が使われており、四季の歌でなく、この歌が恋歌に分類されていることは、『万葉集』の頃には見られない詠われ方といえる。

勅撰集の「あやめ草」を含む歌は、前掲の古今集は一首のみ、後撰集にはなく、拾遺集九首である。後拾遺集十一首、後に金葉集においてはじめて夏部に八首、まとまった歌群をなす。

拾遺集に見られる「あやめ草」の用例は、卷二夏に四首（108、109、110、111）、卷九雑下に一首（572）、卷十二恋二に二首（767、768）、卷二十哀傷に二首（1280、1281）である。このうち五月五日を意識した歌は五首、概ね五日前後の三首、その他一首である。夏部の「あやめ草」歌四首は歌合一首（108）、屏風歌二首（109、111新大系脚注による）夏歌一首（110）であるが、次は五月五日の歌である。

## 『拾遺和歌集』卷第二夏

屏風に

大中臣能宣

109 昨日までよそに思し菖蒲草今日我が宿のつまと見る哉

題知らず

よみ人知らず（賀茂保憲女）

110 今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして

これらは五月五日に宮中から民家まで菖蒲を葺きわたした情景（110）と、屏風絵の軒に葺いた菖蒲草を、今日五月五日に見れば我が家の軒の端、妻とみる（109）という、節供の折の歌であり、主体は「あやめ草」である。

次の恋部二首は「あやめ草」は自身を表現している。

『拾遺和歌集』卷第十二 恋二

五月五日、ある女のもとに遣はしける よみ人知らず

767 いかとも思はぬ沢の菖蒲草たゞつくぐと音こそ泣かるれ

題知らず

躬恒

768 生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の来ぬがわびしさ

拾遺集の「あやめ草」詠歌は、菖蒲が葺かれた軒の「端」を「妻」、「あやめ草」の「根」が「音」（郭公の鳴く音、泣く音）、「根こそ流るれ」と「音こそ泣かるれ」、「刈り」と「仮」などと、掛詞が多数認められる。これは「恋」歌の表現であり、「あやめ草」が四季歌から恋歌に取り入れられるようになったことを示している。ただし「あやめ草を引く」という表現は拾遺集にはない。

次に「あやめ草」の用例の多い『貫之集』、『能宣集』、『赤染衛門集』において考察する。

『貫之集』（注25）の「あやめ草」の歌は、延喜年間の屏風歌に四首、天慶の屏風歌に四首、計八首みられる。

屏風歌であるから、詠歌時期は五月とは限らない。延喜年間の屏風歌と、天慶年間のそれとは約二十年の開きがあり、天慶八年（九四五）の屏風歌は、最晩年の作となる。このうち注目されるのは延喜十九年（九一九）の屏風歌である。

『貫之集』

五月五日

131 あやめ草根長き命つげばこそ今日としなれば人の引らめ

この「あやめ草根長き」という表現は、延喜年間の屏風歌に二首、天慶年間の屏風に三首確認でき、いずれも「あやめ草」はその根の長さが尊ばれ、長寿の祝いの歌の表現として多用されていることがわかる。

延喜御時、内裏御屏風の歌 廿六首

(のうち)

菖蒲とれる所、又、かざせるもあり

227 あやめ草根長きとれば沢水の深き心は知りぬべらなり

228 郭公声きしよりあやめ草かざす五月と知りにしものを

この歌は詞書を見ると、画を見ての詠とわかる。228番では「あやめ草」「ほととぎす」「かざし」とともに詠

み込まれ、「あやめ草」によって「五月」が意識されると詠むものである。『貫之集』においては、屏風歌の中で「あやめ草」は「根長き」ことが大事で、「長寿」の象徴として、また五月そのものを表わすものと扱われている。天慶年間の屏風歌の次の二首は、ほぼ同じ歌である。

五月、あやめ草

393 五月てふ五月にあへるあやめ草むべも根長くおひそめにけり (天慶二年 七月)

516 年ごとに今日にしあへばあやめ草むべも根長く生そめにけり (天慶五年または六年 四月)

また、天慶八年二月の屏風歌の次の歌は228番と趣旨は同じである。

五日

525 郭公鳴けども知らずあやめ草こそ葉日のしるし也けり (天慶八年二月)

貫之のこの天慶年間の三首は類型的であるが、「あやめ草」が「根長く」という表現を用いているのは、貫之のあと、『仲文集』と『輔親集』『六条修理大夫集(顕季)』にしか見られない。ただし、「あやめ草」とともに「ながき根」や「ながきためし」などの表現は他の歌人にあるので、「根長く」という表現が貫之の固有のことばということが言えよう。

『能宣集』

『能宣集』(注26)では、「あやめ草」は十七首あるが、まずほぼ五月五日の歌である。

まず、屏風歌では次の歌がある。

五月五日、庭の卯つぎのうへに聞く

12 今日ひける菖蒲の草に時鳥ねを比べにや我がやどに鳴く

五月五日、女ども端にゐて、ほととぎすを聞く



86 時鳥軒のま近くなくなるはあやめの草にねにやむつる

これらは、伝統的な時鳥とあやめ草の取り合わせであるが、「今日ひける菖蒲」の「根」と「時鳥」の鳴く「音」の長さをくらべるつもりかという表現（12）や、女達が端にいて、軒に葺かれた「あやめ草」に時鳥がたわむれている、その時鳥をきく（86）という表現は、貫之の屏風歌では見られない発想の歌である。

また、次の歌は「根」が人が泣く「音」にかかり、「ねのみかかる袖かな」は和泉式部の歌（第二部に後述）にも詠まれている。

おもふことはべるを、問ひ侍らぬ女に、同じ日菖蒲のねにつけて

14 あはれとも問はぬにしげるあやめ草つゆけきねのみかかる袖かな

「根」が「寝」につながる表現は、次の例がある。

五月節きこしめすに、五日の夕べ、知りたる人の棧敷にとどまりてはべるに、うへの人々まできて、

女にものいひ侍りて、今宵ここにはべらん、などいひ侍りければ、女にかはりて

37 あやめぐさ今日ばかりなるやどなればなにかは人にねをもみすべき

貫之が長寿の象徴として詠んだ「根」は能宣は多様に展開しているのである。

次の「根合」の歌三首は『能宣集注釈』（注27）によれば「これは根合の記録としてはもっとも古い記録である。」とする。

五月五日、あるところに、昌蒲マヤの根比ぶる哥、とはべれば

368 水底にありといふなる白玉はあやめねぐべく長くつらぬけ

同じことに、州浜に鶴を立てて、菖蒲をくはせて、書くれうに

369 ちよよさすみぎはのたづも年ごとに今日のおあやめはかみにとぞ思ふ

また、菖蒲を舟に作りて、釣りする人のせたり

370 釣りののを糸より長きあやめ草ねながら引きていざくらべみむ

また、後に述べる「五月五日に引かれないあやめ草」の存在も既に詠まれている。

五月五日。まらうどめきたる人まできて、前なる池に菖蒲

のおひたるを見て、今日までかくてあるよ、などいひ侍れば

165 時くれどひく人もなきわがやどにあやなくおふる菖蒲草かな

能宣の「あやめ草」の歌はある程度多いが、ほぼ貴族の館の節の賑わいや、季節を賞美する貴族や女房たちの日常の歌である。恋歌めいたものや、服喪中と見られる歌もあるが、五月五日の節供のやりとりである。

### 『赤染衛門集』

同時代の『赤染衛門集』（注28）にみる「あやめ草」歌は、自身の歌は十一首で、贈答歌の返歌が八首ある。「あやめ草」自体の用例としては、「根」は泣く「音」にかけられ、ねをかける「袂」「袖」が詠まれる。とくに「袂」と「玉」と菖蒲草や五月を詠む歌は『恵慶法師集』220番、『大斎院前の御集』81、82番、『相模集』240番にある

が、「袂の玉」という表現は赤染衛門のみのようである。

『赤染衛門集』

五月五日右大将より、さうぶあはせしたるあふぎに、くすだまをおきて「これがかちまけ、さだめさせ給へ」とありしに、とのは左大臣におはしまししかば

135 ひだりにや袂の玉もむすぶらん右はあやめもねこそあさけれ

とのの御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日あやめ草手まさぐりにして「けぢかうみるをむなへしを」とて

136 わが宿のつまとはみれどあやめ草ねもみぬ程にけふはきにけり

「これがかへしせよ」とおほせられしかば

137 あやめふく宿のつまともしられざりつねをば袂の玉とこそみれ

136 番歌の道長の歌は、能宣の「137 昨日までよ所に思ひしあやめぐさ今日わがやどのつまとみるかな」を踏まえ  
て言い換えた歌で、恋歌めいた表現である。返歌は、そのあやめ草は宿の端（妻）とは知りませんでした、根は  
葉玉につけて袂につけるものでしようと、切り返している。

五月五日、同三位

284 すみぞめの袂はいとどこひぢにてあやめの草のねやしげるらん

返し

285 あやめ草今日のたもと玉とては涙をかくるねのみなりけり

同日、定基僧都の母

286 詠めつつ今日すみぞめの袂にはあやめにあへぬねやかかるらん

返し

287 いつともねのみかかれる袂には今日のあやめはわかれざりけり

赤染衛門は、夫匡衡が亡くなったあと、美作三位と定基僧都の母の二人が悲嘆にくれる赤染衛門を案じて贈ってきた歌に対して、「涙をかくるねのみなりけり」、「あやめはわかれざりけり」と応じている。この喪中の歌は、本来長寿を願い、あやめ草を贈る五月五日のこの日だからこそ、いるべき伴侶をなくした失意が際立って感じられるのである。

五月五日、かたらふ人のもとより、くすだまおこすとて

309 いつともこひぬにはなしけふはいとどかくとばかりのあやめにもみよ

返し、とうじみのねにしたるが、ことにながらねば

310 おなじくはながくひけかしあやめ草ねをかへてさへみじかきやなぞ

右の歌は、灯心（とうじみ）を薬玉につけて贈ってきたのだろうか、同じ事ならあやめ草の長い根をひいてはしいものだ、灯心に根をかえてさえ短いのはなぜ、と返しているが、赤染衛門の他の歌と少し違い、うちとけた遊びの歌となっている。

『赤染衛門集』は年代順にならんでいるが、青春期の歌に「あやめ草」はなく、したがって恋愛の手段には用いていない。また、「ほととぎす」など外界の景物を詠み込む歌もない。最後の屏風歌に、「五月雨」「軒の雫」が詠まれているが、これは定番の表現である。赤染衛門の「あやめ草」歌はほぼ女房生活、家庭生活の屋内でのやりとりである。そして五月五日は世の中の節供の日の「あやめ草」であることを意識した上での歌であり、「あやめ草」を自らの心情を託す歌材としては詠っていない。

「あやめ草」の歌で「根を引く」という表現は、和歌では常套の表現として、和泉式部の歌以前からみられるが、必ずしも「根合」の折にのみ詠われたものではないだろう。「根」は「(人の泣く)音」や「寝」と掛詞をなし得る語であり、生活のなかでの、人と人をつなぐ贈答歌の中でこそ生きる。「あやめ草」の歌の場合は、「根」にまつわる連想(寢屋、寝所、泥地Ⅱ憂き、淀野Ⅱ夜殿など)は重要である。また「根」の語がなくても「あやめをひく」といった表現は多用され、後述する和泉式部の和歌においては、「ひかれぬあやめ」などの表現の展開もある。次章でみるように和泉式部の活躍期に、すでに根合という行事が広まりつつあった可能性もあるが、和泉式部が「あやめ草」という歌材での詠歌を多く残すのは、そうした行事のためではなく、むしろ歌人と和泉式部の好尚によるところが大きいのではなからうか。

## 第二章 和泉式部の「あやめ草」―「折」と「恋」

一 「あやめ草」歌と表現技法

和泉式部の「あやめ草」及び「あやめ」の語を含む歌は、家集中に二十九首あり、そのうち清少納言が詠んだ歌二首を除くと、和泉式部の歌は二十七首、『詞花和歌集』一首、『和泉式部日記』に一首ある。

一覧すると次のようになる。

正集

31 真菰草おなじ汀に生ふれどもあやめを見てぞ人も引<sub>レ</sub>きける

319 駒の足にくらべてみれど今日はなほ菖蒲の草のねこそせちなれ

335 菖蒲草よどのながらのねならねど荒れたる宿はつま<sub>レ</sub>とこそ見れ

503 流れつつみつのわたりのあやめ草ひ<sub>レ</sub>きかへすべき根<sub>レ</sub>やは残れる

同じ日、清少納言

504 駒すらにすさめぬ程に老いぬれば何のあやめも知られやはする

かへし

505 すさめぬにねたさもねたしあやめ草ひ<sub>レ</sub>きかへしても駒返りなん

人のかへりごとに、五月五日

519 涙のみふるやの軒の忍ぶ草けふのあやめも知られやはする

五月五日、粽を人のもとにやるとて

521 深沢田みぎはぐれの真菰草昨日あやめに引かされにけり

五月五日、菖蒲の根を、清少納言にやるとて

538 これぞこの人に引きけるあやめ草むべこそ閨のつまとなりけれ

かへし

(清少納言)

539 閨ごとのつまに引かる程よりはほそくみじかきあやめ草かな

また、かへし

540 さはしもぞ君は見るらんあやめ草ね見けん人にひきくらべつつ

547 引く人もなくてきのふは過ぐしてき我が忘るるに生ふるあやめは

おなじ人に

585 うきに生ひて人も手ふれぬ菖蒲草ただ徒にねのみなかれて

615 あやめ草五月ならねどわが袖に人知れぬねはいつか絶えせん

田舎なる人に、ほととぎすに結びて、いと長き菖蒲の根をくはせて

700 そこまでは聞こえしもせじ郭公袂にかかるねを見てを知れ

同じ頃、菖蒲の香のすずろにすれば

704 郭公忍びの声も聞こえぬにまだきもこゆるあやめ草かな

五月五日、薬玉おこせたる人に

740 引|き出でたる程を思へばあやめ草つくる袂のせばくもあるかな

また、あるやうにある人に奉るとて

741 心根|のほどを見するぞあやめ草草のゆかりに引|きかけねども

また、人に

742 身のうきに引|けるあやめのおぢきなく人の袖までね|をやかくべき

忍びて来る人の、つとめて、「人のあらはれぬる事」といふに、同じ五日

743 引|けばこそ軒のつまなるあやめ草たがよどのにかね|をとどむらん

同じ朝顔の花を、人のもとより

744 霧の間に見し朝顔の花をこそけふのあやめはいとど分かれぬ

その夜、早う見たる人々来合ひて、あはれなる物語などするを、人のもとより、「いかにあやめのね  
によそふらむ」といひたるに

745 あやめ草そのね|ならねど時鳥なきこそしつれもとの人として

続集

五月五日に、ある人に

1085 隠れ沼に生ふるあやめの残らぬに人の古根|ぞ悲しかりける

とこなつ ほととぎす あやめぐさ これを人のよませし



1226 すさめねど心のかぎり生ひたるは人知らぬまのあやめなりけり

五月五日、雨のいみじう降る日、独り言に

1247 今日のはなほあやめの草のねどころも水のみ増る心地こそすれ

六日、この精進する男のもとより、「昨日のあやめも知らずで過ぐして」などいひたれば

1248 うたた寝にやがて淀野も見ぬ人はまして何てふあやめやは知る

五月五日、人に

1366 今日のはなほ軒のあやめもつくづくと思へばねのみかかる袖かな

「堅根病む」と人の許に云ひたる人に、五月五日いひやる

1417 今日だにも引きやは捨てぬ隠れ沼に生ふる菖蒲のかたねなりとも

同じ日、忍びたる人に

1418 今日とても引きやは来る菖蒲草ひとしれぬねはかひなかりけり

『詞花和歌集』卷第九 雑上

忍びけるおとこの、いかゞ思ひけむ、五月五日のあしたに、明けてのち帰りて、今日あらはれぬるなむうれしき、と言ひたりける返事によめる

311 あやめ草かりにも来らむものゆへ(忍)にねやのつまとや人のみつらん

『和泉式部日記』 (注29)

またの日、「けふやものへは参り給ふ。さて、いつか帰り給ふべからん。いかに、まして、おぼつかなからん」とあれば、

「をりすぎてさてもこそやめさみだれてこよひあやめのねをやかけまし」とこそ思ひ給ふべかりぬべけれ」ときこえて、

〈他出〉

正集 512 番歌

『夫木和歌抄卷第廿六 雑部八』

五月五日

ふかさは

五月五日、ちまき人のもとにやるとて 和泉式部

ふかさはだみぎはぐくれのまこも草昨日あやめにひかれざりけり

正集 742 番歌

『続古今和歌集』 卷第三 夏歌 (注30)

人の許に薬玉つけて遣はしける

身のうきにひけるあやめのあぢきなく人の袖までねをやかくべき

続集  
1366  
番歌

『後拾遺和歌集』 卷第十四

五月五日に人のもとにつかはしける 和泉式部

799 ひとすらに軒のあやめのつくぐと思へばねのみかかふる袖かな

一覽に見る「あやめ草」の歌についていくつかの興味深い特徴が見られる。

まず、第一に和泉式部集には、多くの重出歌を含むことが明らかにされている。家集全体で446〜615番（この場合は国歌大観番号）には重出歌が含まれないことは指摘されているが（注31 久保木寿子）、このあやめ草歌は正集から続集全体に及んでいるのに一首も重出歌がない。

また、他出も少ない。秀歌選である他本の『宸翰本和泉式部集』（注32）には、詞花集と後拾遺集に収載されている二首のみ、『松井本和泉式部集』（注33）は続古今集、後拾遺集、詞花集に収載されている三首のみが入っている。これらの状況を考えると「あやめ草」の歌は、当時からあまり注目される歌でなかったであろうことが推察される。

次に、詞書をもとに詠歌の状況を分類すると、次のようになる。

a 五月五日と五日に関わる歌 二十五首

詞書に五月五日とあるもの十三首（かへし、同じ日なども含む）

519、521、538、539（清少納言）、540、740、743、1085、1247、1366、1417、1418、311（詞花集）  
詞書にはないが、概ね五日詠と推定できるもの十首

503、504（清少納言）、505、585、700、741、742、744、745、日記歌  
六日詠二首（五日を意識している歌）

547（きのふ）、1248（六日）

b その他 四季歌など

31 初期百首 夏

319 夏歌

335 夏歌 前後の歌がやはり詞書のない春、秋の歌である三首のうち

615 詞書のない歌群（正集605、622）のうちの一首で、季節的には順不同

704 四月 詞書「同じ頃、菖蒲の香のすずるにすれば」（前の703番の詞書が「四月ばかりに、橘の咲き

たるを」とあるにより）

1226 題詠「とこなつ ほととぎす あやめぐさ これをひとのよませし」

これを見ると、ほぼ五月五日に詠まれた歌であることがわかる。同時に、単なる季節詠や題詠はごく少ないことがわかる。

まず、表現技法から見てみると、これらの「あやめ草」の歌には、「あやめ」に関わる縁語掛詞の類が、実に

多様なかたちで詠み込まれていることがわかる。「あやめ草」の「根」を「音」（鳴く、泣く）や「寝」に掛ける掛詞は、『能宣集』にみるごとく、この時代には常套的表現となっていたのに、和泉式部においては「心根」（741）、「人の古根」（1085）、「堅根」（1417）といった、ほかに例を見ない語彙へと展開しているのが注目される。「あやめ草」と「こころね」の組み合わせは、ほかに平安後期の『実国集』（注34）に一首あるのみであるし、「人の古根」、「堅根」は和歌には見ない語彙である。

また、「ね」の縁語として、「よどの」（335、743、1248）（菖蒲の産地「淀野」と「夜殿」と掛詞をなす）や、「寝屋」（538、詞花集322）、「寝所」（1247）などと掛け、「つま」（335、538、743、詞花集311）とともに、恋歌めいた表現をなしている。さらに汀に生える「あやめ草」の植生をもとに、「深沢田」（521）（和泉式部の一例のみの語彙）、「隠れ沼」（1085、1417）、「泥地（うき）」（585、742）（「憂き」と掛詞をなす）、あるいは水に関わることから「雨」や「涙」、「流れ」（泣かれ）と掛詞（503、585）、「水のみ増さる」（1247）などの悲泣をイメージさせる表現に展開させている。

そして「引く」という語が頻繁にでてくる。前節に見たように、五月五日の節供の行事のために菖蒲の葉と根を引くことは欠くべからざることである。引かれた「あやめ草」はもてはやされるが（31）、同時にそれは「引かれぬあやめ草」の存在を生み出す。五月五日の行動として、水辺から引き抜いたあやめ草につけて贈り物をしたり、消息を送ったり、訪れたり、折を意識したやりとりが期待されるのだが、和泉式部の歌の「引く」表現では、何の音沙汰もない状況として、しばしば『引かれぬあやめ草』と否定形に展開する。例えば、547、（585）

743、1085、1417、1418などがその例である。

五月五日の「折」の歌には、五月五日の節供に関わる歌と、節句に関わる「あやめ草」を素材として、自身的心情を詠んでいる歌とがある。ただし五日の節供の歌でも、和泉式部の場合、前掲歌人（貫之、能宣、赤染衛門）のように、節供の行事の場を詠んだり、邪気を払い長寿を願うことに主題があるわけではない。あやめ草という節供の物につけての歌であっても、実は、和泉式部は自身の思いを訴える場（契機）、思いを託す表現（景物）として詠んでいるのである。

## 二 節供に因む物とともに詠まれた歌

折らしいものとして節供の「もの」ととりあわされた「あやめ草」を以下考察する。

節供の物とともに詠まれた歌は、521番「粽」、538、740番「薬玉」、700（741）番「菖蒲の根をおくる」である。

まずは「粽」に関わる歌を検討する。「粽」は『倭名類聚抄』（注35）には「風土記云糴以菰葉裏米以灰汁煮之令爛熟也五月五日啖之」とある。「延喜式卅九内膳 諸節供御料 粽料 糯米……」（注36）の記述がある。粽には茅や、笹、葦などでも巻いたらしいが、菰の葉でも巻いていた。

五月五日、粽を 人のもとにやるとて

## 521 深沢田みきはがくれの真菰草昨日あやめに引かされにけり

521の歌は「31真菰草おなじ汀に生ふれどもあやめを見てぞ人も引きける」の歌の心を別の角度から詠んでいる。

31では、同じ汀にあるのに真菰草ではなく、あやめ草を人は選んで引いていくと詠むが、521番では、真菰草が五月五日の前日にあやめを引くのと一緒に、「引かされて」しまったとしている。この歌の解釈には、「文庫」では「昨日菖蒲を引き抜く縁に引かれて我にもあらず（この粽に用いた真菰草を）抜いてしまったことです」と訳しているが、「我にもあらず」は「抜くべきではなかったもの」というニュアンスが含まれる。「全釈」では「この粽を包んだのは、深沢田の水際がぐれに生えてある真菰草で、昨日あやめを抜く時に、それに引かされて一緒に抜かれてしまったのです。」と普通に解釈しているが、このあとに「粗末な真菰で包んだつまらないものです」と続けている。この「深い沢田」のそして「水際」に隠れているという、普通では見つかからないはずの真菰草であることを強調しつつ、でも昨日あやめ草を引いたときに一緒に引かされたと言っている。しかし、そもそも「粽」は菰で巻かれているものであって、謙遜はしても卑下する必要はない。その一方で「五月五日」にはあくまでも「あやめ草」が主役で、真菰草は従である。その従の「みぎはがぐれの真菰草」が、「粽」という五月五日に必要な物のお蔭で、日が当たらないものが表舞台に出る妙をわざわざうたうところに面白さがある。

「粽」は〈食べ物〉であるからか、余り和歌には取り上げられない。しかしながら和泉式部の歌の中には、「粽」が詞書に登場する歌は521番の他に三首あり、式部の日常の細やかな配慮を推察させる。このうち、次の歌も、「あやめ草」は詠まれていないが、「粽奉る」、「玉」（「菓玉」であろう）、「懸く」「菰」などから、おそらく五日詠であると推測される。

石蔵の宮の御許に、粽奉るとて

506 深沢の菰をぞ刈れる君がため玉は衣の袖にかくらん

なお、石蔵（いわくら）の宮は帥の宮と和泉式部との間の御子であろうといわれている（注37）。

次に「薬玉」についてみてみよう。詞書に「薬玉」とはつきり詠んでいるのは次の一首である。

五月五日、薬玉おこせたる人に

740 引き出でたる程を思へばあやめ草つくる袂のせばくもあるかな

「薬玉」を歌う740番では、目上の人から薬玉を賜ったが、それをつける袂が狭い、身に余ると詠む。「薬玉」は時代によって変遷しているが、菖蒲や艾など薬草を玉とし五色の糸を垂らしたもので、五月五日には宮中だけではなく一般貴族の間でも授受が行われた。（注38）この薬玉もそうしたもので、身近な貴族から贈られたものであろうか。「袂のせばく」と自己を卑下した詠み方で、五月五日の節供の行事の折に詠う歌でありながら、根底に横たわる屈折した思いを窺わせる詠みぶりになっている。

次の742番は『續古今和歌集』（注39）に他出している。その詞書には「人の許に薬玉つけて遣はしける」とある。

また、人に

742 身のうきに引けるあやめのおぢきなく人の袖までねをやかくべき

この歌は「文庫」「全釈」では初句二句を「ね」を引き出すための序詞とする。「十三抄稿」は「あぢきなく」が「身のうきに引けるあやめのおぢきなく」と「あぢきなく人の袖までねをやかくべき」のように両方にかかるとし、「あぢきなく」を不本意の意ととる。ただし、上句の解釈について「私は憂き身の上で、そのような泥土



から引いてきたあやめなので、われながら気に染まぬ不意なものである」と訳す。五日の節供の日に薬玉を贈る際の謙辞にしては「あぢきなく」は強すぎる語に感じる。菖蒲は邪気を払い、薬玉は長寿を願うものである。この歌の場合、自分は憂き身の上で、そういう自分が引いた菖蒲（薬玉）を差し上げるのはむなしく、自分の嘆きがあなたの袖にまでかかってしまうと詠んでいると考えたい。

「菖蒲の根を贈る」「根合」行事を直接取り上げた歌はなく、五月五日に菖蒲の根を贈るのに付けて詠んだ歌は清少納言とのやり取りの538、539、540番の他には、700、741番である。（なお清少納言とのやりとりは503、504、505番にもあり、まとめて第四節で考察する）。

田舎なる人に、ほととぎすに結びて、いと長き菖蒲の根をくはせて

700 そこまでは聞こえしもせじ郭公袂にかかるねを見てを知れ

700番の歌の送り先の「田舎なる人」は、どういう相手かはわからないが、ほととぎすに「いと長き」菖蒲の根をくわえさせる細工物と共に贈ることで、「根」に時鳥の鳴く音、自分の泣く音を掛け、相手の居る「其処」ならぬ、根が伸びた「底」までの距離の遠いこと、ひいては自らの泣き声の程度をよそえている。そこまでは聞こえはしますまい、私の袂に涙のかかる泣く音はこの長い根を見て察してください、というのである。この作り物の趣向は、前掲の『能宣集369番』（注40）の根合の歌の詞書に「州浜に鶴を立てて、昌蒲をくはせて、書くれうに」からも推測されるように、やはり五月五日の何らかの行事に関わるのであろう。自分の悲泣の「音」によそえた根をくわえたほととぎすを、ほととぎすの鳴き声をよく聞くことができるはずの「田舎なる人」にわざわざ贈る

というところに、ある程度のユーモラスな機知、あるいは自分の泣き声だけは聞こえないのだろうといったあてこすりの感じられる趣向となっている。

次に四季題の中で節句行事を詠む歌が319番の歌である。

### 319 駒の足にくらべてみれど今日はなほ菖蒲の草のねこそせちなれ

この歌は312番から329番までの春歌四首、夏七首、秋七首のうち夏歌の中にある。このうち春歌の冒頭歌(312番)は寛仁二年、正月二十三日摂政(頼通)家大臣大饗のために屏風を作るため、詩や和歌を選定したことが、『御堂関白記』(注41)正月二十一日の記事に見え、その中に「江式部」のものも入れたとある歌である。319番は五月の行事の絵を意識して詠まれた歌であるが、この歌は撰入されず、五月は藤原輔尹の「五月節、輔尹 競ぶべき駒も菖蒲の草もみな美豆の御牧にひけるなりけり」(注42)が撰入されたい(注43『栄花物語』巻第十三ゆふしで)。

五月五日には「競馬」「騎射」が行われた。これについて『内裏式』、『儀式』、『西宮記』などの記述を総号すると宮中の行事では四月廿八日に駒牽き、五月五日に菖蒲事の儀式の後、騎射、六日競馬がある。ただ、五月が村上天皇の忌月なので冷泉朝以降廃絶され、宮中での競馬はない。また、賀茂神社の競馬も堀川院の時、寛治七年(一〇九三)に勅命で始められたとあるので、この時はなかったようである(第一章第二節)(注44)。

ただ、「騎射」の行事は引き続いてあり、『枕草子』九五段にも見られ、一四四段「胸つぶるるもの」に、「胸つぶるるもの 競馬見る」という記述があり、はらはらするものという類に入っている。この319番は「駒くらべ

の足にくらべてみたけれど、今日はやはり菖蒲の草の根（根を競う）行事の方が素晴らしい、これこそが「節」のものであるということであろうか。競馬と根合は、ともに五月五日を代表する行事として並称されたようである。

節供にまつわる具体的な行為が詠まれている歌は以上である。

### 三 「折」と「恋」を詠む

次に節供に関わる「あやめ草」を素材として、自身の心情を詠んでいる歌を考察する。五月五日の「折」を詠む歌である。二節にみた傾向を、より明確にしていく詠い方である。全体として五月五日には「引く」一もてはやされるが、五日を過ぎれば顧みられぬ「あやめ草」に、自身を投影するものとなっている。

「あやめ草」の歌には「今日」という言葉を詠み込む歌がある。

#### 五月五日、雨のいみじう降る日、独り言に

1247 今日 はなほあやめの草のねころも水のみ増る心地こそすれ

六日、この精進する男のもとより、「昨日のあやめも知らで過ぐして」などいひたれば

1248 うたた寝にやがて淀野も見ぬ人はまして何てふあやめは知る

「今日はなほ」は五月五日であるがゆえに今日はいっそうという意が込められている。1247 番歌は独り言で、五

月五日の雨がひどく降る日、あやめ草の生える根所の水が増すように、ひとり寝の私の寝所は涙がより多く流れ

るような心地がすると詠む。実はこの前の<sup>1246</sup>番の歌は、詞書から、男が「みあれ」の精進を理由にずっと訪れていないらしいことが詠みとれる。そして男は忘れていたものか、五月五日にも便りもよこさず、和泉式部が「独り言」を歌った翌六日になって、言い訳を寄越すのである。来られない場合は便りだけでもよこすのが「折」をわきまえた行為なのに、という悲しみが<sup>1248</sup>番の趣旨である。ここの「あやめ」は「条理」であるが、淀野（夜殿との掛詞）に気づかれず生えているあやめ（和泉式部自身をよそえる）のことでもある。この<sup>1247</sup>、<sup>1248</sup>番は一群のエピソードをなしている歌群の一部であるので、第五部であらためて考察する。

#### 五月五日、人に

1366 今日 はなほ 軒のあやめもつくづくと思へばねのみかかると袖かな

次の<sup>1366</sup>番歌の「今日はなほ」は「ねのみかかると袖かな」にかかる。五月五日の軒に葺いたあやめを見るにつけてもしみじみと物思いに沈んで、今日はいっそう、あやめの根ならぬ、音を立てて泣く涙のみ袖にかかると思ふ。「つくづくと思う」でその日ずっと一人で過ごしたことが推察される。この歌は後拾遺集<sup>799</sup>番に他出しているが、初句は「ひたすらに」になっている。

二首ともに節供の「折」であるから五月五日は何らかの音沙汰があるはずの日なのに、恋人の訪れも消息もなく、それゆえ、普段よりもいっそうにつらく悲しい気持ちを「今日はなほ」を初句にしているのである。

次に「けふのあやめ」は<sup>519</sup>、<sup>744</sup>番に見られる。

#### 人のかへりごとに、五月五日

## 519 涙のみふるやの軒の忍ぶ草けふのあやめも知られやはする

519 歌は「降る」と「古屋」、「忍」と「偲ぶ」をかけている。五月五日に消息をよこした人の返事に、「本来であれば軒に菖蒲を葺く五月五日、私の住む古屋の軒にはしのぶ草が茂っている。この忍ぶ草のようにあなたを偲んで涙にくれている私には、今日の五月五日も知るわけがないでしょう」と詠む。515 番の詞書が「内侍も亡せて後、人のもとに」とあり、「文庫」では515 ～ 520 番歌を小式部内侍の死に関連する歌とし、「私は古屋の軒の忍ぶ草のようなもの、娘を偲んでないばかりいるので、今日の節句の菖蒲も何もわけが分りません」と解している。「全釈」では515 歌、516 ～ 517 番（同じ人に宛てた歌）は一連の小式部内侍の死と同じ頃の詠かとしているが、518、519、520 番歌は普通の男女間のやりとりとして解している。小式部内侍の死は万寿二年十一月で、515 番歌はその後のいつかではあるが517 番まで特に季節を表していない。519 ～ 521 番（あるいは518 番も）は五月五日の歌としても考えられるので、この歌は挽歌ではなく恋人との応酬ととっておく。古今集巻第十五恋歌五貞登の歌「769 ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞ生ひける」はあやめ草は登場しないが、似た状況で詠まれている。しかし、和泉式部の歌の上句のみで貞登の歌一首の意を言い表しているといえよう。「涙のみふる」「忍ぶ草」など、恋歌の表現を使用しつつ、恋情そのものというより、人を恋い求めるのに顧みられない孤独を歌っている。

次の二首は「今日だにも」、「今日とても」と五月五日を強調して詠んでいる歌であり、この二首は同じ日に詠まれた歌である。

「堅根病む」と人の許に云ひたる人に、五月五日いひやる

1417 今日だにも引きやは捨てぬ隠れ沼に生ふる菖蒲のかたねなりとも

同じ日、忍びたる人に

1418 今日とても引きにやは来る菖蒲草ひとしれぬねはかひなかりけり

1417 番の詞書は「堅根（腫れ物の「ねぶと」のこと）病む」と「人の許に云ひたる」とあり、和泉式部の知人（女）

のところ「堅根病む」言ってきた人（男）に、五月五日という折を捉え、和泉式部が贈った歌である。「隠れ沼に生えている菖蒲の堅い根ですら引き抜かれてしまう今日ですから、せめて今日だけ根太は引き抜いて捨て（訪れ）たらどうなの」と、お節介にも人の恋人に贈っている。詞書にある病名の「堅根（根太）」はそもそも歌に詠まれるような言葉ではない。この詞書から菖蒲の「堅い根」を引き出し、揶揄しているのである。詞書が組み合わされることでこの歌に状況の面白味が加わる。そして「同じ日」に、今度は自分の恋人に<sup>1418</sup>「ひかれぬあやめ草」の悲哀を詠って贈っている。<sup>1418</sup> 番の歌自体は特に面白い歌ではない。ただこの二首がそろうことで、出だしが「今日だにも」「今日とても」、二句目は「引きやは捨てむ」「引きにやは来る」、三句目は「隠れ沼に生ふるかたね」「菖蒲草ひとしれぬね」と、対比的なひびきをもつ。この対照的な歌を同じ五月五日に続けて二首詠み、一首は知人の恋人の男、もう一首は自分の恋人と、二人の男に贈ったとして並べている。事実はどうであつたかわからないが、同日詠として二首配列したのは意図があつたと考えられる。第五部で後述するが、和泉式部の家集にはただ歌を配列しているのではなく、意図的に配列に創意を加えて、ひとつのエピソードをまとめ

ている歌群が見られる。この二首は歌群ではないが、この歌の背景をよく考えれば、まず和泉式部は五月五日の今日一人である。知人の女性からは男が来ないことの愚痴でも和泉式部に言ってきたのだろうか。和泉式部はその男のことも歌を贈ることができる程に知り合いなのである。あるいはその男は知人ばかりではなく、和泉式部とも関係があつたのだろうか。しかし、今の恋人の方も訪れはなく、知人の恋人にも歌を贈るといふ心境とはどういうものか。実は「人の許に云ひたる」の「人」は和泉式部自身であるかもしれないのである。たった二首ながら、いろいろなエピソードを想起させるような歌である。それは詞書と、相似たりズムの歌を並べることで見出されたものなのである。

このように「今日はなほ」「けふのあやめ」「今日だにも」「今日とても」などからは五月五日という折の意識の強さがうかがわれる。またこの時和泉式部にとって重要なのは節供の行事としての「折」ではなく、もてはやし、あるいはもてはやされぬ者を、くつきりと分かち「折」としての五日なのである。

和泉式部はこうした五日に、誰の訪れもなく、便りもない悲哀を繰り返し詠む。

547 引く人もなくてきのふは過ぐしてきて我が忘るるに生ふるあやめは

585 うきに生ひて人も手ふれぬ菖蒲草ただ徒にねのみなかれて

忍びて来る人の、つとめて、「人のあらはれぬる事」といふに、同じ五日

743 引けばこそ軒のつまなるあやめ草たがよどのかねをとどむらん

五月五日に、ある人に

1085 隠れ沼に生ふるあやめの残らぬに人の古根ぞ悲しかりける

とこなつ ほととぎす あやめぐさ これを人のよませし

1226 すさめねど心のかぎり生ひたるは人知らぬまのあやめなりけり

このうち 743 番詞書の「人のあらはれぬる事」は、「文庫」、「全釈」ともに「あなたの秘密の情事が分かりました」と解釈し、「全書」は「忍んで逢ひにくる男の早朝の帰りに人に見あらはされたことだと言うので」としている。

和泉式部集の中で「あらはる」が用いられているのはこの歌と 724 番『忍びて語らひたる人の、ただ頭はれに頭はるるを、かかるをばいかかと思ふ』と人のいひたるに、八月ばかりに」の二首である。この 724 番の場合は露見しても相手が隠そうとしないのでの意で用いられている。また家集にはない歌であるが、詞花集 311 番の詞書「忍びけるおとこの、いかゞ思ひけむ、五月五日のあしたに、明けてのち帰りて、今日あらはれぬるなむうれしき、と言ひたりける返事によめる」は「二人の仲が人に知られた」(のがうれしい) という意になる。

743 番の和歌の解釈は、詞書を和泉式部の情事ととると、「文庫」訳にあるように「やはりあなたが誘う(引く)からこそ妻(端)となつてゐる身です。一体他の誰の夜殿(淀野)で共寝(根)したというのでしょうか。あやめ草は」という解になる。ただ、逢瀬の「つとめて」に「あらはぬる事」とあり、これは「全書」や、724 番、詞花集のように「人に知られた」と解釈し、743 番の詞書は「忍んで来る人が、翌朝(帰り)に人に見られて二人の仲がわかってしまった(困った)」と行って寄越した、と解釈しても良いのではないか。むろん多分その日(五



日)は来なかつたのである。歌の方は「あなたが引けばこそ軒の端(妻)となつてゐるあやめ草の私です。あなたでなかつたらいつたいだれの淀野(夜殿)に根をとどめてゐるのでしよう。」ということになるだろうか。

1085 番 「隠れ沼に生ふるあやめの残らぬに人の古根ぞ悲しかりける」も「引かれぬあやめ」の類である。この歌は、隠れ沼に生えているあやめ草は引き抜かれつくして古根も残っていないのに、顧みられない「人の古根」(飽きられてしまった自分)が悲しいという歌であるが、この歌意を凝集したような「人の古根」という表現が目される。「古根」という語は、和泉式部の歌では、初期百首の「花のふるね」(和泉式部集9。他出の後拾遺集48では「萩のふるね」)、「竹のふるね」(和泉式部集1438)があり、「竹のふるね」は、後撰集954番、拾遺集1194番にも見られる表現である。このうち後撰集の「笛竹の本の古ねは変るともをのが世々にはならずもあらなん」では、「古根」は「(笛竹の)古音」との掛詞をなし、人事に繋がる表現、すなわち「古くからの泣き声」の含意を読むむきもある(「全釈」)。人事に寄せて「古根」を歌うのはこの後撰集の歌くらいのだが、和泉式部は「人の古根」という表現を編み出し、忘れられた存在を歌う。式部の言語感覚の斬新さ、また、忘れられた弧愁をみつける感性がよく窺える表現である。

1226 番歌は「あやめ草」の歌の中で唯一の題詠であるが、夏の景物を題とするもので、新奇な題ではない。歌の内容は、人知れぬ沼であやめ草が、誰からも気にもとめられず、もてはやされもせず、一心に生い茂つてゐるというもので、「あやめ草」を擬人化し、「すさめねど」「こころのかぎり」と詠むことで、孤独を叙情的に象る表現となっている。なお「心のかぎり」も和歌にはさほど使われない表現で、時代もあまりさかのぼることはでき

ない。(注4)

ここまで見てきたように、五月五日の歌はいずれも孤独をかこつ女の心情を詠った、晴れ晴れとしない内容となつている。

和泉式部にとって、五月五日の「あやめ草」は、むしろもつとも賞美されるはずなのに「引かれぬあやめ」、ひとり居の孤独、顧みられない自分、寂寥感を見つめさせる歌材となつている。その根柢にあるのは「恋」、とりわけ独り恋うる悲しみである。節供行事のため、あやめ草の根を引いて贈り合う五月五日は、引かれぬ根、贈られぬ身の「孤悲」を知らされ、確かめる「折」でもある。「折を過ぐさぬ」和泉式部がとりわけこだわつた五月五日という「折」から、和泉式部の感性のありかをよく窺うことができる。

なお、和泉式部集「あやめ草」歌の中で、740番く745番は「あやめ草」を詠み込んでいる歌が並んでいる。前述の歌の考察の中で個々に取り上げているが、ほぼ五月五日に詠まれた歌で、人間関係の中で詠まれている。目上の人、縁戚の人、恋人への歌、親しい人々の中で詠まれた歌などである。ただ、個々の歌の間は特に関連性はなない。五月五日の歌をなぜ六首まとめてここに配列されているのかは、わからない。

#### 四 清少納言との「あやめ草」贈答歌

和泉式部の家集には、贈答歌のどちらかの、和泉式部自身が詠んだ歌は多くあるが、相手の歌はあまり収載されてない。詞書には現れるが、その「人」からの贈歌、返歌は採られていないものが多い。相手方の歌がわか

るのは、帥宮、公任、赤染衛門、相模、道綱、伊勢大輔、道長、道濟などである。その中で清少納言とのやりとりは、同じ「あやめ草」を媒介に、清少納言の返歌も含めて二カ所（A群、B群とする）に出ている。ここでは二人の間で「あやめ草」が素材としてどう詠まれているか考察する。

A群

503 流れつつみつのわたりのあやめ草ひきかへすべき根やは残れる  
（和泉式部）

同じ日、清少納言

504 駒すらにすさめぬ程に老いぬれば何のあやめも知られやはする  
（清少納言）

かへし

505 すさめぬにねたさもねたしあやめ草ひきかへしても駒返りなん  
（和泉式部）

B群

五月五日、菖蒲の根を、清少納言にやるとて

538 これぞこの人に引きけるあやめ草むべこそ闔のつまとなりけれ  
（和泉式部）

かへし

539 闔ごとのつまに引かるる程よりはほそくみじかきあやめ草かな  
（清少納言）

また、かへし

540 さはしもぞ君は見るらんあやめ草ね見けん人にひきくらべつつ  
（和泉式部）

A群の503番の歌に詞書がないので、清少納言との贈答に含めず（この場合他の人に贈った単独の歌とする）、504、505番を一对の贈答と見る解釈（「全釈」、伊藤博氏 注46）がある。この場合、流布本系の群書類従本の本文（『全書』）「清少納言に」のように、504歌を和泉式部の歌、505歌を清少納言の返歌として解釈する。これに対して、503番は「詞書欠落」とみて504番の「同じ日、清少納言」に続くものとし、三首贈答歌として解釈するのは、萩谷氏（注47）、寺田透氏（注48）久保木寿子氏（注49）である。この場合、504歌は清少納言、503、505番は和泉式部の歌となる。

503番は、和泉式部の他の「あやめ草」の歌の定番である縁語掛詞、「あやめ草」「引く」「根」「寝」「音」が用いられ、505番の「根」「寝」「あやめ草」「引く」と対応していることと、504の詞書の「同じ日」とあるので、これは前歌を何らかのかたちで受けていると考えれば、全体として503、504、505番は三首ひとまとまりと考えられよう。この形はB群とも対応する。

この503番の歌の「みづ」は、摂津の国御津とする説（「全釈」、「文庫」）がある。「御津」は「官船の発着する港を尊んでいう。」（『角川古語大辞典』）で、何カ所かあり、難波の御津もそのひとつである。しかし、この歌の「みづ」は「美豆」であろう。「美豆」は、山城国の歌枕であり、摂津ではない。『角川古語大辞典』の「美豆」の項目には、「山城国久世群奈良郷の木津川と宇治川の合流する付近の地（京都市伏見区淀美豆町、久世群久御山町）。ここは古く美豆御牧（みづのみまき）が置かれ、馬寮の馬を肥えさせるために移して放し飼いにし、諸社の祭りの料の馬が飼われていた（左右馬寮式）。……淀川を挟んだ対岸の西淀との間には淀渡（よどのわた

り)があり、京から奈良への淀路(よどぢ)はこの美豆(みつ)の渡(雍州府志・一)を渡って生駒山脈の東麓を南下した」とある。

美豆は、「みづのみまき」と「駒」、「あやめ草」「真菰草」と組み合わせ歌に詠われた。『惠慶法師集』(新編国歌大観)には、次のような歌がある。

212よどのなるみづのみまきにはなちかふこまいはへたり春めきぬらし

また『枕草子』第一一〇段「卯月のつごもり方」に「卯月のつごもり方に、初瀬に詣でて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、菖蒲、菰などの末短く見えしを、取らせたり」という一文がある。

『角川古語大辞典』によれば「淀渡」と「美豆の渡り」は同じ場所をいい、京から奈良への路とあり、清少納言も初瀬詣での行き帰りに通ったところなのである。つまり、清少納言の熟知の地であることを前提にした詠みかけであろう。また「流れつつ」と「みつのわたり」は平安時代ではこの歌しか見られない歌枕である(中世になると後鳥羽院、家隆が詠んでいる)。「引き返す」はもとの所に戻る、以前の状態に戻る、昔に戻るの意がある。

歌意は、川の水(大雨で水が増したか)に押し流されて、美豆の渡りのあやめ草は、引いてかえるべき根は残っているであろうかということ、掛詞の意を含めば、泣いてばかりいるあやめ草は、もとに戻れるよりどころが残っているでしょうかという、からかいの歌である。

504番は清少納言の歌で、第三句が岩波文庫本では「老い」とされているが、榊原本影印(注50)は「おひ」

であり、「新編国歌大観」、「私家集大成」も「おひ」である。清水文雄氏『校訂本和泉式部集』（注51）には「おいぬれば」とあり、校異としても取り上げられていないが、あるいは「おひ」ということも考えられる。「おひ」であれば、「生ひぬれば」で、本歌としては、従来指摘される「892大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今集巻第十七・雑上・よみ人知らず）より「生ふ」「駒」「すさめぬ」「菖蒲草」を含む、拾遺集巻第十二恋二・凡河内躬恒 768生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の来ぬがわびしさ」も考えられる。『源氏物語』蛸巻花散里の歌「その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日や引きつる」は『河海抄』ではこの躬恒の歌の引用としている。（注52）なお、「駒のすさめぬあやめ草」を詠む歌は、『元真集』、『惠慶法師集』（二首）。うち一首は後拾遺集に収載210番）、『義孝集』、『千頼集』がある。

清少納言歌の歌は、駒にさえ嫌われる程あやめ草が成長してしまっているので、どのあやめかどうかの区別はできませんよという意としたい。ただし、「成長する」は、育ってしまったということ、老いている意味も含むと考えられる。

505番は和泉式部の返歌である。「ねたさもねたし」はまた、歌には用例の少ない表現であるが、和泉式部正集733番に確認できる。また後拾遺集の堀川右大臣頼宗の歌（巻第十六雑二911）にも確認できるが、この頼宗の歌の返歌は和泉式部である。『新編国歌大観』では和泉式部以前には確認できず、その後歌論書などに先の堀川右大臣の歌がたびたびとりあげられ、ほかにこの表現を用いている歌人は三人ほどである。

「こまかへる」は「若返る」の意であるが、平安時代の和歌ではやはり用例は少ない。

167 あさつゆのけやすきわか身おいぬとも又こまかへりきみをしまたむ（人丸集）

『冷泉家時雨亭叢書』の人丸集による。（注53）人丸集書陵部本は「若かへり」である（注54）。

この505番歌では「すさめぬに」駒から好まれないとは、残念なこと、くやしいこと、もう一度ひきかへしても、ぜひ若返りしようとする。

この三首の背景に清少納言の生活環境の変化を関わらせて考える説があるが（注55）、ここでは、和泉式部集「あやめ草」の歌群として考えたい。清少納言の恋愛生活の何事かを知った和泉式部が503番の歌を詠みかけ、清少納言が「駒すらにすさめぬ」あやめ草を我が身にたとえて自嘲する504番歌を返し、それに対し505番歌和泉式部が「ねたさもねたし」癩に障ると憤慨し、暗にそんなことはないと励ましている。なお「駒返る」は「老い」に対する言葉であれば「若返る」だが、503番歌の「ひきかへすべき根やは残れる」と対応し、「駒」を男と考えて、素直に男があなたのもとに帰ると歌っているのだとも解釈できようか。

B群の三首は、A群よりわかりやすい。

538 これこそが昔から人が引いてきたあやめ草、なるほど寝屋の端（妻）となるのにふさわしいものですね。

539 寝屋ごとの端に聳くために引かれるものにくらべると、細くて短いあやめ草ですね。

540 そういう風にあなたは見るでしょうね。いろいろな根（寝）をみた人とひきくらべて。

538番の「これぞこの」は業平が第三句に用いて著名であるが（古今集雑上879）、初句に用いるのは、中世以降の歌人には見られるが、中古では和泉式部以外にない。「むべこそねやのつまとなりけれ」は、『大式高遠集』（注

56)に次の例がある。

342 夏くれば淀野にねざす菖蒲草むべこそ人のつまと見えけれ

538 番はあやめ草の根を清少納言にたとえて、いかにも寝屋の妻にふさわしいとたたえたのに対して、539 番歌は、贈られたあやめ草は寝屋の端（夫）を茸くには貧弱なあやめ草だと返し、540 番歌は、そのあやめ草を、今まで連れ添ったいろいろな人と引き比べて、あなたはそう思うのでしょうかと返している。表面上、和泉式部が贈った菖蒲の根をあれこれと言っているのだが、一方、それぞれお互いの恋愛生活を俎上にのせて、からかい合っているように思われる。軽妙なやりとりである。

A 群 B 群ともに、五月五日の折を捉え、お互い意を通じ合ったもののみが理解できるニュアンスをこめて「あやめ草」を俎上に歌う歌となっている。もとより「あやめ草」は根、寝に続くものであるから、必然的にお互いの恋愛生活を意に含み、やりあう歌となっている。ここでの「あやめ草」は、和泉式部固有の心情を託すというより、当意即妙に歌を返すための、いい素材となっている。このやりとりは和泉式部の他の「あやめ草」歌とは違い、ときに自嘲的な相手にやさしく応える歌も含みつつ、全体として明るい。それは相手が機智とユーモアに富んだ「枕草子」の作者、清少納言であるからだろう。たとえば和泉式部集の中で和泉式部を論するような歌を贈ってきている赤染衛門相手では、望み得ぬ軽妙さである。「菖蒲の根」を贈る親しい同性の間柄でのやりとりならではの、機知に富んだやりとりをたどり得るように、和泉式部集には珍しく、清少納言側の返歌も漏らさず残した両歌群は、和泉式部と清少納言のプライベートを覗き見するような、ある種の物語的興味を喚起する歌群と



なっている。

## 五 まとめ

五月五日の節供の「あやめ草」という歌材を詠んだ和泉式部の歌の分析を通して見えたことは、ひとつには和泉式部の言語感覚の鋭さであろう。和泉式部は、そこに普通和歌では用いられない言葉をさりげなく組み合わせるといった技巧もさることながら、定番の掛詞を使用しても、思わぬ視点が含まれていたり、一見何気ないように見える歌でも、必ずその歌の主意を表現する工夫が見られ、またそれが何でもないのでようにさりげなく行われているので、歌のしらべの中に自然にとけこんでおり、気がつきにくい。これは、「あやめ草」に関わらず、他の和泉式部の歌の特質を考察する際にも押さえておくべきポイントであろう。

また、和泉式部は五月五日を大事にしている。ただ、清少納言のように五月五日と節供にまつわるすべてを賛美するのではない。和泉式部は草として菖蒲の色を詠んだ歌はなく、香を詠んだ歌は一首しかない（704番）。和泉式部が「折」を大事にすることは『和泉式部日記』でも繰り返し描いていることである。では「五月五日」の「折」の何が大事であるのか。節供にまつわる行事の楽しみや長寿を願うことが、和泉式部にとっての「折」の中心ではない。それらを大切にしつつも、要するに「あやめ草」の存在が重要なのである。「あやめ草」はその時だけ最ももてはやされる。「五月五日にあやめ草を引く」という節供の行為が、反対に「ひかれぬあやめ草」という存在を生みだす。「あやめ草」はままならぬ恋の孤独の心情を、仮託して表現できる。それが、和泉式部

が一番心引かれる「折」のありようなのである。

和泉式部はすぐれた歌人であることはその当時から認められていたのであるが、このような、言わばありふれた歌材を詠んだ歌を通して、その表現の独自性や個性の一端がわかる。そしてそれは同時に、まだより多くの歌がその本質を見極められないまま研究の対象となっていないことが考えられるのである。

- 注 1 田中喜美春・平沢竜介・菊池靖彦『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(『和歌文学大系』19)(明治書院 1997)
- 注 2 増田繁夫校注・訳『能宣集注釈』(貴重本刊行会 1995)
- 注 3 関根慶子ほか『赤染衛門集全釈』(風間書房 1985)
- 注 4 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』(東京堂出版1998)
- 注 5 牧野富太郎原著『牧野日本植物図鑑』(北隆館 2008)
- 注 6 森由雄『神農本草経解説』(源草社 2011)
- 注 7 守屋美都雄・布目潮瀨・中村裕一訳注『荊蒾歳時記』(東洋文庫324)(平凡社1978)
- 注 8 倉林正次『饗宴の研究(文学編)』(桜楓社 1969)
- 注 9 山中裕・今井源衛編『年中行事の文学』(弘文堂 1981)
- 注 10 中村義雄『魔よけとまじない』(塙書房 1978)
- 注 11 『神道大系』朝儀祭祀編一儀式・内裏式 神道大系編纂会 1980)

- 注 12 『新訂増補故実叢書』 第十八回 (明治図書出版 1952)
- 注 13 後藤祥子「五月五日」(山中裕、今井源衛編『年中行事の文芸学』 弘文堂 1981)
- 注 14 山中裕ほか校注『栄花物語一』(新日本古典文学全集31 小学館 1995)
- 注 15 藤岡忠美ほか校注・訳『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(新編日本古典文学全集26 小学館 1994)
- 注 16 犬養廉校注『蜻蛉日記』(新潮日本古典集成 新潮社 1982)
- 注 17 『古今和歌六帖 第一』(注新訂・校註日本文学大系 第十三卷)(風間書房 1955)
- 注 18 中野幸一注・訳『うっほ物語一』(新編日本古典文学全集14 小学館 1999)
- 注 19 山中裕ほか校注『栄花物語 3』(新編日本古典文学全集33 小学館 1998)
- 注 20 松尾聡・寺本直彦校注『落窪物語 堤中納言物語』(日本古典文学大系13 岩波書店 1957)
- 注 21 萩谷朴編『平安朝歌合大成 第一卷』(同朋舎出版 1995)
- 注 22 三谷栄一『古典文学と民俗』(民俗民芸双書)(岩崎美術社 1969)
- 注 23 注2に同じ
- 注 24 佐竹昭広ほか校注『萬葉集一〜五』(新日本古典文学大系 岩波書店 2013〜2015)
- 注 25 注1に同じ
- 注 26 注2に同じ

- 注 27 注 2 に同じ
- 注 28 関根慶子ほか『赤染衛門集全釈』（風間書房 1986）
- 注 29 野村精一校注『和泉式部日記・和泉式部集』（新潮日本古典集成 新潮社 1971）
- 注 30 『校註国歌大系第五卷 十三代集』（講談社 昭和 51 復刻版）
- 注 31 久保木寿子『実存を見つめる和泉式部』（『日本の作家』13 新典社 2000）
- 注 32 注 29 に同じ
- 注 33 青木生子校注『平安鎌倉私家集 和泉式部集』（日本古典文學大系 80 岩波書店 1964）
- 注 34 『実国集 35』（新編国歌大観）
- 注 35 『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店 1968）
- 注 36 『古事類苑 天部 飲食部八』（吉川弘文館 1980）
- 注 37 増田繁夫『冥き途 評伝和泉式部』（世界思想社 1987）
- 注 38 注 8 注 9 など
- 注 39 注 30 に同じ
- 注 40 注 2 に同じ
- 注 41 藤原道長『御堂関白記』（下）全現代語訳 倉本一宏訳（講談社 2009）
- 注 42 『新撰朗詠集』上 夏 148（新編国歌大観）

- 注 43 山中裕ほか校注『栄花物語 2』（新編日本古典文学全集 32 小学館 1996）
- 注 44 注 8 注 9、『古事類苑 武技部 十四競馬』
- 注 45 単純に新編国歌大観を検索すると、勅撰集では新古今集が初出で紫式部の歌が採られている。個人の家集では一条  
 摂政、惠慶、道綱母、大江匡衡、紫式部が和泉式部以前の歌になる。
- 注 46 伊藤博『和泉式部 和歌と生活』（笠間書院 2010）
- 注 47 萩谷朴『清少納言全歌集 解釈と評論』（笠間書院 1986）
- 注 48 寺田透『和泉式部』（日本詩人選 8）（筑摩書房 1971）
- 注 49 注 31 に同じ
- 注 50 『日本古典文学影印叢刊 9 榊原本私家集（一）』（日本古典文学会編貴重本刊行会 1978）
- 注 51 清水文雄『校訂本和泉式部集（正・続）』（笠間書院 1994 新装版）
- 注 52 阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語 3』（新編日本古典文学全集 22 小学館 1996）  
 『河海抄』新編国歌大観
- 注 53 冷泉家時雨亭文庫編『冷泉家時雨亭叢書』第 78 卷（朝日新聞社 2005）
- 注 54 阿蘇瑞枝校注『人麻呂集』（『和歌文学大系』17）（明治書院 2004）
- 注 55 注 47 に同じ
- 注 56 中川博夫『大式高遠集注釈』（日本古典文学会編 貴重本刊行会 2010）

（対応論文 東京女子大学紀要「論集」 第六十五卷二号 2015・3）

### 第三部 「桜」の歌

#### 第六章 「桜歌」の系譜—古今集から後拾遺集へ—

##### 一 はじめに

古代から「桜」を詠んだ歌は、非常に多い。つぼみから咲くのを待つ歌から始まって、花の盛り、散り初め、散ってしまった後、と移り変わる桜の諸相の瞬間瞬間をとらえて詠む歌は、勅撰集春部の大きな歌群をなしている。たとえば、秋の女郎花、萩、菊、紅葉などもまとまった歌群をなしているが、いずれも景物そのものを詠うものにすぎない。一方、春の花の歌としては「梅」があるが、梅はその色や芳香により賞美され、万葉集以来詠歌数も多いが、この場合にしても、「咲くを待つ」から「散るを惜しむ」までの時間のなかの思いを詠うものではない。このような詠われ方をしている「歌材」（植物）は他にはみられない。

桜が日本人にずっと引き続いて詠われてきた所以は、花盛りの姿のみならず、散り落ちた花びらまでが美の対象となつてゐるからではないだろうか。特に、散る桜である。桜はしおれて落下するのではなく、咲いた花びらがそのまま散つてゆく。その散りざまもまた吹雪に喩えられるくらいに美しく、地面に散り積もつた花びらも雪に見立てられている。この「散る」だけで、咲いた桜を詠むのと同じくらいの歌が詠まれている。

桜は単なる点景ではない。咲き初める時から散り落ちるまでの間にその姿を変えてゆくための時間を含む。「桜」を歌材とするということは、この短い時間の桜の変化に物語ドラマを感じて、「桜」の中に自己を投影して、歌を詠むことである。毎年繰り返されることであるが、世の中に桜がなくならないかぎり、時を越えて「桜」は詠い継がれてゆく。

このような「桜」を素材とした歌を、複数の歌集のなかに追ふことで、人が歌を詠むこと、そこで見つめる心の推移を理解し、和歌史の一面を明らかにすることができるのではないだろうか。本稿ではこうした見通しのもと、勅撰集の中から『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』の「桜」および「花」を詠み込んだ歌を抽出し、詠風の変化を分析、考察する。

本文は各集とも、『新日本古典文学大系』（新体系）（岩波書店刊）を使用する。なお、古今集、後撰集、拾遺集、後拾遺集（引用論文の中の表記はそのまま）のように略称で表記する。

\* 数字は新大系の各集にふられた番号を示す。

\* 歌材としての桜、花は「桜」「花」とカッコを付け、自然の桜をいう場合はつけない。

まず、古今集の巻第一春歌上の49〜68番には咲く桜歌群、巻第二春歌下は69〜89番の散る桜歌群がまずある。この桜四十一首については、詞書又は歌の中に「桜」の語がふくまれており、明確な「桜」の歌群である。この後に続く91〜118番の、詞書にも歌にも「花」とのみ詠まれている、咲く花十四首、散る花十五首が存在する。このあととは藤、山吹と具体的に花の名を詠みこんでいる歌となり、弥生つごもりに至る。

新大系では、明確に「桜」歌群と「花」歌群は分け、「花」を「桜」とは解釈していない。一方、新編日本古典文学全集ではこの「花」歌群も「桜」に関する歌としてとらえ、「桜」の歌七十首と解釈している。これに関しては、注釈書の立場（注1）も一様ではないが、本稿では後述するような「桜」の典型的な詠まれ方（歌材との組み合わせ）によった「花」については「桜」の分類とみなし、「桜」歌と考えあわせて検討したい。これはどの「花」が桜を歌うのかを認定することを主眼とするのではなく、個別具体的な花を超えた、概念としての「花」を考えるためである。このほか、四季部以外に詠まれている桜の歌は、136、349、358、393、394、403、427、479、588、590、684、832番の十二首ありこれはいずれも「桜」の語が詠み込まれているもので、「花」の歌は入れていない。

次に後撰集は周知のとおり、集全体として処々問題があり、この中で、部立てと配列の乱れ、すなわち主題の分散が見られ、古今集の緻密な配列から見るとあたかも混乱しているように見える。このことについても諸研究があり（注2）、ある程度法則性を見出し、立証する論が展開されているが、主に「梅」までであって、「桜」に



ついでには論究されていない。

後撰集の春部の桜歌群は、巻第二春中の三番目の僧正遍昭の歌から始まる。春中49番以降79番まで三一首のうち、「桜」「花」以外の歌は九首である。次の巻第三春下は冒頭の歌は鶯で、その間、すみれが咲き、山吹も咲き、藤も咲き出す。散る桜の歌がでてきて、あと惜春、三月尽の歌になる。この春下82番以降、134番まで五三首の歌群のうち、「桜」以外の歌は三二首となり、一一一首が「桜」または桜と思われる「花」の歌となる。特に春下には多種の花が咲くので、詞書、歌に「桜」が含まれている歌と、「花」とあつてもたとえば「古今集」の「桜」の歌を踏まえいるものは「桜」の歌に入れた（春下「桜」82、83、85、93、102、105、106、110、112、115、117、118、119、132、133、134「花」、88、90、91、92、98）。巻第二春中の咲いている「桜」から春下132番の「何時の間に散りはてぬ覧桜花」まで、一とおりの「桜」の諸相が詠まれている。問題は間にいろいろな景物を詠んだ歌が混じっていることだが、これは「歌群」をまとめて考える側からの見方であつて、現実には多種類の桜の咲く期間には案外に長い。和歌の觀念の世界の論理でとらえれば、整序されていないのはその通りであるが、ある意味自然の推移によつて配列されていると考えられないこともない。後撰集の桜（花）の歌はおおむね四三首になる。

後撰集の桜歌群についての考察の前提となるべきことを述べたが、後撰集の「花」については、注釈書（注3）を参考に私見で「桜」と判断した歌を対象に考察する。

次に拾遺集であるが、その成立は収載歌人の官職から、寛弘二年（一〇〇五）六月一九日から同四年（一〇〇七）正月二八日までとされている。この拾遺集の表現について、小町谷照彦氏は、三代集は古今集の表現の埒内

にあるとした上で、もちろん古今集そのものではなく、「歌語の拡大、修辭の定着、趣向の開拓、感覺の洗練などという点において、『古今集』の集成的展開を遂げており、極端な言語遊戯的性格から脱却して、情と理がほどよく均衡し、優美平淡な歌風」であり、『拾遺集』は三代集の達成」と述べている。(新大系『拾遺和歌集』解説)

拾遺集の桜の歌は卷第一春の36番の中務の歌から、44番まで、咲き初めの桜が詠われ、山田の歌三首を挟んで、48番から54番が盛りの桜、帰雁の歌二首を間に置き、57番から67番までが散る桜の歌である。春部では二七首の桜の歌がある。このほか卷第一六雑春に一八首あり、他の卷第五賀で279、286、第六別302、303、第九雑下510番のほか卷第二十哀傷に1274〜1278番の五首詠まれている。これらをふくめて検討する。

拾遺集の春の桜歌二七首のうち、歌合が九首、屏風歌が六首計一五首を占める。また雑春一五首のうち屏風歌が二首である。また、桜歌として扱わなかった山田の歌の45番歌と、47番歌も屏風歌である。

一方、後拾遺集は、応徳三年(一〇八六)奏覽、翌寛治元年(一〇八七)再奏という。

すでに指摘されているように、後拾遺集初出の歌語や表現も多くあり、また同じ歌語でも質的な変化や用例増が認められ、前三代集から和歌史的な転換があるとされている。

これについて武田早苗氏は『後拾遺集』は、三代集に所収された歌材でも、さほどの注目を浴びなかった表現との取り合わせのものを積極的に掬い取ろうとする」とする(注4)。また中周子氏は『後拾遺集』は『拾遺

集』を継承発展させるという方針を持った集」と結論づけられている。(注5)

後拾遺集については、巻第一春上の77番歌から127番まで咲く桜、巻第二春下巻頭に桃三首を置いて131番から148番までが散る桜である。

この後拾遺集では、春上五一首のうち、79、80番のように詞書に「花見」とあるが桜を主題としない歌、106番の詞書、歌ともに桜も花見の語もない歌については除き、四八首とする。巻第二十雑六1200、1201番に桜の歌がある。

また、春下が一八首と均衡を欠いている。藤本一恵氏は『後拾遺和歌集全釈上巻』(注6)の解説に『後拾遺集』の春上は春下の三倍半、素材の面から、『咲く桜』が『散る桜』の三倍以上ということは、「撰歌範囲が天曆以降、撰閑家最盛期の中ころのをかき歌であり、女流歌人が多く、秋歌より春歌が多いという、華やかなりし時代の風潮もある程度内在しているかもしれない。が、一方、後拾遺集が単独撰であることから、撰者の嗜好、意図として説明することも可能である。」と指摘されている。

「桜」歌の表現の比較、分析するにあたっての前提にこれらの先行研究が指摘するそれぞれの歌集の性格を念頭に置き、考察を進めたい。

研究の方法であるが、まず対象となる部立てとしては、主として四季の部春歌(拾遺集については巻十六雑春を含む)であるが、恋、賀、離別といった他の部立てでの「桜」の歌も検討の範囲とする。

和歌の抽出は、詞書、歌のどちらかに「桜(花)」の語を含む歌を対象とし、組み合わせられているいくつかの歌材、歌語を選び組み合わせごとに比較考察する。

以下「桜」の歌を他の歌材とともに分析する前に確認しておきたいのは、歌の対象となる桜はむろん現在のソメイヨシノではない。植物誌、社会学の見地からの研究（注7）によればこのころの山桜は、現在の固有の種としてのヤマザクラのみに留まらず、山野に咲く野生の桜全てを意味した。自然交配で種々の桜が生まれ、全国に自生していたわけだが、当時の歴史、文化の中心であった近畿地方に多く自生する植物であったため、古くから賞美の対象とされてきたという。古代貴族の庭園に咲く桜もおそらくこの野生の桜を移したものであろう。従って、色も、咲く時期も違う桜があるのがごく当たり前であった。現在のように同種類の桜が多数植えられ、一斉に咲いて、散るといふ状況ではない。『源氏物語』幻巻に「外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛過ぎて、樺桜は開け」（注8）という記述があることも注意されよう。

## 二 桜の享受—「折る」ことと「花見」

「桜」の享受については、既に山田孝雄『櫻史』（注9）において、「中古の巻」では「花の宴」、「櫻会」、「花見」、「櫻狩り」、「花の折枝」、「花合」と項目をあげ、詩歌、説話集、歴史書などの文献を引いて述べられている。勅撰四集において、この山の桜を享受する姿は、さまざまに歌われる「折る」行為から窺い知れる。すなわち人に桜を贈る、または身近な瓶に挿して（注10）手元で楽しみ、また一方で実際に花の咲く所に出かけて見る「花見」「桜狩り」が行われたことがわかる。

(一) 折る

まず、「折る」であるが、「折る」が詠み込まれている歌は古今集に六首（54、55、58、64、65、80、100）、後撰集に七首（50、51、52、68、77、93、115、130<sup>5</sup>）、拾遺集に三首（1278、1039、1040）、後拾遺集に四首（84、85、89、92）ある。

このうち古今集の54、55番歌は、見に来ていない人に折って土産に持ち帰り見せよう、64、65番歌は、散る前に折って賞美するか、折るのは惜しいので散るまで見届けよう、と「折る」ことに逡巡する気持ちを歌っている。

題しらず

読人しらず

54 石走る滝なくも哉さくら花手おりてもこぬみぬ人のため

山の桜を見て、よめる

素性法師

55 見てのみや人に語らむさくら花手ごとにおりて家づとにせん

題しらず

よみ人しらず

64 散りぬれば恋ふれどしるしなき物をけふこそ桜おらばおりてめ

65 折とらばおしげにもあるか桜花いざ宿かりてちるまでは見む

この四首において「折る」行為は実は行われていない。桜を見て「折る」行為を想像して詠んでいるのであり、あるいは、「桜＝折る」がひとつの美的行為として認識されていたのかもしれない。この四首の場合「折る」行

為は歌の中で完結しているわけで、実際に折った桜を人に贈ってはいない。

古今集において、具体的に「折る」桜が詠まれるのは次の二首である。

折れる桜を、よめる

貫之

58 誰しかも尋めておりつる春霞立かくす覧山のさくらを

心地損なひて、患ひける時に、風に当たらずとて、下し込めてのみ侍ける間に、

折れる桜の散り方になれりけるを見て、よめる

藤原因香朝臣

80 たれこめてはるのゆくゑも知らぬまにまちし桜もうつろひにけり

この二首は折られて室内にあると思われる桜を詠んだものである。この場合は、第三者の行為による「折れる桜」が手元であり、それに対しての詠者の感興が詠まれている。ただ詞書でわかるように第三者は登場しない。

「桜」は詠者の感慨に留まっている。この「折る」の語は、古今集春下の「散る桜」歌群にはなく、「花」歌群にない。巻第七賀歌358番に一首ある。（「心」の項にて後述）

続く後撰集では、「折る」については、詞書において具体的な状況が語られており、桜が人間関係の中で、歌を贈答するひとつのよすがになっていることが窺い知れる。

後撰集について見ると、花見の宴の折の歌として次の歌がある。

花山にて、道俗、酒らたうべけるおりに  
素性法師

50 山守はいはばいは南高砂の尾上の桜折てかざむ

古今集55番歌と同じ素性の歌であるが、ここでは人々が桜を折ってかざして「花見」に酔いしれて楽しむ人々を詠んでおり、古今集との表現の違いが明らかである。

後撰集の他の歌には「折って」桜の美を共有できる具体的な相手が居る「折る」歌がある。歌は個人の述懐に留まらず、桜を贈った相手に伝える気持を詠んだものとなっている。例をあげる。

おもしろき桜を折りて、ともだちのつかはしたりければ　よみ人しらず

51 桜花色はひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

返し　伊勢

52 見ぬ人のかたみがてらはおらざりき身になずらへる花にしあらねば

衛門の御息所の家太秦に侍けるに、「その花おもしろかなり」とて折りにつかはしたりければ、  
きこえたりける

68 山里に散りなましかば桜花にほふさかりも知られざらまし

つねに消息つかはしける女ともだちのもとより、桜の花のおもしろかりけるを折りて「これ、その

花に見比べよ」とありければ　こわかぎみ

93 わがやどの歎は春も知らなくに何にか花を比べても見む

次の115番歌は山桜を詠む歌である。

山桜を折りて贈り侍とて

伊勢

115 君見よと尋て折れる山桜ふりにし色と思はざら南

この歌は古今集の同じ伊勢の歌、「68 見る人もなき山里のさくらばなほかのちりなんのちぞさかまし」と詠む山桜を、後撰集では、あなたに見せたくて探して折った山桜で、もう古くなった色と思わないでほしいという。おそらく都の桜より遅く、「ほかのちりなんのち」に咲いた山桜であることを意に含んでの歌であろう。

このように、後撰集の「折る」は、人間関係の中で、具体的に桜を折る行為を伴って、贈り贈られているわけで、古今集とは明らかに違うことがわかる。

拾遺集は「春部」には「折る」を詠む歌はなく、卷十六「雑春」に次の二首がある。

桜の花咲きて侍ける所に、もろともに侍ける人の、後の春ほかに侍けるに、その花を折りて遣はしける  
よみ人しらず

1039 もろともにおりし春のみ恋ひしくて一人見まうき花盛り哉

御厨子所にさぶらひけるに、蔵人所の男ども、桜の花を遣はしければ

壬生忠見

1040 もろともに我し折らねば桜花思やりてや春は暮らさん

1039 番歌は桜の盛りに前年一緒にいた人が今年はやそに行ってしまったので、折って歌とともに贈る、1040 番歌は、



「もろともに我し折らねば」は藏人所から贈られた桜の枝を見てその花のもとにいない、我が身の不遇を嘆いた歌（新大系脚注による）である。拾遺集はほかに巻第二十哀傷に次の歌がある。

この事を聞き侍て後に

大納言延光

1278 君まさばまづぞ折らまし桜花風のたよりに聞くぞ悲しき

この歌は1274番小野宮太政大臣「むすめにまかり後れて又の年の春、桜の花盛りに、家の花を見て、いさゝかに思ひを述ぶといふ題を詠み侍ける」で歌会があつたらしく、それを聞いて延光が詠んだ歌である。

古今集の詠風を引き継いでいるといわれる拾遺集であるが、「春」部に「桜を折る」歌がないのはなぜだろうか。この「春」部には比較的歌合や屏風歌が多く、贈答歌など人との関わりを詠む歌が少なく、いわば晴の歌が多いからであろうか。桜のみならず、ほかの花の枝を折る行為も「齋院御屏風に 16 香をとめて誰折らざらん梅の花あやなし霞たちな隠しそ」という躬恒の梅の花の歌があるのみである。「折る」は桜を享受する方法であるが、古今集では折って人に桜花を贈るという行為も歌に詠む場合は必ずしも具体的に相手に贈る行為の反映ではない。折ること自体が雅な行為とされ、具体的かどうかに関わらず、美意識にかなう行為だからである。後撰集は人と人の関わりで実際の「折る」そして贈る」行為とともに詠まれた。拾遺集においては収載された歌が少ないが、この雑春の二首は折って贈られてきた桜を前にして詠んだ歌であり、哀傷の1278番歌も、もしもご存命なら折っていたらうと想像して詠んでいる。「折る」行為がつなぐ人間関係の中で詠まれているといえる。このほかにも桜を折る行為を詠んだ歌はあつたはずであるで、例えば、和泉式部集と『公任集』に公任の白河山荘に帥宮

と共に、花見に出かけた時に折って帰った桜の一枝をめぐる贈答がある。(第五部後述)  
また、同じく和泉式部集と『道濟集』に、源道濟が一枝折って和泉式部に贈る歌がある。(第七章後述)ただ、拾遺集としては、多くは撰ばれなかったであろう。

後拾遺集は「春」四首の「折る」歌のうち、次の89番歌は「いづれをかわきてくまし」というパターンで後世でもさまざまに詠まれることになった。

題不知

祭主輔親

89 いづれをかわきて折らまし山桜心うつらぬ枝しなれば

また、92番歌は「折る」に「居る」を掛けた例で、折る行為そのものを歌うのではないが、山桜を「折る」とが、都への恋しさと都にいない物憂さをよびおこしている。

長樂寺に侍りけるころ、齋院より山里の桜はいかゞとありければ、よみ侍ける

上東門院中将

92 にほふらん花のみやこのこひしくてをるにもうき山桜かな

桜を「折る」ことは、古今集においては、前述したように一つの美的な行為(美意識)と捉えることができ、後撰集においては人間関係の中での具体的な行為として詠われる。拾遺集、後拾遺集においては、数の上では減少する。ただし、実際に「折る」行為がなくなったわけではない。それは後拾遺集の次の歌でもわかる。

一条院御時、殿上の人と花見にまかりて、女のもとにつかはしける

源雅通朝臣

84 折らばをし折らではいかゞ山桜けふをすぐさず君にみすべき

返し

盛少将

85 おらでたゞ語りたに語れ山桜風に散るだにをしきにほひを

また巻第二十雑六の誹諧歌に次の歌がある。

題不知

源道濟

1200 咲かざらばさくらを人のおらましやさくらのあははさくらなりけり

桜は咲かなければ人は折らない、花を咲かせる桜がいけないのだと詠む。これは桜が咲けば折って愛せずにはいられない気持ちの裏返しで、屁理屈を言っているわけである。

次に考察する「花見」の歌の範疇にもなるわけであるが、花見の時には当然のように「折る」行為（かざしにするなど）が伴うことになる。桜を享受するための「折る」は引き続いてあつたはずで、それはある意味日常的に、桜の季節には「折る」行為が行われ、多くの歌が交わされたに違いない、その歌は日常的である故に、集として撰歌されなかつたのであろう。

## (二) 花見

次に「花見」について各集を見ると、詞書または歌に「花見」という語が含まれる歌は、古今集二首（67、95）

後撰集三首（99、112、133）、拾遺集に二首（35、286、1279 桜とは特定はできないが）と大変少なく、後拾遺集に至って十三首と頻出している（77、78、79、80、84、85、86、87、103、113、117、119、124）。（この場合の「花見」は一つの単語として考えられるものである。「花見れば」などの用例は含めない。）

古今集では、

桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、贈りける

躬恒

67わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき

雲林院親王のもとに、花見に、北山のほとりにまかれりける時に、よめる

素性

95いざけふは春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の影かは

の歌がある。このほかに次の歌も『伊勢物語』八十二段（注1）によれば、渚の院に毎年桜を見に出かけていたことがわかる。

渚院にて桜を見て、よめる

在原業平朝臣

53世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

後撰集においては、先に「折る」であげた後撰集50番歌も花見である。また次のように浮き立つ心を詠んだ次

の歌がある。

女ども、花見むとて、野辺に出でて

典侍よるかの朝臣

112 春来れば花見にと思心こそ野辺の霞とともにたちけれ

敦実の親王の花見侍ける所にて

源仲宣朝臣

133 散ることのうきも忘れてあはれてふ事を桜に宿しつる哉

後撰集の99番は歌自体は花見を直接詠んでいるわけではないが、詞書に「春、花見に出でたりけるに、文をつかはしたりける、その返事もなかりければ、あくる朝、昨日の返事と乞ひにまうで来たりければ、言ひつかはしたりける」とあり、よみ人しらずとして歌があるが、これは『伊勢集』にある歌で、それには花見の状況は書かれていない。

拾遺集には花見という語が直接詠み込まれている歌は少ないが、巻第五賀286、巻第二十哀傷1279番の歌が花見を行った時の歌と思われる。

天徳三年、内裏に花宴せさせ給けるに

九条右大臣

286 桜花今夜かざしにさしながらかくて千とせの春をこそへめ

中納言敦忠まかり隠れて後、比叡の西坂本に侍ける山里にひとくまかりて花見侍けるに

一条撰政

1279 いにしへは散るをや人の惜剣花こそ今は昔こふらし

286 は賀の宴であるので、華やかな花の宴が開かれていたのであろう。1279番は哀傷の歌で、人々が集まっている

様子が詞書から窺えるので故人を偲ぶ花見の会（宴）があつたと思われる。

後拾遺集では、いささか様相が変わってくる。

まず「花見」に招かれなかつたことへの恨みごとの歌が四首（77、78、79、113）ある。

二月諾、良暹法師のもとに、ありやとおとづれて侍りければ、ひとぐ具して花見になむ出でぬると  
聞きて、つねは誘ふものをも思てたづねて遣はしける

藤原孝善

77 春霞へだつる山のふもとまで思ひしらずもゆく心かな

人く、花見にまかりけるを、かくとも告げざりければ、遣はしける

藤原隆経朝臣

78 山ざくら見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける

宇治前太政大臣、花見になむと聞きてつかはしける 民部卿齊信

113 いにしへの花見し人はたづねしを老いは春にも知られざりけり

その他に103、117番歌に道明法師、能因法師の歌がある。が、いずれも世の中のはなやかな花見とは無縁の心境

を詠んでいる。

題しらず

道命法師

103 花見にと人は山辺に入りはてて春は都ぞさびしかりける

賀陽院の花盛りに、忍びて東面の山の花見にまかりありければ、

宇治前太政大臣聞きつけて、この程いかなる歌かよみたるなど問はせて

侍りければ、久しく田舎に侍りてさるべき歌などもよみ侍らず、今日かくなむおぼゆるとてよみて侍

りける

能因法師

117 世の中を思ひすててし身なれども心よはしと花に見えぬる

これを聞きて、太政大臣、いとあはれなりと言ひて、被物などして侍けりとなん言ひ伝へる

以上は男性の歌であるが、次の歌は女性の歌である。「おのこども」が花見に出かけて、自分は行かないが桜を思う気持ちは同じであるという86、87番歌と、自ら花見にでかけてその感興を詠んだ119歌である。

後冷泉院御時、上のおのこども花見にまかりて、歌などよみて、高倉の一宮の御方にもてまいりて侍

りけるに

一宮駿河

86 思ひやる心ばかりは桜花たづぬる人におくれやはする

今上御時、殿上の人と花見にまかり出でける道に、中宮の御方よりとて、人に代りてつかはしけ

る

右大臣北方

87 あくがるゝ心ばかりは山桜たづぬる人にたぐへてぞやる

高倉の一宮の女房、花見に白河にまかれりけるに、よみ侍りける 伊賀少将

119 なにごとを春のかたみに思はまし今日白河の花見ざりせば

これまであげた後拾遺集の歌からわかることは、まず「花見にまかる」つまり「わざわざ行く」という語が詞書に詠まれているのが十三首中八首ある。ということは、後拾遺集のころになると貴族社会では「花見」は、ある程度恒例化し年中行事のように行われていたのではないだろうか。「一条院の御時」（84番）、「後冷泉院御時」（86番）「今上御時」（87番）などを見ると、宮廷もこうした「花見」行事に関わっているのである。春霞に誘われ思い立って花見に出かける（後撰集112番）あるいは我がやどに客を招いて花見の宴をする（古今集67番）という風に、たまたま思い立って行う行為ではなく、前々から計画が練られて集団で出かけるものである。だから誘われぬ恨み言があり、孤独がある。

そして、興味深いことに、後拾遺集の「花見」の歌は、80、84、119番歌を除いて、女房や北の方の歌を含む十首までが、実は「花見」には行っていないのである。男達は前述のように招待から外されたり、誘い合う世俗から離れた状況から詠んでいる。桜の美を享受し、花を賞美する歌ではなく、また古今集のように桜の美の共有といった観念もない。

これは、古今集から後拾遺集の桜の歌を考えると、重要な観点となる。後拾遺集においては「折って」賞美



する、「花見」に行つて酔いしれるような観点から、歌が選ばれていない。従来いわれている後拾遺集の和歌史的転換というものの一つの側面と捉えることはできないだろうか。

次項では桜とともに詠まれる常套の歌材「霞」（桜を隠すもの）、「風」（桜を散らすもの）の組み合わせにおいて、さらに考察をしたい。

### 三 霞と風

#### (一) 霞

まず、古今集と後撰集における「霞」から考察する。

古今集における「霞」は、集全体では二十五首あり、数例を除いてほぼ「春霞」、「春の霞」という詠まれ方をしている。このうち「春歌」部では十四首、「桜」（花）に関わる歌は「桜」歌群（51、58、69、79）、「花」歌群（91、94、102、103）の八首である。他の部立てでは恋歌に479、684番にあり、ともに恋歌に入っている。

古今集の「霞」と「桜（花）」の取り合わせは「霞は桜（花）を隠すもの」として「隠す」の語が含まれる歌が四首（51、58、79、94）あり、また意として「霞にこめて」（91）なども含まれる。この「花を隠す霞」の発想について鈴木宏子氏は、「（花を愛するひとにとって）邪魔者である霞と花を組み合わせる（花を隠す霞）という型は、花を賞美し、愛惜する心の逆説的な表現としてあるのではないか」と評している（注12）。

「隠す」と共に詠まれる「霞」の次の歌には、桜を隠された残念さが歌われている。

題しらず

よみ人しらず

51 山ざくらわがみにくればはるがすみ峰にもおにもたちかくしつゝ

貫之

79 春霞はるあせなに隠すかく覧さくら花ちる間をだにもみるべき物を

前述の「折る」項にあげた58番は、実際に折られた桜を見て、「霞」で隠された向こうの山に桜（花）があることを想像して詠まれている。次にあげる69番は。

題しらず

読人しらず

69 春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはり行

見えない山の桜を賞美し、霞の色が変わるのは、花の色が映っているからかと想像している。

また、恋歌にある霞の歌は次の二首である。

人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後に、よみて、

遣はしける

貫之

479 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

友則

684 春霞たなびく山の桜花みれどもあかぬ君にもある哉

友則の歌の方は「春霞たなびく山の桜花」は「君」の形容である。「みれども」とあるので、桜をすべて隠しているのではなく、「霞」と「山桜」が一体となって美しく見えるのである。貫之の歌は「霞」の間からほのかに見える山桜にたとえて、ほのかに見かけた女性への思いの歌である。いずれも山桜に霞がかかる、あるいは山桜が霞のように見えるもどかしさを女性への恋情によそえている歌である。

古今集の「桜」歌群と「花」歌群の「桜」と「花」の扱いであるが、「霞」との取り合わせにおいては、花歌群の四首は桜と考えて良さそうである。

春の歌として、よめる

良岑宗貞

91 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

寛平御時后宮歌合の歌

在原元方

103 霞立春の山辺はとをけれど吹きくる風は花の香ぞする

霞で花は見えないが花の香はする、あるいはしてほしいと、視覚、嗅覚で受け止めて詠まれている。遠い山の霞の向こうの見えない花であるので、「桜」と言い切らず、「香」や、「色」などから「桜」であることを心に期待して、詠まれた歌であろう。

次に後撰集の「霞」は、集全体で十九首、うち春部で十二首、「桜（花）」に関わるのは七首（63、73、90、99、112、113、114）であり、「桜」の語が詠み込まれているのは63番のみであるが、他の「花」と詠まれている歌

については、詞書や詠歌状況（花見）などで、桜と推定される歌である。

題しらず

よみ人も

63 立渡る霞のみかは山高み見ゆる桜の色もひとつを

この歌では、霞の色と桜の色がひとつになつてとけあつていているという。霞は桜を隔てるものというより、桜と一体となつて桜を超えた美（高い山を彩る霞）を形作つてゐる。

題しらず

よみ人しらず

90 山高み霞をわけて散る花を雪とやよその人は見るらん

この歌は「雪」と「花」の見立てであるが、「霞を分けて散る花」と「散る花が雪に見える」ということを一首に詠み込んでゐる。

この二首は、春の景色の歌といつてよく、古今集の詠い方の表現を少し発展させたといえる。

この他の後撰集の「霞」と「桜（花）」の歌は、「花見」の99番、112番、そして、おそらく桜の「花ざかり」の時の贈答歌が次の歌である。

あひ知れりける人のひさしうとはざりければ、花ざかりにつかはしける

よみ人しらず

113 我をこそとふにうからめ春霞花につけても立ち寄らぬ哉

返し

源清蔭朝臣

114 立ち寄りぬ春の霞をたのまれよ花のあたりと見ればなるらん

この場合「春霞」は「霞」と「立つ」を「立ち寄り」にかけ、花を隠す霞をうまく利用して、無沙汰の言い訳をしている。「春霞」は男の喩えである。

次の73番は古今集の「91花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」を本歌とする。「霞ぞほだし」という、隠す意をもつ語がある。

寛平の御時、「花の色霞にこめて見せずといふ心をよみてたてまつれ」とおほせられければ

藤原興風

73 山風の花の香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける

この歌は「霞」が古今集51番「峰にもおにも」のような高い所ではなく「麓」で、山風を邪魔して香りを引き留めているということで、古今集を継承し展開させた歌である。

以上の用例から見てわかるように、後撰集では「隠す」という語を含む歌はない。「霞」は「桜(花)」を隠すものという概念が直接詠まれている歌はない。

次に拾遺集の「霞」である。拾遺集の「霞」の歌は集全体で三十二首あり、「霞」と「桜」(花)の取り合わせは、四首(37、40、42、104)ある。

題知らず

37 吉野山絶えず霞のたなびくは人に知られぬ花やさくらん

この歌は古今集春下の貫之の歌94番に下句が同じである。「霞は花を隠すもの」という類型的な発想である。

42番歌はやはり霞に桜の前に立ちほだからないでほしいという、典型的な歌で、1041番は「霞立つ山」のかなたの桜花を女性に喩えている歌である。

次の40番歌は『新撰万葉集』（管家万葉）の春3番の歌で、『寛平御時后宮歌合』にもある歌である。

昔家万葉集の中

40 浅緑野辺の霞は包めどもこぼれてにほふ花桜哉

この歌では、山ではなく、「野辺の霞」が「花桜」を「包む」という表現、こぼれて「にほふ」は視覚的表現にも用いられるので、緑との対比で美しい風景を想像させる。

拾遺集の「霞」はほぼ、古今集と同様に「霞は花を隠す」趣向で詠まれているといえよう。

後拾遺集は、「霞」は集全体で二十三首で「桜（花）」との取り合わせは四首（66、77、78、120）である。このうち次の99番歌は、たなびく霞を見やるのではなく、「霞」が立ち込める山里にいて、桜が花咲くのを待つという表現である。

長楽寺に住み侍りける、二月許に人のもとに言ひつかはしける 上東門院中将

66 思ひやれ霞こめたる山里の花まつほどの春のつれぐ

77番は「花見」の項であげたように、霞が花さく山を隔てるのと、孝善に対する良暹法師の隔て心を意味し、78番は「人の心ぞかすみなりける」と、花見に誘われなかった怨み言で、人が自分を隔てるのによそえて使われている。

次の120番は高い峰に咲いている桜に、まわりの人里に近い山に霞に立たないでほしいという歌である。

内大まうちぎの家にて、人く酒たうべて歌よみ侍けるに、遙かに山桜を望むといふ心をよめる

大江匡房

120 高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞たゞずもあらなん

遙かな高い峰と近い山の対比で、遠近と高低を感じさせる。

以上四集の「霞」と「桜」を取り合わせた歌をみてきた。古今集の「霞は花を隠す」は拾遺集に引き継がれている。後撰集は特に強調されてはいない。後拾遺集では「霞」は「桜（花）」を隔てる前提は変わらないが、前述のように人と人を隔てる意にも用いられている。拾遺集、後拾遺集ともに「霞」と「桜（花）」を取り合わせる歌は古今集、後撰集に比べると減っている。

「霞は桜（花）を隠す」ということは、実は「霞」が人と桜を隔てているということである。人は「霞」の向こうにある桜を想像して歌を詠む。または「霞」がかかった桜、「霞」と桜の色がひとつになっている情景を賞美する。桜を愛惜する人々は、見えない桜をも詠もうとするのである。それは単なる美意識のみならず、いかに桜への愛着が強いかを表現するためであろう。ただし、「霞」は必ずしも邪魔ものではないことが、述べてきた

ように「霞」を含めた「美」を詠む歌があることからわかる。

古今集、後撰集、拾遺集については以上のような「霞」の役割が詠まれているのであるが、後拾遺集の前述の「霞」の歌77番、78番ははっきりと「霞」Ⅱ「隔て」人という認識でそれが人間関係に当てはめられていることに注目される。

「霞」と「桜(花)」を一つの情景として詠む用例は勅撰集においては少なくなつてゆく。(金葉集 一首、詞花集 一首)桜のどのような様子、あるいはどのような桜への思いを詠うのかが変化し、撰歌の方向が変わつたことを推察させるものである。

## (二) 風

次に「風」をめぐる古今集・後撰集の歌を考察する。

古今集の、「桜(花)」と「風」を取り合わせた歌は、春歌下の76、83、85、86、87、89、91(「花」)、103(「花」)番、離別の394番の八首である。

「風」は自然現象であるが、「桜(花)」が散るのに関与するため、「風」を擬人化して、「風」に意思があるかのように詠む歌が四首ある(76、85、86、87)。

桜の花の散り侍けるを見て、よみける 素性法師

76花ちらす風の宿りは誰かしる我にをしへよ行てうらみむ

春宮帯刀陣にて、桜の花の散るを、よめる 藤原好風



85 春風は花のあたりをよきてふけづからやうつろふとみむ

桜の散るを、よめる

凡河内躬恒

86 雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふく覽

比叡に登りて、帰りまうで来て、よめる

貫之

87 山たかみみつゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり

76番は「風」が泊まる宿を誰か知っているになら教えてほしい、85番は「風」は桜の木のアたりを避けて吹いてくれ、「桜」がみづからの心で散るのか確認したいと詠んでおり、「桜」にも「心」を持たせている。86番は雪のように桜が散っているのに、風はさらにどのように散れと吹いているのかと「風」が吹くことで、いっそう桜の花びらがたくさん散り舞う姿が想像できる。また87番は、高く遠い山の桜を見ながら帰ってきたが、「風」は好きなように吹き散らしているようだと思像して詠んでいる。これらの歌は、自由に気ままに吹く「風」に頼んで、「桜」を散らすのを止めてもらおう、という発想である。84番の「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（紀友則）のように、「風」に言及しなくとも、散り続ける桜を表現することはできる。しかしそこに「風」を組み合わせると、より散りざまが動的にイメージできる。

また、「風」は、次のように「香」を運ぶ役目もする。この発想は後撰集にもみられる。

春の歌とて、よめる

良岑宗貞

91 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

103 霞立春の山辺はとをけれど吹きくる風は花の香ぞする

古今集においては、「桜（花）」と「風」は対立するものではない。「風」を恨んでみせているように詠んだりするが、実は花の盛りから「風」によって壮麗に散る「桜」の姿が、いつそうに作者の感興を呼び起こし、歌を詠ませるのである。花の盛りの歌と同じくらい散る桜を詠む歌が多いのはそこに美と、散りゆく桜に諸々のはかなさを感じるからである。

後撰集の「風」と「桜（花）」の歌は53、56、57、64、85、88、91、105、106番の九首である。ここでも「風」の擬人化がみられる。

貞観御時、弓のわざつかうまつりけるに 河原左大臣

56 今日桜雫に我が身いざ濡れむ香込めにさそふ風の来ぬ間に

家より、とをき所にまかる時、前裁の桜の花

に結ひつけ侍ける 菅原右大臣

57 さくら花主をわすれぬ物ならば吹き来む風に事づてはせよ

よみ人しらず

64 大空におほふ許の袖も哉春咲く花を風にまかせじ

このうち、56番は「香込めにさそふ風」、57番は花も風も擬人化されて「吹き来む風」に言づてを頼んでいるが、この二首の「風」の方向は反対である。すなわち「誘って去ってゆく風」と、「吹き来む風」である。作者を左大臣、右大臣と並べたのは、この対称的な「風」の動きも意識しているのだろうか。

64番は、花を風から守るために、大空に花を覆うくらいの袖があつたらという発想で、非現実的であることはわかっているが、この「おほふばかりの袖」表現は愛唱されて世に影響を与え、歌に詠まれたり、『源氏物語』(注13)にも引用されている。

また、次の伊勢の歌は、

朝忠朝臣となり侍けるに、桜のいたう散りければ言ひつかはしける 伊勢

85 垣越しに散り来る花を見るよりは根込めに風の吹も越さなん

という、垣根越しに散っている桜を見るよりは、根こそぎ桜ををこちらの庭にもつてきてほしいという、大胆な役割を風に与えている。

次の贈答歌は敦忠と、亡くなった妻との間の子を養育する生家の人(女の母または乳母か)との応答である。

助信が母身まかりてのち、かの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、桜の花の散りける折にまかりて、

木のもとに侍ければ、家の人の言ひ出しける よみ人しらず

105 今よりは風にまかせむ桜花散るのもとに君とまりけり

返し

あつたゞの朝臣

106 風にしも何かまかせん桜花匂あかぬに散るはうかりき

「桜花散る」は詞書により実際に桜の木があったことがわかるので、その実際の桜が散ったことを詠うのであるが、当然「助信が母」が早世した意もあろう。それに対しての返歌は、まだ「桜花」(妻)への思いを残しているのに、「風」に散らすにまかせることはできないと詠んでいる。桜自体に人の命をよそえて詠み、散ることに悲哀を込めている歌である。

次の二首は古今集的な表現を受け継いでいるといえる歌である。

桜の花をよめる

よみ人しらず

53 吹風をならしの山の桜花のどけくぞ見る散らじと思へば

91 吹風のさそふ物とは知りながら散りぬる花のしひてこひしき

以上のように後撰集は「風」は「花」を散らすものとの意は古今集と同じである。ただ、歌語的に56番のように道具立てが多い歌や、「おほふばかりの袖」、や「根込め」といった少し強い語を含む歌、また贈答歌であることよって、古今集的な表現とはやや異質な歌が採られていることがわかる。

次に同様に拾遺集と後拾遺集の「桜」「風」との取り合わせを見てみよう。

拾遺集の「風」の歌は39、62、64、66、1035、1053番の六首である。「桜」を咲かせる、散らすなどの「風」の典型的な詠い方が四首ある。この中で「風」の擬人化もみられる。66番「桜花散り残れりと風」に知らるな」、1035番

「春風は花のなき間に吹きはてね」、1053番「山桜飽かぬにほひを風にまかせて」である。ただ、いずれも新しい発想ではない。

次の62番の歌は荒れた宿の桜は惜しむ人がいないので桜は気軽に風に散るだろうと、「桜」にも心を持たせている歌である。

荒れはてて人も侍らざりける家に桜の咲き乱れて侍けるを見て 恵慶法師

62 浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん

この荒れはてた庭の桜を詠むのは、勅撰集前二集にはない。古今集68番に「見る人もなき山里のさくらばな」、後撰集68番「山里にちりなましかば桜花」など、「山里」が寂しい場所とされることはあるが、場所を示す詞書のある歌は「渚の院」、「雲林院」などである。この「主なき宿の荒れはてた庭」は、往時は人々が訪れる邸宅であり、桜が愛されたに違いない。ところが主が亡くなり、人が去り荒れ果てたところに見る人もなく咲いている。「心やすくや」とあるので、桜が散っても誰も惜しむ人はいないので、気楽に風に吹かれて散っているのだらうという意だろうか。「風」は詠者の心におそらく寂しさも伴った感興を呼び起こしたのであろう。この歌は『恵慶法師集』「38むかし人のありける所の、まへなりけるさくらの、いとおもしろかりけるを見て」の詞書がある。

亭子院歌合に

貫之

64 桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

64番の「木の下風」という（新大系脚注には「貫之の造語か」とある）「風」は桜を散らせているのであるから、暖かい「風」である。「桜」が「雪」に見立てられて、「寒からぬ木の下風」に舞う桜が、空の知らぬ雪と捉えてみせたところに面白さがある。

後拾遺集の「風」と「桜」の取り合わせの歌は81、85、108、138、143、148、1201番の五首である。後拾遺集になると81番、138番の「風」を「いとふ」、143番の「つらき」など148番「風だにも吹きはらははずは」、85番「風に散るだにをしき」と1201番「風に知らすな」のように「風」と対立する表現が出てくる。

題不知

永源法師

81 桜花咲かば散りなんと思ふよりかねても風のいとほしきかな

一条院御時、殿上の人と花見にまかりて、女のもとにつかはしける

源雅通朝臣

（84折らばをし折らではいかゞ山桜けふをすぐさず君に見すべき）

（84の）返し

盛少将

85 おらでたゞ語りに語れ山桜風に散るだにをしきにほひを

隣花をよめる

坂上定成

138 桜散るとなりにいとふ春風は花なき宿ぞうれしかりける

永承五年六月五日、祐子内親王の家に歌合し

侍けるによめる

大弐三位

143 吹く風ぞ思へばつらき桜花心と散れる春しなければ

庭に桜の多く散りて侍りければよめる 和泉式部

148 風だにも吹きはらははずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

藤原実方朝臣

1201 まだ散らぬ花もやあるとたづねみんあなかましばし風に知らすな

後拾遺集の「風」は「桜」を散らすものという前提は同じであるが、「桜」と、それを賞美したい「人」にあっては厭わしいものという意識が強まり、「桜」と「風」が対抗する関係にあることがわかる。古今集では「風」は桜を散らすものであるものの、「風」を擬人化して呼びかけたり、人間の心に寄り添い得るものとして、対立的にとらえていたわけではなく、風に散りしきる桜の美しさも美意識のうちであった。ところが後拾遺集では、「風」に対する「人」の意識が変化し、「風」は自然現象の風で、桜とは別個のものと認識され、古今集のように詠者の心を投影し得るものではなく、むしろ逆らうものとなっている。

#### 四 心

「心」は具体的な事物ではないが、「桜(花)」とともに詠まれる場合、どのような「心」の有りようを示す

のか考察する。

「桜(花)」を詠う歌の中に見られる「心」の表現には、他人の「心」で第三者的に詠まれている「人の心」と、詠者自身の「我が心」がある。また、擬人化された「桜(花)」の「心」、「風」の「心」、「春の心」も見られる。

まず、古今集と後撰集の「心」を見てみる。

古今集の「心」を詠み込んだ歌は、春歌に61、82、83、84、85、87、96、104(花)番に見られ、他は賀358番、哀傷832番に見られる。このうち「人の心」の言葉を直接詠んでいるのは、次の二首である。61番は見る人の心であるが、「飽かれやはせぬ」とは、つまり詠者も世の人も同じ気持ちということである。また、83番は「桜」との対比で「人の心」が詠まれており、この「心」は一般に世の人々の「心」で、散りやすい「桜の心」よりもうつろいやすい「人の心」だという。

弥生に閏月ありける年、よみける

伊勢

61 さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろは飽かれやはせぬ

桜のごと、疾く散る物はなしと、人の言ひければ、よめる 貫之

83 桜花とくちりぬとも思ほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

「しづ心」が82、84番に見られる

桜の花の散りけるを、よみける

貫之



82 ことならばさかずやはあらぬさくら花見る

我さへにしづ心なし

桜の花の散るを、よめる

紀友則

84 久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

同じように「桜」を擬人化し、「桜」が「しづ心」なく散るさまを歌うが、82番は「我さへ」と、我が心も重ねている。84番も見ている我が心も「しづ心」ではないはずである。

次の二首は「風」の項でも取り上げた歌であるが、擬人化された「桜」の「心」と「風」の「心」である。

春宮帯刀陣にて、桜の花の散るを、よめる 藤原好風

85 春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ

比叡に登りて、帰りまうで来て、よめる 貫之

87 山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり

上野岑雄

832 深草の野辺の桜し心あらばことし許はすみぞめに咲け

前二首はいずれも風に桜が散っているのが、85番は風ではなく桜自らの心で散っているのかみたいという歌であり、87番は風が桜を思いのままに散らしているのであろう詠んでいる。「桜(花)の心」を「風の心」との関係を通じて測っている。実際は桜は散ってほしくはないという「我が心」が根底にあり、詠者が自らの心情を擬

人法によつて無心の物に投影しているのである。卷第十六哀傷歌の832番は、深草に埋葬された藤原基経を追悼した歌である。桜にも弔意の心を示してほしいと詠んでいる。

次の歌は卷第七賀歌の屏風歌である。

358 山たかみ雲居に見ゆるさくら花心の行て (ま)おらぬ日ぞなき

この歌は、高い山の雲間に見える桜が美しいのを（手折ることができないので）、「心」が行つて折（居）らぬ日はないと、詠んでいる。単純に「心の行て」という表現はあるようで意外に少ない。古今集ではこの歌のみ、後撰集や、拾遺集にはなく、後拾遺集に「77春霞へだつる山のふもとまで思ひしらずもゆく心かな」（「花見」の項）高岳頼言「南殿の桜を見て 94見るからに花の名だての身なれども心は雲の上までぞゆく」のような歌がある。ただ、意味は違い、むしろ後拾遺集「心をやる」例の「河原院にて、遙かに山桜を見てよめる 平兼盛 97道とをみ行きては見ねど桜花心をやりて今日はくらしつ」の方が歌意が近い。この歌は屏風歌ではない。

後撰集には、69、74、88、92、102、112番に「心」が詠まれている。

御返し

69 句こき花の香もてぞ知られけるうへて見るらん人の心は

元良の親王、兼茂朝臣のむすめに住み侍けるを、法皇の召して、かの院にさぶらひければ、え逢ふことも侍らざりければ、あくる年の春、桜の枝にさして、かの曹司に挿し置かせ侍ける

102 花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

「人の心」は69、102番で詠まれているが、このうち69番は68番の衛門の御息所の歌「山里に散りなましかば桜花にほふさかりも知られざらまし」への帝の返歌で、この場合の「人の心」は「うへて見るらん」衛門の御息所の心である。この場合は特定の相手の心ということになる。102番は詞書にあるように元良親王と兼茂女は夫婦であつたのに、宇多院に召されてしまい逢うことができなくなつたので元良親王が兼茂女に贈つた歌である。桜の花の色は変わらないが人の心は移ろうという。この場合は兼茂女の心が移ろうと詠むが、変わらない桜花の色は元良の親王の心もさしていると考えられる。

女ども、花見むとて、野辺に出でて

典侍よるかの朝臣

112 春来れば花見にと思心こそ野辺の霞とともにたちけれ

112 番は霞とともに「心が立つ」と歌い、人々の花見に浮き立つ心を具象的なイメージと共に表現している。

題しらず

よみ人も

74 春雨の世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそ思へ

きよはらのふかやぶ

92 うちへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん

74 番は、春雨が降ると経るをかけて、年取ってしまった我が心だが、でもやはり花は惜しく思うの意である。

「ふりにたる」と対比する「あたらしく」は今年咲いた「桜（花）」（あたらしく）は惜しく（あらたし）思うと、年を取っても桜を賞美する気持ちは変わらない心を詠んでいる。

92番は擬人化された「心」（花の心）を詠む。桜（花）を擬人化することは古今集から見られるが、「花の心」という語自体は後撰集では後撰集が初出で、後撰集には「をみなへし」など五首の「花の心」が歌われている。「花の心」は好まれたらしく、貫之、躬恒（注14）なども詠んでいる。

次の88番歌は、古今集の藤原好風「85春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ」に対応している。

#### 貫之

88 風をだに待ちてぞ花の散りなまし心づからにうつろふがうさ

古今集85番歌は「桜（花）が自らの意思で散るかどうか見たい」と詠んでいる。それに対してこの後撰集88番歌は「桜（花）が自らの意思で散っているのはつらい」と言い換えている。「心づから」は「桜（花）」の心と、人の「心」を意味する。

古今集の「桜（花）」と「人の心」を詠んだ歌は、はほぼ散る「桜（花）」を惜しむ心情を詠んでいる。一方で後撰集の「人の心」の場合は、はっきりした特徴はない。前述のように特定の相手を示す「人の心」のほか、花見で浮き立つ人々の心、年取ったわが心、花そのもの心、移ろう花と同じ移ろいやすい人の心といった内容である。古今集では「花が散る」を人の心をかき乱す事態として捉えており、後撰集も同様の趣旨を詠んではいる

が、古今集ほど限定的ではない。

次に拾遺集と後拾遺集を考察する。

拾遺集も「桜（「花」）と「心」を詠み込んだ例は多くはない。

平定文が家の歌合に

忠岑

43 春は猶我にて知りぬ花盛り心のどけき人はあらじな

題知らず

よみ人知らず

53 桜色に我が身は深く成ぬらん心にしめて花を惜しめば

題知らず

よみ人知らず

60 見もはてで行くと思へば散る花につけて心の空になる哉

荒れはてて人も侍らざりける家に桜の咲き乱れて侍けるを見て

惠慶法師

62 浅茅原主なき宿の桜花心やすくや風に散るらん

以上に見られるように、43番は満開の桜、他の三首は散る桜に対する愛惜である。43番は春の人の心は我が身でわかる、花の盛に心穏やかな人はいるまいと、この「心」は人の心である。53番は、心に染みこませて桜を愛惜したので、我が身は桜色に深く染まるだろうと詠む、やはり人の心である。この拾遺集43番歌は古今集53番、

拾遺集 53 番歌は古今集 66 番の影響があろう。60 番の「心の空」は散り果てるのを見届けられず、心を「散る花につけて」、散る花のように心が気もそぞろになるといふことだろうか。「心の空」は古今集 788 番友則の歌ではむなしくなるといふような意味に用いられている。

62 番は、「風」の項でもあげたが、散るのを惜しむ人もいない荒れた庭で桜の散っているのを見て、「桜の心」が気楽に、遠慮なく散っているのであろうと推察しているのだが、それはまた詠者の散る桜への愛惜の心である。

「心」の用法であるが、単に「心」あるいは「心の心」の形、または「しづ心」のように「心」の上に形容表現をとまなう名詞形で歌う古今集や後撰集とは異なり、拾遺集では、「心」がどのような状態であるかを具体化していることが注目される。すなわち、「心のどけき」「心やすく」などや、「心にしめて」「心の空になる」の例である。

後拾遺集になると、77、78、86、87、89、90、91、94、97、104、112、133、140、141、143、144、145 番と「心」を歌う用例が多い。

まず、「人の心」であるが、「花見」「霞」の項で取り上げた 78 番のみである。

人／＼、花見にまかりけるを、かくとも告げざりければ、遣はしける

藤原隆経朝臣

78 山ざくら見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける

この歌の場合の「人の心」は花を思う人の心ではなく、自分を知らない間に隔てて花見に行ってしまった人の

心である。後撰集で見た69番、102番の人の心とは違う。

また、「春の心」「水の心」「桜」の心（143番風の項）がそれぞれ一首ずつある。

永承五年六月五日、祐子内親王の家に歌合し

侍けるによめる

大式三位

143 吹く風ぞ思へばつらき桜花心と散れる春しなれば

この歌は「桜の心」を詠み、前述のように古今集85番に「心づからやうつろふ」と桜が自らの意思でちるのか見たいという歌があるが、この歌ではその一歩進んで、桜は自ら散っているのではなく、風が思いやりなく、そうさせているのだと詠んでいる。

通宗朝臣能登守にて侍りける時、国にて歌合し侍けるによめる

源縁法師

112 山ざくら白雲にのみまがへばや春の心のそらになる覧

家の桜の散りて水に流るゝをよめる

大江嘉言

145 こゝに來ぬ人も見よとて桜花水の心にまかせてぞやる

「春の心のそら」は春の人々の心は落ち着かないという、前述の後撰集60番と同様である。145番の「水のこころ」の用例は他にも見られ、ほぼ詞書や、歌の中に水の縁語の「河」「池」「瀬」「ながれ」「清」「にぎり」など

と共に詠まれている。詞書に「流るゝ」とあるので池ではなく、邸内の川か、高低差のある流れであろう。散つて水に浮いた桜の花びらが流れていく光景を目にして、ここに来ていない人も見よと水の思うままにまかせてやると詠む。「水の心」も「ここに来ぬ人も見よ」という気持ちをもっているだろうか。

以上のほかは、ほぼわが「心」を詠んだ歌である。「思いやる心」(86花見の項)、「あくがるゝ心」(87)、「心のまゝに」(91)、「心は雲の上まで」(94)、「心をやりて」(97)、「心をくたく」(144)の表現がある。

今上御時、殿上の人と花見にまかり出でける道に、中宮の御方よりとて、人に代わりてつかはしける  
右大臣北方

87あくがるゝ心ばかりは山桜たづぬる人にたぐへてぞやる

後冷泉院御時、上のおのことも花見にまかりて、歌などよみて、高倉の一宮の御

題不知

祭主輔親

89いづれかをわきて折らまし山桜心うつらぬ枝しなれば

菅原爲言

90ゆきとまる所ぞ春はなかりける花に心のあかぬかぎりは

遠き山桜をたづぬといふ心をよめる

小弁

91山桜心のまゝにたづね来てかへさぞ道のほどは知らるる

河原院にて、遙かに山桜を見てよめる

平兼盛



97 道とをみ行きては見ねど桜花心をやりて今日はくらしつ

紫式部

104 世の中をなになげかまし山桜花見るほどの心なりせば

題不知

永源法師

141 心からものをこそ思へ山桜たづねざりせば散るを見ましや

ここにあげた87番は「あくがる心」を「たぐへてぞやる」、89番は「心うつる」はどの枝も美しくて心がひかれる意で、新大系の注には「心が惹かれそこに心が乗り移る」とあり、いづれを「わきて折らまし」と詠む。

90番「心のあかぬかぎり」は落ち着いて「ゆきとまる所」はないという。91番「心のまゝに」「たづね来て」、

97番「行きては見ねど」「心をやりて」、141番は「心からものをこそ思へ」「たづねざりせば」「見ましや」、104番の「花見るほどの心」は、花をながめるている時のような心であれば、「なになげかまし」と詠む。同時代の和泉式部の歌に、「野辺に出でて花見る程の心にもつゆ忘れぬ物は世の中」(注15)がある。

以上それぞれの歌の「心」の表現と、それに喚起される行動の表現をあげた。「桜」を思う「心」の形をさまざまに詠んでいることがわかる。すなわち古今集においては「心」は散る桜の歌に主に表れ、後撰集は詠まれた歌に特に偏りはないが「心が立つ」、「花の心」など古今集にはない表現が見られた。また拾遺集も「心」を詠みこんだ歌は少ないが、「心」「心の心」という表現ではなく「心のどけき」「心やすく」などや、「心にしめ

て「心の空になる」などの「心」の状態を示す例が表れた。そして後拾遺集の「心」の表現は、具体的な詠者の行動を伴って、前述のように多様な例がある。三代集よりも後拾遺集において「桜（花）」と「心」の組み合わせが際だって多くなった背景には、「桜」を擬人化するなど、観念的な美意識として詠うのではなく、もともと実体としての桜に対する「心」を詠むようになったからではなからうか。それはイメージの中の桜ではなく、現実の桜（たとえば山桜）に対しては、人は「わが心」に伴って何らかの行動を起こし、歌を詠む。それは「花見」の語が多く見られることとも関連があると考えられる。

## 五 まとめ

勅撰集三代集と後拾遺集の「桜」の歌を、組み合わせられるいくつかの歌材や歌語、また行為により、歌を選び比較するという方法で「桜」の歌の詠風の変化を考察してきた。その結果、いくつかの興味深い点が認められた。

ひとつは、「桜」の歌の詠い方は、ほぼ百年余りの間であるが、決して一様ではないということである。桜の享受については基本的に「折って賞美する」や「花見に出かける」ことは変わらないが、人々はそれぞれその時代の受け止め方（美意識）に従って、歌を詠んだのである。それは、「桜」の歌の詠風に大きく影響しており、特に「心」との取り合わせで、顕著に見られた。

和歌史という観点からは、「桜」はどの歌材、歌語の組み合わせでも、後拾遺集において新しい詠風の変化が

見られたことが興味深い。後拾遺集の歌風について、前掲の藤本一惠氏(注16)は「それは、後拾遺集の通俊の序文に「すがた秋の月のほがらかに、ことば春の花のほひあるをば千うた二もち十あまり八つを撰びて・・」とあることから、「これは単なる文飾とみなすことはできない。『うつろひの美』『ほろびの美』よりも撰者の好んだものは花やかな美しさであり、また、秋は明月の清光となる。・・」としており、「咲く桜」「散る桜」の数の相違の理由としている。このような後拾遺集の特徴から見ると、前述の「桜(花)」と「霞」において霞が桜の美しさも強調するものではなく、親しい人との「隔て」と認識しているのが理解できるし、また「風」が「いとふ」ものであることも、咲いている桜を詠む歌を好む当時の好尚から考えると、当然であろう。また、「心」の扱いは(四節)で述べた如く、イメージ化された「桜」ではなく、実体としての桜に寄せる「心」であるからこそ「心」の形もさまざまに表現されるのである。

以上「桜」の歌について、全く配列などを無視してかなり思い切った方法で分析を試みた。毎年その季節になると人は「桜」を歌に詠む。それは常套的な行為である。そして、それぞれの時代での詠み方で詠い継がれたきたことは、冒頭で述べたように、常に人々の感興を呼び起こすことのできる、「桜」の持っている「力」なのであろう。

- 書店 1965)、片桐洋一『古今和歌集全評釈』(上)(講談社 1998))
- 注 2 杉谷寿郎『後撰和歌集研究』(笠間書房 1991)、  
佐藤高明『後撰和歌集の研究』(日本学術振興会 1970)
- 注 3 木船重昭『後撰和歌集全釈』(笠間書院 1988)、  
工藤重矩『後撰和歌集』(和泉書院 1992)
- 注 4 武田早苗『後拾遺集』の撰歌意識と歌群構成の「方法」(相模国文27号 2000年3月)
- 注 5 中周子『後拾遺和歌集』における『拾遺和歌集』の継承―共通する歌人詠の比較を中心に―(大阪樟蔭大学研究紀要第四卷 2014)
- 注 6 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈上巻』(風間書房 1993)
- 注 7 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』(東京堂書店 1998)、  
斎藤正二『日本人とサクラ―新しい自然美を求めて』(『斎藤正二著作撰集』5)(八坂書房 2002)  
佐藤俊樹『桜が創った『日本』―ソメイヨシノ起源への旅』(岩波書店 2005)
- 注 8 阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語④』幻卷(新編日本古典文学全集 23)(小学館 1996) 529ページ
- 注 9 山田孝雄『櫻史』山田忠雄校訳(講談社 1990)
- 注 10 『枕草子』第三段「正月一日に」、第二段「清涼殿の丑寅の隅」(松尾聰、永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集 18 小学館 1997))

『古今和歌集』52番、『後撰和歌集』82、83番歌

注 11 阪倉篤義ほか校注『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（日本古典文学大系9 岩波書店 1957）

注 12 鈴木宏子『古今和歌集表現論』（笠間書院 2000）

注 13 注8に同『源氏物語』幻巻 「おほふばかりの袖求めけん人よりは、いとかしこう思し

寄りたまへりかし」529ページ

注 14 田中喜美春・平沢竜介・菊池靖彦『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』（和歌文学大系19 明治書院 1997）

注 15 清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部続集』（岩波書店 1983）

注 16 注6に同

（対応論文 東京女子大学紀要「論集」第六十六卷二号 2016・3）

## 第七章 和泉式部の「桜」の歌

### 一 はじめに

本稿は、和泉式部の歌の中から、「桜」を詠んだ歌を抽出し、それぞれを考察するものである。第六章で勅撰集の「桜(花)」の歌の流れを考察した。その結果をふまえつつ、和泉式部の「桜」の歌を検討することにより、特質を明らかにし、和歌史上の和泉式部の位置をも確認できると考える。

和泉式部の歌を、「桜」歌という範疇で取り上げた論考はさほどない。「桜」歌の研究としては、「初期百首」、あるいは公任の白河山荘での贈答歌、「権中納言の屏風歌」などの考究のなかで取り上げたものが見られる程度であり、それぞれの歌群の中での考察に留まる。そこで本稿では、和泉式部が「桜」を歌に詠む際に、「桜」をどのように捉え、どんな表現で詠むのか、和泉式部にとって「桜」とは何であるのか、一つの行為「折る」や、「桜と心」、「桜」を巡っての連作意識、独詠などから考究して行きたい。

本稿の「桜」歌の範囲であるが、まず第一に詞書と歌のどちらかに「桜」の語が含まれている歌を範囲とする。これらの歌は、「桜」を主題とする歌と、「桜」を介しての人事詠等があり、これらが「桜」歌の主軸になる。また、「花」のうち「桜」の歌であるかについては、詞書の内容、季節(二月・三月)前後の歌、重出歌の詞書、歌の内容、他の歌人の歌集等から判断する。

重出歌についてであるが、和泉式部集の中には多くの重出歌が含まれており、これについては成立や構造上の問題として、先学の諸研究がある。「桜」歌にも重出歌が見られるが、単なる異同では済まされない詞書の違いや、詠歌状況の変化、歌の配列の移動など、明らかに何らかの意図が働いているのではないかと思わせる重

出歌が見られる。本稿では、重出歌は別の歌として、その中の創作性なども合わせて考察することとする。

## 二 桜の享受 折る一枝をめぐって

桜を折って賞美するという行為は、第三章において考察したように、古今集においてはひとつの美意識を表す表現として詠まれ、後撰集においては人間関係の中で具体的に贈り贈られる行為として詠まれる。拾遺集、後拾遺集以降は、「桜」を「折る」歌が選ばれることは少なくなったが、和泉式部の詠歌が多数採られる後拾遺集には「花見」の歌が多く詠われる。桜の季節に桜を折る、贈る行為は、特別な営為として意識されるほどではないものの、私的に引き続き行われていたと考えられる。(注1)

和泉式部において「折る」歌は、贈答歌、独詠歌いずれの中にも見出せるが、折って自ら賞美し、その感慨を詠むという古典的な詠い方より、折って見せる、折って贈るなど、人と人とのつながりの中で、詠まれることに特色がある。そこには桜を愛する心があり、桜の一枝の美を共有できる者たちを結ぶ歌になっている。

次の歌は「折る一枝」をめぐる贈答歌である。

同じ頃、人のもとより、「桜の花を、また見すべき人もなければ、

御料にとてただ一枝をなん折りたる」とて

157 また見せん人もなければ山さくら今一枝を折らずなりぬる

かへし

158 徒らに此の一枝はなりぬめり残りの花を風にまかすな

此の歌の贈り主は源道済である。

『道済集』

雲林院の桜の一枝、あるあかり<sup>如本</sup>つかはすとて、

151 また見せむ人しなれば桜花今一枝を折らずなりぬる

和泉式部の返歌は『道済集』にはない。両集ともに贈った相手の名は記していないが、互いの私家集に収載されていることで、和泉式部と道済の贈答と判明している。後の勅撰集の新拾遺集巻二春歌下には道済の歌が、新後拾遺集巻二春歌下には道済の歌を詞書に和泉式部の返歌が、それぞれ入集している。

和泉式部集の方の詞書は『道済集』のそれとは違い、また他出の勅撰集にもない。「桜の花を、ほかに見せるべき人もいないので、あなたにあげるただ一枝を折ったのみで、ほかの枝は折りませんでした」ということだが、この道済の歌は詞書と歌の両方で、「見すべき人もなければ」、「また見せん人もなければ」と繰り返して「ただ一枝をなん折りたる」、「今一枝を折らず」と、特別なことであると強調している。ほかに見せる人もいないからというのは、あなた以外にこの桜の一枝を贈るのにふさわしい人がいないからということである。

和泉式部は、私にだけ見せるといふけれども「此の一枝」は無駄になってしまったようですね、と私はその



相手ではないと切り返し、暗にほかにも贈る相手はいるでしょうにという含意を込めて、残りの花を風に散らさないように、と返している。

和泉式部の歌にはしばしば、上二句あるいは三句と下句の間で、思いがけない展開を見せる歌がある。この歌もそうで、「此の一枝は無駄になったようだ」という衝撃的な断言の後、下句ではいきなり「風にまかすな」と命じている。「桜を風にまかす」は古今集の貫之の歌「87山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり」をふまえている。他にもこれを本歌とする歌は多いが、否定形に用いられているものは少なく、「まかすな」と命令形でとめる歌は例を見ない。「見すべき人もいない」と文と和歌とで繰り返しているけれども、わざわざ断り何度もを付けるからには、実はほかにも差し上げたい人がいたのでしよう、幸い「今一枝は折らず」桜はまだ残っているから、残りの桜の枝を本当に贈りたい人に贈るなら無駄にならずにすむ、そのために「残りの桜を風にまかすな」というのである。

和泉式部集のこの157番の歌の前には第四節で考察する石山寺参詣の折の歌154、155、156番がある。その始めの歌154番の歌は、

石山より帰るに、遠き山の桜を見て

154 都人いかにと問はば見せもせん此の山ざくら一枝もがな

がある。この三首とは詠歌状況は別であるのだが、157番の詞書は「同じ頃、人のもとより」とあり配列として

時間的な関連性を持たせている。154番歌は花を思う都人のために「此の山ざくら一枝」が欲しいと歌うが、これは、157番歌の「ただ一枝を見せたいから折った」と同じ心である。第四節で述べるがこの154、155、156番は配列に創意性が見られるところである。この贈答歌が同じ所に配されているのは、「桜」を「折る」歌としてある程度そのままを意識したものであろうか。

和泉式部集には、相手の名は記さずに「ひと」とする詞書が多く、相手の歌も書き残さない場合が多い。むしろ相手の歌は詞書の中に含めてしまったらしき歌もしばしばある。この場合も道済とはいわず「人」とする。歌は書き残されているものの、内容はほぼ詞書で説明されており、相手の男（道済）の歌がなくとも和泉式部の歌単独で理解し得る。しかし、ここでは男の歌があるゆえに男側の視点も加わって、より複雑に、相互の思惑の交錯が描かれることになり、「桜の一枝」は人と人をつなぐものとして焦点化されている。また和泉式部の歌も、贈答歌の「切り返し」の軽口と見えて、男の他の女への思いを、あたかも第三者の視線から見透かすかのような、鋭さを獲得している。

「ただ一枝」「今一枝」「此の一枝」と、「桜の一枝」を焦点化する軽妙なやりとりは、桜の季節に、美しい「此の一枝」を折って、贈り贈られることのかげがえなさをわかり合っている、親しい歌人同士ならではの贈答歌なのである。

次の歌は、1450番から1454番歌の歌群の中にある。歌群としての考察は第五部第十一章において述べる。

桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもとより、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

1450 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ

「来まじくは」の「まじ」については、

中古においては、和文の散文に見られ、和歌ではあまり見られず、八代集では五、六例用いられているにすぎない。また、漢文訓読資料においてもあまり見られない。中世以降、口頭語では次第に「まじい」「まじ」が勢力を広げ、「まじ」は徐々に衰退していく。

（『日本国語大辞典』）

とある。この語が使われていること自体が稀なことであり、それも初句にもってくるというのは余り例はないだろう。この<sup>1451</sup>歌は、美しい桜を「散らぬ先に見たい」と言いながら来ない男に積極的に「こちらから折っても贈りましょう」と歌いかけた点に面白みがある。折って土産にという歌はあるが、「折りてもやらん」は桜を贈る歌の中ではあまり例を見ない（注3）。続く下の句では158番と同じく、古今集の貫之の歌の表現を否定的に用いて、風が思うままに桜を散らせるのを見るまいと結ぶ。女からの「折りてもやらん」は、大胆な表現である（実際に贈ったかどうかはわからない）。桜の美しさを見せたい、早く来ないと散ってしまうということ、そし

て先の1450番歌で歌いかけた、はかない「露と花」のなかの私達の仲という思いが、女から折って贈る行為の根底にある。桜への深い愛と、それを共有したい恋しい男への心が、重なり合う。「桜の一枝」を贈る行為には、はかなくもかけがえのない「今この時」の美しさのなかにこそ、恋しい人との絆を確かめたいとする、和泉式部独特の思考が表れているよう。

独詠の「折る」歌には、帥宮挽歌群内の次の歌がある。

### 三月晦方に

#### 998 たれにかは折りても見せん なかなかに桜咲きぬと我に聞かすな

誰かが桜が咲いたことを知らせてきたのだろうか。和泉式部は折って見せる人もいないのだから桜の開花は教えてくれるな、と詠む。恋しい人との絆を確かめさせる「桜」が咲いても、もはや「折りても見せん」人はいない。「桜の一枝」は孤独の深さを確認させるものになっている。この歌については、「全釈」や「抄稿」はそれぞれ本歌として古今集巻第一春歌上紀友則の「38きみならで誰にか見せむ梅花色をも香をもしる人ぞしる」や、後撰集巻第二春中大将御息所「61咲き咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思し」をあげる。友則の歌は「色をも香をもしる人」と梅の花の美を共有したいと詠んでいる。大将御息所の歌は、「咲き咲かず我にな告げそ桜花」とかつて住んでいた邸の桜が咲いたと人伝には聞きたくないと詠む。いずれも、桜の美を共有できる帥宮はこの世には居らず、折って見せたい帥宮がいないのだから桜が咲いたと教えてくれるなという

心である。和泉式部の歌は、こうした「きみならで誰にか見せむ」、「咲き咲かず我にな告げそ」など、歌の伝統を正しく受け継いでいるのである。そして「一枝」がつなぐ人との絆を見つめる。そのままだが、宮を失った孤独の深さを表現し得ているのだろう。

和泉式部にとって「桜の一枝を折る」は単なる美意識にとどまらず、桜への思いを伝え、共有する、またはその結果共有のむずかしさや、人を恋わずにはいられない、それにも関わらずおのが思いを見つめる行為なのである。その意味では後撰集の方向を継承し、深化させたものといえるだろう。

### 三 「桜」と「心」

桜には人の心と呼び起こす力がある。「桜」の歌はみなこの力によって、自ら湧き上がる桜への思いを詠んだものであるが、特に「心」の語が直接詠み込まれている歌には直接心情を表していると考えられる。

和泉式部集においては、「桜」と「こころ」が詠み込まれている歌は概ね十三首である（重出歌は含まない）。以下、表現の例を見ていく。

まず、自らの「心」をひとつの対象にむかって作用させるという表現として、「心をかけて」「心をとめて」「心をやる」と詠む歌がある。

#### 5 花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞ立ちぬべき

この歌は和泉式部集の冒頭「初期百首」に含まれる歌である。初期百首のこの歌の配列としては、初期百首春二十首の中の5番目であり、4番梅、6番は春の日、7番春の夜、8番梅が香、9番春の野の花の歌をへて桜の歌は10番まで出てこない。この配列上、「花にのみ」の「花」は「梅」と解釈する説（「全釈」と、この古今集の「あだなり」の下句を詠み込んでいることから、「桜」との解釈（「百首全釈」とする説、また「抄稿」はこの歌にとって「桜か梅かは、つまりいづれはでもよいことではある」とする。鈴木宏子氏は、「やはり桜を思う歌なのではないだろうか」とし、「5は桜の開花を待ちつつ、この花が、春の間ずっと心を占めるであろうことを詠じた歌なのではないか」として現代語訳は「桜はいつ咲くのか、花のことばかりを心にかけるうちに、いつのまにか、春を過ごす人は花と同じように浮気者だという評判がたってしまうのにちがいない」とし、「梅を詠じる歌のはざまに、桜の開花を予感する歌を織り込んでいるのである」とされている（注4）。他出である続後撰集には桜の歌群に入っている。この歌の前後に梅は出てくるが、必ずしも梅歌群ではなく「花にのみ」といえるほどの花は、やはり桜を意識していると考えたい。

「心をかく」は、和泉式部集の用例ではほかに一首、続集934番に見るが掛詞に用いられ意味が違う。また「心にかく」という用例はあるが（404番）、この場合は「人知れず心の中で気にかけている」の意になる。すなわち、「心をかく」、一心にあるものに夢中になるという意味での用例はこの歌のみである。

「花にのみ心をかく」は一心に桜のみを愛することである。他に好忠の『毎月集』（注5）に同じ「花に心をか

ける」例として「38ゆふだすき花に心をかけたれば春は柳のいとまなみこそ」が見られる。この歌は花に執着することが詠まれているのだが、和泉式部歌はその花が散りやすい、移ろいやすいものであるから、花に執着することで、おのずとあだなる名が引き出されてしまうと詠んでいる。「おのづから」は和歌では平安中期以降に多く見られる語句である。

下句はよく知られた古今集巻第一春歌上のよみ人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の上句を用いている。「あだなる」「あだなり」は多く用いられる言葉であるが、「名がたつ」まで詠み込んでいる歌はそれほど多くない。和泉式部は三首（193松 1452桜）詠んでいる。この古今集の歌は直接的には「桜」が「あだなり」であるが、和泉式部の歌はあだなる「桜（花）」に「心」をかける「人」までを「あだなり」と詠む。「人」は自分自身を含めて一般の人である。この「あだなり」の句を入れることで、具体的な桜を超えて客観的に、詠者も含めた人々の桜によせる「人の心」を表現しているのである。浮気と名を立てられようとかまわないと、はかない「桜（花）」にかける人の心の一途さが表現されている。

次に「心をとむ」の用例をみる。

野の花を、馬に乗りたる人三人ばかり、見て過ぐる所

188 あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて

桜狩りにあまたゆく人ある山を過ぐ

\* 853 あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて

この歌は和泉式部集187番から198番の一人の、屏風の歌詠まするに、はるの「12首の2番目で、重出歌は851番から865番「権中納言の屏風の歌、桜咲きたる家に客人おほかり」15首の3番目の歌である。両歌群は歌数も違い、詞書、歌の語句にも異同が見られる。この188番と853番の歌についても、歌に異同はないが詞書に大きく違いがある。この歌も詞書によると、188番歌の方は騎乗の三人が「野の花」を見て過ぎようとするところ、一方853番では桜狩りに大勢の人が山に行く様子と、歌から見ると場面の図柄が違うように見える。この屏風歌は、同時に源道済と大江嘉言が詠んでおり、この歌に該当する場面の歌と思われるものは『道済集』では詞書はなく帰り道の旅の歌になっており、『大江嘉言集』（新編国歌大観）では次のような詞書を持つ。

むまにのりたる人二三人ばかり桜の花のもとをすぐ、しりにゆく人花をみる

121よそながらみてやすぎまし桜花我ひとり行くみちにしありせば

屏風歌には実際に絵を見て詠む場合と、見ないで題を与えられて詠む場合があり、桑原博史氏は「道済集をはじめ三つの歌集の記録は、その図柄の示し方にそれぞれ自分流に多少の解釈を加えて、各歌の詞書として記録したのであらう」と『道済集全釈』（注6）解説にあり、田島智子氏は別の歌の観点からこの屏風歌は言葉の題を与えられて詠んだのではないかと推察されている（注7）。和泉式部の重出歌についての詞書の差異は、和泉式部集自体の重出歌発生の問題とも考えられるので、一つの題に対して二種類の図柄を想定して詠んだわけで



はないだろう。

「あるかぎり」、「心をとむ」はいずれも同時代では和歌に詠まれることは少なく、中世以降によく詠まれるようになる。和泉式部集においても両方ともこの歌のみに用いられている。

「あるかぎり」は、桜を見ている人々のすべてと、「あるかぎりのこころ」とがかけられているので、「ありったけの心を花にとめて」との意を表現している。ただ、詞書の差異は少し解釈に影響する。188番のそれは騎乗の三人が「ありったけの心を花にとめて」いる様子が推察できる。これは嘉時の歌にも通じる。853番はむしろ桜狩り行きたくさんの人々すべてという意の方が強く表現される。いずれにしても、人が花に尽きせぬ思いを寄せていることを、「あるかぎりの心をとめて」と詠んでいるのである。

一転して「花も見知らぬ駒にまかせて」と、花の美しさなどわからない駒の歩みにまかせるという下句は、花に耽溺する「人」と何の感慨もない「駒」の対比が鮮やかで、ユーモアすら感じさせる。

近藤みゆき氏は「花も見知らぬ駒にまかせて」は『白氏文集』の「尋花信馬頭」、「信馬閑行至日西」、『類聚句題抄』の「尋花信馬行」の関連を指摘され、「いわば、馬に信せて行く」とは、早い時期から本朝詩にも定着していた、尋花の常套句であった。和泉式部では『駒にまかせて』の言葉続きそのものの相通性によつてそうした漢詩が好んで描く尋花の世界を引き寄せながら、しかもその身を委ねる駒は花の情趣を解さず進んで行くど、ひねりをきかせたものと解される。」としている(注8)。

上句が「あるかぎり心をとめて」という独特の表現を用い、下句が詩の常套句の受容ということならば、これまで見てきた歌の上句の類例のない言葉のあとに、よく知られた古今集の句を持ってきて歌全体としては独自の表現となる手法と同じである。画中の人物になって詠むのが屏風歌であるが、和泉式部のこの歌は画中の人物になりきるといふより、むしろ画中の人物を超え、人のなかに「あるかぎりのところをとめて」花を見る心を見出す和泉式部の感性が際立っている。

次は「心をやる」の用例である。

#### 二月の桜のおそき頃

176 待たせつつおそくさくらの花により四方の山べに心をぞやる

桜の遅く咲く事を人のよむに

\* 1266 待たせつつ遅く桜の花により四方の山べに心をぞやる

この歌の「心をやる」は「心を擬人化して、使ひに出すやうな気持であらうか」と「全釈」にあるように、ずっと待っていて、なかなか咲かない桜のために、あちこちの山辺に心を馳せると言う気持ちを詠んでいる。和泉式部集ではほかに533番に「心をやる」表現がみられるが、意味が違う。後拾遺集巻第一春上には平兼盛の「河原院にて、遙かに山桜を見てよめる 97道とをみ行きては見ねど桜花心をやりて今日はくらしつ」があり、遠い山の桜は見る事が出来ないのを心を馳せるといふ意は同じである。ただ、和泉式部の歌には「四方の

山べ」とあり、一方向をみているのではなく、四方という空間的な広がりがあり、あちらこちらに心をやるという、桜を待つ落ち着かない気持ちを表している。

また、「おそくさくら」は「遅く咲く」と「桜」を掛けているが、和泉式部以前にはほぼ見られない。和泉式部では他に666番に「おそく桜の花をこそ見め」がある。この後も用例はわずかであるが、西行、慈円がこの言葉を用いて詠んでいる。

#### 桜のいとおもしろきを見て

#### 999 花見るにかばかり物の悲しきは野辺に心をたれかやらまし

この歌は帥の宮挽歌群の中の歌である。古今集巻二春歌下、素性「96いつまでか野辺に心のおくがれむ花しちらずは千世もへぬべし」、後撰集巻三春下典侍よるかの朝臣「112春くれば花見にと思ふ心こそこのべの霞とともにたちけれ」に見られるように、春になると「野辺」には美しい花が咲き、人には花に憧れる気持ちが沸きだして、花見に出かけてゆく。この歌は、それらの伝統的発想（桜は親しい人と喜びをわかつもの）を踏まえ、身近な美しい桜を見てもこのように悲しいのに、誰が野辺に心をやって（桜を見に行つて）楽しもう、到底そのような気持ちになれないということである。この歌も帥宮が亡くなったあとの悲傷の歌であり、ともに桜を見ることもうかなわないということが心にある。

以上の「心をかける」「心をとむ」「心をやる」の三例は和泉式部集の中でほぼ「桜（花）」に対しての表現で

ある。この語句は「桜」によって選ばれた、「桜」ならではの思いを表すことばといえよう。

次に「風の心」の歌である。

日頃、花おもしろき所にあるを、今日ほかへ行かんとするに、いみじう散れば

1354 吹く風の心ならねど花見ては枝にとまらぬものにざりける

風を擬人化し、風に心をみる表現は古今集に詠われて以来、数多く詠まれている。この和泉式部の歌も古今集を意識していると考えられるが、1354番歌は、古今集巻二春歌下、「99吹風にあつらへつくるものならばこの一本は避きよと言はまし」や、「106吹く風をなきて恨みようぐひすは我やは花に手だにふれたる」などに詠まれる、吹く風の意志で花が散るといふ意も含んでいるだろう。

「全釈」は上句を「何も吹く風がそのつもりでするわけではありませんが、（私の思うままにするつもりではないが）、「花みては」を「花みでは」の意に解し、「桜の花は、枝に長くとどまらないで散ってしまふ」をこの花を見ないでここにとどまる気にはならないと解釈している。「文庫」は吹く風の意味ではないが、花を見ているといつまでも枝にとどまらないものだったというように解釈している。初句を「吹く風の意味ではないが」だけの意味で解釈すると、「花見ては」に続きが悪い。「折る」の二節でもふれたが、和泉式部の歌には、上二句又は三句の間に一つ呼吸をおいて、下句で違う展開を見せることがある。この歌も二句目と三句目を続けて解釈しようとする、わかりづらい。二句と三句の間に詞書の「いみじう散れば」という言葉を挿入すると解

釈しやすい。

詞書は、何日か桜の美しい所に滞在していたが、今日よそに移ろうとしたらひどく散ったのでとあり、散った理由は風が吹いたからなので、「吹く風の心ならねど」つまり、よそに移る（風のように動く）とはいえ、私の心は吹く風の心とは違うのだけれど（花を散らすつもりはないけれど）と詠いだす。ここで上句は切れ、「花みては」以下の句は詠者を主語として、風のせいで散る花を見て、花は枝に止まらないものであったと思う。それは自分の心もまたここに留まらないことを表現しているのである。

また、人の常に居し所に書きつく

1355 待ち侘びて行く方も知らずなりにきと君来て問はばとくて答へよ

この歌を含めて考えると、しばらく滞在していたが、今日ほかに行くので（ここに留まらない）、待ちわびて家を去るときにそこにこの歌を書き残したということになり、また新たなエピソードを想像させる。

和泉式部集の中では「風の心」はこの歌と、「折る」項で取り上げた<sup>1451</sup>番の二首のみであり、他に紅葉などに用いられた例はない。和泉式部は、「風の心」は古今集の「桜」歌の受容であり、「桜」を対象にするもの、ととらえていたのではないだろうか。

「花の時心不静、雨の中に松縁を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

460 松はそのもとの色だにもあるものをすべて縁も春は異なり

459 番歌は詞書の前半「花時心不静」、に照応する歌である。この歌は、既に『嘉言集』、『道済集』との関連が指摘がされている(注9)。「嘉言集」の114番の詞書は、「花心しづかならず」、115番「はるのこまつみどりをます」の題で詠まれており、同じ題詠であることがわかる。『道済集』は、264番歌の詞書に「三月五日、中宮大夫(の)、法住寺にて人々詠みし。二首。春残花。」、265番歌は「雨中小松」の題がある。この時の「中宮大夫」は藤原斉信であり、前述(11ページ)のように、この三者は「権中納言の屏風の歌」をそれぞれ詠んでいて、この権中納言は藤原斉信と推測されている。これらから、和泉式部は他の二人と詠歌の場を共有する機会があり、この二首の歌もそうした機会に詠まれた歌のひとつであったとも考えられる。詞書は漢詩からは出典不明とされているが、「人のよむに」とあるので、その場で出された題なのではないだろうか。この歌は業平の古今集巻一春歌上「53世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」を本歌とするが、同じく貫之の巻二春歌下「82ことならばさかずやあらぬさくら花見る我さへにしづ心なし」などの意も含まれよう。

和泉式部の歌は「心のどかな時はない」と詠む。桜は咲いたと思えば散り始めるから、つまり外吹く風が桜を散らすから花に散ってほしくない人の心は静まらないのである。そして、花を思う「心のうち」には風は吹かないのだから、桜は散らず心静かなはずであるのにと詠んでいる。屋外に吹く風に散る桜を見て惜しむ心を詠むというのは、散る桜の歌の常套であるが、和泉式部はその惜しむ心を見つめて、自らの「心のうち」が揺

れ動く必要はないのに、外の光景に動かされて揺れている（前述の1354番「吹く風の心ならねど」にも通じる）状態を詠んで示すという表現に、特色がある。

この「こころ」の項で論じた歌には、「心」を第三者的視点からみた歌はない。5番では「人は」と客観的な視点で詠んでいるように見えても、「花にのみ心をかけて」ているのは詠者自身である。屏風歌にしても、画中の人物に自らの桜への思いを投影しているのでなければ「あるかぎり心をとめて」という表現にはなり得ない。「風の心」は「風」の姿が擬人化されて詠まれているわけではない。題詠も自らの心のうちを表現している。すなわち、詠まれているのは、和泉式部の桜への「心」のありようなのである。

#### 四 「桜」をめぐる歌群

和泉式部の「桜」の歌の中で、時間を追いつつ場面が展開する歌群がいくつかある。

その中でも創意工夫がみられる歌群は第五部で取り上げることとし、ここでは習作的な工夫のみられる歌群を取り上げる。

次の歌群は正集と続集に重出する。まず続集の方からみる。

二月晦日方に、物に詣づる道なる法住寺の桜見んとて、入りたれば、

花もまだ咲かざりけり、知りたりし僧のありし、問はするもなし

1099 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとの主だにもなし(155)

同じ道なりし所に入りて見れば、そのもまだしかりければ、柱に書きつく

1100 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折に又来ん(156)

逢坂の関にて、いと苦しければ休むとて、つくづくとゐて

☆1101 雲居まで心はゆけど逢坂の関こえぬべき心地こそせね

もろともなる人の、「婦りなん」といふに

☆1102 留まれとも行けともいはでこころみん何のためなる逢坂の関

山科といふ所にて、苦しければ休む、その家主の心あるさまに見ゆれば、

「今婦さに聞えん」などいひて

☆1103 帰るさを待ちこころみよかくながらよも尋ねではやましなの里

かくて詣で着きて、「花さかざりけり」など、もろともなる人のつれづれがりければ

1104 常磐山春は縁になりぬるを花咲く里や君は恋しき

哀れにおぼゆれば、手すさびに軒おほし檻まに書きつく、日頃籠りて、出でなんとするに

☆1105 憂き世には猶帰らでや止みなまし山より深き谷もありけり

帰るとて、山科の家にいひやる

☆1106 君ははやわすれぬらめど御垣根をよそに見捨てていかか過ぐべき



桜を詠んでいる歌で続集は1099、1100番の二首であるが、「物に詣づる」は、正集によれば石山寺で、続集でもこのあとの詠まれている歌をたどれば、石山寺であろうことは推測される。

1099 歌の「法住寺」は平安中期永延二年（九八八）に藤原為光が建立した寺で（注10）、現在の京都の東山区のあたりにあった。まずその桜を見ようとしたが、花が咲いていなかった、知人の僧がいたので尋ねさせたがいなかった、会うこともできずに詠んだとする。

「桜がり」は「花見」と同義で、拾遺集にも見られるが、多くは中世以降に多く見られる語である。和泉式部の歌では「権中納言の屏風の歌」853番の詞書に「桜狩りにあまたゆく人ある山を過ぐ」がある。この歌での「桜狩り」は「桜許」とかけ、「木のもと」にも対応する。「主だにもなし」の「も」で、桜も咲いていなければ、主もいなかった、と歎いているわけだが、このあと、1100番では、同じ道の別な所に行き、そこもまだ咲いていなかったので柱に書き付けたと歌う。この「それまでの」は「次の桜の季節」までということであろうか、これから咲き始めるまでの短い期間であれば、「命あるものなれば」はやや大げさであろう。いずれにしても花の咲いているときにまた来ようと詠んでいる。

このあと「逢坂の関」で二首、山科の里で一首歌を詠んでいる。京からは山科を経て、逢坂の関を越えて近江国に入るのだから、道順で言えば1103歌の後に1101、1102歌が来るべきで、不審である。そして石山寺に詣で、やはりそこにも花は咲いていなかったと一緒に行った人が残念がったので、1104番の歌を詠んだ。この歌は古今集の源宗干の「24常磐なる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」をひき、山も春になれば美しい緑になるの

に、「花咲く里」があなたはそんなに恋しいのかという意であるが、「全釈」は「ここでは下界・俗界の心を含める」とする。この歌の「花」は直接桜の花を指しているわけではないが、詞書の「花さかざりけり」の花は一連の歌から桜と解される。その後、寺を出て、行きに寄った山科の里の主に消息を送る。

一連の歌は詞書と歌を連ねて、あたかも石山寺への道中記のごとくつづつづつしている。「逢坂の関にて、いと苦しければ休む」、「山科といふ所にて、苦しければ休む」と疲労困憊する様子が強調される。『和泉式部日記』（注11）には、八月に石山参詣をしたことが書かれており、ここは道中の記述などはないが、帥の宮が参籠中の和泉式部に童に手紙を届けさせる場面で、その童に宮は「苦しくとも行け」と命令しており、都と石山寺の往復は大変だったようである

この歌群は「法住寺」の花を見に行くところから石山詣でが始まるのだが、創健者の藤原爲光は正暦三年（九二二）に亡くなっているが、以降長元五年（一〇三二）に焼失するまで法住寺は威容を保っていたと考えられるので、寂しいところではなかったはずである。法住寺の知人の僧もたまたま不在という感じに思われる。「同道なりし所」は法住寺から山科にむかう途中であろうか。「寺」とは書かれていないし、ここでは僧を訪ねてはいない。そして、冒頭の二首をはじめとして、行く先々で咲いた花を詠んだ歌はなく、結局最後の<sup>1106</sup>番まで桜が咲いたとは詠んでいないのである。しかし<sup>1104</sup>番の歌に「花さかざりけり」と残念がる連れの詞書があるので、物詣での旅のみではなく、桜を追いつつの道中であつたのだろう。

では正集の方の歌を次にあげる。

石山より帰るに、遠き山の桜を見て

154 都人いかにと問はば見せもせん此の山ざくら一枝もがな

同じ道なる寺に入りて見れば、ここの花は咲かざりければ、知りた

りし僧のありしを問はするも、なければ

155 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとの主だになし (1099)

156 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折りに又見ん (1100)

154 番は、後拾遺集巻第一春上(100)に「遠き所にまうでて帰る道に、山の桜を見やり」という詞書で入集している。この歌は古今集巻第十八雑歌下小野貞樹「93宮こ人いかにと問はば山たかみはれぬ雲居に侘ぶとこたへよ」の上句を用いている。この「都人」は多くの歌に詠まれているが、この上句「都人が問ふ」意を詠んだ歌は多くはない。中世に至って、「都人」が「問はで」の意の歌が散見される。小野貞樹の上句をそのままそっくりなぞって「都人いかにと問はば」と詠む歌はこの歌くらいしか見当たらない。歌意が似たものには、『公任集』に女院の住吉詣に同行した道長が公任に贈った歌がある(注12)。和泉式部の歌では、「山の桜」について「いかに」と問われたら見せもしましよう、この(あの)山の桜の一枝をほしいものです、と小野貞樹や道長とは違い、詠者についてでなく「桜」について、「いかに」と問われたとする。

154 番歌の詞書は「石山より帰る」道筋で詠まれたとする。石山からの帰り道に遠くに見える山桜は咲いている。

そして、そこから京へ帰る同じ道にある寺に寄ったら花は咲いておらず、知人の僧もいなかったということ、155番、156番の歌が詠まれている。この歌は前述の続集1099番、1100番と語句の異同はあるが、同じである。違うのは詞書で、1099番の詞書では法住寺の知人の僧を訪ねたがいなかったという、1100番は同じ道の所であつて桜が咲いていなかったから歌を書き付けたのである。正集では155番、156番と同じ寺で連続して詠まれたことになっており、詞書が二首に対して同じ道の寺で知人の僧を訪ねたとある。

どちらが先に詠まれたかは不明であり、歌より推測するしかないのであるが、この歌群は続集から正集のそれに整理されたと見たい。それは、154番の歌をこの二首の前におくことで、遠くの咲いている山桜の存在が示されるからである。一方、続集の1104番によれば石山寺に着いたときには、石山寺にも咲いていなかった。続集の歌群では桜がないのである。また1099番、1100番にあたる二首の詞書をまとめて155番、156番の詞書とする。法住寺とは限らない石山寺からの帰りの寺のできごとに変更しているのである。正集の方は石山寺からの帰り道であるから、「同じ道なる寺」は山中のものさびしい寺をイメージさせる。たまたま訪ねた寺の知人は不在だったのか、あるいは居を移したのかわからない。156番で自分がもし命があらば、次の花の折りに見に来ようと詠んでいることから考えると、既にこの寺の桜を見るべき人（僧）も亡くなっていたのかもしれない。そして154番の「此の山ざくら一枝もがな」という思いとは裏腹なものさびしい趣きでまとめられているわけである。帰り道であれば「それまでの」は、いつとわからない「次の参詣の折」という意味になり、続集よりは筋が通り、「命たへたる物」ならば花の折りに必ず見よう（続集では「来む」という語も、諧謔味を狙った大げさなもの言いを超えて、切実

な感情がこもる。

この両歌群の「桜」は咲きはじめていない桜である。まだ咲いていない桜ならば心待ちにするという歌い方も多いのに、どこか寂しさを感じさせるような歌群になっているのはなぜかと言えば、「命たへたる」という句ゆえであろう。桜を咲くまで命があるかという、またこの次の花盛りの桜を見るまで生きていくかどうかかわからないという思いを抱え、桜と共に人の命のはかなさを見つめているのである。

## 五 和泉式部と桜

ここでは、これまでに取り上げた歌以外の主に独詠を中心に、「桜」を主題とする歌を詠むことは和泉式部にとってどういう意味があるのか、和泉式部にとっての「桜」とは何かということを考えていきたい。

まず、桜そのものを詠んだ歌を見る。

### 夕暮に、遠き桜を見やりて

#### 690 句ふらん色もみえねば桜花心あてにも眺めやるかな

「心あてに」は古今集卷五秋歌下の躬恒の歌「277 心あてにをおらばやをおらむ初霜のをきまどはせる白菊のはな」が本歌であるが、意外にも平安中期には用例が少ない。源氏物語夕顔の巻に「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(注13)の例がある。あとは中世以降の歌が多い。霜と菊、雪と梅、霞と桜などと共に詠まれるが、光経、良経の歌に山桜とともに詠んだ歌があるが、これは和泉式部の歌の影響もあるかと考えられる。

和泉式部はこの歌で、夕暮れに紛れて、美しく咲き匂っているであろう桜花が見えないのであて推量で眺めているという。古今集の初霜、白菊の冷たい白い印象と異なり、昼が長くなった春の夕暮れの伸びやかさと、桜の美しく「にほふ」色とが照り映えて、暖かく艶な印象をかもしだす歌に詠んでいる。

次の歌は和泉式部集にはない。三章の風の項でも歌のみとりあげた。

### 庭の桜の多く散りて侍りければよめる

148 風だにも吹きはらはらずは庭桜散るとも春のほどは見てまし (後拾遺集巻第二春)

後拾遺集の新大系の注では「風に散る花を詠むのではなく、散り落ちた地上の花びらが風に吹き払われることを惜しむ珍しい趣向の歌」とある。拾遺集巻第一春には、よみ人しらず歌として「延喜の御時、藤壺の女御歌合の歌に 61朝ごとに我がはく宿の庭桜花散るほどは手もふれで見む」、『赤染衛門集』(注14)には「庭に積もる花を風の吹き散らすを 495散りてだによるべき物を桜花庭をさもはく風の心よ」がある。

拾遺集の歌のように桜の散り積もった庭を掃くのは人の役目であり、その花を、花の散っている間は掃かないでおこうと詠み、赤染衛門はこれを「散る桜にさえも心をよせるのに、それをさも掃くように吹き散らす風の心よ」と詠んでいる。和泉式部の歌は拾遺集の庭の散り積もった花びらを掃かないでおこうという意と、赤染衛門の掃いているのは「風」という意の両方の心を展開するような詠み方で、地面に散った桜をそのまま鑑賞しよう、風さえ吹かなければ春のあいだずっと見ていられるのだからと詠む。この歌では「人の手」は関係しない。散り敷く桜を惜しむこの歌で後拾遺集の桜の歌群は終わるのである。

この歌に関しては、もう一つ注意すべきことがある。それは帥宮が『白氏文集』の「惜花不掃地」(注15)を歌題として歌を詠ませたことが、『兼澄集』や『大江嘉言集』に見られることから、それと関連した題詠ではないかということである。これについては第八章において題詠に関する考察の中で詳しく述べる。

以上の二首は特に新しい言葉を用いているわけではなく、古典的な言葉で、また桜を詠む環境としては当たり前の設定なのである。だが、690番の歌は、たとえば霞の向こうの桜を思いやるのではなく、夕暮れの山の桜をあて推量で眺めるといった趣向にしていることと、「匂ふらん色」ということばが、夕方の情景とあいまって独特の雰囲気をかもしている点で、和泉式部の繊細な感性というものが読み取れるのである。

また、後拾遺集の歌は前述のように咲いた花を散らす風ではなく、既に散ってしまった桜を吹き散らす風を厭うのである。そして散ったあとも、庭に敷きつる桜を春のあいだ鑑賞したいとする。「散る桜」の歌はおおむね散るのを惜しむ歌であるが、この歌は散ったあとを惜しむ心を詠んでいるところが、やはり同じように感性の鋭さを感じさせる。

次に人に贈った歌、人との関わりはあるが独詠と考えられる歌を考察する。

三月ばかり、人の来むとて、ただに明かしたるつとめて、いひにやる

181夜のほもしろめたなき花の上を思ひがほにて明かしつるかな

この歌は続集に重出歌(1146、1340)を持つ。続集の二首は、詞書に微妙な差異があるものの、歌は同一である。

正集181番との違いは、「うしろめたなき」が続集は「うしろめたきは」となっていることであるが、歌の意味は

同じである。詞書が、続集の方は単純に「二月ばかり、人の頼めて来ずなりぬるつとめて」（1146、1340は「来ずなりにし」となっており、二月と三月の違いもあるが、正集の方がより詳しい説明になっている）。

「うしろめたなし」は「うしろめたし」と同義語だが、和歌の用例では「うしろめたし」は多いが「うしろめたなし」は少ない。和泉式部以前では『惠慶法師集』（新編国歌大観）に二首ある。「257 ささがにのいやはねらるるはるの夜のうしろめたなき花を思ふに」はこの歌同様に、「夜のうちに散ってしまうかもしれない桜が気がかり」という意味に使われ、「うしろめたなき」は和泉式部の歌の中ではこの一首のみである。

来るといつてきた人が現れず待つているうち朝になってしまったという状況は、古今集巻第十四恋歌四の素性の歌「691 今こむと言ひし許に長月のありあけの月を待ちいでつる哉」に見られるが、この歌は有明の月が出るまで待つてしまったという表現で、ひとりの夜の時間の経過を表している。和泉式部の歌は、単純にひとりで待つていたが夜が明けてしまったとは言わず、時節は三月のこと、「花」を取り込み、夜中起きて待たされていたことを、あたかも桜を心配しているかのような顔をしていたのだと言い贈る。この「思ひがほ」という言葉が効いていて、その実は来るか来ないか一晚中心配していたのにと恨み言を詠んでいるわけである。直截的に詠まず、言い回して訴えるのが特徴的である。

次の一首は、三月末、すなわち春の終わりに散りきってしまった枝につけて人に贈るといふ、趣向の歌である。

### 三月晦方に、散り果て方なる枝につけて、人に

798 散りにしは見にもや来ると桜花風にもあてで惜しみしものを



歌意は「散ってしまった。もしや見に来てくれるかと桜の花を風にも当てないようにして大事にしていたのに」ということである。散りはた枝を贈るのは、春が終わろうとしているのに、花の盛りに便りもなく、見にも来ない相手への皮肉を込めたものであろうか。後撰集に巻第三春下、貫之が中務から贈られた桜の花を瓶に挿していたのが散ってしまったのを「82ひさしかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれどうつろひにけり」と詠んで中務に贈っている。この歌は拾遺集巻第十六雑春に重出し、こちらの詞書は貫之が桜を瓶に挿して中務に贈って詠んだことになっている。いずれにしても「うつろひにけり」桜が主題となっている。和泉式部の歌の「風にもあてで」はこのように実際に折り取って風に当てなかったというほどでもなく、桜を惜しむ気持ちの強調であろうか。

次の歌は石山寺から、おそらく都の人のもとに贈った歌である。

二月ばかり、石山に詣づとて、ある人のもとに

1352 心して我はながめんをりをりは思ひおこせよ山の桜を

この歌の上句は、「全釈」「文庫」とも、心をこめて贈った相手のいる都の空をながめると解釈している。石山寺に滞在している、つまり都を離れているわけであり、「ある人」は都にいるという状況は当然である。ただ、「心して」眺めているのは都の空だろうか。たとえば既に見て来た154番（四）やこの（五）の項前掲の690番の歌を合わせて考えれば、山の桜を眺めて感興を詠むことはあるわけで、この場合も「心してながむ」は山の桜を対象としているのではないだろうか。そして「心をこめて山の桜を眺めています。あなたも時々山の桜を（私のことはともかく）思い出してください」という意であると考えられる。

逆に次の歌は都から、田舎なる人に贈った歌である。

田舎なる人のもとより、三月十余日のほどにいひやる

1253 まづ来んといそぐ事こそかたからめ都の花の折を過ぐすな

詞書の「田舎なる人のもとより」のあとに脱文があると諸注にある。この歌は自身は都におり、地方にいる人に文をやつて花の折に都に上ることを促している。急ぐことは難しいでしょうがと言いつつ「折りを過ぐすな」と急がせているのである。脱文のところはあるいは来るといつて来ない状況があつて文を送ったのかもしれない。

和泉式部は桜の盛りにはだれかと共に賞美したいと思う。しかし、見せたい人はそばにいないので文を贈る。

「田舎なる人」「田舎より来たり」など詞書に「田舎」の語を含む例は和泉式部集に九例見られる。そのうち自身は田舎に行く歌、はらからが田舎に行く歌以外、田舎にいる人、行く人は男である。従つてこの歌も夫か男をさすのであろう。「見にもや来ると」、「思ひおこせよ」「都の花の折を過ぐすな」といった積極的な言葉を詠み込み、桜の美を分かち合いたい相手を誘っているのである。

特に詞書を持たない歌群の中の次のような歌もある。

608 をりよくは見に来ぬまでも我が宿の桜咲きぬと告げましものを

この歌は、独詠か、人に贈つたものかわからない。「をりよくは」という語を直接詠み込んでいる歌は和泉式部以前に見られず、後世もきわめて少ない。「見に来ぬまでも」は『和泉式部日記』に「月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと」があり、訪れない帥宮へ贈った歌である。

「全釈」は「ちょうどいい機会さへあったら、たとへ見に来てくれないにしても、うちの桜がもうさきましたとあのひとにしらせませうものを」と解釈している。

「をりよきは」の「をり」は何の折か。「我が宿の桜咲きぬ」と「告げる」良い機会なのか、そうすると「見に来ぬまでも」は挿入句になる。「桜が咲いた折」、つまりちょうどいい時に一緒に桜を見たい、だから見に来てほしいという強い気持ちがあるからこそ、我が宿の桜が咲いたことを告げたいということなのであろう。でも実は見には来てくれないことはわかっている。「見に来ぬまでも」という句を入れひと呼吸おいているのである。またひと呼吸おきつつもやはり「告げまし」と詠う。告げたい思いと、なおためらわれる思いとが「見に来ぬまでも」「告げまし」という表現からよく伝わってくる。

これらの歌に共通していることは、桜の折に見に来る人がいない状況で、桜を媒介に人との交流を求めていることである。ただ、求めても得られない状況でもあることも認識しているのである。

このような花の盛りに人の訪れない状況のなかで、和泉式部の心境はどういうものであったか。すでに初期百首の春歌に次のような歌が見られる。この二首は後拾遺集巻第一春上に入集している。

11人も見ぬ宿に桜をうゑたれば花もてやつす身にぞなりぬる

12わが宿の桜はかひもなかりけり主からこそ人も見に来れ

この二首には「花もてやつす身」「主からこそ人も見に来れ」と自らを否定するような響きがある。拾遺集巻第十六 1015の公任の歌で『公任集』の冒頭にある「春来てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主なりけれ」は（この

花は梅)、詞書に「北白河の山庄に花のおもしろく咲きて侍けるを見に、人くまうで来たりければ」とある。「花こそ宿の主なりけれ」と詠みながらも実は「主」は自分であり、人々がやってくるのが嬉しくて喜んでいることが詠みとれる。和泉式部の歌はこれと正反対の歌であり、根底に流れている悲哀が感じられ、わが宿の桜への強い思いはあるものの、それを人が見に来ないことの原因を我が身を卑下することで表現するという、屈折したひびきを持つ歌になっている。

これまで見てきた人との関係において詠まれた桜の歌は、根底に流れる諦めの意識がありながらも、真意は「桜を見に来てほしい」(会いに来てほしい)の表現の歌なのである。

一方で和泉式部の「桜」の歌には、人に問いかける歌、共に見ようと呼びかけ、人を意識している歌でも、実はそこには美しい桜への愛がある。そのような深い思いを表現している詠嘆の歌がいくつか見られる。たとえば次のような歌である。

#### 花のいとおもしろきを見て

#### 1088 あぢきなく春は命の惜しきかな花ぞこの世のほだしなりける

「桜」という語はないが、眼前にある花を見ていて詠んだ歌であることと、「ほだし」となるほどの花は、やはり「桜」であろう。春はどうしようもなく命が惜しいと、それは桜があるので、花にひかれて此の世から逃れることができないのだと「命」のほだしに思っているのである。それは、次の666番の歌に共通する。

#### 「桜の花の待ち遠なり」といひて

## 666 暮るる間も知らぬ命にかへつつもおそく桜の花をこそ見め

「おそく桜」は「遅く咲く桜」で、(三)でもふれたように、176番の和泉式部自身の歌以前に見られず後世の用例もわずかである。他に「くるる」「かへつつ」とともに、「おそくさくら」とリズムがあり、歌に軽みを感じさせる。桜という花を「遅く咲く」花と規定する。実際に遅いかに関わらず、早く咲かないか、咲いて欲しいと願う人の心が感じさせる「遅く咲く」桜である。桜への思いを軽妙なりズムに端的に捉えた表現といえよう。

ただ、リズムは軽妙でも歌の内容は決して軽いものではない。この「命にかへつつも」「花をこそ見め」とは、「暮れるまでの間をも覚束ないはかない命」の時間と、「なかなか咲かない桜を咲くまで待つ」時間の対比と考えられる。命は刻々と残りの時間を刻んでいく。先を見定め難いのが人の世であり、あるいはもはや暮れるまでの時間しか残されていないのかもしれない。その見分けがたい残りの時間を、桜が咲くまでの時間に全部使っていくから、桜を見たいという。「桜への思い」というものが、「命」と同じレベルに扱われるほどの、儚さとかけがえなさをもつということを表現しているのである。

### 六 まとめ

前章において、勅撰集の「桜」と「折る」、「桜」と「心」を詠み込む歌を考察した。古今集において、「折る」は必ずしも具体的行動を伴わない美意識の表現として詠まれ、後撰集では具体的な相手に贈るための実際の「折る」行為とともに歌に詠まれた。和泉式部の「折る」歌は、これら両集に見られる桜の美への共感と、贈り贈ら

れるために「折る」行為を歌に詠むという伝統的な詠み方を引き継いでいる。言葉の上では古今集の方が近い。さらにやはり伝統的な詠み方である「桜の美しく咲くまさにこの時」を分かち合いたいという気持ちがあり、そこには人との絆を求め、確かめる自らの思いがこめられている。

「桜」と「心」については、前述のように古今集では「人の心」、擬人化された「風」や「桜」の「心」に我が心を投影して詠んでいる。和泉式部の「桜（花）」と「心」を詠む歌は、擬人化された表現も、「心」を客観的に詠む表現もない。「花」と「心」を詠む歌は自身の桜への思いと、人との関わりを問う「心」のうちを詠んでいるのである。

和歌史との関連で言えば、古今集の「桜」歌群の影響を強く受けていると言えよう。これは古今集の「桜」歌群そのものが美意識の完成度が高く、後世へ大きな力を及ぼしているからであるが、和泉式部は、古今集の意をふまえつつも巧みに応用し、独自に表現を展開している。これは、和泉式部の歌が多く入集している後拾遺集までの「桜」歌の流れの中にあるわけではなく、むしろ直接古今集から独自に引き継いでいる部分が多いことを意味している。

和泉式部の「桜」の歌の中には、単なる桜への賛美の歌はない。しかし、桜への愛情は深く、何者にも代えがたいものであることが読み取れる。ただ、桜は咲くと同時に散り始めるはかないものであるが、和泉式部はそこで詠嘆するにとどまらない。それは桜の美しさと裏腹に花期が短いことに、人との絆や、自らの命のはかなさの象徴として捉えているからである。和泉式部は華やかに咲く桜に耽溺しきれない自身を詠んでいるのである。

- 注 1 拙稿 東京女子大学紀要「論集」第六十六卷(二号)
- 注 2 桑原博史『源道濟集全釈』(風間書房 1977)
- 注 3 『古今和歌六帖第四』に「2322 ひきよせてきみがかざしにうちたをりわれをりやらんきみがかざしに 人丸」の例がある。(新編国歌大観)
- 注 4 鈴木宏子「『和泉式部百首』覚書 - 春歌二十首を詠む」『千葉大学教育学部研究紀要』第5巻Ⅱ人文・社会科学編(2002)
- 注 5 松本真奈美ほか『曾禰好忠集』(和歌文学大系54中古歌仙集一)(明治書院 2004)
- 注 6 注2に同じ
- 注 7 田島智子『屏風歌の研究』(和泉書院 2007)
- 注 8 近藤みゆき「和泉式部と漢詩文」『古代後期和歌文学の研究』(風間書房 2005)
- 注 9 久保木寿子「和泉式部の詠歌環境 - その始発期」『国文学研究』七十一集 1980(早稲田大学国文学科)
- 注 10 『日本紀略 後篇九 一條(永延元年十一月〜二年三月)』(吉川弘文館 1988)『国史大辞典』
- 注 11 野村精一校注『和泉式部日記 和泉式部集』(新潮日本古典集成 新潮社 1981)
- 注 12 後藤祥子ほか校注『公任集』(新日本古典文学大系28 平安私家集 岩波書店 1994)

注13 阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語』①（新編日本古典文学全集 小学館 1994）

注14 武田早苗ほか校注『赤染衛門集』「和歌文学大系 20 明治書院 2000）

注15 「愛水多棹舟 惜花不掃地」『白氏文集』 卷五二・二二八九・「日長」（新釈漢文大系第105巻白氏文集 九）（明治書院 2005）

※歌材としての桜、花は「桜」「花」とカッコを付け、自然の桜をいう場合はつけない。

（対応論文 東京女子大学紀要『論集』第六十七巻一号 2016・9）

\*資料 和泉式部の「桜」歌 一覽

正集 続集（底本 榊原本） 岩波文庫本

春

- 5 花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞ立ちぬべき
- 10 見るままに下枝の梅も散りはてぬさも待ち遠に咲く桜かな
- 11 人も見ぬ宿に桜をうゑたれば花もてやつす身にぞなりぬる



12 わが宿の桜はかひもなかりけり主からこそ人も見に來れ

夏

21 桜色に染めし衣をぬぎかへて山郭公けふよりぞ待つ

いづれの宮にかおはしけむ、白河院にまるもるともおはして、

かく書きて家守に取らせておはしぬ

99 われが名は花ぬす人と立てば立てただ一枝を折りて帰らむ

日ごろ見て、折りて、左衛門督返し

100 山里の主に知られでる人は花をも名をも惜しまざりけり

とある文をつけたる花のいと面白きを、まろが口すさびにうち言ひ

し

101 折る人のそれなるからにあぢきなく見し山里の花の香ぞする

左衛門督の返事、又、宮せさせ給ふ

102 知られぬぞかひなかりける飽かざりし花に代へつる身をば惜しまず

又、左衛門督

103 人知れぬ心のうちを知りぬれば花のあたりに春は過ぐさん

一日、御文つけたりし花を見て、まろなんさ言ひしと人の語りけれ

ば、かくぞのたまひし

104 知るらめやその山里の花の香はなべての袖にうつりやはする

返し

105 知られじとそこら霞の隔ててに尋ねて花の色は見てしを

石山より帰るに、遠き山の桜を見て

154 都人いかにと問はば見せもせん此の山ざくら一枝もがな

同じ道なる寺に入りて見れば、ここの花は咲かざりければ、知りた

りし僧のありしを問はするも、なければ

155 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとの主だになし (1099)

156 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折りに又見ん (1100)

同じ頃、人のもとより、「桜の花を、また見すべき人もなければ、

御料にとてただ一枝をなん折りたる」とて

157 また見せん人もなければ山ざくら今一枝を折らずなりぬる

かへし

158 徒らに此の一枝はなりぬめり残りの花を風にまかすな

二月の桜のおそき頃

176 待たせつつおそくさくらの花により四方の山べに心をぞやる (1266)

三月ばかり、人の来むとて、ただに明かしたるつとめて、いひに  
やる

181 夜のほどもうしろめたなき花の上を思ひがほにて明かしつるかな (1146  
1340)

人の、屏風の歌詠まするに、はるの

187 春毎の花の盛りは我が宿に来と来る人の長居せぬなし (852)

野の花を、馬に乗りたる人三人ばかり、見て過ぐる所

188 あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて (853)

山の花を、かすめらん

189 花はなほ人に見せなん隔てたる霞の内に風もこそ吹け (854)

人の、「今桜も咲きなん」といへば

214 まさざまに桜も咲かん身には見ん心の梅の香をばしのびて (789)

十月ばかり、帥の宮より、「いかにつれづれに」とのたまへれば

\* 233 花見にと暮らしし時は春の日もいとかく永き心地やはせし (1321  
1341)

春つ方人の来たりければ、花もみな散りにければ、みちなりなどに

や

245 いたづらに帰らん事を思ふかな花の折こそ告ぐべかりけれ (787)

返し、男

246 散りにけむ花をば今はいかがせん見て過ぐしけん人に問はばや

世の中にあらまほしき事 (うち)

338 おしなべて花は桜になしはてて散るてふことのなからましかば

宮の御殿の桜を

456 花もをし散らで千歳を過ぐさなん君がみやこに匂ふ桜を

「花の時心不<sup>レ</sup> 静、雨の中に松緑を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

「燈の前に花を思ふ」と云ふ心

461 夜のほどに散りもこそすれ明くるまで火影に花を見るよしもがな

462 火にあてて見るべきものを桜花幾日もあらで散るぞ悲しき

463 ともしびの風にたゆたふ見るままに飽かて散りなん花をこそ見れ

608 をりよくは見に来ぬまでも我が宿の桜咲きぬと告げましものを

「桜の花の待ち遠なり」といひて

666 暮るる間も知らぬ命にかへつつもおそく桜の花をこそ見め

夕暮に、遠き桜を見やりて

690 匂ふらん色もみえねば桜花心あてにも眺めやるかな

三月晦に

711 なかなかに咲きて散りぬる花なれば日を経て物は思はざらまし

二月晦方に、人々来て物語などして、「花の散りにける、さうざう

し」などいふに

\* 787 いたづらに帰らん事を思ふかな花の折りにぞ告ぐべかりける (245)

\* 788 おぼろげに惜しみし花の散りにける枝にさへこそ目はとまりけれ (213)

これを聞きて、人、「桜は今咲きなん、散りにける花をば何か思ふ」

といひけるに

789 まさざまに桜も咲かば見には見ん心に梅の香をばしのびて (214)

三月晦方に、散り果て方なる枝につけて、人に

798 散りにしは見にもや来ると桜花風にもあてで惜しみしものを

「梅桜、いづれおもしろし」と人のいふに

848 桜より色はさこそは深からめ香さへ異なりくれなゐの梅

權中納言の屏風の歌、桜咲きたる家に客人おほかり

851 植ゑし植ゑばかかれとぞかし桜花見にとてこそは人の来つらめ

852 春毎の花の盛りを音に聞く人の来ゐては長居せぬなし (187)

桜狩りにあまたゆく人ある山を過ぐ

853 あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて (188)

山の霞、花をかくす

854 はなばなと人に見えなん立ちくもる霞のうちに風もこそ吹け (189)

二月晦方に、風のいみじう吹くに

926 花散らす春の嵐は秋風の身にしむよりもわびしかりけり (1120)

三月晦方に

998 たれにかは折りても見せんなかなか桜咲きぬと我に聞かすな

桜のいとおもしろきを見て

999 花見るにかばかり物の悲しきは野辺に心をたれかやらまし

十二月ばかり、物染めさせて、「花やある」と人に乞ひたりし、二

月二十日余りばかりに、おこすとて、「花乏しき春かな」といひた

るに

1077 咲けど散る花はかひなし桜色に衣染め着て春は過ぐさん

同じ頃、夕暮の風の吹くに

1120 花さそふ春の嵐は秋風の身にしむよりも哀れなりけり (926)

花のいとおもしろきを見て

1088 あぢきなく春は命の惜しきかな花ぞこの世のほだしなりける

二月晦日方に、物に詣づる道なる法住寺の桜見んとて、入りたれば、

花もまだ咲かざりけり、知りたりし僧のありし、問はするもなし

1099 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとに主だにもなし (155)

同じ道なりし所に入りて見れば、そこのもまだしかりければ、柱に

書きつく

1100 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折に又来ん (156)

二月ばかり、人の頼めて来ずなりぬるつとめて

1146 夜のほどもうしろめたきは花の上を思ひがほにて明かしつるかな (181 1349)

田舎なる人のもとより、三月十余日のほどにいひやる

1253 まづ来んといそぐ事こそかたからめ都の花の折を過ぐすな

桜の遅く咲く事を人のよむに

1266 待たせつつ遅く桜の花により四方の山べに心をぞやる (176)

1269 枝ごとに花散りまがへ今はとて春の過ぎゆく道見えぬまで

十月、時雨するに、つれづれにおぼゆれば

\* 1321 花見つつ暮らしし時は春の日もいとかく永き心地やはせし (233) 1341

十月、時雨したる、つれづれにおぼゆれば

\* 1341 花見つつ暮らしし時は春風もいとながき心地やはせし (233) 1321

二月ばかり、人の頼めて来ずなりにしつとめて

1340 夜のほどもうしろめたきは花の上を思ひ顔にて明かしつるかな (181) 1146

二月ばかり、石山に詣づとて、ある人のもとに

1352 心して我はながめんをりをりは思ひおこせよ山の桜を

日頃、花おもしろき所にあるを、今日ほかへ行かんとするに、

いみじう散れば

1354 吹く風の心ならねど花見ては枝にとまらぬものにざりける

桜の花のいみじう散りつもりたるを見て

1432 桜花思ひもあらず木の下に散りつもるともいかでこそ見め



桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもとより、

「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

1450 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ

といひたれば、「なかなかあだの花は見じとてなむ」と云ひたるに

1452 あだなりと名にこそ立てれ桜花霞のうちに籠めてこそをれ

同じ頃、女客人の詣で来て、物語などして帰りぬるに

1453 我が宿の花を見捨てて往にし人心のうちはのどけからじな

松竹などある中に、桜の咲けるを見て

1454 常磐なる物ともやがて見てしがな松と竹との中にさくらを

(和泉式部集・和泉式部統集 清水文雄校注 岩波書店 一九八三年)

後拾遺和歌集 卷第二春下 (新大系)

庭の桜の多く散りて侍りければよめる

148 風だにも吹きはらははずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

松井本和泉式部集

春

待<sup>ッ</sup>花<sup>ヲ</sup>といふこころを

(正集一〇)

7 みるまゝにしづ枝の梅も散はてぬさも待ちどをにさく櫻かな

花のとき心静ならず、といふことを

(正集四五九)

8 のどかなるお<sup>を</sup>りこそなけれ花を思ふ心のうちに風はふかねど

(正集五)

9 花にのみ心をかけてを<sup>を</sup>のづから春はあだなる名ぞ立ぬべき

花のいとおもしろきをみてよめる

(正集一〇八八)

10 あぢきなく春は命の惜しきかな花ぞこの世のほだしなりける

源道濟雲林院の花見にまかりて侍けるに、そのさくらを

折て

(正集一五七)

11 またみせむ人しなければさくら花今一えだを折らずなりぬる

と申をくり侍けるかへりごとに

(正集一五八)

12 いたづらにこの一えだはなりぬなり残りの花を風に散らすな

遠き所にまうでてかへる道に、やまのさくらをみやりて

よめる

(正集一五四)

13 都人いかにと問はば見せもせむかの山櫻一えだもがな

庭に櫻のおほく散ければ

(後拾遺和歌集卷第二春下一四八)

14 風だにも吹はらはずは庭櫻ちるとも春の程はみてまし

(正集十一)

15 人もみぬ宿に櫻をうへたれば花もてはやす身とぞなりぬる

(正集十二)

16 わが宿の櫻はかひもなかりけりあるじからこそ人も見にくれ

(続集九九八)

17 たれにてか折てもみせん中／＼に櫻さきぬとわれにきかすな

月あかき夜、花にそへて人てのもとによみ

つかはしたりし

(正集一〇七三 梅)

18 いづれともわかれざりけり春の夜は月こそ花のほひなりけれ

夏

四月のついたちの日よめる

(正集二十一)

20 櫻色にそめし袂をぬぎかへて山ほととぎす今朝よりぞまつ

雑

つれづれなりし<sup>を</sup>おり、よしなしごとにおぼへしことど

もかきつけしに、世中にあらまほし事

(正集三三八)

189

<sup>お</sup>をしなべて春は櫻になしはてて散るてふことのなからましかば

敦道親王のともに、前大納言公任の白川の家にまかり

て、又の日、敦道のみこつかはしけるつかひにつけよ

とて

(正集一〇一)

205

おる人のそれなるからにあぢきなくみしわが宿の花の香ぞする

おる人 公任

(和泉↓公任)

〔平安鎌倉私家集〕久松潜一、松田武夫、関根慶子、青木生子校注

日本古典文学大

岩波書店 昭和39)

宸翰本和泉式部集

春

花の時、心しづかならず、といふことを (正集四五九)

6 のどかなる時こそなけれ花をおもふころのうちに風は吹かねど

夏

四月一日 (正集二二)

9 さくら色にそめしたもとをぬぎかへて山ほととぎす今日よりぞ待つ

つれづれなりし折に、よしなしごとにおぼ

えしこと、世の中にあらまほしきこと (正集三三八)

35 おしなべて花はさくらになしはてて散るてふことのなからましかば

敦道のみこのもとに、前大納言公任の白河

院にまかりてまたの日、つかはしける使ひ

につけて (正集一〇二)

88 折る人のそれなるからにあぢきなく見しわが宿の花の香ぞする

折る人 和泉 (和泉↓宮)

〔和泉式部日記 和泉式部集〕野村精一校注 新潮日本古典集成 新潮社 昭和五六

他出

後拾遺和歌集

(新大系)

卷第一 春上

遠き所にまうでて帰る道に、山の桜を見やり

て

(正集一五四)

100 みやこ人いかゞと問はば見せもせむこの山桜一えだもがな

題しらず

(正集一一)

101 人も見ぬ宿に桜をうへたれば花もてやつす身とぞなりぬる

(正集一二)

102 我が宿の桜はかひもなかりけりあるじからこそ人も見にくれ

卷第三 夏

四月ついたちの日よめる

(正集二一)

165 桜色に染めし衣をぬぎかへて山ほととぎす今日よりぞ待つ

新古今和歌集 卷第十六 雑歌上

(新大系)

敦道の親王の供に、前大納言公任白河の家に

まかりて、又の日、親王のつかはしける使ひに

つけて申侍ける

(正集一〇二)

1459

おる人のそれなるからにあぢきなく見しわが宿の花の香ぞする

おる人 公任

(和泉↓公任)

続後撰和歌集 卷第二 春歌中

(新編国歌大観)

(正集五)

84

はなにのみ心をかけておのづからはるはあだなる名ぞたちぬべき

(正集三三八)

85

おしなべてはるをさくらになしはててちるてふことのなからましかば

万代和歌集

(和歌文学大系13)

卷第一春歌上

(続集九九八)

199

誰にかは折りても見せむなか／＼に桜さきぬと我に聞かすな

卷第二春歌下

花時心不静といふことを

(正集四五九)

246 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

続千載和歌集 卷第一 春歌上

(新編国歌大観)

題しらず

(続集九九八)

69 (70) たれにかは折りてもみせむ中にさくらさきぬと我にきかすな

続後拾遺和歌集 卷第二春歌下

(新編国歌大観)

花時心不静といへる事を

(正集四五九)

93 長閑なる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風はふかねど

風雅和歌集 卷十 雑歌上

(新編国歌大観)

花のいとおもしろきをみて

(続集一〇八八)

1480  
(1470) あぢきなく春はいのちのをしきかな花ぞこの世のほだしなりけり

\*新拾遺和歌集卷第二 春歌下

(新編国歌大観)

雲林院のさくらををりて式部がもとへ



つかはすとてよめる

源道濟（正集一五七）

132 又みせん人しなればさくら花今一枝ををらずなりぬる

新後拾遺和歌集 卷第二春歌下

（新編国歌大観）

源道濟雲林院の花見にまかりて侍りけるに、その桜ををりて、

又見せん人しなれば桜花いま一枝ををらずなりぬる、

と申しおくりて侍りける返事に

（正集二四五、七八七）

86 いたづらにこの一枝はなりぬなり残りの花を風にまかすな

玄々集 能因撰 永承（一〇四六―一〇五三）年中またはその後の成立（一条天皇永

延から後朱雀天皇寛

徳に至る凡そ五十九年間九十二人の秀歌を作者別に掲げたもので、和泉式部六首）

小式部内侍に右衛門督の白河へ花みなむまかるといひい

れたまへれば

三 春の来ぬ所はなきにしら河のわたりのみや花はさくらむ

（吉田幸一「和泉式部全集本文篇」古典文庫 昭和三四 による）

第八章 『燈の前に花を思ふ』と云ふ心」の歌三首をめぐって

一 はじめに

本稿では和泉式部の桜の歌のうち、次の『燈の前に花を思ふ』と云ふ心」歌三首をとりあげ考察したい。

「燈の前に花を思ふ」と云ふ心

461 夜のほどに散りもこそすれ明くるまで火影に花を見るよしもがな

462 火にあてて見るべきものを桜花幾日もあらで散るぞ悲しき

463 ともしびの風にたゆたふ見るままに飽かで散りなん花をこそ見れ

当該歌の詞書の「燈」「前」「花」「思」は榊原本・村田春海本ともに漢字表記であり、そこに題詠意識が窺える「と云ふ心」(注1)が付された形で、全体として、漢字四字題の題詠と思われる詞書となっている。

桜を詠む歌は古来より多いが、ほとんどが昼間の桜を歌うもので、遙かに山桜を望み、野山に花見に行き、または庭の桜を愛でて、散るのを惜しむ歌である(注2)。ところが当該三首では、「燈の前」、すなわち夜に室内で花(桜)を思う心を歌っている。こうした桜の詠い方は、勅撰集には見られず、後述のように非常に新奇な発想である。この斬新な詠い方には、当然のことながら「燈前思花」という題が関連していよう。そもそも漢字四字題を詠むこと自体、平安半ばの女流歌人の営為として注目に値するが、それに加えて「燈前思花」と

いう題も珍しい。和泉式部集（岩波文庫の脚注）には「出典未詳」とあり、『平安朝漢文学総合索引』（注3）にも、見当たらない。『白氏文集』『礼記』『史記』『文選』『玉臺新詠』など、日本の漢詩漢文では『日本書紀』『菅家文章』『田氏家集』等、『和漢朗詠集』『千載佳句』に再録される著名な漢籍に、管見の限り「燈前思花」の詩句を見出すことはできない。「燈前思花」は既存の漢籍の詩句に拠らない、新作の漢字四字題であるらしい。

和泉式部は、新作の漢字四字題を詠む文学環境と、どのように繋がっていたのだろうか。「燈前思花」の「題の心」とはどのようなものか。そして当該三首はその「題の心」をどのように詠み得ているのか。同時代までに例のない題に導かれ、類を見ない発想で桜を詠む当該三首を通じ、和泉式部という歌人について考察していきたい。

## 二 漢字四字題の創作

『紀師匠曲水宴和歌』（注4）では、新作の漢字題が出されているが、既に歌会においては、既存の詩句に拠らない漢字三、四文字の題が出されていたという（注5）。

和泉式部が歌会や歌合、あるいは詩会と接する機会としては、帥宮敦道親王周辺と花山院歌壇が考えられる。既に指摘があるように（注6）、和泉式部集には、河原院に集って歌を詠んでいた源道済、大江嘉言、源兼澄らや、花山院歌壇に属していた道明阿闍梨、藤原長能らと、詠作の場（屏風歌、歌合、歌会）を同じくするらしい歌がある（注7）。特に、兼作歌人として活躍していた道済とは、直接歌を交わしていたことが、相互の歌集に確認で

きる（注8）。

題を詠むという行為に注目すると、和泉式部が源兼澄、大江嘉言、藤原長能らと、完全な一致ではないが、同じような題で歌を詠んでいることが知られている。すなわち和泉式部集の809〜811番の詞書に、「暗き夜、ほととぎす待つ心」「橋の下にて」「ほととぎすの声を、山辺に尋ねにいくを聞きて」とあるのに対して、『源兼澄集』（注9）の25〜27番の詞書には、「庭なる橋のもとに時鳥の声待つころ」「暗き夜、待つころ」「また、ほととぎすを聞きに行く心を」とあり、さらに『大江嘉言集』92〜93番に、「ほととぎす、たちばなのもとにてまつ」「くらき夜まつ」とある。この三者の詞書に題詠という明示はないが、和泉式部と兼澄の詞書の「心」から、題詠と判断して良いだろう。また『長能集』（注10）19の詞書には、「かたらふ人のもとに、五月のころほひきたるに、くらきよに郭公を待つといふ題を、よますれば」とあり、和泉式部集の809番の「暗き夜、ほととぎす待つ」と同趣の題を賜って歌を詠んでいたことが知られる。

また和泉式部集には、当該歌以外にも、新作の漢字題を詠んだらしい歌がある。

○『和泉式部集』

「花の時心不<sup>な</sup>静<sup>しず</sup>、雨の中松緑を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

460 松はそのもとの色だにあるものをすべて緑も春は異なり

岩波文庫が脚注で、同じく漢詩の典拠不明とするこの題の場合、源道済、大江嘉言も似た題で二首ずつ詠んでい

ることが、すでに指摘されている。(注11)

○『源道済集』(以下本論文引用の道済の歌は注8による)。

三月五日、中宮大夫、法住寺にて人々詠みし。二首。春残花。

264 山隠れ残れる花を見つるかな世に吹き出だす風にたづねて

雨中小松

265 春雨に生ふる小松の梢にぞ君が来てみむほどは知らるる

○『大江嘉言集』

花心しつかならず

114 さかぬよにちるまで花につけたれば春の心のそらにも有るかな

はるのこまつ、みどりをます

115 千代まではかはらざるべき松なれどはるはみどりのふかくぞ有りける

『道済集』のみ「春残花」と違う題もあるが、この題も出ていたものか、中宮大夫(藤原齐信)らが法住寺で詠んだとするこの歌だけ時期が違うのか、詳細は不明である。この他は微妙な違いはあれ、ほぼ同じ題であることから、和泉式部集459、460番の詞書にいう「人のよむに」の「人」として道済と嘉言も参加したことは確かであろう。なお和泉式部集では、「燈前思花」の三首(461、462、463番)の直前が、この歌となっている。

さて、この道済、嘉言、兼澄の三人については、敦道親王のもとで題を下賜され、歌を詠んだ例が確認できる。たとえば『兼澄集』の1の詞書には、「そちの宮にて三月十日よひばかりに人くうたよませたまふに、はなを見てにはをはらはらずといふだいをたまはりて」とあり、敦道親王は『白氏文集』の「惜花不掃地」（注12）を題として出し、人々に句題和歌を詠ませている。『大江嘉言集』の95番の「花をみむとてにはをはらはらず」も、この時の歌であろう。また、後拾遺集の次の歌も、この句題との関連があるだろうか。

庭の桜の多く散りて侍りければよめる 和泉式部

148 風だにも吹きはらはらずは庭桜散るとも春のほどは見てまし

詞書によればただの叙景歌のようだが、歌意からみて、「惜花不掃地」との関連が考えられる（注13）。あるいは和泉式部自身は題を賜る立場になかったが、敦道親王周辺の営為を見聞きしたことで、私にこの歌を詠んだものであろうか。

この他、道済も敦道親王に従って、詩会に出詠していたことが知られている（注14）。また拾遺集1031番の詞書では「帥の親王、人／＼に歌詠ませ侍りけるに」とあり、嘉言の歌が入集している。兼澄、嘉言、道済は、敦道親王のもとでの詩会や歌会に連なっていたことが知られ、和泉式部が彼らと題を同じくする歌を残しているのには、敦道親王との関連が推察されよう。

また花山院歌壇の歌人である長能、道明阿闍梨は、それぞれの歌集に、花山院の歌会にて題を賜り詠んだとする歌が残されている（注15）。

『大江嘉言集』にも同様の歌があり、嘉言も花山院の周辺に出入りしていたことが知られる。なかでも『道明阿闍梨集』の222番の詞書には、「月前に花をおもふといふ題を、花山院よませ給ひしに」とあり、花山院が「月前思花」と覚しき題を詠ませていることが注目される（次節で詳しく検討する）。そして和泉式部集には花山院歌合に出詠した歌が残されており、花山院歌壇とも、敦道親王を通じてであろうか、交流があつたようである（注16）。

敦道親王の召人であつた和泉式部は、親王の周辺や花山院歌壇で催される歌会や歌合、詩会などに接し、題を賜り歌を詠む営為を享受しうる環境にいた（和泉式部集422番）。ところがこの「燈前思花」題については、道濟らゆかりの深い歌人の歌集に確認できず、『平安和歌歌題索引』（注17）にも、他に見当たらない。歌合や歌会で出された新作の漢字四字題だったのであるが、実際には出されなかつた、あるいは出されても、詠歌が家集に残らなかつた題であるようだ。そうした珍しい題に関心を寄せ、複数の歌を詠んだという点に、和泉式部の個性が窺えるのではなからうか。

### 三 「燈前思花」の題意

この桜の歌三首は、先行研究（注18）において、『白氏文集』の詩「惜牡丹花」との関連が指摘されている。

#### 惜牡丹花 二首

惆悵階前紅牡丹

晚來唯有「兩枝殘」

明朝風起應「吹盡」

夜惜「衰紅」把「火看」

(注19)

傍線部分が千載佳句にとられている。詩句の趣意は、明朝、風が起これば、牡丹は吹き尽くされるだろう、だから花を惜しみ、今夜火をとって見るといふものである。なるほど花が散ろうから「火影に見たい」「火にあててみたい」と詠む461番、462番との関連が首肯される。しかしながら「燈」ならぬ「火」を「把りて」花の側に行き、実際に明かりで照らし出して見た『白氏文集』の詩興は、「燈前思花」とは自ずから違うだろう。

句題和歌であれば、もとの漢籍に題の趣意は明らかであるが、新作の題意はどう考えれば良いだろうか。この題は、大きくは「燈前」と「思花」からなるが、そもそも「燈の前に」とある歌題は平安中期には見当たらず(注20)、次の詞書が比較的近い形である。

○『拾遺和歌集』卷第一六 雑春

清慎公家のさぶらひに、灯火のもとに桜の花を折りて挿して侍けるを詠み侍ける

兼盛弟

1050 ひのもとに咲ける桜の色見れば人の国にもあらじとぞ思

折り取った桜が室内に生けてある状況で、「灯のもと」を「日の本」とかけ、ともしびのもとに咲いている桜は、よその国ではなく、日本のものと詠んだ歌である。題詠ではないが、そもそも「ともしび」で照らされる



「花」を詠む歌は、拾遺集のこの歌と、次の『万葉集』  
4087 番のみが確認できる。

○『萬葉集』卷第十八

同じ月の九日、諸僚、少目秦伊美吉石竹の館に会して飲宴しき。時に、主人百合の花縵三枚を造り、豆器に疊ね置き賓客に捧げ贈りき。各この縵を賦して作りし三首（のうち）

4087 灯火（等毛之火）の光に見ゆるさ百合花ゆりも逢はむと思ひそめてき

右の一首、介内蔵伊美吉繩麻呂

いずれも室内の燈ともしびの前に折り取った花があり、それを見て詠む詠物歌である。燈ともしびは、円形の台に柱をたて受け皿に油あぶら 坯つぎをのせ、燈芯を浸して火をつける照明具をいう（注21）。「大殿油」とも呼ばれる室内照明器であり、外に持つて出るようなものではない。『白氏文集』等、詩句には「燈前」という語句が確認できるが、いずれも室内の燈台に照らされた状況を詠っている。

○『和漢朗詠集』冬夜 尊敬（橘在列）

年光自向燈前盡

客思唯従枕上生

（注22）

○『菅家文章』三〇九

獨吟

牀寒枕冷到「明遲

更起燈前獨詠」詩

詩興變來爲「感興」

關「身万事自然悲

(注23)

『和漢朗詠集』の詩について『新編日本古典文学全集』は、燃え尽きようとする燈の前で、今年の残り少ない時間が尽きようとしている、その灯りを見ていると、二度と戻らない時の流れを旅する人生というものへの旅愁が、枕のあたりからわき起こってくる、とする。『菅家文草』は「冬夜九詠」の一篇で、寒い夜に目覚めて燈前で詩をよむうちに、「詩興」が「感興」を誘い、自身に関わるすべてに感慨がおこって、自ずと悲しくなる

と詠う。このように漢詩には、室内の「燈前」で思いにふける作例が見いだされる。

○『大江嘉言集』

あめのうちに花をおもふ

11 春の夜のあけもはてなばいでてみむこよひの雨に花咲きぬらん

春雨花をおもふ

21 はるのよのあければとくみむつれづれと桜もよほす雨のふるかな

○『源道濟集』

同殿にて。思<sup>ニ</sup>野花<sup>トイフ</sup>一題を、

217 秋の野は行きては見ねど思ひやる心のうちに花ぞ咲きける

「花を思ふ」は、傍線部分の表現に顕著なように、山や野にある花、または雨中の花を想像して詠む、花を思う心を詠む歌である。特に道済が、花を思うゆえに「心のうちに花ぞ咲きける」と、想像の世界に咲く花を歌っているのが注目される。また、「花を思ふ」は花を思いやる心を題意とするためか、「夜、花を思ふ」という題の作例も多い。

○『続古今和歌集』 春歌下

雨夜思花といふことをうへのをのこどもつかうまつりけるついで

一条院御歌 (注24)

154 くらきよのあめにたぐひてちるはなをはるのみぞれとおもひけるかな

○『実方集』

春の闇の花を思ふといふ題を、よみける (注25)

316 春の夜の闇に心のまどへども残れる花をいかゞおもはぬ

○『能因集』

(注26)

夜思桜花心二首

54 さくら咲春は夜だになかりせば夢にも物はおもはざらまし

55 夜のほども散りや果つらん桜花月ならましかばおきてみてまし

\* 54番は初句「桜さへ」という形で他出（『後拾遺和歌集』98番）

一条院の歌をのぞき、いずれも闇の中の花を思いやる歌である。また雨中散る桜をみぞれに見立てた一条院の歌も、桜は見えないはずで、想像裡の落花を見立てた、観念的な歌である。『能因集』では、桜の咲く春は夜がなければ夢のうちにももの思いにふけることはないのに、夜のうちには散ってしまう花を月なら起きて見ていられるのに、と詠む。

さらに、「夜思瞿麦」という題で、三人が同時に詠んだらしい歌も残されている。

○『源道濟集』

夜思瞿麦

214 夜のほどにさきやしぬらむとこ夏のはなのさかりはいこそねられね

○『大江嘉言集』

夜、とこなつをおもふ

153 あけぬれば色色にあるとこなつによるはにしきのはにぞ有りける

○『能因集』

雨の夜、常夏をおもふ心、道済が家にて人ぐよみしに

20 いかならむ今宵の雨に常夏の今朝だに露のおもりげなりつる

其夜人と以<sub>二</sub>此歌<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>第一<sub>一</sub>矣

「夜」と「とこ(床)」の縁で、「常夏(翟麦)」が組み合わせられたもので、部屋の内、外の常夏のさまに思いを馳せる歌である。

このように「夜思花」の題意には、夜、闇の中の桜は見られないことが前提としてある。夜のうちに散ってしまうだろう、あるいはいま散っている、見えない花を思つて詠む題なのである。

照明技術の未発達なこのころ、屋外の夜は現代では想像の及ばない漆黒の闇であつたに違いない。外の明かりといえば月光がたよりであつた。和泉式部集 314 番には次の歌がある。

314 花にあかで今日も暮れなば水の面に浮かべる月をかくこそは見め

「花」はこの場合桜かどうかわからないが、飽かずに花を眺めているうちに、暮れてしまったので、水面に映る月影を花を見るように見ようという意である。月の光は池に映るが、花は見る事が出来ない。

月光にまぎれる白梅が詠われ(古今集巻第一春歌上 40 躬恒「月夜にはそれとも見えず梅花香をたづねてぞしるべかりける」)、「月のおもしろかりける夜、はなを見て」詠んだ歌もある(後撰集巻第三春下 103「あたら夜の月と花とおなじくはあはれ知れ覽人に見せばや」)。しかし『四条宮下野集』(注 27)に、「月のあかきほどに」

清涼殿の桜を「花見せむ」と折らせて「1ながき夜のひかりのなかりせば雲居の花をいかで折らまし」と詠んでいるのを見ると、月明かりは花を折るためのもので、花自体は室内で活けて楽しんだようである。次の『道明阿闍梨集』では、「花を思ふ」題で月光に照らされる桜が詠まれているが、これも月光のもとに桜を鑑賞して詠うものではない。

○『道明阿闍梨集』

月おぼろにて花を思ふといふ題を

58 ちりぬめる花のにほひも見るべきをあなおぼつかな夜半の月かけ

春の夜花をおもふといふ心を

80 かきくもる月の光もなげかれす 花のかけこそみまほしけれ

月前に花をおもふといふ題を、花山院よませ給ひしに

222 春の夜は月みる空もなかりけり花のうへのみおもひやられて

58番はおぼろな月光ゆえ散る桜が見えない嘆きを歌う。80番は、月の光が翳っても嘆きはしない、翳った花のおぼろな様子こそが見たいと歌う。柏木由夫氏は「月光が翳り、花は見えにくく輪郭のみが判別できる状況だが、それによって題の『花をおもふ』という想像を重んじたことが生かされている」「翳った花の姿に幻想的な美を見出している」(注28)とする。また222番は、花が心配で春は月を見ることもないという歌意で、月に照らされた桜を見た感興ではなく、「月前に」ありつつ、心の中の桜への思いをこそ歌っている。

「燈前思花」題は「夜思花」題の一類であろうが、夜でなく室内の「燈前」という、新しい趣向が加わっている。この題からどのような桜への思いが詠まれていようか。

三「燈の前に花を思ふ」と云ふ心 歌三首

前述したように、和泉式部は周辺の文学教養を享受しうる環境にいた。仮に和泉式部周辺のいずれかの歌会、詩会の時に「燈の前に花を思ふ」という題が、いくつかの題と共に出されたとする。その中で和泉式部は敢えてこの「燈の前」という設定の題を選んだ。二節で考察したようにこの三首は「夜思花」の流れにはあるが、それに「燈の前」という状況を加えた題の心を詠むことが、和泉式部の歌心を刺激したのではないだろうか。

この三首には起・承・転結のような展開(構成)を見て取れるのではなからうか。

461 夜のほどに散りもこそすれ明るるまで火影に花を見るよしもがな

起の第一首。『和泉式部集全釈』(注29)では、次の歌を「心に置く」とする。

○『後撰和歌集』巻第二春中

前栽に竹の中に、桜の咲きたるを見て 坂上是則

54 桜花今日よく見てむ呉竹の一夜のほどに散りもこそすれ

後撰集歌では、「今日見る」はすなわち日中に見ることを意味しており、前提として「夜のほど」の桜は見

られないとの飽きたらなさがある。この後撰集歌の下句の「夜」以下を上句に据えて、「一夜のほど」に散る桜を惜しむ心は同じながら、下句に日中のみならず火影に照らし夜明けまで見たいという発想を加えている。目の前の燈ともしびの明るさに、これで照らせば「夜のほど」の桜を昼と同じく見られるのにというのである（注30）。なお、「夜のほど」を花と組み合わせた例としては和泉式部集の「181夜のほどもうしろめたなき花の上を思ひがほにて明かしつるかな」のほか、前節にみた道濟、能因の歌が目につく程度で、いずれも夜見えないうちに変化する花に思いを馳せる歌である。

見えない夜の桜を、燈の火影に照らして「見るよしもがな」とするのが題に導かれた新しい発想だが、この「もがな」の根底には、実際には室内の燈は外に持ち出せないから、この明るさで見るのは無理な願いだといふあきらめがある。日中の桜の美しさを思うにつけ、そのまま桜を夜も目の前の燈の明るさで見たいという願望と、それはかなわないという焦燥がせめぎ合うのである。

462 火にあてて見るべきものを桜花幾日もあらで散るぞ悲しき

承の第二首。諸註釈では前歌を受け「火にあてて」とするが（「文庫」「全釈」）、先行和歌における用例は、ほぼ「陽ひにあてて」である。すなわち、亭子院女郎花合24番「をる人をみなうらめしみ歎かなてる日にあててしにも置かせじ」（注31）、『仲文集』13番「ゆふだすき袖にかけてもちかひてむゆふ日にあててみではあらじ」、和泉式部続集1020番「君を思ふ心は露にあらねども日に当てつつも消えかへるかな」、いずれも「陽ひ」である。燈ともしび



(火)に桜を見るといふ歌のない時代に、第二首では桜は「火にあてて見るべきもの」とまで断じている。それだけ眼前の燈に照らして桜が見たい、散り初める前に少しでも長く桜を見ていたいという思いが深まっている。しかし燈台は携行できず、実際には明るい光では見られない。一首目の「夜のほど」の「見たい」「見られない」の渴望と焦燥を、第二首では幾日か重ねるのだが、そう幾日も重ねないうちに桜は散ってしまう。第二首の結句「悲しき」は、第一首を受けて、散る桜への愛惜ゆえにより深められた渴望と、どうしても無理だといふ諦念ゆえの悲しみを表している。

463 ともしびの風にたゆたふ見るままに飽かて散りなん花をこそ見れ

第三首は、前二首から大きく転じて、風の前の燈を歌う。まず目に付くのが「たゆたふ」である。「たゆたふ」は、『万葉集』には一三首あるが、古今集の508番「ゆたにたゆたに」のほかは八代集には見られない語で、和歌では波、大海、雲、風、大船、網などとともに歌われることが多い。大きな揺らぎを想像させる語である。

いま見ている燈が風に「たゆたふ」。室内の炎の繊細なゆらめきに大きな揺らぎを感じずるほどに、和泉式部の心は眼前の燈に集中している。そのため室内の炎のほのめきに、いま屋外で吹いている、一気に桜を散らすほどの風の強さを感じるのである。花を散らす風に「たゆたふ」炎を見つめるうちに、花を思つて「たゆたふ」心が重なつてゆく。

「見るままに」は、「見るにしたがつて」「見ているうちに」の意で、和泉式部集には、この歌のほか、和

泉式部自身が詠んだ五首（重出歌を含まず）がある。

10 見るままに下枝の梅も散りはてぬさも待ち遠に咲く桜かな

目の前で変化するまでの長い間、「じっと見つづける」自分を、和泉式部は歌う。「見るままに」は、変化する対象に愛着し注視する深さをえぐる語なのである。さらにこの第三首の「見るままに」は、「ゆらぐ燈を見続けろうちに」「見続ける目の前で飽き足らぬままに散る花」のように、「燈」と「花」のイメージを重ねる役割も果たしており、燈の風にたゆたう姿を見るうちに「花をこそ見れ」の結を導く。「見るままに」「見れ」が重複する形だが、こうした重複は和泉式部の歌にはしばしば見られ、軽快なリズムをなしている。例えば「214 見には見ん」「790 見には見えじ」「994 見にのみぞ見る」「564 待つ人は待てども見えであぢきなく待たぬ人こそまづは見えけれ」などである。

第三首の歌い出しの、屋内に吹き込む風に眼前の「ともしび」が大きく揺れるさまは、外にはもつと強く、桜を散らす風が吹いていることの暗示である。前二首には詠まれていない「風」が登場したことで、目の前で消えようとする「燈」のはかなさと、みるみるうちに散るのだから外の「花」への思い―見たいのに見られない焦燥が引き出され、第三句「見るままに」を継ぎ目に、両者は重ねられてゆく。そして、いま風に散り舞っているだろう見えない花を、「たゆたふ」目の前の燈に見るのだ、と結ぶ。

第三首の結「花をこそ見れ」は、前二首で眼前にない花を「見るよしもがな」「見るべきものを」と、思い続

けた結びともなっている。ここではじめて「花を見た」のであるが、もちろん花の姿そのものを見たわけではない。ここで見えたのは、愛する花をずっと「見たい」と思う心、「思花」の心が高じた結果として燈に見えた、心のなかの、想像の桜である。

和泉式部には「いとへども消えぬ身ぞ憂き羨まし風の前なる宵のともし火」（和泉式部集 1036 番）という歌がある。「風の前なる燈」は、どんなに輝いても一瞬の風で消えてしまう。それは桜が咲き誇っても一陣の風で散ってしまうのと似ている。『燈の前に花を思ふ』と云ふ心はこの第三首 463 番に集約されるのではないだろうか。二首で、すぐに散る桜を惜しみ、夜も昼も見たいという、強い気持ちを詠む。そして三首目で風に揺れる燈を見て、とうとう風に散ってしまう桜の姿を目にうかべる。燈も桜も等しくはかなく無常のものなのである。

第三首で見た桜は、燈と一体となって心に映る桜であり、燈の持つ、闇に沈む前の一瞬のまたたきのイメージが、二重写しになっている。消滅と隣り合わせの瞬き、まさにいのちの輝きそのものの桜なのだ。思いの深まっ

てゆく果てに、闇に瞬く光に命のほのめきを「見る」。そう歌い上げる言語感覚と感性には、  
1162 | もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る | （後拾遺集卷第二十維六）  
にも共通するものがあるのではなからうか。

#### 四 まとめ

『燈の前で花を思ふ』といふ心」という題は、新作の漢字四字題と見られるが、管見の限り他の歌集には確

認できず、当時のいずれの歌会、歌合で出された題かも不明である。ただし、「夜、花を思ふ」は、夜のうちの  
見えない花への愛着を詠む題として、既に多くの作例が見られた。和泉式部はこれら「夜思花」の発想を踏ま  
えつつも「燈前思花」題の独自性に応え、室内の燈の前で屋外の桜を燈に「見る」と思う心を詠んでゆく。

この「燈の前」の設定は重要である。なぜなら、闇のなかの瞬きである「燈」は、消滅無常を強く意識させ  
るからである。また当時の油の貴重さゆえか、牡丹を「火を採りて」（松明などを手に取って）夜見ることでは  
きても、大きな花木である桜を全面に照らして見るのは不可能だったとみえ、夜桜を鑑賞する歌が平安時代に  
は存在しない。つまり目の前の燈の明るさで「見るよしもがな」「見るべきものを」と願えば願うほどに、そう  
できない焦燥が掻き立てられることになる。もの狂おしいまでの桜への愛着と、いくら愛着しても儂く消えて  
しまう（散ってしまう）無常さを、「燈の前」は思い知らせる。その思いの深まりを第一首（起）、第二首（承）  
と丁寧に歌うことで、第三首の「燈」「花」双方の儂さを引き出す「風」（転）に大きく揺れる心が導かれ、そ  
の思いの深さが「花」の姿を見る「結」へと繋がってゆく。ここには帥宮挽歌の五十首歌にも似た構成意識があ  
ると考える。

注1 井上宗雄「『心を詠める』について―後拾遺・金葉集にみられる詞書の一傾向」（『立教大学日本文学』35号、1976・2）

- 注 2 拙稿『桜』歌の系譜―古今集から後拾遺集へ―(東京女子大学紀要『論集』 第六十六巻三号 2016.3)
- 注 3 平安朝漢文学研究会編『平安朝漢文学総合索引』(吉川弘文館 1987)
- 注 4 「三月三日紀師匠曲水宴和歌」(『群書類従』・第十一輯和歌部 續群書類従完成 會 昭和34 訂正三版)
- 注 5 小沢正夫『古今集の世界』(増補版 塙書房 昭和51) 橋本不美男『王朝和歌史の研究』(笠間書院 昭和47) 浅田徹「題詠と表現―金葉集の時代」(秋山虔編『平安文学史論考』 武蔵野書院 2009)
- 注 6 久保木寿子「和泉式部の詠歌環境―その始発期」(『国文学研究』七十一集 昭和五五(早稲田大学国文学科))
- 注 7 一例をあげれば和泉式部集187番〜198番(重出歌851番〜864番)の「権中納言の屏風のうた」の歌は、『大江嘉言集』122番〜132番(屏風の歌)、『源道濟集』87番〜98番(権中納言とのゝ屏風の歌)と、同じ図柄で詠んだ歌と考えられている。
- 注 8 桑原博史『源道濟集全釈』(風間書房 1987)
- 注 9 春秋会『源兼澄集全釈』(風間書房 平成3)
- 注 10 平安文学輪読会編『長能集注釈』(塙書房 平成元)
- 注 11 注8及び福井迪子「大江嘉言考」(『一条文壇の研究』桜楓社 昭和62)
- 注 12 「愛水多棹舟 惜花不掃地」
- 『白氏文集』 卷五二・二二八九・「日長」(『新釈漢文大系第105巻 白氏文集 九』(明治書院 平成17))
- 注 13 『類聚句題抄』には、慶滋保胤が「惜花不掃地」を題として作った詩がある。本間洋一氏は和泉式部のこの歌を「惜花不掃地」の和歌詠の例にあげている。

- 本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院 2012）
- 注 14 「暮春陪都督大王遊覽法興院同賦庭花依旧關」（今浜通隆注釈『本朝麗藻全注釈』 新典社 平成5）
- 注 15 『長能集』 注10に同じ
- 三保サト子編『道命阿闍梨集 本文と索引』（和泉書院 昭和55）
- 注 16 和泉式部集 868～876 重出歌125、132～149）
- 注 17 糧麦会編『平安和歌歌題索引』（1994 増補版）
- 注 18 小松登美「和泉式部と漢学」（『和泉式部の研究』笠間書院 1995）近藤みゆき「和泉式部と漢詩文」（『古代後期和歌文学の研究』2005）
- 注 19 『白氏文集（三）』新釈漢文大系第99巻（明治書院 1988）
- 注 20 注18及び各私家集目録
- 注 21 「燈火器」（『日本の美術』177号（至文堂 1981）
- 『平安時代史事典』資料索引編（角川書店 1994）
- 注 22 菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集19 講談社 1999）
- 注 23 川口久雄『菅家文章 菅家後集』（日本古典文学大系72 岩波書店 昭和41）
- 注 24 『列聖全集』御製集第一巻一条天皇御製（列聖全集編纂會 大11）採録で確認
- 注 25 大養廉、後藤祥子、平野由紀子校注『平安私家集』（新日本古典文学大系28 岩波書店 1994）
- 注 26 注25に同じ

注 27 注 25 に同じ

注 28 柏木由夫「道命阿闍梨集」注釈(三)(大妻女子大学紀要・文系、第四十五号平成25年3月)

注 29 佐伯梅友・村上治・小松登美著「和泉式部集全釈」正集篇(笠間書院 2012)

注 30 『宇津保物語』祭の使「夜にいりて、灯籠間ごとにかげ、灯台間なく立て、統松ともし渡しつ」の結果「昼よりもあかく照りみちたるほかげに見えたる姿」という記述がある。中野幸一校注・訳『うつほ物語①』(新編日本古典文学全集14 小学館 1999)

注 31 『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小学館 1994) 収載

\*私家集の『大江嘉言集』、『仲文集』は「新編国歌大観(古典ライブラリー)」を本 文とする。

本論は「東京女子大学日本文学」115号(2019.3)投稿 掲載予定

#### 第四部 「露」の歌

第九章 勅撰集の「露」の歌 後撰集と後拾遺集を中心に

一 はじめに

和泉式部の歌には「無常」を詠む歌が多いという指摘が既にある。また、和泉式部は「露」の歌を多く詠んでいる。この、一瞬で消えるはかないものとして古来から詠まれてきた歌材「露」をどう詠み込んでいるか、その歌い方を考察することで、和泉式部が「無常」をどう詠むのか、和泉式部詠の表現としての「無常」を考えたい。そこでまず、勅撰集において「露」がどのように詠まれているかを考察する。

「露」は自然の景物のひとつとして、万葉集の時代から歌に詠まれている。古今集の仮名序には「かくてぞ、花を賞で、鳥を羨み、霞を哀れび、露を悲しぶ心、言葉多く、さまざまに成りにける」とある。三十一文字の歌の形が定まったあとの歌のさまざまな形の類例として、「露」があげられ、「悲しぶ」という心と結びつけられている。「露」は和歌を詠むにあたり、感興を催す歌材として身近なものであった。

『歌ことば歌枕大辞典』で渡部泰明氏は、歌ことばの「露」は、主に秋に用いられ、草木の上に置く用例が多く、光ることから玉に見立てられ、また、草葉を紅葉させるもので、比喩としては涙に喩えられことが多く「露」と涙が交錯し、重なり合って、景情一致の情景を生み出すところに真骨頂がある。」とまとめている。また露は消えやすいものであるからはかないものに喩えられ、「蟬丸が詠んだという、『秋風になびく浅茅の末ごとに置く白露のあはれ世の中』（新古今集・雑下・一八五〇）は、葉末の白露にこの世の無常が突き詰められている。

『露の命』『露の身』という連語の場合の露も同様のニュアンスを背負う」とする。(注1)

勅撰集において「露」の語を詠んだ歌は、主に秋部に多い。古今集では「露」の歌四十四首のうち十九首、後撰集八十九首のうち実に四十八首が秋部にある。拾遺集では五十首のうち八首、後拾遺集は四十一首のうち二十



一首が秋部（拾遺集は雑秋を含む）である。一方で「露」歌は恋歌、離別、哀傷、雑にもあるが、これらの部立でも秋の景物と共に詠まれる形が多いので、やはり「露」は秋の景物と捉えられていたといえよう。ただし夏の「露」の歌も数は少ないが、各集に見いだされる。

この勅撰集の露の歌の比較について、甲斐知恵子氏は、古今集においては「四季の露の歌は、いずれも草木、花、山、田野にやどる露をうたい、かつ露を、玉や、雁の涙、稻おほせ鳥の涙にたとえるという趣向のものである。」とし、また「白露」、「朝露」、植物におく露を詠じた歌等に言及し、「こうして『古今和歌集』の露の歌には、前代『万葉集』（28首）につづき、「白露の美」がよまれて、春は白露と柳の浅緑に新鮮な美を求め、秋はまさに「白い秋」で、萩、女郎花、菊、桔梗に置く白露の透明な美しさが賞でられ、色彩的には、白、紫、淡黄色、紅葉色などの、すっきりした美しさがみとめられる。露は、秋のものとして人々のたえがたい悩みや、さまざまな想い、恋心をたくしたものとみることができよう」と論じている。ついで後撰集、拾遺集において用語、表現の変化や、配列の違い等を詳述している（注2）。

これら三集及び後拾遺集の秋部を詳細に見ていくと、露という景物は基本的には秋の美を詠うものであり、植物とともに詠む、玉とみる、涙のたとえとなる、袖・袂などと詠むといった類型は古今集以来同じである。組み合わせられる素材では、萩は三集とも見られ、後の後拾遺集に最も多い。草、草葉（草葉に置く露）、女郎花も多く、行事との組み合わせで菊も詠まれる。また、露は木々の木の葉を染めるといふ発想から、特に古今集では「木の葉」「木々」「木の下」との組み合わせが見られ、また、「あきの野」「秋の夜」と露の組み合わせは四集とも

に詠まれている。後拾遺集では、浅茅・荻など新しい組み合わせもあるが、露そのものを主題とする歌は少なく、自身の感興を詠む歌が多く見られる。

このように「露」は秋の歌に主に詠まれているが（季節としては秋）、露自体が秋に限った景物ではない。夏の朝露もあるし、露を詠んだ夏歌もある。

「露」は自然現象であり、それ自体に主張があるわけではない。無機質な人工物や石に水滴が落ちていても、多くの人は関心を持たないであろう。しかし、たとえ石の上に置いた水滴でも、それに光が当たって輝いた時、さらに白い石の上だったりすればなおさら、透明で光る美しい玉と見て人は感興を催され、歌を詠む。蜘蛛の巣の糸においた露、草花や木々に降りた露は、露とその置かれた景物は相互に影響しあって、人間の心を捉え、その結果生じた感興が詠まれる。また水滴は涙にたとえられ、露に濡れることは自身の涙で濡れることを容易に連想させる。さらには「露」は、そのままでは長続きしがたく、日が当たれば蒸発し、風が吹けば草花からころり落ちてしまう。ゆえに「露」の歌は無常やはかなさを思う感慨に転じてゆく。加えて「秋」は古今集以来、凋落する、あるいは一人寝の寂しい、物悲しい季節と捉えられており、これが「露」のイメージに影響するところもある。このようには、「露」いろいろな要素と組み合わせられて、さまざまな意味が見いだされる歌材として生きている。

このような「露」の歌について、まず、示したように主に「露」の歌が八十九首と他の勅撰集より圧倒的に多い後撰集と、和泉式部の後の後拾遺集の夏歌、秋歌を見てみたい。おおまかな分類として（一）露そのものを詠

む歌と、(二) 露が誘う心象を詠む歌、に分けて見る。ただ、必ずしも明確に分けられるものではないので、どちらにも入る歌もある。後撰集に多い贈答歌はここには含めていない。

## 二 後撰集の露の歌

後撰集には前掲のごとく秋部に四十八首の露の歌が見られるが、特に巻第六秋中の歌八十首のうち、三十二首が露を含む歌である。そして、275番から293番のうち四首をのぞく十四首、300番から316番まで一首を除いて十六首が連続しており、「露」の歌がまとまっている。ともに詠まれる歌材は古今集を引き継いでいるが、さらに幅が広がっている。また、「白露」の詠まれている歌が、後撰集では二十九首(古今集五首、拾遺集・後拾遺四首)と多いことが特徴である。

### (一) 露そのものを詠む歌

露を玉に見立てる、玉を貫く表現は、『万葉集』から見られ(後撰集305番歌は 万葉集巻八秋雑歌 1576番大伴家持歌)、古今集では巻第一春歌上の遍昭の「27浅緑糸よりかけて白露を珠にもぬける春の柳か」があり、秋歌の222番、225番に詠まれている。「露」を「白玉」にたとえる例は勅撰集には思いの外少なく、後撰集の三首、詞花集に一首(108番)あり、万葉集にも既に一首(1551番)ある。

後撰集においては、秋の部ではおよそ八首ほど見られ、いずれも「露」を「玉」と見立てる。

題しらず

藤原守文

270 草の糸にぬく白玉と見えつるは秋の結べる露にぞ有ける

題しらず

よみ人も

311 白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり

この二首は白露を白玉かと見間違えるという発想であり、次の二首は、

よみひとしらず

305 わがやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫く物にもが

よみひとしらず

312 秋の野に置く白露の消えざらば玉にぬきてもかけて見てまし

は、いずれも露が消えないものならば玉に貫きたいという気持ちを詠んだ歌である。

また、次の歌は同じ秋の野の露を詠んでいる。

つらゆき

307 秋の野の草は糸とも見えなくに置く白露を玉と貫く覧

文屋朝康

308 白露に風の吹敷秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける

一方は草が糸とも見えないのに露を貫いて玉と見せている、一方は貫きとめられないで風に散っていると、正  
反対の情景を詠んでいる。

次に「露」が他のものに影響するという表現には「露は木々を紅葉させるもの」という美的な発想がある。古今集で、敏行の「257 白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちゞに染む覧」、よみ人しらずの「259 秋のつゆいろく異にをけばこそ山の木の葉の千種なるらめ」がある。後撰集では次のような歌がある。

題しらず

よみ人も

310 置くからに千種の色になる物を白露とのみ人のいふらん

よみ人しらず

369 秋の野の錦のごとも見ゆる哉色なき露は染めじと思に

370 秋の野にいかなる露の置き積みば千ゞの草葉の色変はるらん

よみ人しらず

377 雁鳴きて寒き朝の露ならし竜田の山をもみだす物は

もとかた

381 遅く疾く色づく山のもみぢ葉は遅れ先立つ露や置くらん

後撰集 310 番は古今集の敏行の歌をうけて「秋の紅葉に置くや否やいろいろな色の露になるのになぜ白露というのか」と詠む。369 番は秋の野は「色なき露」が染めるわけでもないのに錦のごとく見えているとし、370 番は古今

集 259 番の発想と同じく、いろいろな色の露が草葉の色を変化させることを前提に詠んだ歌である。このように後撰集では「露」は秋の野、山の木々を色づかせるものという発想から、無色の白露、その透明な露が木々や草を多種多様な色に染め上げる不思議がさまざまな形で詠まれている。

もう一つ、「露」は涙の比喻になる。自然の情景の中で詠む歌では自然物に影響を及ぼす涙である。これらは(二)に入れてもいいものであるが、人の涙を直接詠んでいないので、(一)に入れた。古今集ではよみ人しらず「221 なきわたる雁の涙やおちつらむ物思宿のはぎのうへのつゆ」、壬生忠岑「258 秋の夜の露をばつゆとをきながら雁のなみだや野べを染むらん」同じく忠岑「306 山田もる秋の飯廬にをく露はいなおほせ鳥なの涙なりけり」と、鳥の涙に喩えられている。後撰集では次の歌がある。

よみ人しらず

242 天河流て恋ふるたなばたの涙なるらし秋の白露

よみ人しらず

263 風寒み鳴く秋虫の涙こそ草葉色どる露と置くらめ

242 番は織女の涙、263 番は秋虫の涙であるが、古今集を含め、情景の中で詠まれる露の涙はいわば想像の涙である。天空よりの彥星を恋ふる涙を、地上の白露に見立てるといふ242 番は広い空間を感じさせ、一方草むらのどこかで鳴く虫の涙というとして細かい小さなものを思いやる263 番は繊細さを感じさせる。この後の拾遺集、後拾遺集の秋、雑には見当たらない発想である。詞花集に好忠「118 秋の野のくさむらごとくにをく露は夜なく虫のなみだ

なるべし」が見られる。

(二) 露が誘う心象を詠む歌

次にあげた歌は露そのものを詠んだ歌ではない。「露」を置く情景の喚起するその心象を詠んだ歌である。まず「露」を「袖」に「置く」発想である。涙と露の関係でいえば(二)の最後の例に似るが、(一)は露を涙と見て居るのに対し、こちらはむしろ涙を露と見ている。だからこそ「袖の露」なのである。

題しらず

天智天皇御製

302 秋の田のかりほのいほの苦を荒みわが衣手は露に濡れつゝ

よみ人しらず

303 わが袖に露ぞ置くなる天河雲のしがらみ浪や越すらん

302 番は著名な歌であり、木船重昭氏は「韻律流麗、感情の露出を抑え、客観的叙景の中に情感をこめる」(注3)と評している。

よみ人しらず

313 唐衣袖くつるまで置く露はわが身を秋の野とや見るらん

314 大空にわが袖ひとつあらずかなしく露や分きて置くらん

315 朝毎に置く露袖に受けたため世のうき時の涙にぞ借る

秋歌とてよめる

つらゆき

316 秋の野の草もわけぬをわが袖の物思なへに露けかるらん

313 番から 316 番は「袖に置く露」が「涙」を暗示しているとも、逆に、涙に濡れた袖を露にたとえた恋のなげきともとれる。「露」と「袖」の組み合わせは古今集に少なく（三首）、後撰集に圧倒的に多い（十四首）。

次の歌はいずれも朝には消える「露」が「むなしく秋の夜に置き明かす」ことを、わが身がむなしく一人で物思いしつゝ起き明かすことにならずらえながら詠む。

題しらず

よみ人も

290 秋の夜をいたづらにのみをきあかす露はわが身の上にぞ有ける

題しらず

よみ人も

424 わがごとく物思ひけらし白露の夜をいたづらに起き明かしつゝ

また、次の歌は女郎花が女性と重ね合わせられて詠まれている。

よみ人しらず

275 秋の野の露に置かるゝ女郎花はらふ人無み濡れつゝやふる

ここまで後撰集の秋の部の独詠に見られる「露」の歌を見てきた。「露」そのものの「役目」のような二つの



観点から内容を考察した結果、(一)「露」そのものを詠む歌、については古今集などと比べて特に大きく違つてはいない。内容は技巧よりも率直な詠みかたの歌が多く、各項で考察したように古今集にはない新しい発想の歌も多少混じっていた。

(二)の「露」が誘う心象を詠む歌 については、情景から感興を引き起こされる歌を範疇を取り上げたが、実は恋の歌が多く見られた。後撰集は雑纂的で四季部にも恋の歌が入っていることは指摘されていることである。「露」の置く情景への感興のみならず、我が身に引きつけた歌を詠む場合、物思いが恋の想いと重ねられ、範圍としては少々曖昧なものになっている。そして秋の部の「露」の歌では「露」が美しくはかないものであることは、認識されているが、命のはかなさまで詠まれている歌は多くはない。

次の歌は後撰集の夏部にある歌である。

題しらず

193 常もなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ

夏の暑さで夜間か早朝にしかみることが出来ないであろう夏草の露と、それを頼みとする命のあることを「はかなし」と表現している。

この歌は『新撰和歌』、『新撰朗詠集』にも採られているが、いずれも「つれもなき」になっている。「つれもなき」であると、「命をたのむ心を無視して」という意になる。「露」の「無常」、ならぬ「無情」を嘆く歌である。「夏草」は『新撰万葉集』卷之下にある。

321 夏草裳 夜之間者露丹 憩濫 常焦留 吾曾金敷

なつくさもよのまはつゆにいこふらむつねにこがるるわれそかなしき

のように、暑さに焦がれるものであり、しばし夜の間の露にわずかに「憩う」のに、その露は無情にもすぐ消えてしまう、それが「つれもなき」で、それでもわずかな露で命をつなぐ蟬のはかなさ、ということになるうか。

後撰集の「常もなき」は「命とたのむ蟬のはかなさ」、つまり蟬のみならず、露の無常をいうのだろう。甲斐知恵子氏は「ここには『つねもなき』、即ち『無常』がうち出され、夏草、露、蟬に『生命の常なき』、草葉にやどる露から人世のはかなさを蟬によって詠出して」いるとする。(注4)

その意味で193番歌は後撰集の「露」の歌の中でも、めずらしく、無常と命のはかなさにまで思いをさせて詠んだ歌である。

三 後拾遺集の露の歌

次に後拾遺集の秋の露の歌を考察する。後拾遺集では、秋部二十一首のうち十九首が秋上に見られ、そのうち295番から310番まで二首を除く十四首が連続している露の歌群である。

前述の二つの分類は古今集、後撰集の歌から導きだしたものである。これに沿って後拾遺集において考察を試みたが、かなり詠歌の様相が変化している。

(一)「露」そのものを詠む歌

306 さゝがにの巢がく浅茅の末ごとに乱れてぬける白露の玉

寛和元年八月七日、内裏歌合に

よみ侍りける

橘爲義朝臣

307 いかにして玉にもぬかむ夕されば萩の葉分きに結ぶ白露

後撰集では多く詠まれていた「露」を玉と見立てる歌は、この二首のみである。蜘蛛の糸に置く露をうたう歌は、古今集に文屋朝康の「225 秋の野にをくしらつゆは珠なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ」の歌がある。ここでは「さがにのすがく」という蜘蛛の巢の張った様子を詠み、そこに置く露を「乱れてぬける」と表現している。前掲の古今集や後撰集など、これまでの「玉」にぬく「露」はひと筋にいらんているイメージであったが、浅茅に広がった蜘蛛の巢に露が一面にかかる様子から、「乱れて」の表現が生まれたのであろう。『長能集』では「77 ささがにのすがく葉ずゑの浅茅よりみだれてかかるしらつゆの玉」（新編国歌大観）とあり、「みだれてかかる」でよりいっそういろいろに露が降りている光景が連想されよう。なお、「浅茅」と「露」の組み合わせは勅撰集では初出である。また、307 番でも、夕方に結ぶ露、萩の葉分きの露と、これまでの勅撰集にはない表現がある。「萩」と「露」の組み合わせも後拾遺集に初出である。そして、後撰集では「玉に貫いて見たい」と詠んでいるが、この歌では「いかにして玉にもぬかむ」と一歩進んで自分から玉に貫くという意思を示している。

「露」の美しさは伝統的な主題であるが、後拾遺集の秋部にはこの二首以外ない。「露」が主題の歌では次の

ような歌もあげられる。後にのべるが、これらはむしろ（二）露が誘う心象を詠む歌に入る歌である。

草むらの露をよみ侍りける

藤原範永朝臣

304 今朝来つる野原の露にわれぬれぬうつりやしぬる萩が花摺り

題不知

良暹法師

308 袖ふれば露こぼれけり秋の野はまくりにてぞ行くべかりける

土御門右大臣家歌合によめる

源親範

309 秋の野は折るべき花もなかりけりこぼれて消えむ露のをしさに

次に「露が木々の葉を染める」という表現は後拾遺集にはない。辛うじて、次の一首が見られるくらいである。

天曆御時御屏風に、菊を翫ぶ家ある所をよめる

清原元輔

353 うすくこく色ぞ見えける菊の花露や心をわきて置くらん

この歌は『貫之集』を見ると、延喜二年の屏風歌（158番）とし載っており、貫之の歌となっている。いずれにしても詠まれたのは延喜または天曆期でらしく、露が花の色に影響を与えるという美意識の色濃い歌である。後拾遺集の撰歌の対象として「露が木々の葉を染める」がなかったのは、固定の観念として珍しくなく、取り上げられなかったのであろうか。ただし、「露」と「紅葉」の取り合わせは、中世以降にも詠まれている。

また、涙の比喩で自然物への影響と考えられる歌は次のようなものである。古今集や後撰集に見られた「雁の

涙」や「虫の涙」はない。

七月七日、庚申にあたりて侍けるによめる 大江佐経

239 いとゞしく露けかるらん織女の寝ぬ夜にあへるあまの羽衣

後撰集の242番の歌に通じるものがあるが、後撰集では地上の白露をそう見たのだが、この歌では「・・らん」と、天上の天の羽衣を想像しての歌」である。一晚中起きていなければならぬ庚申の夜の感興「寝ぬ夜にあへる」に焦点があるらしい。後拾遺集歌に比べ、後撰集は地上の露を実際に詠むぶん、すつきりしていようか。

次の298番は、297番の詞書と同じ心を詠んだとあり、萩を擬人化して、「露」は「萩の涙」と喩えている歌である。

萩のねたるに、露のおきたるを、人くよみ

侍りけるによめる

新左衛門

297 まだ宵にねたる萩かな同じ枝にやがておきある露もこそあれ

同じ心をよみ侍りける

中納言女王

298 人しれずものをや思秋萩のねたるがほにて露ぞこぼるゝ

また、次の歌は菊を擬人化して、菊におく露を菊の涙と喩えている例である。

西の京に住み侍りける人の身罷りて後、籬の

菊を見てよめる

恵慶法師

347 植ゑおきしあるじはなくて菊の花おのれひとりぞ露けかりける

以上後撰集のように鳥や虫の涙とする歌はないかわりに、花の涙とする歌が後拾遺集にはみられるのである。

(二)「露」が誘う心象を詠む歌

「露」が置く情景からさそわれるその心象を詠む歌である。「露」のを「我」からの視点で詠む、あるいは「我」の感興を詠む。後拾遺集の秋の部の「露」の歌はほぼこの中に入るものである。

後撰集に見られた「露」を「袖」に受ける歌はない。逆に次のような歌もある。

題不知

良暹法師

308 袖ふれば露こぼれけり秋の野はまくりでにてぞ行くべかりける

また、袂や袖が露（涙）でぬれる発想の歌は、次の三首に見られる。

みなどといふ所を過ぐとてよめる

能因法師

296 思ふことなけれど濡れぬわが袖はうたゝある野辺の萩の露かな

世をそむきてのち、磐余野といふ所を過ぎてよめる

素意法師

305 磐余野の萩の朝露分けてゆけば恋ひせし袖の心地こそすれ

題不知

源道濟

316 よそにのみ見つゝはゆかじ女郎花折らん袂は露にぬるとも

296番歌は『能因集』（注5）には詞書の地名が違い、また和歌の初句が「おもふことなければ」となっている。

出家の身で思うことはないはずの袖がぬれてしまったことを、新大系では「思い悩むことはないはずの身なのに（涙で濡れるように）濡れてしまったことだ、困った野辺の露であることよ。」と、「うたたある」を「誤解されそうで」としている。藤本一恵氏は「思うことはないけれど、わたしの袖はつい涙で濡れてしまう。それをいよいよしめつぼくさせる野辺の萩の露だなあ」と「うたて」を「ますますひどく」と解釈している（注6）。『能因集』の解釈では初句が違うので「ぬれぬ」は否定形として「物思いすることがないので濡れもしないわが袖を、あやにくな野辺の萩の露が濡らしてしまった。」とする。いずれの解釈でも、萩の露で袖が濡れたことと、それが物思いの涙にぬれたことが過去にあったことが契機となって詠まれている。

305番は出家後に萩の朝露にぬれた袖を、在俗時の後朝の別れの朝の涙と思いついて出しているか、思い起こしながら涙していたのかもしれない。

316番は、『道濟集』（注7）には「左大臣殿の、秋の花御覽ぜし御供にて、」とあり、道長のお伴をしていた時に見た女郎花に呼びかけた歌で、女郎花にかかる露で袂がぬれてもと詠む。微妙に恋のイメージを感じさせられる歌である。

以下はそのほかの思いを詠む歌である。

藤原長能

289 宮城野に妻よぶ鹿ぞさけぶなるもとあらの萩に露や寒けき

藤原家経朝臣

291 鹿の音ぞ寝覚めの床にかよふなる小野の草ぶし露やおくらん

物おもふことありけるころ、萩を見てよめる 伊勢大輔

295 起きあかし見つゝながむる萩の上の露吹きみだる秋の夜の風

八月晦に萩の枝につけて人のもとにつかはしける

和泉式部

299 かぎりあらむ中のははかなくなりぬとも露けき萩のうへをだにとへ

はらかなる人の家に住み侍りけるころ、萩

のをかしう咲きて侍りけるを家主はほかに侍

りて音せざりければ、言ひつかはしける

筑前乳母

300 白露も心おきてや思ふらん主もたづねぬ宿の秋萩

草むらの露をよみ侍りける

藤原範永朝臣

304 今朝来つる野原の露にわれぬれぬうつりやしぬる萩が花摺り

土御門右大臣家歌合によめる

源親範

309 秋の野は折るべき花もなかりけりこぼれて消えむ露のをしさに



秋、前栽の中にをりゐて酒たうべて、世の中

の常なきことなど言ひてよめる 大中臣能宣朝臣

310 草の上におきてぞあかす秋の野のつゆことならぬわが身と思へば

思野花といふ心をよめる 良暹法師

330 朝夕に思ふ心は露なれやかゝらぬ花の上しなれば

西の京に住み侍りける人の身罷りて後、籬の

菊を見てよめる

恵慶法師

347 植ゑおきしあるじはなくて菊の花おのれひとりぞ露けかりける

289 番は『長能集』192 番によれば屏風歌、291 番は祐子内親王家歌合の歌であり、実景に即しているわけではない

が、両歌とも遠く泣く鹿の声を聞いて、「露」の置いていることを想像する。289 番は古今集 694 番を本歌としてい

るので妻呼ぶ鹿の声は「君をこそまで」の意を含む。鹿の声と「露」の取り合わせは、涙を暗示し、ひとり寝の

わびしさを感じさせる。ただし、貫之集の 408 番「妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露と成るらん」という

歌があることから、あるいは「鹿の涙」を連想させるものか。そうすると(二)に入れるべきものかもしれない。

295 番は「萩の上の露」が、露が重たくて萩の枝がしなりこぼれ落ちるといふ定番の情景ではなく、萩が風に吹

かれ揺れ動いて、露が乱れて散るといふ。それを物思いしながら一晩起き明かして見ているといふことは、その

内心の乱れを表現している。当然涙も加っていよう。300 番は、主がたづねて来ない家で萩の花の上の白露の寂し

さを思いやった歌で、自身の思いも重ねているとみる。304番は、詞書に「露」が含まれる歌である。朝通つてきた野原は露が置いていたのでぬれてしまった。萩の花の色に衣が染まったのだらうかと詠んでいる。「萩の花摺り」は「萩の花が咲いている原に分け入って、衣服が萩の花の色に染まること。またその衣服」（日本国語大辞典）という。野原は萩の野原であったことがわかり、萩の露で濡れたのである。309番、330番はともに露のかからない花はないとして、309番は露を惜しんで花を折ることができないとする実景の歌であり、330番は「心は露なれや」と、「露がかかる」を「心がかかる」と重ねた観念的な響きのある歌である。347番は亡くなってしまった人の家の籬の菊が咲いて、花に置いている露を見て菊の涙と思う。ここには菊を植えた故人への哀悼と、むなしく独り咲いている菊への愛惜の気持ちが込められている。310番は無常を詠むともとれる歌であり、特に注目したい。後拾遺集の秋の部の「露」の歌は、次のような特徴が見られた。

まず、秋の露の歌に見られる伝統的な素材の取り合わせは後拾遺集にもみられた。萩、鹿、菊秋の野などで、浅茅、萩が新しい取り合わせである。

表現の方法としては、「露」のある情景として、「萩の上の露」を、「野原の露」と「萩の花摺り」で暗示する例や、「萩のねたるに露のおきたる」「うたゝある野辺の萩の露かな」と工夫された言回しや、また前述したが「さゝがにの巢がく浅茅の末」、「萩の葉分き」など、従来にない表現も確認できる。また、後撰集では「露」は「置く」という言葉で詠まれるが、後拾遺集では「袖ふれば露こぼれけり」、「こぼれて消えむ露のをしさに」、「ねたるがほにて露ぞこぼるゝ」という表現がでてくる。「露」が「こぼれる」は後拾遺集に四首（哀傷に一首

569 番を含む）あり、勅撰集では後拾遺集からである。

「無常」ということに関しては、直接に言葉で表現している歌は310番の詞書のみであるが、他の歌においても「露」の消えやすいはかない性質を無常と感じていることは言外に汲み取れ、言葉で表現している以上に詠み手の心象が反映されていると考えられる。

後拾遺集の「露」の歌は、(一)「露」が誘う心象を詠む歌 の分類に入ると前述したが、こうした点がそれまでの勅撰集の「露」の歌と違う特色であると言えよう。

次に秋部以外の勅撰集の「露」の歌であるが、勅撰集秋部では「露」は消えやすくはかないものという前提の上で歌は詠まれているが、無常というところまで踏み込んだ歌はあまりない。むしろ、恋、離別、哀傷、雑歌などの部で無常、露の命、はかないといった歌が見られる。以下、各集で用例をあげる。

『古今和歌集』巻第十二 恋歌二

ともものり

615 命やは何ぞは露のあだものを逢ふにし換へばおしからなくに

『後撰和歌集』巻第四 夏

よみ人しらず

193 常もなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ

巻第十四 恋六

物言ひわびて、女のもとに言ひやりける

1008 露の命何時とも知らぬ世中になどかつらしと思をかゝる

卷第十八 雑四

題しらず

1263 人心たとへて見れば白露の消ゆる間も猶久しかりけり

『拾遺和歌集』卷第二十 哀傷

病して人多く亡くなりし年、亡き人を野ら藪

などに置きて侍を見て

すけきよ

1325 皆人の命を露にたとふるは草むらごとに置けばなりけり

『後拾遺和歌集』

卷第十四 恋四

女につかはしける

入道撰政

813 思ひには露のいのちぞ消えぬべき言の葉にだにかけよかし君

秋部によく見られる、「露」の美しさや「露」のある情景を愛でる歌とは異なつて、「恋部」ではわが身を「露の命」のはかなさにたとえて心情を訴える歌がよく見られるが、これはむろん和歌の上の言葉である。「恋死」

と同じく、激しい恋情を表現するひとつの方法に過ぎない。これに対して「哀傷」では、現実的な「死」を詠む。特に拾遺集の1325番歌は、疫病により死者があちこちに放置されているという、凄絶といえる状況を目の当たりにしての人の命のはかなさへの思いを「露」と詠んでいる。

こうした和歌史の下、和泉式部が「露」をどう捉えて詠んでいるかを、十章で考察する。

注1 久保田淳、馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店 1999）

注2 甲斐知恵子「勅撰集の自然の歌と美意識―露（その一）―」学苑505号 1982 「勅撰集の自然の歌と美意識―露（その

一）―」学苑517号 1983）

注3 木船重昭『後撰和歌集全釈』（笠間書院 1988）

注4 甲斐知恵子「勅撰集の自然の歌と美意識―露（その一）―」学苑505号 1982）

注5 犬養廉、平野由紀子校注『能因集』（新日本古典文学大系28 平安私家集 岩波書店 1994）

注6 藤本一恵『後拾遺和歌集全釈上巻』（風間書房 1993）

注7 桑原博史『源道济集全釈』（風間書房 1977）

第十章 和泉式部の「露」の歌一 無常を詠む

一 初期百首の「露」の歌

まず最初に取り上げるのは初期百首のうちの「露」を詠んだ歌である。初期百首は先行研究も多くあり、解釈についても久保木寿子氏の「百首全釈」では、それまでの諸注釈をふまえながらの詳しい解説がなされている。久保木氏は和泉式部百首について、「先行百首の歌材を基に、いかにより新たな歌境を提示するか、錯誤を辞さない模索的な試みはその身上であり、常識的な美の枠組みから逸脱する要素を多分に内包する。」との見解を示している。和泉式部の初期百首における「露」を詠んだ歌は、夏に二首、秋に二首、冬に一首ある。恋二十首のうちには存在しない。

夏

24 夏の日の脚にあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

29 とこなつにおきふす露はなになれやあつれて背子が間遠なるらん

秋

44 秋の田の庵に葺ける苦をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

冬

61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

「露」がほかの景物に影響を及ぼしている様子を詠んだ歌は49・61番歌で、間遠な背子や露に濡れて眠れぬ夜などに対する詠者の心情、つまり人に収束するのが29・44番歌である。24番は景を詠みつつも「はかなく」消える露を見ながら同じく「はかなく」消える自分を見ている詠者の心情を強く感じさせる。いずれも勅撰集に見られる、『古今和歌集』巻第四秋歌上よみ人しらず 222 はぎのつゆ珠にぬかむと取れば消ぬよし見む人は枝ながらみよ」、「後撰集」巻第六秋中 文屋朝康 308 白露に風の吹敷秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」のような、美しい「露」そのものを主題とする歌ではない。24番は露の美を主題とする歌ともいえるが、道芝の露の「はかなさ」に焦点をしばるため、心情を詠む歌のような響きが生じている。

和泉式部に先行する百首歌の中で「露」が詠まれた例としては、好忠百首の杵冠歌に一首、惠慶百首の秋に一首、「きのえ」一首、応和した源順に一首である。ほかに、海人手古良集夏に一首、秋に三首、ほか一首、重之百首では夏に一首、秋に二首、重之女百首は夏に一首秋に一首見られる。和泉式部の初期百首の五首は比較的多い。とくに好忠の百首歌の四季の中に「露」を詠んだ歌がないのは興味深い。好忠の百首歌の序では「わが身ひとつに憂けれども、ひをむしの日暮らし、草葉の玉の風を待つほどなれば」と、はかないものの喩えを連ねる中で「玉」、つまり「露」をとりあげているからである。ただし、のちの『毎月集』の中では六月から十二月までの間、十五首の「露」の歌が詠まれている(注1)。序の美文調にも登場する「露」は、歌材としては既に手垢のついたもので、新しい試みである「百首歌」の中では、特に食指の動く素材ではなかったのかもしれない。

以下、和泉式部の百首歌の「露」を季節を追って考察する。

## 24夏の日の脚にあたればさしなごらはかなく消ゆる道芝の露

24番は、「夏の日の脚」から始まる。「日の脚」は「ひあし」ともいい、漢語「日脚」ニツキヤクとの関連が考えられる。

「日脚」は「日の進む早さ。ひかげ。ひあし」(『大漢和辞典』)。「ひのあし」は「雲の切れ目や物の間から差し込んでくる日光」の意で、ジャパンナレッジによれば『蜻蛉日記』上巻と『源氏物語』末摘花巻に用例が見られる。ただし歌語としては珍しく、新編国歌大観所収歌のうちでは「ひのあし」を詠むのはこれのみである。

和泉式部がこの語を用いたことについて「百首全釈」はこの歌の補説で「『日の脚』は古今集の夏の歌材の枠をはみ出すもの。漢語の和訓を歌語化する例は、『日脚』以外にも、30『涼風』・33『螢火』・34『人身』・65『蓬門』など。新規歌材の開拓への意欲のあらわれであろう」としている。

また道芝は、歌語としてのイメージは時代によって変遷がみられるが、おおむね路傍に生える小さな草というものであり、万葉集には「道の芝草」で詠まれている歌があるが、中古では卑近さゆえに歌材としては取り上げられなくなり、三代集には見られず、平安中期から中世になると、後朝の歌語として「道芝の露」が定着していき、「またふと目にとまる道端の『芝』の上の露は、とりわけはかなさを強く感じさせる存在」としてはかない命のたとえとして詠まれるという(『和歌植物表現辞典』「しば」の項(注2)「全釈」では、用例は新しく、和泉式部の時代頃からよくつかわれるようになったらしいと指摘している。「道芝」の語は好忠の『毎月集』の「三月をはり」の最初の歌に詠まれている。「道芝の露」は勅撰集で見られるのは新古今集が最初で、同時代では『小大君集』『高遠集』、『重之子僧集』に見られる。和泉式部集90番で、『和泉式部日記』中の歌には次ようなもの



がある。

同じ人の返りごとに

902 道芝の露とおきゐる人により我が手枕の袖もかわかず

24番の歌は、まず「脚」という語が光線をより強く印象づける。露を見ることができるのは早朝である。夏の朝の光線があたった道端の芝草の露はすぐに消えてしまう。強い日射しにはかなく消える道の芝草の露を、単刀直入に詠んだ歌である。

先行する百首歌に見られる露の歌は、源重之「260 行きなれぬ道のしげさに夏ぐさのあか月おきは露けかりけり」(注3)、重之女「24いそげどもゆきもやられぬ夏ぐさのしげれるやどはみちを露けみ」などがある。これらでは「あかつき起き」「ゆきもやられぬ」とあり、逢瀬の帰り道に茂る夏草の道を「露けし」と詠む後朝の歌で、露は別れの涙をよそえるものである。一方和泉式部の24番歌は、後朝を示唆する表現を含まない。ただし、前述の902番の「道芝の露」は『和泉式部日記』の中では帥宮の後朝の歌への返歌である。早朝に道芝の露を見て、日が差したらあつけなくはかなく露が消えたと詠む24番歌であるが、その「道芝の露」は、早朝に帰って行った人が踏んでいった「道」の露を意識したとも考えられよう。その意味でこの24番歌も恋の情趣の漂う歌といえるのであるが、ここで詠まれている「露」は、そうした恋に苦しむ「涙」ではなく、それが「涙」だったとしても、あくまであつという間に消える露のはかなさにこそ主眼がある。この歌の「露」は、むしろ詠者自身を含め、人の生を、人の命のはかなさを見つめさせているのである。

## 29とこなつにおきふす露はなになれやあつれて背子が間遠なるらん

「とこなつ」と「露」の組み合わせは、勅撰集では、後撰集以降に見られる。後撰集巻第五秋上藤原兼三「230 ひこぼしのまれにあふ夜の常夏は打はらへども露けかりけり」、拾遺集巻第十三恋三清原元輔「思ひ知る人に見せばや夜もすがら我がとこ夏に<sup>お</sup>をきるたる露」（いずれも詞書省略）、『伊勢集』「121一人のみ寝る常夏の露けきは涙にさへや色はそふらん」など、ほかに『仲文集』、『源順集』、『実方集』等に歌があり、いずれも「床」におく「露」と涙とが掛けてある。

和泉式部の29番では、「常夏」に「床」、「置き」と「起き」をかけ、「露」を「涙」に喩えているが、こうした歌い方は、他の歌集の例と同様である。

「とこなつにおきふす露」は、「常夏の花に置く露」と「床に起き伏す私の涙」を意味し、例に見た歌のように類型的な表現で、いわばよくある現象として詠われている。和泉式部はそれに「なになれや」と続けている。「全釈」は「和歌の世界における慣用句。『何だい、いったい』、『まるで何にもならないぢやないか』と解釈しており、「百首全釈」では『「これは一体何なのだろうか」。ここは、素朴な疑問の体。上述のことへの反駁ではない』としている。ごく当たり前とされてきたことに疑問を呈する表現で、なぜ露がおりのかが改めて注目されることになる。

下句の「あつれて」は、「熱る」「暑る」で、暑さに苦しむことであるが、諸注が指摘しているように、用例が少なく、この歌のほかは『好忠集』、『散木奇歌集』、『爲忠初度百首』に見られるのみである。ここで好忠の

毎月集の歌、「115夏衣うすくや人の思ふらんわれはあつれてすぐす月日を」が踏まえられているのだろう(注4)。  
この好忠の歌は男の立場から詠んだものであるが、一方和泉式部の歌は、「これは女の立場からすねたもの」(「全  
釈」)と解釈するのが良いだろう。

「床」に置く「塵」がつかうことで男の不在を示すこともあるが、ここでは「床に起き伏す涙」を「何なれや」と自問し、独り寝に傷ついている自分を見だし、「常夏」からの連想で暑さゆえに「あつれて」恋人が間遠になったのだろうと結んでいる。上句と下句の間に、常(床)夏の露に思いを巡らせた一瞬の時間がある。

## 秋

### 44 秋の田の庵に葺ける苦をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

この歌は後撰集巻第六秋中天智天皇歌「302秋の田のかりほのいほの苦を荒みわが衣手は露に濡れつゝ」の、大胆に三句までをほぼそのまま取り入れている。和泉式部はこのような手法をたびたび用いている。第三章第七章でも述べたように、初期百首の春歌「5花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞたちぬべき」は、古今集巻第一春歌上のよみ人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の上句を取り入れている。このとき和泉式部は、元の歌を受け継ぎつつ微妙にずらしてその先を詠む。和泉式部の百首歌の5番の歌は、あだな「桜」のことばかと思うから、人の心も「あだ」といわれるのだと発想を転換している。この44番の歌意は、「小屋の屋根の薦の目が粗いので、露が漏り落ちて、少しも眠れない」ぐらいであるが、大胆に上の句を取り込んだ天智天皇詠の下の句「衣の袖が濡れてしまうことだ」という意は承知の上で、その先の気持ち

(露で衣も濡れてしまうので眠れない)を詠んでいる。天智天皇歌の「衣が露に濡れた」詠嘆を背後におきつつ、一人寝の涙とも想像される。露ゆえに眠れない状態、ひいてはその時の心を感じさせる歌へと変えられている。

#### 49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

「露」と「藤袴」の組み合わせは、勅撰集では新古今集以降にみられる。私家集では元真、元輔などの用例が早い。元輔の歌は天徳二年の白河院で「秋の花の露を逐ひて開くといふことをよみ侍しに」として詠まれた、「27ほころびて花咲きにけりふぢばかまにほひにむすぶ露にまかせて」(注5)である。

49歌では縁語、掛詞が多用されている。「かけておく」は「露」が「置く」、「袴」を「掛けて置く」の両意がかけられている。秋の花「藤袴が咲きほころぶ」と「袴が綻ぶ」、「霧や立つ」は「切りや裁つ」をかける(「全釈」「百首全釈」)。単純に解釈すると、「白露が置いた藤袴が咲き綻んだ。霧が立っているのだろうか」ということで、掛詞を生かせば「藤色の袴が綻びた。切り断ってしまったのだろうか」となる。「百首全釈」では「白露の」は「懸けておく」を導き出すための枕詞的なものとし、「藤袴の花が綻ぶ」と「霧が立つ」の関連にのみ注目して解釈しているが、「白露」は単なる「懸けておく」を導くだけの景物なのだろうか。むしろ元輔の詠歌に着目すると、「露」と「藤袴が綻ぶ」の関連こそが重要だろう。

他にも『古今和六帖』第一「129 初秋の空にきりたつから衣袖の露けき朝ぼらけかな」、『能宣集』の「八月ばかりるなかなる人にきぬつかはす 47あきぎりのたつたびごろもおきてみよつゆばかりなるかたみなりとも」、『斎宮女御集』の「くだりたまへるころ、かの宮より 202あきぎりのたちてゆくらんつゆけさにこころをつけて

思ひやるかな」などの例がある。「白露」は「懸けておく」を導き出すためだけではなく、「露」によって「藤袴の花」が咲き綻ぶこと、「露」に濡れた「袴」が綻ぶの意もあるのではないだろうか。そして「霧」が立ちこめれば湿っぽくなり、「露け」くなる。この歌の「白露」は歌全体に作用していると考ええる。

### 61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

古今集の「露」には「木々の葉を染める」という発想が見られた。古今集巻第五秋歌下敏行朝臣「是貞親王家歌合に、よめる 257 白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちぎに染む覧」、後撰集巻第六秋中「題しらず よみ人も 310 置くからに千種の色になる物を白露とのみ人のいふらん」、拾遺集には、巻第九雑下に藤原伊衡「躬恒、忠岑に問ひ侍ける 513 白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん」からはじまる、躬恒と忠岑が問答する歌十一首がある。また、先行の百首歌のうち重之女百首には「51 うつろへば一つ色にもあらなくにたれかいひけんしらぎくの花」がある。

和泉式部の歌は、この逆で「白ながら」、白いままでと、菊の花を移ろわせることなく、露が置いている白菊を初霜に見間違うと詠んでいる。「白ながら」はこの歌の外に例を見ない。「見まがう」は当然、古今集巻第五凡河内躬恒「277 心あてに<sup>お</sup>らばや<sup>お</sup>らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」を念頭においている。和泉式部の歌の場合は、初霜が置く以前の、露の置いた白菊を詠んでいるのである。

以上が初期百首の「露」の歌である。用語の特異性は見てきたとおり、露との組み合わせられた歌材は新しいものではないが、組み合わせ方が工夫されている。それぞれの「露」の置かれた状況（傍線の部分）を生かした

詠み方は、和泉式部の新たな表現を生み出そうとする姿勢が窺えるのである。

## 二 和泉式部と「露」

和泉式部の歌で詞書、及び歌に「露」の語が詠みこまれている歌は、前節でみた百首歌の五首以外にも、和泉式部集に六十一首（重出歌は含まず）、家集に無い歌が後拾遺集に一首、新古今集に一首、夫木和歌抄に一首、新拾遺集に一首で、七十首ほどある。これらの和泉式部の歌の特徴をつかむために、(一)伝統的な歌い方 (二) 思いを詠む（独詠） (三) 人とのつながりで詠む（贈答歌）の三つの観点から、以下考えていきたい。

### 「露」伝統的な詠み方の歌

「露」歌のもっとも伝統的な詠い方は、露を「玉」「白玉」に見立てるものであるが、この発想による歌は、和泉式部の「露」歌にもいくつか確認できる。二首ほどあげてみよう。

#### 135 葉にやどり枝にはかかる白露を白く咲きたる花と見るかな

ここでは、すぐに落ちる白露を「白い花」に見立てることで、ごくはかない露の花をイメージさせている。また、

#### 145 白玉の敷ける庭とて下りつれば露に衣の裾はぬらしつ

「露」を「玉」と錯覚したまま庭に降りて衣の裾をぬらすという歌であるが、視覚から行動が促され、知覚（ぬれる）という展開が見られ、「露＝玉」の見立てに終わらないのが面白い。

伝統的な詠い方の中には他に、第九章で見たように、「露が木々を染める」があり、この歌として次のものが

ある。

檀色づきたり

830 きしよりもまだき檀の色づくは秋に入る日に露や置くらん

この歌は「いとつれづれなる夕暮に、端に臥して、前なる前裁どもを、ただに見るよりは、とて、物に書きつけたれば、いとあやしうこそ見ゆれ、さは人やは見る、ちひさき松に」という詞書から始まる八首の連作の中の一首である。

「きしよりも」は「きぎ（木々）よりも」の誤かと「文庫」の脚注にある。他出の夫木和歌抄では「おしなべて」となっている。「文庫」に従って「木々」と解釈して、他の木々より早くも檀が色づいているのは、秋に入る日（七月一日）に露がおいたからだろうかの意とする。これは古今集卷五秋歌下敏行朝臣「257 白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちぎに染む覧」をはじめとする、草木を染める露の発想の歌によるものである。ただし、新編国歌大観によれば「檀」と「露」を取り合わせた歌は少なく、平安時代では忠見と和泉式部くらいしか見出せない。そこに、「真弓」と「射る」の掛詞を詠み込んでいる。

また七夕に詠まれた歌として

1280 風の音に秋来にけりとおどろきて見れば草葉の露も置きけり

は、同じく敏行の古今集卷第四秋歌上の巻頭歌「169 秋きぬと目にはさやかに見えねども風のをとにぞおどろかれぬる」を踏まえているが、和泉式部は風だけではなく「露も」置いていると詠む。この歌は前歌1279番の詞書「七

月七日、織女に代はりて待つ頃、草の露を始めて見る」を受ける歌である。その季節はじめて草葉の露を見た感動を、古今集の歌をうまく引きながら詠んでいるのである。

(二) 思いを詠む (独詠)

次に「露」のある情景から誘われる思いを詠んだ歌を考察する。

はじめに詞書の工夫により、景物と心象を詠み込んだ、次の連作を見る。

松の木に蜘蛛の網かきたるに、露の置きたるを見て

1064 ささがにのいとどはかなき露といへど松にかかれば久しかりけり

と見ゆるほどに、消ゆれば

1065 はかなしや朝日まつ間の露を見て蜘蛛手に貫ける玉と見けるよ

「蜘蛛」の巢に露が宿る歌は古今集の秋に二首、後撰集、拾遺集にはなく後拾遺集に一首ある。古今集では、巻第四秋歌上の文屋朝康の「225 秋の野にをくしらつゆは珠なれやつらぬきかくる蜘蛛のいとすぢ」、後拾遺集には巻四秋上の藤原長能「306 さゝがにの巢がく浅茅の末ごとに乱れてぬける白露の玉」がある。

古今集、後拾遺集に収載されたこれら二首は、蜘蛛の巢に露がかかった様子を蜘蛛の糸に玉が貫くと表現している。『枕草子』一一五段「九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の」にも雨が蜘蛛の巢にかかりこぼれ残った露を「・・・白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ」(注6)と表現するように、蜘蛛と露を取り合わせる場合、糸と玉という見立て関係で歌うのは常套的であった。



和泉式部の 1064 番は、「松」の木にかかった蜘蛛の巣におく露を見て、蜘蛛の巣に置くとてもはかない露といえども、長寿の松に懸かっているので久しく留まっているのではないかと詠う。蜘蛛の露であるが「玉」の見立ては使わず、蜘蛛の巣自体はかないものであるが、そこに置くさらにはかない露と常緑の松とを組み合わせ、その対照の妙が面白い。1064 番歌は、これ一首で独立した歌である。しかし「と見ゆるほどに、消ゆれば」と次の 1065 番とをつなぐ詞書をつけたことで、二首が連動し、ひとつの歌境が生まれている。

1064 番を詠んだ、その目の前で、露は消えてしまった。1065 番歌は、朝日をまつ間の蜘蛛の巣におく露は、糸に貫く玉かと思つて見ていたが、むなしかつた、朝日があがつたらやはり露は消えてしまったのだ、ぐらいの意である。「はかなしや」は玉と見ていた自分がおろかだったという気持ちと、あつけなく消えてしまった露に対しての感慨とが込められている。一度は松にあやかり得ると歌っていただけに、いっそう露の運命的なはかなさが際立てられている。

「まつ」に「待つ」を掛けたとみることもできるが（「全釈」）、やはりこの二首の妙は、詞書によって一瞬の景から、一瞬の景でしかなかったことに気づいての感慨へと移行する、微妙なうつろいを描いた点にある。『和泉式部日記』に結実してゆくような、詞書とともにあるからこそその表現を志向する歌である。

次の二首では「露」は詠まれているが、実景というよりも露の情景を想像し、それから呼び起こされる感興を詠んだ歌である。

寝もねられぬままに探れば、衣の濡れたるもあはれなり

682 浅茅生にやどる露のみおきみつ虫のねられぬ草枕かな

この歌は673番の「長柄の橋を見て」という詞書の歌に続く、淀川の船旅のなかでの歌群の一つである。ひとつ前の681番は「仮屋して、浜面に臥して聞けば、都鳥鳴く」という歌で、ここで陸地が上がって泊まった様子がわかる。682番の詠歌状況は多分同じで旅寝の歌である。浅茅生と露の組み合わせは多く詠まれているが、勅撰集では後拾遺集から見られるものである。また浅茅と虫も詠まれていて、やはり勅撰集では後拾遺集からである。

詞書は旅先の仮屋で寝付くことができないうまま、衣を探ってみれば（浅茅におく露で）湿っぽいのも哀れであるとある。衣の濡れていることから、外の浅茅にも露がおいているのを想像し、また虫の音が聞こえてくる。その中で人のなかでは自分のみ起きたままであるという、旅寝の感慨を詠んだ歌である。「虫の音」の「ね」から「寝られぬ」にかけて自分が寝られないと詠んでいるわけだが、実は鳴き続けている虫も起きている。にもかかわらず浅茅が生える宿に、露のみが「おきみつ」と詠むことで、この夜を分かち合うべき他者の不在を痛感させつつ、同時に自分と露と虫しか存在しないことを示唆することで、単に寂しいとか侘びしいだけに終わらない感慨を引き出すことに成功している。

暮れぬれど、奥へも入らで月見るほどに、夜は明けぬるなるべし、

空のけしきあはれなるにも

1488 まどろまで明かしつるにも今しこそ野辺に宿れる露もおくらめ

『和泉式部日記』（注7）を思わせる詞書である。日が暮れたが、奥にも入らないで端近く臥して月をながめ明

かすという場面は日記に何回か見られる。「暁起きの文」の場面には、「…大空に西へかたぶきたる月の影遠く、すみわたりて見ゆるに、きりたる空の歌気色、鐘の声、鳥の音一つに響きあひて」と、夜が明けたあとの空のあわれな風情が描かれている。一晚中外の景色を見ていたのだから、「夜は明けぬなるべし」は見えぬものへの推量ではない。段々に夜が明け、見ている本人にもいつが夜明けか判別がつかない、明けきる直前の微妙な時間帯が示されている。

一晚中寝ないで明かしてしまつたが、ちようど今、朝、野辺に宿つた露も置く（起く）だろうという意で、明け方のあわれな風情に搔き立てられた、朝露が置く時間帯である今への感興を詠んだ歌である。夜が明けて庭先の露を「見た」と表現するのではなく、野辺の露を想像して「起くらめ」と詠むのは、自分は眠らずにいたが、眠っていた人も今は起きたであろうという意味にもとれる。「全釈」は他の人のところに泊まつた恋人も今頃起きているでしようの意に解釈しているが、少々詞書の情趣とはそぐわない恨み言になってしまう。これは一晚中月を見ながら独り時を過ごした後の心象で、孤独を見つめる歌ととりた。

1488番は家集末の「日次詠歌群」とよばれる歌群の中の一首である。この歌群については「序」の研究史の項で述べたように、事実性（歌を交わしている貴人は誰か、又は成立時期の問題など）と虚構性（歌群全体を作者が意図して構成した）の両面からの研究がなされている。この歌は1487番九月十一日と1489番十三日の歌の間にある。十一日の歌で物忌みで他所に居るなかの、つれづれの苦しさを詠んでおり、十三日にはいつもの家に戻つたのであるので、この歌はまだ物忌み中の歌である。前歌からむなしく一人ですごし、「暮れぬれど…」の詞書に続く。

詞書で語られる情景を「あはれなるにも」と感じ入り、野辺におく朝露を思う。この歌は詞書がなくては成り立たない。そして次の歌ではいつもの所に戻ったが、やはり独りぼっちには変わりがないのである。この三首の構成は詞書を含めて、ひとつのエピソードを語っているように考えられる。

ここで詠まれている「露」は必ずしも実景でなくてもよい。浅茅、女郎花、蜘蛛、野辺、といった「露」が置く定番の情景があり、その情景を意識しながら詠むのだが、実際に「露」を見ているとは限らず、むしろ観念上の「露」に心象を託しているのである。特に682番、1488番は独り夜を過ごすなかに、消えやすい、はかない「露」だけが起きて（置きて）いることで、ここにいない「人」のまなざしが喚起されされ、いっそう孤独感を際立たせている。

独り居は、かつては誰かと共にあったが、現在人との関係が途切れているか、不透明な状況のうちにあることを意味する。そうした屈折を抱える「独り居」と共にある「露」は、人との関係のはかなさや、涙の契機となっている。たとえば次の二首である。

#### 九月晦方に、物思ふ頃

#### 1297 白露とおきあつつのみあるべきをいづち見捨てて秋の行くらむ

翌日からは初冬になるという九月末に「もの思ふ」は一人もの思いにふけている状況で、白露と共に続き続けて居るべきなのに、私を見捨ててどこに秋は行ってしまうのだろうかの意で、それは秋が私に飽きて見捨てて行ってしまったということの意味する。

とこなつ ほととぎす あやめぐさ これを人のよませし

1224 はらはねど露のおきふすとこなつは塵も積もらぬ物にざりける

題詠であるが、起き臥す床が涙に濡れて、払ってもいないのに塵もつもらないと詠む。

このように独詠においても、1064、1065番の連作は別にして、「露」が「置き」と「起き」を掛けて、露と自分のみが起きているとする発想の歌が多い。「独り居」の発想は誰かと共にあつた時を想起しているという意味では、次の「人とのつながり」の歌にもつらなる発想が見てとれる。

(三) 人とのつながりで詠む

和泉式部の歌の中で「露」の語が一番多く詠まれているのは、人とのつながりの中で露を詠む歌である。その中には独詠もあり、また親しい知人との贈答もある。主として恋人への贈答が多く、「露」にたとえて男女の仲のはかなさを嘆く歌や、人の心の無常を悲しむ歌もあるが、次にあげる二首のように、ほぼ恋人とのやりとりで、軽妙に応酬している歌もある。この場合は「露」の実際の露ではなく、観念上のものである。また詞書に語る詠歌の状況は複雑であり、いろいろ憶測を加えないと解釈が定まらない。

この頃、物いふ声を立ち聞きて、人の「聞えん」などいひたるに

834 萩の上に露吹きそへし雁が音を上の空にも聞きてけるかな

詞書の「この頃」はこの歌の前が「七夕七日」歌なので、「秋」のことであろう。

「物いふ」は言葉を交わす、男女の情を通わすの意味があるが、和泉式部集に219番「忍びて物言ふ人のあるに、

異人のあれば、急ぎて出づるに、「435番「例の人来て、物いふ所に立ち寄りたれど音もせねば、帰りて恨みたるに」などがある。この場合は和泉式部も関わりのある男との会話であろう。「立ち聞きて」とあるので、聞いたのはむろん男性である。「人」はその男性で、「物いふ声」すなわち他の男性が和泉式部に話しかける声を聞いて、お話ししたいと言ってきたのでと解釈する。

「全釈」では上三句を「萩の上に露を吹き加へる遊びのやうに、ほんのかり（雁）そめの気持ちでちよつと口だしてゐたわたしの声に」と解釈しており、この歌の背景に古今集巻四、秋歌上のよみ人しらずの歌、「221なきわたる雁の涙やおちつらむ物思宿のはぎのうへのつゆ」と、『古今和歌六帖 一』つゆの項「545白露をとればけぬべしいざとらじ露吹きそひてはぎのあそびせん やかもち」の歌をあげている。また「文庫」では「萩の上に涙の露を催し添えた悲しい雁の声―私の声を」と、両解釈に違いが見られる。

「吹きそふ」は吹き加わるの意で、「あらし吹きそふ」「風をふきそふ」などと詠われるが、新編国歌大観によれば、平安時代にはきわめて少ない。和泉式部以前の用例は『中務集』と『古今六帖』545番、『源氏物語』に二首見られるのみである。ここの歌の場合、風の語も何もないが、古今集の意を汲み、萩の上の露に空を飛んでいる「雁」の涙が加わった（吹きとんできた）ととりたいたい。

また「うはのそら」と「雁」を詠んだ歌は勅撰集では金葉集が初見で、和泉式部以前の歌人の例は、『夫木和歌抄』巻第十三に『是貞親王歌合』の友則の歌、「恒久親王家歌

548  
か  
り  
の  
鳴  
く  
う  
は  
の  
そ  
ら  
な  
る  
涙  
こ  
そ  
秋  
の  
た  
も  
と  
の  
露  
と  
お  
く  
ら  
め」がある。この友則の歌の「うはのそら」は「漠然として雲をつかむようなさま、」（『日本

国語大辞典』である。和泉式部の歌では雁とともに詠み込まれた歌はこの834番のみであるが、「うはのそら」の歌は他に三首ある。そのうちの780番は主体は違うが、同様の詠まれ方をしており、「あなたのいうことは根拠がない」というような意味で詠まれている。

歌意をまとめると、萩の上におく露は雁の涙、すなわち私の泣く声を、いい加減に聞いていたのですねということになる。「もの言ふ声」は「泣く声」であり、それを立ち聞きした他の男が、慰めるつもりか適当に言い寄ってきたのを拒んだという状況が考えられるのではないか。むろんこの「露」は自らこぼれ落ちた涙の表現と考える。

人の家に、秋の頃、「萩、上、露」と云ふ事を云ひたるに、「ことわりなる事どもを云ひつづければ、え問ふまじ」と云ひたるに

1370 萩原に臥す小男鹿も云はれたりただ吹く風にまかせてを見よ

詞書の『萩上露』と云ふ事」とは、何を意味するだろうか。

「文庫」は前掲の古今集の「221なきわたる雁の涙やおちつらむ物思宿のはぎのうへのつゆ」を引くかとの補注がある。

「全書」では『萩の上の露』は以前からの歌の題で、その題で詠んだ歌について論じた問答の連作が、拾遺集雑下に出てゐる。(513、514番)、「今もそれが論になってゐて盡きないのである。」として、「露がどこに結ぶのかは、ただ吹く風次第のことだ」と「歌によって論を一掃しようとしたもの」と解釈している。

また、「全釈」は「人の家」は他の女の家でそこにすみついた男への歌として「萩の上の露」は「男が手折  
りやすい女の評価に用ゐる語」で、この歌を「その言葉、わざと男に対して用ゐ、他の女にももの見事に誘惑さ  
れて、入り婿になってしまった男を、皮肉ったものと見た。」という前提で解釈する。かなり複雑な詠歌状況  
を想定している。「人の家に」という表現は、他に和泉式部集にはなく、主に「人に」、「人の許に」が多い。「全  
釈」のような解釈をするには、もう少し説明的な詞書があつても良さそうなものである。

古今集221番の歌は前述の834番の歌にも引かれており、のちの定家の歌論書にも取り上げられているような著名  
な歌であるから、「萩の上の露」といえばこの歌をさすということは考えられる。「文庫」に従い、この歌を引  
いたととる。眼目は「なきわたる」「もの思ふ宿」の部分であろう。

「ことわりなる事ども」は理屈っぽいことと各注釈はしているが「道理、当然のこと、当たり前のこと」を、  
「云ひつづくれれば」というのは、そういうことを何回もいふので行けない、「文庫」は「問ふまじ」と校訂して  
いるが、「全釈」は「訪ふまじ」になっている。ここは「訪ふまじ」の方が意としてはわかりやすい。

いろいろな解釈があるが、ここは「萩の上の露」とだけ言って、古今集の歌を暗示し、「涙とともにずっと物  
思いにふける私」を思い出させようとしたのではなからうか。それがもらった側からすれば耳に痛い「ことわり  
なる事」だったので、そんなことばかり言われては行けないと言ったのではないか。

「小男鹿」は萩を求めてやって来る。萩は女性（妻）に見立てられて万葉集の頃から詠まれてきた。萩原にふ  
す牡鹿、つまり、萩（女）に寄ってくるのが当たり前前の鹿（男）にそんなことも（しかも）云われたことよとい



う。ここでの「そんなこと」とは「道理のことを言われたから行けない」のことになる。「云はれたり」は和泉式部の歌のみにみられる句である。下句はただそのようなことは「吹く風にまかせておいて」は、会いに来てほしいということであるが、雁の涙が吹き飛んでくるか、つまり涙ぐみ続けているかは風にまかせての意があるか。また古今集のよみ人しらず「694 宮木野のもとあらの小萩つゆをおもみ風をまつごと君をこそまで」も意識されている。

この歌は「露」が歌に詠み込まれているわけではない。ただ、「萩上露」が、男女のやりとりの中の重要なキーワードとして用いられており、歌の背景にもなっているので、とりあげた。

以上の歌は、男女の軽妙なやりとりであり、情趣を詠むという歌ではない。「露」の語を契機として男女の仲の今の状況を表すこと、ここでの「露」、涙ぐむような状況を詠むことに意義がある。また詳しい詞書を伴うことであたかも物語の一場面であるかのような作となっているのも興味深い。

男女の贈答歌の本質として、男性からの贈歌に対しては女性にはぐらかして返すのが普通であるから、「露」の贈答歌でも必ずしも情趣深いやりとりではなく、丁々発止の掛け合いの歌も生まれる。たとえば次の歌である。

忍びて語らふ人の、煩ひて、「今宵はえ過ぐすまじ」といへりければ、またのつとめて

263 おぼつかかな夜の間の程も白露のおきあやすらん死にやしぬらん

「死にそうだ」という相手に随分とひどいことを詠んでいる様だが、男の方の大げさな物言いに對して、それほどではないことを見越して、このような歌を贈ったのだろう。ここでは「露」は「知らず」と「起き」にか

ける言葉としての役割しかないが、男の「命」の意味とも取れよう。「露」の無常を詠むのも和泉式部らしさであるが、このような軽妙な歌を詠むのも、和泉式部らしさなのである。

次の二首は、恋人への贈歌である。

八月ばかり、夜一夜風吹ききたるつとめて、「いかが」といひたるに

1312 荻風に露吹きむすぶ秋の夜は独り寝覚の床ぞさびしき

世の中はかなき事など、夜一夜言ひ明かして、帰りぬるつとめて

1325 おきてゆく人は露にはあらねども今朝は名残の袖もかわかず

1312 番は荻風が吹いて露を玉と結ぶ、そのような秋の夜の独り寝のわびしさを詠んだものであり、1325 番は後朝の歌で、別れの悲しみを袖を濡らし続ける露（涙）として詠んでいる。いずれも「涙」を暗示させている。

その他「露」の用例として、「露けし」「露けさ」という表現が六例あり、そのうち「袖」が「露けし」の例が三例ある。この「袖が露けし」歌は古来非常に多く詠まれているものである。

九日、綿覆はせし菊をおこせて、見るに露しげければ

1483 をりからはおとらぬ袖の露けさを菊の上とや人の見る覧

和泉式部の右の例は、きせわたをした菊の露から、自らの袖の露けさを思い、菊（聞く）だけの事と人は見る（聞くとの対比）だろうか和詠む。「人」は菊を「おこせた」人だろうか。菊を贈る方も、歌を贈った方も「折」を意識した風雅な贈答である。

八月晦、人のもとに、萩につけて

765 限りあらむ中のはかなくなりぬとも露けき萩の上をだに問へ

人のかへりごと

766 いつとなくさのみ露けき花の上をなにかは風に知らせしもせん

右の二例は自身を萩、花に喩え「露」は涙を暗示している例である。

人とのかわりの中で詠まれる「露」の歌は、ここに取り上げなかつた歌を含めて三十数首ある。このうち人（ほぼ男性）への贈歌の中では、「露」は「男性」を意味し、「命」あるいは「涙」を暗示している。「露」という語が人とのやり取りの中で用いられる時、多様な場面、状況において使われていることがわかる。ただ、前述の834、1370、263番のように、必ずしも男女の仲の無常を詠む歌ばかりではない。例えば扇に描かれている露の絵に託して意味ありげに男に贈っている歌もある。

八月ばかりに人の来て、扇を落としてけるを見て、竹の葉に露いと多く置きたる形書きてある、  
程経てやるとて

645 しののめにおきて別れし人よりは久しくとまる竹の葉の露

ある宮仕へ人の持たる扇に、萩など書きたる所に

920 露はらふ風もやあると宮城野に生ふる小萩の下葉ともがな

また、次の二首のごとく男からの便りに、いなして返している歌もある。

「此の頃袖の露けき」などいひたる人に

840 秋は猶思ふことなき萩の葉も末たわむまで露はおきけり

語らふ人のもとより、撫子をおこせて、「かかる口たる花はあらじ」

といひたるに

1237 まことかと比べて見れど我が宿の花の露にはなほうてぬり

以上の歌は軽口たたき、相手をかかわしている歌であるが、次の歌は「露」が子供の父親をさしている歌であり、「露」を詠む歌の中では唯一のものである。

幼き児の病みけるを、あはれと思ふべき人の聞きて、「いかが」といひたる

837 いかばかり思ひおくとも見えざりし露に色へる撫子の花

以上人と露との関わりの中で詠む歌をあげてきたが、根底に、特に詞書において複雑な人間関係を示すときは、その複雑な状況は歌と響き合い、結局は男女の仲のはかなさが詠まれている。そこから無常が感じられているのである。

### 三 命を詠む

和泉式部の「露」の歌を「無常を詠む」という観点から考える時、一番重要なのは、「露のはかなさ」を「人

の命のはかなさ」ととらえて詠む歌である。ここでは「露」にたとえて、身近にある「死」を詠む歌をとりあげ考察する。

宮より、「露置きたる唐衣まゐらせよ、経の表紙にせむ」  
と召したるに、結びつけたる

484 置くと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへむ

他出 新古今和歌集 卷第八 哀傷歌

小式部内侍、露をきたる萩をりたる唐衣をきて侍りけるを、  
身まかりてのち、上東門院よりたづねさせ給ひける、たて  
まつるとて 和泉式部

775 をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにたとへん

御返し

上東門院

776 おもひきやはかなくをきし袖のうへの露をかたみにかけん物とは

この歌は482番から続く、小式部内侍の死をいたむ一連の歌群のうちの一首である。

宮（彰子）から小式部内侍の形見の唐衣を所望された。経の表紙にするということは、供養の意味があるろう。

「露置きたる唐衣」は露の模様のある唐衣という意で、他出の新古今集では「露をきたる萩をりたる唐衣」と具體的な模様を示している。それに結びつけて、はかないとされる露にもこうして置いたままになっている露（模

様)もあるというのに、露よりもはかなく亡くなってしまった人を何に喩えたらいいのだろうという哀切な歌である。「全釈」では「置くとしし露もありけり」を「探してみれば、かうしてちゃんとありますわ。」と、唐衣がそのまま残っていたことと解釈している。

「露」ははかなく亡くなった人の象徴であり、涙の喩えでもある。死者の形見の品によって仏事を催す(ここでは写経に表紙をつける)のは、それ自体死者を供養する行為であるが、「露置きたる唐衣」、「露が置いている」という模様にも供養の心がこめられていたのであろう。

いかなる人にかありけむ、わづらふと聞きていひやる

### 659 さまざまに心置きたる露なればただに草葉の上とやは聞く

和泉式部の歌の中で「いかなる人にか」の詞書を持つ歌はこのほかに三首ある。そのうち508、546番歌は、「だれだったか」くらいの特にたわいのない男性への贈歌ととれるが、しかしながら「いかなる人にか、いひ侍る」の詞書で、「548いとどしく物ぞ悲しきさだめなき君はわが身のかぎりと思ふに」という歌があり、この歌から詞書のない歌が555番まで続く。この詞書が全体にかかる連作かと思われる程の、とある人の片恋の苦しさを主題とする歌が続くのである。この659番も「いかなる人」は「さまざまに心置きたる」人でもあるので、過去にこみいった恋愛の経緯があり、今は縁遠くなっている男性について、わざとおぼめかした表現と考えたい。

この「心置く」は心にかける、思いを残すのほか、心の隔てを置くという意味がある(『小学館古語大辞典』)。この歌の解釈は「文庫」は「いろいろの事で隔て心を持ったことのある仲なので。」とし、「全釈」は「相手に

対して不快に思ふことがあつて、へだて心を持つ意の『心置く』に、『露が置く』をかける」とある。「草葉の上」は「文庫」は「自分とは無縁の人のことをよそえた。」とし、「全釈」は「自分とは無関係の人の生命の危機としては感じてはゐない。」とある。

鈴木宏子氏は『源氏物語』花の宴の藤壺の歌について、歌に含まれる〈心を置く〉について、広く辞典類や注釈、平安時代の歌、物語、日記を含めて考察している。鈴木氏によると、〈心を置く〉の歌には「置く」の縁語である「露」が詠み込まれる歌が非常に多いという。そして「〈心を置く〉は、露、霜、植物と結びついて一首の表現を形成して」おり、「歌の中での意味は『心をかける』系と、『心を隔てる』系に大別できる」とし、「心をかける」系が平安期の早い時期（古今集）に見られ、平安後期には「心を隔てる」意の方が増していき、「平安和歌全体を通覧すると『心を隔てる』系が多いが（中略）『心をかける』系の歌もなくなるわけではない。」としている（注8）。

この歌の場合、その人との間に恋をめぐる過程でさまざまな葛藤があつて、現在はつきあいのない相手なのではなかるうか。「心置く」は現在は「心隔てている」関係であっても、過去には「心をかける」（思いをかけた）間柄なのである。隔て心だけでなく愛情も残っており、忘れられない人なので、病氣と聞いて歌を贈ったのである。ここで「露」はその相手でもあり、相手の命とも言えよう。草葉は「露」が置くところで、「草葉の上の露」ははかないもの（命）としてしばしば歌われてきた表現であるが、ここでは「ただに」の語を付すことで、ただ単に、世に言うのと同じはかないものと思うことができようかと、本当は心にかかっているのだと詠んだものと

解釈したい。詞書と一体となって、一つの恋の結末を想像させるような味わいの歌である。

次の三首は「朝顔」と「露」の歌である。

朝顔は『和歌植物表現辞典』（注9）によるとは平安期に入って『あさがほ』の花の命の短さと無常観を結びつけてうたう用法が見られ、「その際、『あさがほ』のはかなさを強調するためには、『露』とともによまれるケースが圧倒的に多い。」とある。また、露と花との関係は「はかない『花』の上に置くさらにはかない『露』という認識が多い一方、『花』が『露』よりもはかないとする逆の発想の詠も見られる」と指摘されている。

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、

朝顔を折り枯らしてありけるを見て

1096 朝顔を折りて見んとや思ひけん露よりさきに消えにける身を

1096 番歌は、はかない露よりさきに亡くなってしまふ身とは思わず、朝顔を折って鑑賞しようとしたのだろうか  
と詠む。この詞書の亡くなった人はだれであろうか。遺品を見ているので、親しい人だったのだろう（あるいは小式部か）。亡くなった人の持ち物を見ることが自体命のはかなさを感じる上に、持ち物から出てきたのは「折り枯らした朝顔」である。「朝顔」はすぐにしぼむものの、咲いている一瞬は美しい。「朝顔」を賞美しようと思つて折った時にはその人は確かに生きていたのにと、その人が生きていた一瞬が、枯れてしまった花の向こう、花盛りの幻影と重ねられる。歌の「露」はその「朝顔」に置いた露と見る必要はなく、短命な「朝顔」に置く、さらにはかない「露」よりも先に「命」が「消えにける」無常を詠んだものである。詞書と重ねることで「露よ



り先に」消える人間のはかなさが、印象深く詠まれている。

「暮にかならず」といひたる男、朝顔につけて

1166 今の中の露にかばかりあらそへば暮には見えじ朝顔の花

この歌は、「暮れには必ず行く」といつてきた男に、朝顔につけて、今この時置いている「露」と「朝顔」がこのようにはかなく消える事を争っているくらいなので、暮れにはこの朝顔の花はもう見えますまいと贈ったものである。この詞書から見て、男からの音信は朝来たものであり、あるいは前夜約束しながら来なかつた言い訳かもしれない。そこで朝顔を贈り、「露」はもちろんはかなく消えるものであるが、「朝顔」も夕方にははかなくなってしまうであろう、自分の命が消えてしまう前に今すぐ逢いたい、来てほしいということと解釈できる。

和泉式部と同時代の歌人の歌では次の例がある。

『好忠集』毎月集 はじめの秋 七月 (注10)

191 おきて見んと思ひしほどにかれにけり露よりけなる朝顔の花

1166 番はこの歌の直接の享受ではないが、「露」と「朝顔」のいずれがはかないかを問うなかで、両方のはかなさを強調しているところが共通していると言えよう。来るか来ないか、たわむれた言い争いのような歌いかけのなかに、人の世のはかなさを見つめる感慨が顔をのぞかせている。

世の中はかなき事など言ひて、槿花のあるを見て

1296 はかなきは我が身なりけりあさがほの朝の露もおきて見てまし

「世の中はかなき事」という詞書を持つ歌はほかに四首（153、215、1325、1373番）見られる。このうち1325番は後朝の歌であるが、他はいずれも「はかなき事」は命にかかわる歌の詞書である。

「この世は無常である事」などを言って、朝顔があるのを見て、「はかない朝顔に置く、さらにはかない朝の露も起きて見ていようものを、実は朝顔の露よりもはかないのはわが身（命）なのであったと詠う。なるほど明日の命はわからない。この歌においても「世の中はかなき事」は命のはかなさにかかわる。はかない「露」がやはりはかない「朝顔」におくことは「はかなさ」をいつそう強調する表現となる。同時代の歌としては次の歌がある。

### 『輔親集』

おなじころ、世のはかなき事をいひて人人うたよむに

22人の世はなにかはためしあさがほのつゆけきほどのいのちとおもへば

「露」と「朝顔」を同時に詠む歌は、勅撰集では新古今集が初出で、前掲の好忠の歌である。和泉式部と同時代、あるいはその少し前から、「朝顔」「露」を同時に詠むようになっていく。同時に詠むことで「はかなさ」が強調される。両者とも朝にはその姿を印象づけながら昼にははかなくなってしまう。一時生き生きと存在しながら少しの時間で消えてしまう。「朝顔（花）」には「露」にはない華やかな輝きがあり、「露」にはしぼんだ姿を残す「花」とは違う、跡形も無く消えるはかなさがある。この両者を取り合わせることで「死」と隣あわせだからこそ美しい、その一瞬をかたどることができる。それは「命」そのものの本質を暗示している。

世の中さわがしうなりて、人の片端より亡くなる頃、人に

1363 知らじかし花の端ごとにおく露のいづれともなきなかに消えなば

世の中が疫病の流行で、人が次々と亡くなっていく頃人に贈った歌で、花びらひとつひとつの先の先ごとに置く露のように、だれともわからないうちに消えてしまったら（私が死んでしまったら、あなたは知らないままでしょうね）と詠む。

「世の中さわがしうなりて」は185番「世の中さわがしき頃、語らふ人の久しう音せぬに」の詞書での歌が和泉式部歌にある。同様に、紫式部の歌にも見られる。

『紫式部集』

(注11)

世の中の騒がしきころ、朝顔を、同じ所にたてまつるとて

53 消えぬまの身をも知る知る朝顔の露とあらそふ世を嘆くかな

この紫式部の歌と和泉式部の歌との違いは、「朝顔の露とあらそふ」と、「花の端ごとにおく露」という表現の違いであろう。朝顔の露とあらそうようにというのはそのくらいはかない命と詠むのに対して、露に焦点をあてて、花びらひとつひとつに置いている露が消えてしまうようにという表現は、詞書に「片端より亡くなる」とあるように、もっと大勢の人をイメージさせ、小さな花びらにおく露のごとく、人の命などごく小さいものと捉えているところに違いがある。また、「消えぬまの身をも知る知る」（紫式部詠）と自らの良識を詠うのに比べ、「いづれともなきなかに消えなば」（和泉式部詠）は、その他大勢のうちの一人として自己を対象化する歌とも

いえる。

これらは、長保三年の疫病流行のころ（『日本記略』後篇十 一條）（注12）を二人それぞれに詠んだものであろう。流行病で片端から人が亡くなる状況は、観念ではなく現実のものとしての「死」を身近に感じさせる。「露の命」が、単なる修辞ではない、実感の重みを持って詠まれている。

露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて

178 草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か（正集）

露より世のはかなき事あるに

重出歌

1149 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれじ幻の世か（続集）

他出 万代和歌集卷第十八 雑五

（注13）

3573 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれしまぼろしの世か

この歌は重出歌と微妙に助詞が違っており、また諸注の解釈も見解が分かれる。

まず、「全釈」はこの歌の出典は金剛般若経「一切有為法、如夢幻泡影、如露、亦如雷、応作如、是観」  
「（注14）としている。「文庫」も「一切有為法……によるか」と補注にあげている。

「文庫」は178番の脚注「このままの本文では解を得がたい」とし、1149番の「たとへぬ時だにも」を生かして脚注では訳は「草の上においた露とたとえぬ時でも、この世はどうてい頼みにはできまい、幻の世なのか。」としている。「頼まれじ」否定形の本文とする。

「全釈」は1149番の解はなく、178番「たとへし時」「頼まれし」として、『し』は過去の『き』とすべき。」とあり、訳は「草の上の露にたとへし時」は金剛般若経の「一切有為法、如夢幻泡影、如露」と仏が説いた時とし、その時でさえ「頼むに頼み得ない幻の如き世」であった。「まして現世の幸福など力になりましょうか」と解釈している。本文を「頼まれし」としながら、実際は「頼まれじ（否定形）」で解を示している。また「仏がこの世のはかなさを説いたときでさえ、頼み得ない世」という解については、「さえ」のつながりが不明である。『万代和歌集』は続集1149番と底本の表記は同じだが、「頼まれし」と本文を立て、訳は「草の上の露に譬えな

い時でも、この世は頼りにできた幻の世なのか、もともと頼りになぞできなかったではないか。」としている。先行研究を踏まえて、さらに納得できる解釈ができるわけではないのであるが、一応本文を選択判断して考察したい。

まず、1296番でも触れたように、和泉式部の「世の中はかなき事」の詞書の歌（153、215、1296、1373番）は「命」にかかわる歌である。たとえば次のような歌である。

常よりも、世の中はかなう見えし頃、九月九日

1373 聞きときく人は亡くなる世の中に今日も我が身は過ぎんとやする

正集178番の詞書は「露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて」続集1149番は「露よりも世のはかなきことをあるに」とあり少しニュアンスが違う。178番「露よりも世の中はあつけなくむなしいことと人が言うのを聞いて」、また1149番は「露よりも世の中にはかない事があるを」となっているので、一般的に世の中のはかなさをい

うのだけではなく、おそらく人が亡くなるような状況が続いて、正集の場合は「人が言っていた」のを聞いて、続集の場合はそういう状況があるのを詠んだということになる。正集は贈歌か、続集は独詠のかたちとなっている。

上句は「草の上の露」は置くとすぐ消えてしまうはかないもので人の命に喩えられる。178番では「命」をはかない「草の上の露」とたとえた時ですらも、となり、また1149番は逆で、「命」を「草の上の露」にたとえない時でさえも、となる。しかし、「命」は「草の上の露」によくたとえられているものであるから、「だにも」と続けるためには、上句は否定の本文の方が良い。詞書からの続きとしても1149番の「たとへぬ」の方の本文を取りたい。

下句であるが、続集「我不愛身命」歌群の中に次の歌がある。

1401 幻にたとへば世はた頼まれぬなけれどあればあれどなければ

この歌の内容を、「文庫」訳で見ると「この世を幻にたとえれば、一方また頼みとすることができる、なぜといえ、幻ははかないように見えてあり、あるように見えてないから。」とある。この世はすべて幻でありながら、一方で存在すると人は考える。この世は「空」であり、かつ「仮有」であるという、天台宗という三諦をよむ歌である。

この1401番の歌をヒントに考察すると、1149番は、命を「露とたとへぬ」（はかなくない）時でさえこの世は幻であつたのだ。詞書の「露より世の中はかなき事」があつて、「やはりこれは頼りにできない幻の世だったのか」

と解釈できるのではないか。上句の「時だにも」のあと、「ではどうであつたのか」という言葉がなく、そこに傍線をつけた意があると考えた。下句との間に一呼吸おいているのである。

難解であるが、この世で救い得ない無常、にもかかわらずその無常の世にすがって生きている人という存在のはかなさを「露」をたとえに詠んでいることは理解できよう。

「命」を詠む歌には、題詠、独詠、人との贈答、連作的な歌群も含まれる。これは、和泉式部はさまざまな詠歌状況において、はかない「露」を「命」と詠んでいるということであろう。和泉式部が自らの命を詠んだ歌に

にはかにいたく煩ふほどに、来合ひて見たる男のもとより、いとほしかりし事

1286 ことならばあはれと見まし目の前に涙の露と消えましものを

という歌がある。この歌は自ら病に倒れた時の素直な心情で、男の優しさから、その眼前で死にたいという、実感としての「命」が詠まれている歌である。「露」を「命」と捉えることは仏典であるが、この歌のように、あるいは前掲の<sup>1363</sup>番に見るごとく、死が現実のものとなった時、「露」が我身に置き換えられる。自分もまたはかなく消え、そして消滅に抗うことができないことに気づく。それならば、自分を惜しんでくれるかもしれない男の前で、見守られて消えたいという。死はのがれられず、しかし、人は生にすがりつかずにはいられない。そうしたせつば詰まった無常を詠んでいるのである。

#### 四 まとめ

第九章の「はじめに」で述べたように、「露」はそれ自体香りがするとか、色が美しいとかの主張を持たない、

無色透明な存在である。だが、「露」に光があたつて光る時、または植物などに置いた時、人はそれに何らかの感興を催し歌を詠む。「露」は「何か」とともに詠む歌材なのである。「何か」はそれが事物であつたり、情景であつたり、あるいは人であり、自分の内面であつたりする。

和泉式部の「何か」は複雑である。たとえば事物を見ても、初期百首の五首は「露」の置かれている状況は「道芝の露」「とこなつにおきふす露」「漏りくる露」「白露のかけて置きたる藤袴」「露のおきたる白菊」とすべて違う。それぞれは特に珍しいものではないが、歌に詠まれたとき、組み合わせられた言葉によつてその表現しているものが単なる感慨ではなく、詠者の深い心境となつてゐることは考察で示したとおりでである。

しかし、この初期百首の歌の中にも、次の「思いを詠む」の中でも、「恋」が背景にある。人現関係の中で詠まれた歌はやはり「恋」が基調になつてゐる。ただ、それは「露」と詠まれているだけに、「涙」や「はかない世の中」や、それは表出していなくとも無常の思ひがあるだろう。

「命を詠む」歌はまさに「露の命」と言われる「死」と向き合う歌である。それは周りの人々が次々亡くなつていくような状況の中で、人の命が露ほどに軽いものであり、無常感が募る歌である。

和泉式部は多様に「露」を受け止め、さまざまに展開をさせ表現している。そして、そうした露のさまざまな姿を和泉式部が巧まずして巧みに表現する力量は計りがたい。考察の中でも指摘したが、歌を単純になぞつただけではわからない深い意味がある。そしてこれらの歌に共通して流れている、和泉式部の諦念のようなものがあるのではないだろうか。



和泉式部の有名な歌に、後拾遺集卷第十四恋四の次の歌がある。

つゆばかりあひ見そめたる男のもとにつかはしける

831 白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへばひさしかりけり

この歌でははかないものの代表のうちに「露」が挙げられ、その「露」もまた、自分たちの恋にくらべて見れば、久しいものであったのだと詠んでいる。列举された「はかないもの」を「久しかりけり」と詠むことに、この歌の面白さがある。この露の置くほんのひとときすら長く感じられるほどに、恋ははかないというわけであるが、この歌はそれを嘆くというより、既に178番でもあげた「無常」の諦念が根底にあつての詠歌であると考えられる。

そして、全体を通して見れば、はかない「露」及び「露」が影響を与えているものを、すべてをじっと見つめている和泉式部の目が感じられよう。そこには、何かしらの諦念、または和泉式部の思想のようなものが流れているのであり、それが和泉式部が持っている無常観であると考ええる。はかない「露」はそこに作用して「露」の歌を生み出したのである。

注1 松本真奈美ほか『曾禰好忠集』（和歌文学大系54 中古歌仙集一 明治書院 2004）

注2 平田喜信・身崎壽『和歌植物表現辞典』（東京堂書店 1998）

- 注 3 新藤協三ほか『重之集』（和歌文学大系 52 三十六歌仙集二）（明治書院 2012）
- 注 4 注 1 に同じ
- 注 5 『元輔集』 書誌は注 3 に同じ
- 注 6 松尾聰・永井和子校注訳『枕草子』（新編日本古典文学全集 18 小学館 1997）
- 注 7 野村精一校注『和泉式部日記 和泉式部集』（新潮日本古典集成 新潮社 1981）
- 注 8 鈴木宏子「〈心を置く〉という和歌―藤壺の独詠歌を考えるために―」（千葉教育学部研究紀要 第 51 巻 2003）
- 注 9 注 2 に同じ
- 注 10 注 1 に同じ
- 注 11 山本利達校注『紫式部日記 紫式部集』（新潮日本古典集成 新潮社 1980）
- 注 12 『国史大系 日本記略 第三（後篇）』（吉川弘文館 1988）
- 注 13 安田徳子『万代和歌集』下（和歌文学大系 14 明治書院 2000）
- 注 14 中村元・紀野一義訳註『般若心経 金剛般若経』（岩波書店 1960）

（対応論文 東京女子大学紀要「論集」第六十八巻第一号 2017・9）

\*資料 和泉式部の「露」の歌 一覽

和泉式部集

24 夏の日の脚にあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

29 とこなつにおきふす露はなになれやあつれて背子が間遠なるらん

44 秋の田の庵に葺ける苫をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

秋（のうち）

49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

露

(872)

125 玉かとして取れば消えぬる白露をおきながらこそ見るべかりけれ

露

135 葉にやどり枝にはかかる白露を白く咲きたる花と見るかな

露

145 白玉の敷ける庭として下りつれば露に衣の裾はぬらしつ

はぎ

× 147 さ男鹿は秋になりにけり萩の上の露くれなるにみち（以下欠文）

露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて

178 草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か（1149）

忍びて語らふ人の、煩ひて、「今宵はえ過ぐすまじ」といへりければ、またのつとめて

263 おぼつかな夜の間の程も白露のおきみやすらん死にやしぬらん

観身岸額離根草 論命江頭不繫舟（のうち）

305 露を見て草葉の上と思ひしは時まつ程の命なりけり

324 野辺ながら折られましかば女郎花露もおとさで見ればきものを

皇太后うせさせ給へる御法事の物とて、いろいろの玉召したるに、参らすとて

367 数ならぬ涙の露をそへたらば玉の飾りをかさんとぞ思ふ

檀の木の老いたるを見せ給ひて

× 406 ことは深くもなりにけるかな（帥の宮）

× 407 白露のはかなくおくと見しほどに

443 はかもなき露のほどにも消ちてまし玉となしけんかひもさき身を

宮より、「露置きたる唐衣まゐらせよ、経の表紙にせむ」と召したるに、結びつけたる

484 置くと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへむ

柏野より、何とかや相模へやるとて

591 寝をだにも安くねさせで萩風の吹きおとしたる柏野の露

609 上よりは萩の下葉の下露のしをれておつる秋にもあるかな

八月ばかりに人の来て、扇を落としてけるを見て、竹の葉に露いと多く置きたる形書きてある、程経てやるとて

645 しののめにおきて別れし人よりは久しくとまる竹の葉の露

田舎なる人のもとより、早して、国の皆焼けたることを侘びたるに

654 小山田のなどひたぶるに思ふらん露のおくにはありもこそすれ

いかなる人にかありけむ、わづらふと聞きていひやる

659 さまざまに心置きたる露なればただに草葉の上とやは聞く

寝もねられぬままに探れば、衣の濡れたるもあはれなり

682 浅茅生にやどる露のみおきみつ虫のねられぬ草枕かな

例の物へいにし人を思ひ出でて

708 いかならん背子が旅寝の草枕いとかく露はおきるもせじ

人の、つとめてのかへりごとに

760 おきてゆく人の心も白露のいままで消えぬ事をこそ思へ

八月晦、人のもとに、萩につけて

765 限りあらむ中ははかなくなりぬとも露けき萩の上をだに問へ

人のかへりごとに

766 いとなくさのみ露けき花の上をなにかは風に知らせしもせ

檀色づきたり

830 きしよりもまだき檀の色づくは秋に入る日に露や置くらん

この頃、物いふ声を立ち聞きて、人の「聞えん」などいひたるに

834 萩の上に露吹きそへし雁が音を上の空にも聞きてけるかな

幼き児の病みけるを、あはれと思ふべき人の聞きて、「いかが」といひたる

837 いかばかり思ひおくとも見えざりし露に色へる撫子の花

「此の頃袖の露けき」などいひたる人に

840 秋は猶思ふことなき萩の葉も未たわむまで露はおきけり

しらつゆ

872 玉と見て取れば消えぬる白露をおきながらこそ見るべかりけれ (125)

895 きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさはに悲しかりける

同じ人の返りごとに

902 道芝の露とおきある人により我が手枕の袖もかわかず

ある宮仕へ人の持たる扇に、萩など書きたる所に

920 露はらふ風もやあると宮城野に生ふる小萩の下葉ともがな

972 わが袖は蜘蛛の網がきにあらねどもうちはへて露の宿りとぞ思ふ

御果てに、経など供養して

989 今もなほ尽きせぬ物は涙かな蓮の露になしはすれども

昼偲ぶ（のうち）

1020 君を思ふ心は露にあらねども日に当てつつも消えかへるかな

宵の思ひ（のうち）

1035 宵ごとに物思ふ人の涙こそ千ぢの草葉の露とおくらめ

松の木に蜘蛛の網かきたるに、露の置きたるを見て

1064 ささがにのいとどはかなき露といへど松にかかれば久しかりけり

と見ゆるほどに、消ゆれば

1065 はかなしや朝日まつ間の露を見て蜘蛛手に貫ける玉と見けるよ

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、朝顔を折り枯らしてありけるを見て

1096 朝顔を折りて見んとや思ひけん露よりさきに消えにける身を

露より世のはかなき事あるに

1149 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれじ幻の世か (178)

いといたう荒れたる所を眺めて (のうち)

1160 消ゆる間の限り所やこれならん露とおきゐる浅茅生の宿

「暮にかならず」といひたる男、朝顔につけて

1166 今の間の露にかばかりあらそへば暮には見えじ朝顔の花

或女、男田舎に行きて亡くなりたるを聞きて、「身にかへましものを」など歎く

を聞きて

1208 逢ふ事も何のかひなき露の身を代へばやけ代へん露の命を

七月晦日、女のもとに始めてやるとて、よませし

1218 花薄ほのめかすよりは白露を結ばんとのみ思ほゆるかな

とこなつ ほととぎ あやめぐさ これを人のよませし

1224 はらはねど露のおきふすとこなつは塵も積もらぬ物にざり

語らふ人のもとより、撫子をおこせて、「かかる□たる花はあらじ」



といひたるに

1237 まことかと比べて見れど我が宿の花の露にはなほうてぬなり

みな月の晦方に、六波羅の説明聞きにまかりたる人の、扇を取りかへて、

やるとて

1254 白露におきまどはすなあきくとも法にあふぎの風は異なり

七月七日、いと疾う起きて

1259 織女に心をおけば朝ぼらけただわがごとや露もおくらん

田舎へ行くに、或所より御小桂など賜はすとて、「道の露はらふ」などあるに

1261 目に近きせきはたとも思ひやる浅茅が原の露もおとらず

七月七日、織女に代りて待つ頃、草の露を始めて見る

1279 その宵を待つもすべなし鶴の橋も渡らぬ通ひ路もがな

1280 風の音に秋来にけりとおどろきて見れば草葉の露も置きけり

にはかにいたく煩ふほどに、来合ひて見たる男のもとより、いとほしかりし事などいひたる

1286 ことならばあはれと見まし目の前に涙の露と消えましものを

世の中はかなき事など言ひて、槿花のあるを見て

1296 はかなきは我が身なりけりあさがほの朝の露もおきて見てまし

九月晦方に、物思ふ頃

1297 白露とおきあつのみあるべきをいづち見捨てて秋の行くらむ

八月ばかり、夜一夜風吹きたるつとめて、「いかが」といひたるに

1312 萩風に露吹きむすぶ秋の夜は独り寢覚の床ぞさびしき

いたうあばれたる所にて、女郎花に露の置きたるを見て

1316 女郎花露けきままにいとどしく荒れたる宿は風をこそ待て

世の中はかなき事など、世一夜言ひ明かして、帰りぬるつとめて

1325 おきてゆく人は露にはあらねども今朝は名残の袖もかわかず

世の中さわがしうなりて、人の片端より亡くなる頃、人に

1363 知らじかし花の端ごとにおく露のいづれともなきなかに消えなば

人の家に、秋の頃、「萩上露」と云ふ事を云ひたるに、「ことわりなる事どもを云ひつづくれば、え問

ふまじ」と云ひたるに

1370 萩原に臥す小男鹿も云はれたりただ吹く風にまかせてを見よ

親につつむ事ありて、隠れてゐたる方の前に、萩のいとおもしろきに露の置きたれば

1372 さは見れどうちもはらはで秋萩を忍びてをれば袖ぞ露けき

「我不愛身命」といふ心を上にすゑて (のうち)

1398 はかもなき露をば更にいひおきてあるにもあらぬ身をいかにせん

四月一日、思ふ様ありて

1405 交はしてし衣はかへじ結びおきて露けげなりと人は見るとも (1509)

桜のいとおもしろき咲きたるを見て、往にし人のもとより、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひ  
たるに

1450 疾うよ来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花のなかぞ世の中

九日、綿覆はせし菊をおこせて、見るに露しげければ

1483 をりからはおとらぬ袖の露けさを菊の上とや人の見る覧

暮れぬれど、奥へも入らで月見るほどに、夜は明けぬるなるべし、空のけしきあはれなるにも

1488 まどろまで明かしつるにも今しこそ野辺に宿れる露もおくらめ

九日、午の時ばかり、ある人も見とがむべき人もなき所にて、心安く見るままに

1495 白露のうち置きがたき言の葉は変はらん色のをしきなるべし

十月一日

1509 交はしてし衣はかへじ結びてし露けげなりと人は見るとも (1405)

七日、風のいとはげしきに

1518 露の置きし木々の木の葉を吹くよりはよにも嵐の身を誘はなむ

後拾遺和歌集 卷第十四恋四

つゆばかりあひ見そめたる男のもとにつかはしける

831 白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへばひさしかりけり

新古今和歌集 卷第十五 恋歌五

頼めて侍ける女の、のちに返事をだにせず侍ければ、かのおとこに代りて

1344 いま来んといふことの葉もかれゆくによな<sup>く</sup>露のな<sup>に</sup>にをくらん<sup>お</sup>

夫木和歌抄

卷十三秋部四 露

歌集 述懐 古来歌合

5485 かくしつゝ在りふる程に身の露やたまりてしつむふちとなるらん

新拾遺和歌集 卷第十三夏歌

(新編国歌大観)

305 けふは又しのにをりはへみそぎしてあさの露ちる蟬のは衣

他出

和泉式部日記

(新潮日本古典集成)

p45 ただ今も、消えぬべき露のわが身ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに、

p54 道芝の露におきある人によりわが手枕の袖もかわかず

p59 ことの葉ふかくなりけるかな

とのたまはすれば、

白露のはかなくおくと見しほどに

詞花和歌集 卷第九 雑上

(新大系)

言ひわたりけるおとこの、八月ばかり、袖の露けさなど言ひたり、返ごとによめる  
320 秋はみな思ふことなきおぎの葉もすゑたはむまで露はをくめり

新古今和歌集

小式部内侍、露をきたる萩をりたる唐衣をきて侍りけるを、身まかりてのち、

上東門院よりたづねさせ給ひける、たてまつるとて

775 をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにしたとへん

雲葉和歌集 卷七秋歌下

(新編国歌大観)

666 おしなべてまたきまゆみの色づくはいる日をうけて露やおくらん

夫木和歌抄 卷十五秋部六 檀

秋歌中 雲葉

6077 おしなへてまたきまゆみの色つくはいる日をうけて露やおくらん

\*資料 和泉式部の「露」の歌 一覧

和泉式部集

24 夏の日の脚にあたればさしながらはかなく消ゆる道芝の露

29 とこなつにおきふす露はなになれやあつれて背子が間遠なるらん

44 秋の田の庵に葺ける苫をあらみ漏りくる露の寝やはねらるる

秋（のうち）

49 白露のかけて置きたる藤袴ほころびにけり霧や立つらん

61 白ながら露のおきたる白菊を今朝初霜に見ぞ紛へつる

露

(872)

125 玉かとして取れば消えぬる白露をおきながらこそ見るべかりけれ

露

135 葉にやどり枝にはかかる白露を白く咲きたる花と見るかな

露

145 白玉の敷ける庭とて下りつれば露に衣の裾はぬらしつ

はぎ

× 147 さ男鹿は秋になりにけり萩の上の露くれなゐにみち（以下欠文）

露よりも世のはかなきことを人の言ふを聞きて

178 草の上の露にたとへし時だにもこは頼まれじ幻の世か（1149）

忍びて語らふ人の、煩ひて、「今宵はえ過ぐすまじ」といへりければ、またのつとめて

263 おぼつかな夜の間の程も白露のおきゐやすらん死にやしぬらん

観身岸額離根草 論命江頭不繫舟（のうち）

305 露を見て草葉の上と思ひしは時まつ程の命なりけり

324 野辺ながら折られましかば女郎花露もおとさで見るとべきものを

皇太后うせさせ給へる御法事の物とて、いろいろの玉召したるに、参らすとて

367 数ならぬ涙の露をそへたらば玉の飾りをかさんとぞ思ふ

檀の木の老いたるを見せ給ひて

× 406 ことは深くもなりにけるかな

（帥の宮）

× 407 白露のはかなくおくと見しほどに

443 はかもなき露のほどにも消ちてまし玉となしけんかひもさき身を

宮より、「露置きたる唐衣まぬらせよ、経の表紙にせむ」と召したるに、結びつけたる

484 置くと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへむ

柏野より、何とかや相模へやるとて

591 寝をだにも安くねさせて萩風の吹きおとしたる柏野の露

609 上よりは萩の下葉の下露のしをれておつる秋にもあるかな



八月ばかりに人の来て、扇を落としてけるを見て、竹の葉に露いと多く置きたる形書きてある、程経てやるとて

645 しののめにおきて別れし人よりは久しくとまる竹の葉の露

田舎なる人のもとより、旱して、国の皆焼けたることを侘びたるに

654 小山田のなどひたぶるに思ふらん露のおくてはありもこそすれ

いかなる人にかありけむ、わづらふと聞きていひやる

659 さまざまに心置きたる露なればただに草葉の上とやは聞く

寝もねられぬままに探れば、衣の濡れたるもあはれなり

682 浅茅生にやどる露のみおきあつ虫のねられぬ草枕かな

例の物へいにし人を思ひ出でて

708 いかならん背子が旅寝の草枕いとかく露はおきぬもせじ

人の、つとめてのかへりごとに

760 おきてゆく人の心も白露のいままで消えぬ事をこそ思へ

八月晦、人のもとに、萩につけて

765 限りあらむ中ははかなくなりぬとも露けき萩の上をだに問へ

人のかへりごとに

766 いつとなくさのみ露けき花の上をなにかは風に知らせしもせ

檀色づきたり

830 きしよりもまだき檀の色づくは秋に入る日に露や置くらん

この頃、物いふ声を立ち聞きて、人の「聞えん」などいひたるに

834 萩の上に露吹きそへし雁が音を上の空にも聞きてけるかな

幼き児の病みけるを、あはれと思ふべき人の聞きて、「いかが」といひたる

837 いかばかり思ひおくとも見えざりし露に色へる撫子の花

「此の頃袖の露けき」などいひたる人に

840 秋は猶思ふことなき萩の葉も末たわむまで露はおきけり

しらつゆ

872 玉と見て取れば消えぬる白露をおきながらこそ見るべかりけれ (125)

895 きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさはに悲しかりける

同じ人の返りごとに

902 道芝の露とおきある人により我が手枕の袖もかわかず

ある官仕へ人の持たる扇に、萩など書きたる所に

920 露はらふ風もやあると宮城野に生ふる小萩の下葉ともがな

972 わが袖は蜘蛛の網がきにあらねどもうちはへて露の宿りとぞ思ふ

御果てに、経など供養して

989 今もなほ尽きせぬ物は涙かな蓮の露になしはすれども

昼偲ぶ（のうち）

1020 君を思ふ心は露にあらねども日に当てつつも消えかへるかな

宵の思ひ（のうち）

1035 宵ごとに物思ふ人の涙こそ千ぢの草葉の露とおくらめ

松の木に蜘蛛の網かきたるに、露の置きたるを見て

1064 ささがにのいとどはかなき露といへど松にかかれば久しかりけり

と見ゆるほどに、消ゆれば

1065 はかなしや朝日まつ間の露を見て蜘蛛手に貫ける玉と見けるよ

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、朝顔を折り枯らしてありけるを見て

1096 朝顔を折りて見んとや思ひけん露よりさきに消えにける身を

露より世のはかなき事あるに

1149 草の上の露とたとへぬ時だにもこは頼まれじ幻の世か（178）

いといたう荒れたる所を眺めて（のうち）

1160 消ゆる間の限り所やこれならん露とおきある浅茅生の宿

「暮にかならず」といひたる男、朝顔につけて

1166 今の間の露にかばかりあらそへば暮には見えじ朝顔の花

或女、男田舎に行きて亡くなりたるを聞きて、「身にかへましものを」など歎く  
を聞きて

1208 逢ふ事も何のかひなき露の身を代へばやけ代へん露の命を

七月晦日、女のもとに始めてやるとて、よませし

1218 花薄ほのめかすよりは白露を結ばんとのみ思ほゆるかな

とこなつ ほととぎ あやめぐさ これを人のよませし

1224 はらはねど露のおきふすとこなつは塵も積もらぬ物にざり

語らふ人のもとより、撫子をおこせて、「かかる□たる花はあらじ」

といひたるに

1237 まことかと比べて見れど我が宿の花の露にはなほうてぬなり

みな月の晦方に、六波羅の説明聞きにまかりたる人の、扇を取りかへて、  
やるとて

1254 白露におきまどはすなあきくとも法にあふぎの風は異なり

七月七日、いと疾う起きて

1259 織女に心をおけば朝ぼらけただわがごとや露もおくらん

田舎へ行くに、或所より御小桂など賜はすとて、「道の露はらふ」などあるに

1261 目に近きせきはたとも思ひやる浅茅が原の露もおとらず

七月七日、織女に代りて待つ頃、草の露を始めて見る

1279 その宵を待つもすべなし鵲の橋も渡らぬ通ひ路もがな

1280 風の音に秋来にけりとおどろきて見れば草葉の露も置きけり

にはかにいたく煩ふほどに、来合ひて見たる男のもとより、いとほしかりし事などいひたる

1286 ことならばあはれと見まし目の前に涙の露と消えましものを

世の中はかなき事など言ひて、槿花のあるを見て

1296 はかなきは我が身なりけりあさがほの朝の露もおきて見てまし

九月晦方に、物思ふ頃

1297 白露とおきあつのみあるべきをいづち見捨てて秋の行くらむ

八月ばかり、夜一夜風吹きたるつとめて、「いかが」といひたるに

1312 萩風に露吹きむすぶ秋の夜は独り寝覚の床ぞさびしき

いたうあばれたる所にて、女郎花に露の置きたるを見て

1316 女郎花露けきままにいとどしく荒れたる宿は風をこそ待て

世の中はかなき事など、世一夜言ひ明かして、帰りぬるつとめて

1325 おきてゆく人は露にはあらねども今朝は名残の袖もかわかず

世の中さわがしうなりて、人の片端より亡くなる頃、人に

1363 知らじかし花の端ごとにおく露のいづれともなきなかに消えなば

人の家に、秋の頃、「萩上露」と云ふ事を云ひたるに、「ことわりなる事どもを云ひつづくれば、え間ふまじ」と云ひたるに

1370 萩原に臥す小男鹿も云はれたりただ吹く風にまかせてを見よ

親につつむ事ありて、隠れてゐたる方の前に、萩のいとおもしろきに露の置きたれば

1372 さは見れどうちもはらはで秋萩を忍びてをれば袖ぞ露けき

「我不愛身命」といふ心を上にすゑて (のうち)

1398 はかもなき露をば更にいひおきてあるにもあらぬ身をいかにせん

四月一日、思ふ様ありて

1405 交はしてし衣はかへじ結びおきて露けげなりと人は見るとも (1509)

桜のいとおもしろき咲きたるを見て、往にし人のもとより、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに

1450 疾うよ来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花のなかぞ世の中

九日、綿覆はせし菊をおこせて、見るに露しげければ

1483 をりからはおとらぬ袖の露けさを菊の上とや人の見る覽

暮れぬれど、奥へも入らで月見るほどに、夜は明けぬるなるべし、空のけしきあはれなるにも

1488 まどろまで明かしつるにも今しこそ野辺に宿れる露もおくらめ

九日、午の時ばかり、ある人も見とがむべき人もなき所にて、心安く見るままに

1495 白露のうち置きがたき言の葉は変はらん色のをしきなるべし

十月一日

1509 交はしてし衣はかへじ結びてし露けげなりと人は見るとも (1405)

七日、風のいとはげしきに

1518 露の置きし木々の木の葉を吹くよりはよにも嵐の身を誘はなむ

後拾遺和歌集 卷第十四恋四

つゆばかりあひ見そめたる男のもとにつかはしける

831 白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへばひさしかりけり

新古今和歌集 卷第十五 恋歌五

1344 頼めて侍ける女の、のちに返事をだにせず侍ければ、かのおとこに代りて  
いま来んといふことの葉もかれゆくによなく露のなににをくらん

夫木和歌抄

卷十三秋部四 露

歌集 述懐 古来歌合

5485 かくしつゝ在りふる程に身の露やたまりてしつむふちとなるらん

新拾遺和歌集 卷第十三夏歌

(新編国歌大観)

305 けふは又しのにをりはへみそぎしてあさの露ちる蟬のは衣

他出

和泉式部日記

(新潮日本古典集成)



p45 ただ今も、消えぬべき露のわが身ぞあやふく、草葉につけてかなしきままに、

p54 道芝の露におきゐる人によりわが手枕の袖もかわかず

p59 ことの葉ふかくなりにけるかな

とのたまはすれば、

白露のはかなくおくと見しほどに

詞花和歌集 卷第九 雑上

(新大系)

言ひわたりけるおとこの、八月ばかり、袖の露けさなど言ひたり、返ごことよめる

320 秋はみな思ふことなきおぎの葉もすゑたはむまで露はをくめり

新古今和歌集

小式部内侍、露をきたる萩をりたる唐衣をきて侍りけるを、身まかりてのち、

上東門院よりたづねさせ給ひける、たてまつるとて

775 をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにしたとへん

雲葉和歌集 卷七秋歌下

(新編国歌大観)

666 おしなべてまたきまゆみの色づくはいる日をうけて露やおくらん

夫木和歌抄 卷十五秋部六 檀

秋歌中 雲葉

6077 おしなへてまたきまゆみの色つくはいる日をうけて露やおくらん

第五部 和泉式部家集配列にみる創意性について

第十一章 歌群から見られる創意性について

一 はじめに

和泉式部集には配列に創意工夫が看取される一連のまとまりのある歌群が何カ所かに見られる。これは詞書に

よって時間と状況が展開してゆくもので、詞書から一連の歌群であると認定して読んだ時に、ひとつのまとまったエピソードが浮かび上がって見える、主に五首から九首の歌群である。

こうした歌群、多くは人とかかわりの中で詠まれた和歌に認められる。むろん贈答歌の応酬の中で展開するエピソードもあるが、むしろ主流であるのは、複雑な人間関係が詞書によって象られ、それゆえの心情の推移が一首一首に詠み込まれることで形をなすエピソードである。詞書と配列に工夫を加えることで、一つのまとまった歌群としている。

また、和泉式部集の特徴として重出歌の存在があるが、この歌群にも重出歌が見られる場合がある。重出歌の存在する歌群において、両者を比較すると詞書や配列に違いが認められ、そこに意図的と思われる創意が見取れる。その創意によって、それぞれにまとまった歌群をなしており、二種類の作品として収載されていると考えられる。

和泉式部の場合は、『和泉式部日記』の作者としての資質、すなわち『和泉式部日記』のように、散文と和歌の構成で虚構性を描きうる人物であることを勘案すれば、家集の中にもそれに近い一連の歌群があってもおかしくはない。むろん、多くの先達の諸研究により、『和泉式部日記』が和泉式部の「日記」であり、「自作」説で落ち着いていることを前提としての推察である。歌群についても、すでにいろいろな立場からアプローチされている。そのような先行研究を踏まえながら、まずは一連のまとまりのある歌群の詞書と配列から認められる、創意について考察したい。

## 二 歌群の考察

まず、重出歌が存在する一連の歌を見る。(歌群の名は、試みとして私に付した)。

### (一) 稻荷祭の歌群

ア

稻荷祭見しに、傍なる車の、粽など取り入れて苦しきを、まろが車に取り入れしと、公信の少将、蔵人の少将言ひけると聞きしを、一日祭見るとて車の前を過ぐる程に、木綿かけて取り入れさせし

108 稻荷にも言はると聞きしなき事を今日は糺すの神にまかす

返し

109 何事と知らぬ人には木綿襷なにか糺すの神にかくらん

と言ひたれば、幣のやうに、紙をして書きてやる

110 神かけて君はあらがふ誰かさはよるべに溜まるみづと言ひける

かへさ、故殿の鶴君の、筒を借りて轅をかけ給へりし、「異人にはさらにと取らせねども」とて言ひやりし

111 異人は許さざらまし木綿襷かくる車のながえなりとも

雅通の少将など乗り給へりし、それや詠みけむ

112 木綿襪かくる車のながえこそ今日のあふひのしるしとは見れ

イ

稲荷祭見る女車のありけるを、「その人なめり」と、或君達の言ひけるを聞きて、祭見る車の前より、男の過ぐる程に、木綿につけてさしつれ

1275 稲荷にも言はると聞きしなき事を今日は糺すの神にまかする

返しに、いみじうあらがひたれば

1276 神かけて君はあらがふ誰かさはよるべにたまるみづにいひけん

この歌群は稲荷祭での出来事を発端に、その後の葵祭の道中での公達との贈答へと発展する歌群である。

稲荷祭は「京都の伏見稲荷大社祭礼。古くは四月上卯の日を式日とした」（『国史大辞典』）とある。粽は『延喜式』三十三大膳下五月五日節料」として粽の材料の記述があり、「三十九内膳諸節供御料」には同じく粽の料の記述のほか、「右従三月十日迄五月卅日供料」（注1）とあるので、五月五日以前にも供物として作られていたことがわかる。もっともこの歌の場合は、飲食のためかもしれない。「一日祭見る」の祭は賀茂祭（葵祭）のことで「古くは単に祭といえばこの祭を指した」（『国史大辞典』）とある。

108 番の詞書にはこの稲荷祭見物の道中、傍らの車が粽などを取り入れて見苦しかったのを、私（和泉）が車に

取り入れたと公信少将（藤原公信）と「蔵人の少将」が言い触らしているというのを聞いて、その後の祭（葵祭 旧暦四月中西の日）を見る際、少将の車が前を通り過ぎる時に、木綿をかけて取り入れさせたとある。

108 番の歌は、稲荷祭の時にありもしない事を言われたのを今日は糺すの神（賀茂神社）に任せて真否を判断してもらおうというほどの意で、これに対して 109 番の歌では、自分は何のことかわからない、あなたは何を、神を引き合いに出して糺すのか、と反論している。詠者は公信かと思われる。

110 番は神をかけてあらそうのですね。ではだれが見た（「よるべの水」は「神前に置かれた瓶の水」で「見つ」にかける）と言ったのでしようぐらいの意で、ここまでが前半のやりとりである。粽は食物として車に取り入れたのか、あるいは供御なのか。たわいもない行為が噂になったのは、和泉式部が取り入れたと思われたからだろうか。いずれにしても何かの罪を犯したわけでもなく、大げさに神かけてあらそうほどのことでもない。要するに同世代の若い貴族たちとの掛け合いを楽しんでいるのである。

次の二首は祭の帰りの出来事を詠んだ歌である。

111 番の詞書は、『和泉式部集全釈』（以下「全釈」）は「かへさに殿の鶴君の」に改めてある。それは「こ」と「に」は誤写がおきやすいこと、「殿」は時の執政者に使われ道長のことであるが、「故殿」で道長の死後のこととすると「鶴君」はすでに「関白頼通」であり、おかしいからである。原典「榊原本」（注2）を確認したところ、「こ」と「との」間に少し空白がみられ、これは「ここの」と続けるよりは「に」の方が良いと思われるので「全釈」に従いたい。祭の齋院の帰りの見物の際に、鶴君の車が和泉式部の車のこしきにながえをかけたのを、

他の人なら決して取らせないので、と和泉式部が車の中に言い送った。そして111番の歌は他の人だったらたとえ神事のための木綿だすきをかけた車でも許さないのですがとの歌である。

112番には雅通の少将などが乗っていて、その方が詠んだのだろうか、語り手の言めいた状況説明がある詞書が付されている。詞書によればたづ君と同乗していた雅通の少将とおぼしき人の返歌で、木綿だすきをかけた車の轆をかけるのを許すだけでなく、車の「なかへ」に入ることを許されれば今日の「葵」（逢ふ日）の御利益と思うのだがと詠んでいる。

この後半のエピソードは、前半と異なり、源雅通とのやりとりである。「異人にはさらに取らせねども」という詞書や歌の内容は、時の執政者の長子に向けての歌ではなく、あるいはそこにいるとわかっていた雅通に贈ったものではないだろうか。そう思わせるのは、代詠である雅通の歌は少々恋歌めいており、「それや詠みけむ」と語り手の推察のような詞書がさらにその感を強くする。後述するように源雅通は和泉式部の恋人の一人と思われる、最後は恋の雰囲気が終わっている。

次にイの二首であるが、ここでは、公達の名もなく、粽云々の記述もない。この歌だけ見ると、稲荷祭に本人は行っていなくて、他の女の女車があったのを「その人なめり」と和泉式部が来たと「或君達」が言っていたのを聞いてとがめた歌というように取れる。ここでは109番にあたる相手の歌は省かれて、代わりに「返しに、いみじうあらがひたれば」、の中に意を含み、1276番の歌を和泉式部が詠んだ形である。また、雅通の少将のエピソードはない。

平田喜信氏は家集の重出構造について、乙類（B群99・263番）とした歌群には贈答歌が多数おさめられているが、丙類（E群400・902番 F群903・939番、H群1063・1333番、I群1334・1470番）（○群は清水文雄氏の分類注4）の歌群では、贈答歌は皆無であり、ある意図のもとに他人詠が省かれていたり、具体的な人名は臚化されるなどの形で所収されていることから、「乙類・丙類間には、贈答歌を採録する方針の上で大きな差異があったと見なさなければならぬ」と結論づけた（注3）。この稻荷祭をめぐる歌群の重出についても平田氏の指摘する特徴が見てとれよう。この二首はH群内にあり、この研究に即して考えれば、Aの歌稿をまとめる際、原歌集で二つの歌稿があったのを「想い出」として一つにまとめたもので、続集イを採録する際はAと共通の母体ではなく、はじめから雅通との贈答の歌稿がなかったものをもとに採録したと考えられようか。この重出歌の出現に關してはいくつかの先行研究があり、この歌群に言及の研究（注5）もあるが、ここでは該当箇所での引用にとどめておく。

以下内容の考察に入る。

藤原公信は『枕草子』の九五段「五月の御精進のほど」（注6）の面白いエピソードが有名である。この公信は貞元二年（九七七）生まれで万寿三年（一〇二六）の没、父は藤原為光、母は藤原伊尹女であり、官歴をみると長保元年（九九九）に少将、長保四年（一〇〇二）の二月五位藏人、寛弘元年（一〇〇四）中将、その後藏人頭、参議、春宮権太夫、左兵衛督、などを経て極官は従二位、権中納言となっている（注7）。

源雅通は生年未詳で寛仁元年（一〇一七）の没、道長男鶴君とは、祖父源雅信を同じくし（鶴君の母倫子は雅通のおば）、従兄弟の間柄であった。長保三年（一〇〇一）右少将（この時は公信とともに右少将）、寛弘二年



(一〇〇五) 右少将で五位藏人を兼ね、長和元年(一〇一二)に中将となる。『権記』には、長保三年に「賀茂祭右近衛府使」を務めていることが記述されている(注8)。雅通は「源少将」として『紫式部日記』には寛弘五年(一〇〇八)中宮彰子の敦成親王出産の折の記述にしばしば名前が見え、(注9)『和泉式部日記』にもそれらしき人物がでてくる。『和泉式部集』には255、256番に贈答歌があり、恋人のひとりだったらしい。

「藏人の少将」は従来「公信の少将」の注記であるというのが通説になっていたが(「全釈」)、青木賜鶴子は「公信の少将」と名前が明示されているのに「藏人の少将」と注記するのは不審として、本文通り「公信の少将」と「藏人の少将」の二人と解釈する可能性を指摘し、公信が少将であった時期に藏人の少将であった人物のうち最も可能性のあるのは藤原重家であるとした。そして青木氏は公信が少将になったのが長保元年(九九九)の九月で、重家が藏人の少将であったのは長保元年一月で、四月の祭りの時はまだ公信は少将になっていなかった点については、見方をかえて、この詞書が公信が少将になったあとに書かれたと考えるか、長保元年十月であればまさしく「公信の少将、藏人の少将」と呼ばれ、二人の呼称は問題はないとしている(注10)。

ただし、重家は貞元二年(九七七)生で、公信と同年生まれ、左少将藏人少将になったのは長保元年の一年間であり、長保三年(一〇〇一)二月には出家している。後半の歌の「雅通の少将」は長保三年から公信と同じく右少将になっていて、重家と時期が重ならないが、この点も雅通が少将となった後に書いたという可能性も考えられると青木氏は論じられている。歌稿をまとめる時にはその時の知られた呼称で書いたと考えると、この論文ではこの歌群の詠作時期は、たづぎみ(道長男 頼通)元服が長保五年二月であるので、長保元年から四年の賀茂

祭のできごとであり、実際に歌として詠まれたものを一連の作品としてまとめたのは雅通が少将となった長保三年以降としている。

まず、「蔵人の少将」が公信の注記かどうか、検討してみる。

歌の詞書においては、人を表記するために名前ではなく当時の官位を記すのは通常のことであるが、詞書に二人以上の名前が並列されている例及び注記をつけている例などを、同時代の私家集の中から探してみると次のような例が見られた。

『馬内侍集』 82 左大臣、兵衛佐にておはせしとき（注11）

『朝忠集』 77 朝忠朝臣、重光の朝臣の歌ふたつ（注12）

『赤染衛門集』 3 中関白殿の蔵人の少将と聞し頃（注13）

17 六条の源中将と経房の中将と

『公任集』 87 中宮大夫、たゞ今の大殿（注14）

302 宰相中将いれり、たゞのぶ

今のところ管見の限りでは右のような例があるが、和泉式部の歌に近い例は『赤染衛門集』17であろう。『馬内侍集』82、『赤染衛門集』3、『公任集』87、302は注記であるが、注記にはそれなりの書き方があることがわかる（『公任集』302は傍注本文化という）。

和泉式部集ではどう表記されているかを見ると、詞書に実在の人物名は多くでてくるが、このような、同じ人

について注記が本文となっている例がない。「越後守のりなが」「東宮のなおただ」「監物ゆきつね」など役職を付した名前は出てくるが、「よりのぶ」「みちなり」という名前が先にあつて、役職や官位名を追記している例がない。例えば、「のりなが、越後の守」のような記述の仕方をしてはいない。逆に「権中納言」「讃岐殿」「内大臣の若君」「近江大夫」などに名前の注記をつけることもしていないのである。

このように並列して「公信の少将」にさらに「蔵人少将」と注をつけるのは異例といえよう。当時、『権記』によれば公信はこの時期蔵人少将として活躍中で、わざわざ注をつける必要はなかったのではないか。稿者としては別人であるという立場から以下解釈してゆく。

蔵人少将を、藤原重家と考える場合、青木氏の指摘されるように、重家が蔵人少将であった長保元年の間、公信が少将となった同年の十月以降に四月の賀茂祭のことをまとめたか、または、長保二年の四月の賀茂祭での出来事と考えられよう。というのも、重家は長保二年の一月に従四位下に叙され、五位蔵人の少将ではなくなっているが、あとに続いて蔵人と少将を兼任した人は公信までいないのである(注15)。このため重家がすでに従四位下となっている年の四月の賀茂祭の記述であるのに、重家を蔵人少将のままとして詞書に書く可能性が考えられる。

後半の「雅通」は長保二年の時点では少将になってはいない。雅通が少将であるのは長保三年であるので、鶴君の元服の長保五年(一〇〇三)二月以前、長保三年か長保四年の賀茂祭の出来事ということになる。そうなる」と長保三年四月二十日の『権記』にみえる、「辛酉 賀茂祭／無常の観を催す為に見物」の段で行成が賀茂祭を

見物し、車を数えたという記述に「右近衛府使は少将源朝臣雅通」とあるところが有力な時期であるが、役目としてたづ君と同乗したかどうかはわからないので、長保四年の賀茂祭も可能がある。

ところが、公信が少将、重家が蔵人少将と呼ばれる時期に、雅通もまた少将と呼ばれ得る時期は存在せず、前半と後半では時期がずれることになる。青木氏は、一連の詞書において、それぞれ違う時期にのちに詞書を書いた、としている。しかし素直に違う時期の記録がひとつにまとめられたと考察するべきではないか。

前半は歌に「糺すの神」の語があるから、賀茂神社の祭であることは確認でき、後半の「祭のかへさ」は翌日に齋王が上賀茂神社から齋院御所に帰る時のことである。先述したようにの公信少将と蔵人少将が関わったエピソードは長保元年か二年のこと、後半のエピソードは長保三年か四年の賀茂祭である。このように別の年の賀茂祭のエピソードだったのを、前半は同世代の公達とのたわいのない贈答ということでもまとめ、後半は雅通との恋歌めいた贈答で、最後は和泉の歌ではなく、雅通の歌である、「あふひのしるし」という誘いの歌でまとめられており、前半とはやや違う雰囲気となっている。このあたりもこの二つがもとは違う時期の詠歌だったのではと思わせる。

和泉式部が祭の時にとかく言われる状況はたびたびあったのか(注16)、同じような歌が他にもある。

宮の御服にて物見ぬ年、禊ぎの日、「人の車にそれぞれと聞くはまことか」と問ひたる君達のありけるを、後に聞いていひやる

1060 それながらつれなき物はありもせよあらじと思はで問ひけるぞ憂き

賀茂の道に詣であひて、「語らはん」などいふ女の、「だれぞ」と問ふに、異人の名のりをしたければ、この人もまたさやうに言ひしを、かたみにそれを聞きて、後にやりし

1070 我に君劣らじとせし偽りをただすの神もなのみなりけり

また、祭りの帰さだけを詠んだ歌も和泉式部集に見られる。

祭の帰さ見るに、齋院の御車の中に、知りたる人のもとに、葵に書きて

1082 昨日今日行きあふ人は多かれど見まくほしきは君ひとりかな

この三首には、先の稻荷祭の歌群と共通する点がある。1060番の人違いの噂をあとから聞くと、1070番の

「偽りをただすの神」と、噂をめぐる虚々実々のやりとりがなされたらしいこと、1082番の車の中の「知りたる人のもとに」手紙やるのだが、それが恋歌仕立てであることなどである。これらの歌を見ると、稻荷祭歌群を編む下地となるようなエピソードは和泉式部周辺にいくつもあつたわけである。

二つの歌稿をまとめて一つのエピソードとしたことで、歌群にどのような主題が生じていようか。見るように、前半と後半は違う場面を構成している。最初は稻荷祭だが、その半月くらい後の賀茂神社の祭に車で繰り出した折の雰囲気がよく伝わってくる。それは車がすれ違う折に車の中から「木綿かけて取り入れさせし」、「幣のやうに、紙をして書きやる」と祭ならではのやり方で手紙をやり取りしたり、車が混み合っているのか車の轆を貸すなど、上流貴族の男性との交流が描かれているからである。そして、この前半、後半ともに詞書か歌かに、いづれとも「木綿襷」、「かく」という語が含まれている。この歌群全体の雰囲気を統一していると考えられる。

また、108番の詞書に「まろ」という自称代名詞を用いているが、実は家集のこの歌群のすぐ前が帥宮、公任、和泉式部の歌のやり取りである白河院での花見の歌群である。この「まろ」はこの中の99番、101番、107番とこの108番のみに用いられている。このことから、やはりこの稻荷祭歌群でも何らかの創意工夫の意図が読み取れる。

和泉式部集の中で贈答歌と見られる歌でも、相手の歌が記されていない場合が多いが、この歌群は贈答歌の相手が収載されている。最後が和泉式部の歌ではなく、雅通らしい相手の歌で終わっているのは「あふひのしるしとは見れ」と送って来た、その恋の雰囲気を活かそうとしたのかもしれない。

この歌群の面白さは多くは詳しい詞書によっている。108番の詞書では粽を取り入れたのを見苦しいと思う、そしてそれを自分がやったと疑われたのが悔しいと思う和泉式部の価値観が表れており、そのような噂を打ち消すべく、わざわざ賀茂の祭を待つて、糺すの神を引きあいに出して反論している。また「幣のやうに、紙をして書きてやる」というのは具体的にはどのような形状なのかよくわからないが、祭に因んでただの手紙ではなく幣にするところ、神前を意識しているところも面白い。帰さのエピソードも「筒を借りて轅をかけ給へりし」は、時の権力者が和泉式部の轅を借りたのも、車が大勢いる中で和泉式部の車を選んだのは偶然か、実は雅通が車を手引きしたのか、その辺りもよく考えるところとおかしい。112番の前の文「雅通の少将など乗り給へりし、それや詠みけむ」は、詞書ではあるが、この歌と前の歌の続きをよくするために、この形で再編するにあたって挿入した一文で、「語り手」の地の文に近いひびきがある。

以上のようにこの歌群には配列に工夫が見られ、詞書にも虚構性がある。この稻荷祭に端を發した賀茂の祭に

関わる一連の歌を、自身の物語志向により、まとめ直したものと考える。

(二) 御嶽精進の歌群

次にあげる贈答歌群は既に一度でふれているが(注17)、配列の創意性に注目してもう一度考察する。

男の、御嶽精進とて、ほかに□□□みあれの日、葵に挿して

1246 かざせどもかひなき物はおのが引く標の外なるあふひなりけり

五月五日、雨のいみじう降る日、独り言に

1247 今日 はなほあやめの草のねどころも水のみ増る心地こそすれ

六日、この精進する男のもとより、「昨日のあやめも知らで過ぐして」などいひたれば

1248 うたた寝にやがて淀野も見ぬ人はまして何てふあやめやは知る

詣づる程になりて、道のほどを着るべき狩衣なむ様なる物縫はする、やるとて

1249 うち交はし夜着るまじきあさ衣は縫ふも物憂きものにぞありける

とてやりたれば、狩衣を「着よく、肩などもよし」といふ事をいひたれば

1250 かり衣我によそふる物ならば袂よくしもあらじとぞ思ふ

縹の帯の所々かへりたるを着替へて、男のおこせたれば

1251 馴れぬれば縹の帯のかへるをもかへすかとのみ思ほゆるかな

御嶽は「大和（やまとの国）奈良県」の吉野山の最高峰、金峯山の別称」で、御嶽精進とは、「金峯山に参詣する人が、それに先だつて、五十日または百日の間身を清めて読経・写経などの修行すること」である（『小学館全文全訳古語辞典』。「みあれ」は「みあれまつり」で、「京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）葵祭りの前儀として行われる神事」であり、「古くは四月の中の午の日に行われた」という。（『日本国語大辞典』）

詞書の一部は判別できないが、おそらく、「みあれ」の日に男は御嶽精進中でよそにいるので、逢う事が出来ないため、葵に挿して歌を贈った、ということだろう。その<sup>1246</sup>番歌は、葵をかざしても甲斐がないものは、おのれ（あなた自身）が引いた標の外にある葵（逢う日、逢瀬）であることだ、ぐらいの意になる。「おのが」は「自分」の意であるが、精進齋中であるのは、男であり、おそらくそれ故に「逢ふ日」に逢えないということも言ってきたのであろう。それに対して贈った歌と考えれば、「標を引いたのはあなた自身でしょう」という意をこめて、「おのが引く」と詠んだのではないか。また、「標のほか」は和泉式部集では中宮彰子との贈答で、中宮彰子が「標の外」、和泉式部が「標のうち」（464、465番）と詠んでいる。この場合は「御殿」の意で葵祭りの贈答である。このほか、『傳大納言母上集』（注18）には「ある人、賀茂の祭の日婿取りせんとするに、男のもとより、あふひうれしきよしいひたりける。人に代はりて 7頼みすな御垣を狭みあふひ草標のほかにもありといふなり」という忠告のような歌がある。ただし和泉式部の歌の場合、『傳大納言母上集』のように、私（和泉）は「標の外」で会えないが男は標の内にいる他の女とは逢っているのだ、との含意までは考えなくて良いだろう。

この<sup>1246</sup>番は、<sup>1248</sup>番の詞書に「この精進する男のもとより」とあるので、同一の人物との関係を詠んだ歌群の、



最初の歌と考えられる。男は精進を理由にずっと和泉式部（女）のもとを訪れていないらしい。

それからしばらく時間を経て、<sup>1247</sup>番は、雨が強く降る五月五日の「独り言」で、今日は一層あやめ草の根のほつた所も雨で水が増さるように、自分の寝所は涙のみ、いつにも増して流れるという意である。男からの何の音沙汰もないなかでの、鬱々とした心情を歌う独詠歌である。五月五日は人々が菖蒲の根を贈りあい、「あやめ」によそえて歌を歌う端午の日であるだけに、その日も忘れられていた悲しみが募るのである。そして男は、「独り言」を歌った翌六日になって、「（精進中で）昨日のあやめも知らないで過ごしてしまつて」と言い訳を寄越した。来られない場合は便りだけでもよこすのが「折」をわきまえた行為である。一日遅れてしまつたが、「折」を知る身だとのアピールであろうか。<sup>1248</sup>番は、それに応えたもので、「うたた寝をしていて淀野の夢も見ないよ  
うな人は、まして淀野に生えているどの菖蒲がわかるというのか」と詠む。ここの「あやめ」は「文目」であるが、淀野（夜殿との掛詞）に、人からに気づかれず、生えている菖蒲（和泉式部自身をよそえる）のことでもある。  
このあとに続く<sup>1249</sup>番、<sup>1250</sup>番、<sup>1251</sup>番は前三首とエピソードを変えて、男（夫）の衣装を調える妻の歌である。<sup>1249</sup>番は「詣づる程になりて」と、精進があけ、いよいよ金峰山に参詣する日が来ると、男から道中着る狩衣の仕立ての注文が来た。縫ってそれを送る時に、「袖を交わして夜着ることなどない麻（朝）の衣は縫うのもつらく、  
気の進まないものだったのですね」と歌を添える。

男が衣装を注文する歌には『業平集』38（注19）に、「宮仕へしける人をかたらひけるに、『装束調じておこせ

給てむや。さることする人なくて、いとなむわびしき』といひやりたりければ」のという詞書がある。また、後撰集卷第十一恋三734番小野遠興がむすめ「離れがたになりける男の装束調じて送れりけるに、『かゝるからに、うとき心地なんする』と言へりければ」とあり、男の方から乞う場合と、女からの贈り物である場合とあるようである。いずれの場合も衣装は日常のものではあるが、男女の仲のかけひきに重要な小道具である。

1250番の「着よく、肩などもよし」は、催馬楽『夏引』の引用で（「文庫」脚注による）、「汝麻衣も 我が妻の如く 袂よく 着よく肩よく 小領安らに 汝着せめかも」（注20）の傍線部分をもととする。この催馬楽は、「絹の生糸を以て織つて着せてあげよう、だから妻と別れよ」と迫る女を、「麻衣で結構。（麻衣は）我が女房の如く、袂もよく、着やすく肩の具合もよく衿もゆるやかで」と、女房のためにはねつける歌謡である。これを引いたのは、当然「我が妻の如く 袂よく」を言うためで、このような調子のよいほめ言葉を送ってきた男に対して、返歌<sup>1290</sup>番は直訳すると「かり衣を私にたとえるならば、袂よくもあるまいと思ひます」となる。この「袂よくもあるまい」を「全釈」は「だって、わたし、あなたに他の女の誘ひをはねつけさせるだけの力もない仮の妻なのですもの」の意と解釈しており、「文庫」は「狩衣は括り袖であるのに対して、女の衣の袂が広いところからいう」とする。「文庫」の説に従い、仮の妻という含意までは考えず、麻の狩衣を自分の女房のように、袂がよくて、と言っているけれど、狩衣の袂は私の袂とは幅がちがいますよといなしているとする。女の誘惑を断ち切った催馬楽『夏引』の男に、自分をよそえる男（夫か）のいうことは、狩衣を女の衣装によそえたのと同様に、信用ならないと言うことであろうか

次の1251番の詞書と歌にある「縹の帯」は、縹色（浅葱色）に染めた帯で、やはり催馬楽『石川』の、「石川の  
高麗人に 帯を取られて からき悔する いかなる帯ぞ 縹の帯の 中はたいれなるか かやるか あやるか  
中はたいれたるか」（注21）によるとする（「文庫」脚注）。『角川古語大辞典』（注22）では「…意味不明の『中はた  
いれるか』を、のちに『中や絶えたる』と解して伝え、男女の仲の絶えることをいう歌語として多く用いた。ま  
た、その色が変色しやすいことから、人の心の移ろいやすいこと、男女の関係の希薄なことをもいう。」として、  
和泉式部の次の歌や『源氏物語』紅葉賀巻を用例にあげている。

装束ども包みて置く、革の帯に書きつく

1110 泣き流す涙にたへで絶えぬれば縹の帯の心地こそすれ

1251 番歌は、縹色の帯の所々色が褪せているのを着替えて男が返してきた。それを自分たちの仲をもとに戻らせ  
る（別れる）とのみ思われると詠んでいる。色変わりした帯は、男との関係も古女房の自分も褪せてきた象徴の  
ように思われるのである。

「全釈」は「わたしの文を送り返して来たのかと」思ったと解釈している。語釈で「正集五八四に記したよう  
にこの頃縁を絶つ決心の時は、先方からもらった恋文を一括して返す風習があった。それを言ってみるものと見  
て解した。」とある。正集五八四は「文庫」で593「人の置きたりける鏡の箱を返へしやるとて」という詞書の歌  
のことであるが、この歌は鏡の箱を女の側から返している歌である。和泉式部の歌の中には、傳の殿（道綱）と  
の贈答で和泉式部が道綱から来た手紙を返す歌に「ふみかへす」という言葉がある。しかしながら男性から女性

へ文を一括して返すという風習があったのだろうか。後撰集及び、同時代の歌人の家集、『蜻蛉日記』（注23）には、別れの際どうするかという詞書を持つ例が散見される。しかし、後撰集と同時代の主な家集を見たが、歌の詞書に見る限り、文を女性ではなく男性から別れるために返す例は見られないし、色褪せた「帯」で別れを示す例も見られない。

この歌の詞書の「所々かへりたるを着替へて」は、必ずしも参詣のための新しい狩衣と着替えたのではなく、普段着ている装束の帯が古びたので返してきたのかもしれない。前二首とどこに連続性があるかと言えば、新しい装束を仕立てて送ったという状況と、それを受けて「着替へて」と詞書を付した、その言葉の近似性である。そして、寄越した帯は、催馬楽で歌われる「縹の帯」であったので、前二首のつづきの歌と読むことができる。あるいは男は催馬楽（石川）を意識していなかったのかもしれないが、和泉式部の方では、男が先に寄越した歌に催馬楽を引いていたがゆえに、今回も引いているととりなし、「かへすかとのみ思ほゆるかな」と詠んだのかもしれない。

前半の三首は、少し距離が見え始めた男女の贈答で、男の無沙汰に泣く<sup>1247</sup>番歌は孤独と悲哀を詠む独詠である。続く歌群は、詞書が男の行動を追い、その動きにつれて女の心情が詠まれていく形になっている。男は夫であるうか。その折々女が詠んだ歌は、相手に贈られているのだと考えられるが、男は女の気持ちにははなはだ無頓着のようである。男は女に歌を送らねばならない「折」の「みあれ祭り」と「五月五日」の二度も逃しているのである。しかし、一応御嶽参りのための精進潔斎という大義があるからか、男は悪びれもせず、一日遅れの「あや

め」歌を贈ったり、狩衣の仕立てなどを気易く頼んでいる。また女も、男から道中の支度を頼まれること自体は悪い気はせず、男の支度を調べてやっている。男としては無視している気はなく、催馬楽を持ち出してほめるなど、相応の相手として扱ってはいるのである。ただ、長い間、女のもとを訪れていない事実は事実なので、女の歌はやや自嘲的であるし、最後の歌は諦めにも似た感慨で終わる。妻は家刀自としての役割を果たしつつ、女性としてはあまり顧みられない孤独な心情を詠むのである。

この歌群の創意工夫という点において、二つの点をあげられる。

ひとつは、この歌群は時間の推移をたどってみれば、行動しているのは男だけなのであるが、「みあれ」の日は前述のように四月の中旬で、男はそのころ御嶽精進のために五十日とか百日の潔斎中であった。それから半月ほどして五月五日、六日の菖蒲のやり取りがあり、それから精進潔斎があけて、狩衣の注文、仕立て、それを送る、さいごに着替えた縹の帯が返ってくるという、かなりの期間にわたるやりとりなのである。これらの期間の間にいくつもの別のできごとがあったに違いないが、この男とのやりとりだけをまとめたこと自体に、既に事実を越えた意図的なものがある。

また、もうひとつは詞書と歌の配列の工夫である。この歌群は詞書の示す折々に詠まれたものであろうか。あるいは、手許の歌稿に詞書をつけてまとめたのか、いずれにしても連作として一挙に詠まれたものではないだろう。配列と詞書の工夫があるからこそ、一連のエピソードとしてまとめ、歌群として内容が面白いものになっている。

1246番は単独でも成り立つ歌であり、1247番は「ひかれぬあやめ」の歌を多く詠む和泉式部らしい独詠歌である。

この二首は、1248番の詞書「この精進する男のもとより、」の言葉で1246番が1248番につながり、「六日」「昨日のあやめも知らずで過ぐして」という言葉で1247番と1248番がつながる。間に1247番に和泉式部らしい抒情が窺える歌を入れ、三首連なる形になる。後の三首は、間の詞書「詣づる程になりて」により、前三首との連続が成り立つ。

詞書のみを追っていてもおおよその筋がわかる。この詞書の工夫により、御嶽精進をめぐってひとつのエピソードが構成されている。女の心中などおかまいなく行動する男の人物像が鮮明になり、滑稽味すら感じさせられる。女はそうした男の要求に抗うことなく対応しているが、孤独と悲哀がどことなく漂う歌を詠むのである。

(三) 疾うを来よ歌群

次にあげる歌群について、拙稿「和泉式部の『桜』の歌」(注24)において歌の考察をしているので、ここでは歌の語釈、解釈は最小限にとどめ、配列について考察する。

桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもと

より、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

1450 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ

といひたれば、「なかなかあだの花は見じとてなむ」と云ひたるに

1452 あだなりと名にこそ立てれ桜花霞のうちに籠めてこそをれ

同じ頃、女客人の詣で来て、物語などして帰りぬるに

1453 我が宿の花を見捨てて往にし人心のうちはのどけからじな

松竹などある中に、桜の咲けるを見て

1454 常磐なる物ともやがて見てしがな松と竹との中にさくらを

1450 番の詞書「桜のいとおもしろう咲きたるを見て」の、「見た」のは誰であろうか。前稿（注25）では、「往にし人」が和泉式部の家の桜を近くまで来てきれいだと思つて、「散らぬ先に、今一度、いかで見む」と云つてきたと解釈し、桜を口実にもう一度会いたいと云つてきたという意であるとした。しかし、実際は、桜の季節に「往にし人」から「散らないうちにもう一度、ぜひとももう一度会いたい」という消息が来たのを、詞書を付けるとき、男がこう言い送つてきた事情を勝手に推測して付したのではないだろうか。その意味では「超越的視点」にも似た物語的な語りの視点がほどこされているのである。この詞書が付されたことで、読者は男が通りがかりに見たのだろうか、あるいは男の家の桜を見て思いおこしたのだろうか、など読者は想像をかきたてられる。

1450 番は「疾うを来よ」、「咲くと見る間に散りぬべし」と呼びかけ、訪れを促している。これは「散らぬ先に」と言つてきたことに対しての返歌であるが、女側の返歌としては、普通は待つ気持ちを込めながらもはぐらかして返すのが常道であるから、「疾うを来よ」と積極的に男を誘うのは異例である。「往にし」人からの「今一度いかで見む」という言葉は、女にとって心弾むものだった。女が男の久しぶりの消息に心踊つたことが想像でき

るのである。「疾うを来よ」という口語的な詠いだしは、そうした弾むような心を巧みにとらえている。しかしこれに続けて、歌の方は置けばすぐ消える露と、咲けばすぐ散る花はそれぞれがもろいばかりではないものであり、「露と花との中ぞ世の中」と呼びかけて終わる。男女の仲は、露と花同じくらいもろいものだという心が「ぞ」によく表れている。詠いだしと同じ軽妙な調べであるが、「露と花との仲ぞ」との断言には女の無常観も感じ取れる。以前どういう状況で去っていったのか、女の心に深い思い出を残しつつも、あっけなく終わって、長く続いた間柄ではないことがわかる。

1451 番の詞書では、「といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる」とあり、男はあらわれず、ここで数日の時間の経過が示される。1450 番の歌には反応もなかったのか、「いひやる」の語が二回も出てくる。1450 番「疾

うを来よ」に重ねて、さらに積極的に「来まじくは折りてもやらん」と詠む。後半は「風の心にまかせる」という古今集巻第二春歌下貫之の「87山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり」以来の表現で、我が家の桜を風にまかせて散らせることを、古今集とは反対に「見じ」としている。この歌は桜を口実に逢いたいと言って来た男に、一心に桜を惜しみ、咲いている桜を見せたい気持ちを伝えている。が、しかし、実は「散らぬ先に」と言いつつなかなか来ない男を待つ強い気持ちをも、「来まじくは」と、来そうにないなら折ってでもそちらに送ろうよという屈折した言い回しで詠んでいるのである。桜の美しさにことよせて待ち続ける思いを伝えているわけである。

1452 番の詞書によれば、女の懇願に男からは「なかなかあだの花は見じとてなむ」と云ってきた。男も古今集巻



第一春歌上読み人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の表現を取り入れ、桜（女）を見たい、会いたいと言ったものの、あなたが何かと噂の多い「あだな花」であるから、なまじつか浮ついた花は見まいと思つてね、と言いつつ諷する。「あだの花は見じ」は<sup>1450</sup>番歌の「風の心にまかせては見じ」に対応させて、「風に舞う花」はすなわち「あだの花」と見なして「見じ」と云つてきたのかも知れない。男の方は女が「年にまれなる人もまちけり」かどうか、間を置いたのだとでも言いたげである。

これに対する和泉式部の歌は、大胆にも同じ古今集の前掲62番上句「あだなりと名にこそたてれ桜花」をそのまま据え、巻第二春歌下良岑宗貞「91花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」から、「霞にこめて見せず」の意を借りて、「霞のうちに籠めてこそをれ」と、桜を霞のうちに閉じ込めておるから、名ばかりで本当は「あだな花」ではないとする。これは同時に62番下句の「年にまれなる人もまちけり」の意も含み、霞の内に籠もつて待つておりますという返事でもある。

<sup>1453</sup>番もやはり古今集を踏まえて、前の二首に連続する。同じころ、女の来客があり、物語りをして帰つたあとに詠まれた<sup>1453</sup>番は古今集巻第一春歌上の躬恒の歌「桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、それが贈りける 67わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき」をふまえている。「我が宿の花を見捨てて往にし人」と古今集の上句のリズムそのままに詠んでおり、前三首につづけてこれが据えられると、この「往にし人」は、先ほどまで語らっていた女客ではなく、応答を続けていた男をさすことになろう。下句は古今集巻第一春歌業平「53世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」の下句を詠みかえ

ている。この1453番は「往にし人」との直接の贈答ではなく、女客と桜がたりなどをして、帰ったあと、結局訪れてきそうもない男を思い出しての独詠であろう。往ってしまった男の心に、そうは言っても未練はあるだろうとする。それは単に桜への未練を言うのであろうか。それともそれなりの経緯があったゆえに、男の方でも私（女）への未練があるはずだという確信をいうのだろうか。

これまでの歌を詩の構成にたとえて言えば、1450番が「起」、1451、1452番が「承」、1453番が「転」にあたるだろうか。そして「結」の部分が次の1454番である。

「松竹などある中に、桜の咲けるを見て」とあるのは、後撰集巻第二春中坂上是則「前裁に竹の中に、桜の咲きたるを見て 54 桜花今日よく見てむ吳竹の一夜のほどに散りもこそすれ」という歌も見られるので、前裁の中に桜が咲いていたのだろう。この歌は一見すると独立した歌のように見えるが、松と竹の中に咲く桜を、松と竹と同じように変わらない物としてずっと見ていたものだという歌意は、1450番の「咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中」に見事に対応して、「結」となっている。

「常磐なるもの」、無常ではないものとして桜が永遠に咲いてほしいという詠嘆は、「散らぬ先に会いたい」という男に期待を抱き頼みにしたものの、それとは裏腹に結局来なかったことに対する失望や、悲しみも含めてのものである。戻って来そうで来なかった男との関係一かつての仲も含めての日々が無常なものとして思いうかべられている。男が女のもとを訪れようとした契機を「いとおもしろう咲きたる」桜を見て、としたことで、桜の美しさとはかなさが男女の仲の喩えとして重なり合い全体に一貫したテーマを形作っている。一連の歌の末

尾は結局松竹を引き合いに、桜（人の気持ち）の無常を詠む歌で締めくくられている。

以上のようにこの歌群の創意性は明らかであろう。「桜」をめぐっての人間関係が、女自身の期待、不安、諦め、嘆息といった順に配列されてひとつのエピソードを作り上げているのである。

### 三 まとめ

和泉式部の歌の中で創意性を意識していると思われる歌群は他にもいくつもあり、特に重出歌のあるものは、重出との比較において研究されている。重出があるゆえに、「稻荷祭の歌群」のように双方の違いがより際立ち、そこに創意工夫を見てとって、それが和泉式部自身によるものか、まったく第三者の手によるものか、事実かどうか、論議が生ずる。本論文は配列に注目しての創意性を考察するもので、歌群の成立事情などは考察しないが、実際のできごとから多少の時間をおいて和泉式部式自身がまとめたものと考えている。

また、「御嶽精進歌群」、「疾うよ来よ歌群」については、重出も、他出もない歌群である。この両歌群については考察してきたように、詞書によって巧みに状況と歌を連続させており、歌も表現技法もさることながら、詞書が生み出す文脈によって、人と関わりながらも常に孤独な女の心情の推移を追うことができるのである。これはやはり、ほかならぬ和泉式部自身によって編まれた歌群なのではないだろうか。

「物語性」というと定義が難しく、曖昧にもなるので、この論文ではあえて「エピソード」と称した。このよ  
うなエピソードとして一群の歌をまとめられるということは、『和泉式部日記』の作者としての資質を表すもの

であり、和泉式部自身の編纂意識の物語志向を示すものであると考えたい。

- 注1 『國史大系 延喜式 後篇』(吉川弘文館 1972)
- 注2 『榊原本私家集(一)』(日本古典文学影印叢刊9)(貴重書刊行会 1978)
- 注3 平田喜信『平安中期和歌考論』和泉式部集の構造―集内の重出現象をめぐって(新典社 1993)
- 注4 清水文雄『和泉式部歌集の研究』(笠間書院 2002)
- 注5 藤岡忠美「和泉式部集の成立」(国語と国文学 28巻5号 昭和26・5)
- 注6 松尾聰、永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集18 講談社 1997)
- 注7 市川久編『近衛府補任 第一』(統詳書類従完成会 1992)  
榎野廣造編『平安人名辞典 長保二年』(高科書店 1993)
- 藤原行成『権記 上、中』(倉本一宏全現代語訳 講談社学術文庫(講談社 2011 2012)
- 注8 注7に同じ
- 注9 山本利達校注『紫式部日記 紫式部集』(新潮日本古典集成 新潮社 1980)
- 注10 青木賜鶴子『和泉式部集』一〇七番歌詞書『蔵人の少将』をめぐって(言語文化学研究 日本語日本文学編8) 2013・3)
- 注11 松本真奈美・高橋由記・竹鼻纈『中古歌仙集(一)』(和歌文学大系 54 明治書院 2004)
- 注12 新藤協三・西山秀人・吉野瑞恵・徳原茂実『三十六歌仙集 二』(和歌文学大系52 明治書院 2012)

注 13 武田早苗・佐藤雅代・中周子『賀茂保憲女集・赤染衛門集・泷少納言集・紫式部集・藤三位集』(和歌文学大系20)(明治書院2000)

注 14 犬養廉・後藤祥子・平野由紀子校注『平安私家集』(新日本古典文学大28)(岩波書店1994)

注 15 市川久編『近衛府補任 第一』(統群書類従完成会 1992)

注 16 橋健二・加藤静子校注・訳『大鏡』(新編日本古典文学全集34 小学館1994)

注 17 拙稿「和泉式部とあやめ草」(東京女子大学紀要「論集」第65巻2号2015・3)

注 18 書誌は注11に同じ

注 19 室城秀之・高野晴代・鈴木宏子『小町集・業平集・遍昭集・素性集・伊勢集・猿丸集』(和歌文学大系18 明治書院 1998)

注 20 臼田甚五郎・新間進一・外村南都子・徳江元正 校注・訳『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』(新編日本古典文学全集 26 小

学館 1994)

注 21 注20に同じ

注 22 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義『角川古語大辞典』(角川書店 1982—1996)

注 23 犬養廉校注『蜻蛉日記』(新潮日本古典集成 新潮社 1982)

注 24 拙稿「和泉式部の『桜』の歌について」(東京女子大学紀要「論集」第67巻1号 2016・9)

注 25 注24に同じ

## 結

この論文では三つの歌材をとりあげた。家集の配列や歌群、詠歌状況などと無関係に、それぞれの歌材を含む歌を抽出し、考察の対象とした。まず、これは意図したことであるが、今までの和泉式部研究や、和泉式部歌のアンソロジーなどでは取り上げられていない歌に光を当てることができた。考察の対象とした歌のうち、勅撰集に取られていたり、著名な歌群の一部であるなど、よく知られている歌も少しはあったが、考察した全体からみれば一割にも満たないであろう。しかし、本論文で考察した和歌は、全体として取るに足りない歌というわけではない。むしろ、今まで知られてこなかったことが惜しい歌も多々あり、和泉式部という歌人の豊かさを、新たな歌の中から考えることができた。また、歌の解釈の点で、家集の配列の一首だけでは意味不明とされていた歌が、同じ歌材の歌を集めたなかで見ると解釈がつかみやすい利点もあった。

歌材は「菖蒲（あやめ草）」、「桜」、「露」の三つである。この語を含むというだけで取り出された歌は、家集全体に散在しているわけであるが、詠まれている内容、すなわちその歌材を用いて表現しようとする主題は、当然のことながら共通のものがある。詠歌状況も詠歌時期も異なるにもかかわらず、「あやめ草」を詠む歌には、「歌ことば」としての共通の発想や連想があり、一つのまとまりがある。「桜」、「露」も然りである。

第二部で見てきたように、「あやめ草」は「折」を大事にする和泉式部にとって格好の歌材であった。和泉式部の「菖蒲（あやめ草）」の歌はほぼ五月五日に関わる歌である。節供の時だけ引き抜かれてもてはやされる「あやめ草」は、逆に言えば五月五日には大事にされなければいけない。和泉式部は「あやめ草」に自らを仮託し、「引かれぬあやめ草」の存在を提示した。五月五日に顧みられない「あやめ草」、それは世間と切り離された孤独な存在である。和泉式部は行事とは関係なく、つながりをもつべき日だからこそ照らし出される自分と人とのつながりを見つめ、屈折した孤独を「あやめ草」に詠んでいるのである。「あやめ草」は拾遺集以降にほぼ年中行事の歌として現れてくるので、歌材としてはそれほど古いものではない。なかでも「引かれぬあやめ草」として主題に取り込んだのは、和泉式部が始めてであろう。

「桜」は第三部で示したように、古今集以降、日本を代表する花木と言っても過言ではないほど、もてはやされ、多くの歌が詠まれてきた。「桜」は古今集の桜歌群があつて、その後の桜の歌に多大な影響を及ぼしている。すなわち、古今集の「桜」歌は、華やかに咲く桜への賛美と、美しく散る桜への愛惜を主題とする。咲いても散つても人は桜に耽溺するのである。第三部末にも述べたが、和泉式部の「桜」の歌は、同じくこうした古今集の「桜」歌の影響を受けているのだが、桜への賛美と愛惜を歌いながら、むしろ人との絆をこそ見つめているような響きがある。そもそも桜が咲く期間は短く、すぐに散り始める。ゆえに桜への思いが深ければ深いほど、逆に人の命にも通ずる桜のはかなさを思うことになり、また桜の美しさとはかなさを知るほどに、誰かとの一時の美しさを共有したいと願い、歌を詠むに至る。和泉式部の場合、「桜」もまた、他人と分かち合う時間を意識さ

せる歌材となっている。和泉式部の「桜」の歌は、華やかな咲く桜を単独で詠むよりも、人間関係の中で、ひととのつながりを前提に詠まれることが多い。桜の美しさを讃えていても、どこかこれを共有する相手、あるいはそれを見ている自分を感じさせる。桜が美しくはかないからこそ、それを見つめる自分の命、あるいはそれを共にながめた他人との絆や命の姿が、桜の姿と重なりながら詠われるのである。

第四部の「露」は同じく和歌史では古『万葉集』の時代から詠じられてきたありふれた歌材である。「露」それ自体は水滴であり、無個性で主張はしないが、「露」がおいた何か植物などと調和して、双方が影響しあうところで人は感興を催して歌を詠む。露は何かと取り合わせの中で詠まれる歌材である。また「露」は「涙」にたとえられて恋歌の響きを持ち込み、またあっけなく消えるはかなさに、「命」に喩えられることも多い。そもそも「露」には決まった「折」はない。「折」という時を持つほどもなくはかなく消える。消えた露はもとに戻らないし、留まることもない。

こうした「露」を詠む時、和泉式部はとりわけ「露」の無常を見つめているように思う。もちろん「涙」でもある「露」は、人を恋うる思いと重なり、人との繋がりを引き寄せてくる歌材なのだが、その根底に和泉式部は、つねに無常を意識している。「露(涙)」にくれる男女の仲のはかなさ、はかない縁や人の世の営みに、深く愛着しながら生きる「露の命」を見つめている。その瞬間は確かに存在し、大事にすがりついているのに、ふと目を転じてみれば、その大切な時はあっけなく終わっている。まさにこの世自体が「草の上の露」であると、和泉式部は歌う。もちろん和泉式部のすべての「露」の歌が無常をテーマとするわけではないが、その意味でどこか無



常の響きがある。

各部で述べたように、「あやめ草」「桜」「露」とともに心情のじむ叙情的な歌が多いが、新しい言葉やあまり歌語として使われない言葉を取り入れたり、漢詩や古今集を大胆に詠み込み、全く新しい歌として表現する、あるいは歌全体のリズムを整えるといった表現技法は巧みである。和泉式部集全体にも言えることであろうが、このように歌材を特定してみると、それぞれの歌材を独特な言い回しの中に収めて詠んでいることがわかる。また、必ずしもすべて叙情的な歌だけではなく、男性も女性ともに相手とする軽妙な掛け合いや、皮肉めいた贈答歌もある。友情も恋情もとれるひびきが贈答歌の掛け合いからにじみ出す。ひいては前章で述べた如く、意図的に歌を配し、語りの視点を思わせる叙述を含む詞書をはさむことで、物語めいた一群をなす歌群へとまとめ直している。和泉式部の詠者としての技量は一面的ではない。

三つの歌材で詠まれた歌は、それぞれ共通した特徴を持っている。「あやめ草」は「折」の意識と、「ひかれぬあやめ草」歌、「桜」は「桜」への強い愛と、人との関係を図る歌、「露」ははかなく無常のものとして詠む歌、それぞれの歌材ならではのテーマを紡ぎながら、家集全体に散らばっている。その三つの歌材のテーマを貫くものは何かと考えると、「孤独」ではなかるうか。平安時代を生きる一人として、和泉式部もまた疫病に接し、寿命も短く、大切な人の死を次々に経験し、多くの人との別れもあった。通い婚を常とする平安時代の婚姻慣習は、男女の絆のもろさを感じやすい形であり、人間関係のはかなさを身にしみて感じて、この世は常無きものという自覚や孤独を和泉式部も持ったとしても当然であろう。しかし、この「孤独」は和泉式部の個人的体

験の反映にとどまらず、むしろ、創意性という点から評価できるのではないだろうか。

和泉式部は、自らの分身の「孤独な女」を創り上げて、演じさせ、詠わせているのではないだろうか。それは家集のどこにあっても「あやめ草」を詠む時には五月五日に孤独に過ごす女を登場させていることや、「桜」の歌の中では美しい桜を「見に来てほしい」（会いにきてほしい）の意の歌が再三出てくることに鑑みると、個人的な体験を超えた創意というものを考えずにはいられないのである。和泉式部が実際に孤独を感じる人間関係にあったという以外に、そうした人間関係を誇張して、あるいは時に設定して歌を詠んだのではないだろうか。

五月五日の折に世間の行事と関わりなく何ごともなく過ぎていく一日、華やかに咲く桜を共に鑑賞したくも、孤独のうちに散ってしまう日々、朝においても一日も持たない露のごとくはかない恋を嘆く日など、歌に付された詞書を読むと、詞書の中で行動する女と、それを書いている作者がいるように感じられる。一首のみでも詞書が豊かにエピソードを語り、その詞書も相まって含蓄深い人生の断面を見つめさせる歌にしばしば出くわすが、それは、取りも直さず和泉式部がそのような創意性を以て歌を詠む歌人であることを示していよう。

配列上の順番でまとまる歌群や、心情表現を取り上げる、ある形容詞の歌を取り出す、というような単位で考察する方法とは違い、歌材で抽出することによって引き出された歌は、「はかなし」など特定の心情に彩られた歌という枠組から自由に考察することができた。ただし、これまでの和泉式部の歌の研究とかけ離れた特質が明らかになってきたわけではない。むしろ、今までの和泉式部論を強化した部分もある。そしてとりわけ痛感するのが、和泉式部の歌はふと思いつきで口からすらすら出てきたものではなく、非常に豊富な知識（和歌、漢詩、仏教、

行事など」と、卓越した言語感覚で、考えられて詠まれた歌であるということである。非常に何気なく詠んでいるように見える歌でも、他の歌人の同じ主題の歌と比較して見ると、深い意味がある場合もある。和泉式部の歌はありふれた歌材を平明なことばで詠んでいると見える歌でも、詞書や配列、俗語も含めた珍しい表現や先行する歌の取り込みなどに工夫が見られ、含蓄深く、存外難解なのである。





